

霊障からの奇跡の生還

霊障・不運の原因を知り輝く明日を築くために

宮下僕夫

PDF 初版：2022 年 2 月 2 日

目次

ご挨拶	6
はしがき	9
【一】 解決の実例	10
(1) 正体不明のものに憑かれる	10
(2) 不潔恐怖症	10
(3) ノイローゼ、自律神経失調症	11
(4) 非行、家庭内暴力	12
(5) 子供ができない	12
(6) 登校拒否	13
(7) 腰痛	13
(8) 弱視	14
(9) うつ病	14
(10) 大やけど	15
(11) 幻聴	15
(12) 浮気	16
【二】 大神・親神様と加藤先生	17
(1) 加藤先生と中山みきさんの違い	18
(2) 加藤先生に神々の入り込み	19
(一) 腹の中の神	20
(二) 他界の神	21
(三) 外界の神	22
(四) 別宇宙の神	24
(五) 力の強い神の入り込み	26
(六) このように力の強い者はいない	27
(3) 天照大神様への伺い	28
(一) 天照大神様との会話	28
(二) 神の世界について	29
【三】 先祖の障りと供養	32
(1) 先祖の障りで子孫が苦しむ場合	32
例① N 家...父方の先祖の障り	32
例② O 家...母方の先祖の障り	33
例③ I 家...先祖の助け	33
例④ Y 家...信仰の違いから先祖を供養しない	39
例⑤ Y 家...戦死や変死は救われていない	42
例⑥ Y 家...供養の仕方の悪い場合	44
例⑦ H 家...先祖の障り	44
例⑧ N 家...母親の憑依による障り	46
例⑨ N 家...一部の先祖のわがまま	48
例⑩ S 家...一人娘が嫁ぎ名跡がなくなる	50
例⑪ K 村家と K 林家...先祖の争い	51
例⑫ M 家...神道系の信仰では救われない	51

(2) 位牌への魂入れ.....	60
(3) あの世の様子.....	61
(4) 先祖への諭し.....	68
【四】 屋敷内の土地の神様の障り.....	78
(1) 屋敷内の土地の神について.....	78
(2) 土地の神様の怒り.....	79
(3) 稲荷の神様の障り.....	81
(4) 稲荷の神様へのお詫び.....	89
【五】 土地の因縁.....	91
(1) 因縁の深い土地には住まない.....	91
例 1 土地を求めたいとお願いした件.....	92
例 2 転居してから喘息がひどく、医者でも原因がつかめない方.....	92
例 3 関東大震災の時に多くの死骸を埋められた跡地に建ったマンションを買った方.....	93
例 4 処刑場の跡地に住んでいる方.....	93
例 5 お助けをいただき、転居しなくても済んだ方.....	94
例 6 墓地跡なので転居するしかないのだが.....	95
(2) 土地の因縁の解決方法.....	96
【六】 前世の因縁.....	100
例 1 結婚できない人.....	100
例 2 日々の通り方.....	101
例 3 膝から下の焼けるような痛み(火の中).....	101
【七】 先祖の悪因縁による障り.....	124
神仏を信じない晩年の方へ.....	124
例 1 M 家...男親の非道で死んだ亡者の恨み.....	125
例 2 K 家...古い先祖に苦しめられ世を去った亡者達.....	128
【八】 輪廻転生による因縁.....	131
例 1 離婚...前世で継子いじめ.....	131
例 2 兄にいじめられる...義理の親子で敵同士.....	131
例 3 兄弟の不仲...前世の恨み.....	133
例 4 不倫...先祖に仲を裂かれた恨み.....	134
蒔いた種は生える.....	136
【九】 動物の霊の障り.....	139
【十】 病に倒れて.....	142
[A] 天からの便り.....	142
(1) 入院.....	142
[B] 父より愛する息子への手紙.....	147
【十一】 亡者の憑依と霊媒体質.....	155
亡者の憑依.....	155
霊媒体質と治療の効果.....	158
【十二】 宗教と霊能者.....	161
新興宗教と霊能者の正体.....	162

例 1 ○○の光	162
例 2 ○○の科学	163
例 3 大○教	164
例 4 ○○の家	165
例 5 G○○	165
例 6 不動○○○	166
例 5 ○○青山	167
正しい霊能者と宗教とは	168
新興宗教と悪魔	169
【十三】神の教え	171
例 1 惜しいの心	171
例 2 前世の業からの痛み	171
例 3 心の立て替え(例 2 と同じ人です)	172
例 4 不動明王の神の怒り	173
例 6 神が助けられない場合	174
【十四】神の手引き	177
親心	177
(1) 神様への恩	178
(2) 信心	180
(3) 種通りの芽が出る	181
(4) 皆が幸せに暮らせる心遣い	183
(5) 喉元過ぎれば熱さも忘れる	185
貸しと借り	186
(1) 神は見ている	186
(2) 子供に財産を譲ることについて	187
(3) 倒産	189
心の糧(神や霊のことをまだよく知らない初めての方へ)	190
(1) 神の声	190
(2) 親の手引き	192
【十五】神様の障りと祭り込み	195
(1) 観世音菩薩(かんぜおんぼさつ)	195
(2) 弁財天	196
(3) 水天宮(水神)	197
(4) 不動明王	198
(5) 人神	200
【十六】神の思いに沿う生き方とは	203
財産とは	205
悪しきこととは	208
縁談について	211
結構な心	212
魂の修行と役割	213
親神様参拝に思う	215

手紙の相談者 A さんへ	218
あとがき.....	220
《基本的に知っておいていただきたい事》	222

ご挨拶

人の喜ぶ姿を見るのは、嬉しいものです。また、不思議な助けを頂き、悩みが解決したのです。

毎回のことで慣れてはいても、奇跡を頂き、鮮やかな助けを目の前で見ると神の世界に生かされていることを再認識しないわけにはいきません。神の存在がわからない人や、幸不幸の仕組みがわからない人はなんと気の毒なことかと思えます。自分だけが幸せであってはいけないし、周囲の仲間の人たちだけが幸せであってはいけない、世の中の大勢の悩み困る人、全ての人が幸せになって貰わなければならないと思えます。

幸せになる方法も不運に泣く原因も解明できた今、皆様にぜひ、この仕組みをお伝えし、良き生涯を過ごして貰いたいと思えます。

今から約10年前、鍼灸治療の傍にボランティアで悩みごとの相談をさせてもらうようになり、多くの方々と接しているうちに、なんとしても助かってもらいたい、どんな小さな光でもよい、暗闇から抜け出す道を見つけてあげたい、生きる希望を持ってもらいたい、そんな想いは強くても、超能力も、霊能力もない、何の特殊な力もない私にはどうすることも出来ませんでした。

それが、加藤先生との出会いにより、神様のお手伝いをさせて貰えるようになり、その結果、幸運の掴み方、不幸からの逃れる方法を教えて頂けるようになりました。

誰にでも幸せになれる道はあり、行き詰まりや八方塞がりなどない、歩み方を変え、心に光を灯す方法を知ってもらえれば良いのです。この方法を理解した人々は、皆幸せになれることが分かりました。私や周りの仲間の人たちは皆、幸せです。こんなに幸せで良いのかと申し訳なく思います。

世の中には美しい花も目に入らず、優しい小鳥の声も耳に入らない人もいるでしょう。心の置き方により極楽も地獄も味わえる世の中です。皆さん全ての人に極楽の生き方をし、陽気な暮らしをして貰いたいと思えます。その為には、「どうしてもこのことだけは知ってほしい」、「このことさえ理解しておいて下さったら幸せへの道が開かれる」、「人間が幸せに暮らせる知識を知って頂

きたい」と念じ、下手ではありますが幸せへの道しるべのテープを何十巻も作ってお配りさせて頂き、その後は「心の友」という小冊子を発行させて頂きました。

いずれもボランティアで手作りのため、お配りする範囲も限られています。テープや小冊子が手に入らない方々にも幸せへの切符を手に入れて頂きたいという思いから小冊子の10号までの一部分を編集して出版させて頂いたのがこの本です。「心の友」誌を読んだ仲間の人たちは運勢が好転しております。この本を読んで下さった皆さまも、理解し、実行さえして下さったら運勢は変わるはずです。

この本に書かれた内容は少しの作り話や誇張もなく、毎日治療院において起きている事実です。私の手元には神仏や霊（亡者）とのやりとりの生の声の入ったテープが数百本あり、加藤先生を通して書かれた神様の教えや亡者の恨みの話など数千枚も整理されており、現在も増え続けております。いつの日にか、これらの資料が世の人のために役立ってくれればと念じております。お知らせしたい事例は大変多くあります。しかし頁数の制約上、ほんの一部しか紹介できないのが残念です。

この本は今まであまり知られていなかった神様や霊（亡者）のことを書いていますが、宗教の本ではありません。科学が進歩しても、解決不可能なこと、不可思議なことが沢山あり、そのために悩んだり苦しんだりされている方も多いと思います。この本では、そういう悩み、苦しみがどういう原因からで、どう解決したらよいかということを実例を通して示しています。

神様の存在や霊の障り、先祖のこと、輪廻転生のことなどがわかれば、悩み、苦しみの根本的な原因を理解することができ、解決の糸口が見つかるはずです。霊魂や宗教の本が沢山出版されており、それにすがっている方も多いと思いますが、根本的に解決しているのでしょうか。悩み困る人は霊能者や家相、墓相、占い師などに高いお金を支払って助けを求めておりますが、決してそのようなことで運勢が変わることがないことを理解してほしいと思います。心の持ち方、毎日の暮らし方、祖先の供養のこと、老後や死後のことなどぜひ大勢の方に知って頂けたらと思います。

幸せになる真実の種は荒れ果てた現世の畑にはなかなか根付かないかもしれません。しかし人類が陽気に暮らせる種であるならば何としても育て繁栄させな

ければと思います。本書が少しでも陽気ぐらし、極楽な生活への道しるべになってくれればと念じております。

追記

1991年発行の私の著で、「さまよえる魂の救済」（たま出版）がありますので、併読下されば理解がしやすいと思います。しかし、手に入らない方のために、前著の中から、基本的に理解して頂きたい事柄だけを本書の終わりに簡単にまとめてありますので、初めて私の本を読まれる方は、そちらからお読みになるのも良いかと思っております。

はしがき

朝早く、相談者の件で加藤先生と電話をしていると、突然、大神親神じゃ、と言って神様に代わられる。神様より優しく相談者についての因縁を指導される。全く有難いことだ。本当に、大神様親神様は、私たち人類の親だと思う。要件が終わると神様は、戻るぞと言われて去られる。

加藤先生と今度は人間としての話に戻る。しかし神様が乗られて話した後は、数分の間が必要で、加藤先生はすぐには声が出ない。しばらく呼吸を整えてから正常の話ができる。このようなことは二人の会話の中でしばしばある。でも不思議だ。姿、形のない大自然の大神が、加藤先生の体を借りて言葉として伝え、そしていつも話の中に愛と公平と生き方の大切さを教えて下さる。

加藤先生だから、私だからといって、えこひいきはしない。いつも平等だ。神様は大きくて深いなあと感じ、何か嬉しくなる。

どんな相談事にも、どんな治療にも自信が持てるようになりました。真実の神には不可能はないからです。悩み事に対しては、加藤先生はますます力が強くなってきました。私の鍼灸治療も神様と二人連れだからよく治ります。

皆様に、できる限りお役に立たせてもらいたい。喜んでもらいたい。しかし、肉体を持つ人間には限度があります。高慢にならぬよう気をつけながら、皆様の手足となってお役に立たせてもらおうと思っています。

この本は、神様や霊のことを知らない人に、少しでも参考になればと願って、発行させてもらいました。決して宗教などの組織づくりを目的としているわけではありません。気軽に読んでくだされば幸いです。

読んでのご意見、また質問などもお待ちしております。

【一】 解決の実例

(1) 正体不明のものに憑かれる

Kさんが、胸が苦しく、両手が痛く、長いこと苦しんでいる。神様にお伺いすると、悪しきものが体に入り込んでいると言われる。席を設けて加藤先生にお願いし、解決する。ぎゃあぎゃあと Kさんの体より出てくる。早速消滅していただく。もののけで、四つ足だと言われる。この世に存在しないものかもしれない。

Fさんは、家の中のあちこちに黒い塊が見えて、体調も悪く、学校に行けないという。加藤先生にお願いして対処する。神様は、魔だと言われる。神でもなく、亡者でもないと言われる。一体何なんだろう。もののけにしても、魔にしても、見当のつかないものだ。このように変なものに憑かれて生活が狂うのは困る。

神様に、なぜこのようなものに憑かれるのかお伺いすると、前世の魂の業によると言われる。ここでも生き方の大切さを教えられる。私たちの病や不幸は偶然ではなく、それなりの原因が全てある。ただ、それが分からないだけだ。いろいろなものが複雑に絡み合いながら、動いている。しかし、人間は万物の霊長だと思いついて、人間が支配している世だと思っている。

(2) 不潔恐怖症

Nさんが相談に見えられたのは夏休みの前です。中学3年生の息子さんは、中学に入る頃から不潔恐怖症になり、必要以上に手を洗い、そのうちに物を触るのも汚がり、外の空気も怖がって学校にも行けなくなりました。3年間に投稿した日は合計で1年ちょっと位なものです。

今では部屋に閉じこもり母親以外とは家族とも顔を合わせず、話をする時も埃が入ると口を閉じて話し、食事の度ごとに居間と廊下を掃除し、母親が毎回風呂に入ってから料理を作らねばなりません。玄関のドアを開閉すると、その都度、廊下や下の部屋を掃除します。手を洗うにしても毎回新しい石鹸を使わなければなりません。夏でもクーラーがつけられず、埃や虫を怖がって窓は締め切りです。

私も不潔恐怖症は何人も解決させてもらっていますが、これほどの方は初めてで、かなり因縁があるだろうと思いました。早々に加藤先生にお願いすると、神様のお返事は、亡者が数百体も憑依しているとのこと。子供さんの生まれた時の家が、墓地跡だったことが原因でした。当院で席を設けて二度にわたり亡者の消滅をして頂きました。

その結果、かなりの効果は上がりましたが、まだ勉強道具に触れられず、高校受験ができる状態ではありません。

私の所も相談者が多いため順番を待ってもらいましたが、なんとか受験に間に合えばと、何回か神様にお願い致しました。土地の障り、亡者の救け、先祖の救けと行い、試験の1週間前に全ての原因を取り除きました。受験に際し、学校に行っていないため、中学校の内申書は書きようがないと空白で、当日の試験だけが頼りでしたが、私立を2校受験し2校とも合格しました。そのうち1校は、都内でも有名校の一つです。病気は完全に治り、高校入学後は、無遅刻、無欠席で元気に登校しており、勉強もスポーツも精一杯やっています。

(3) ノイローゼ、自律神経失調症

N区に住むAさん(25歳、会社員)は、高校の頃よりノイローゼ気味になり、また、自律神経失調症など、様々な神経症に悩まされてきました。最初は、体に何か異常があるのではないかと思い、いろいろな検査を受けましたが、何も異常は見当たりません。そこでAさんは、病院の神経科へと通い始めましたが、悩みを聞いてくれるくらいで、ほとんど何の解決にもならず、精神安定剤の服用を勧められ、ますます泥沼にはまる毎日でした。

そんな折、知人の紹介で、ある霊能者の所へ行きました。結果は百万円も取られた挙句、何にも症状は良くなりませんでした。しかしAさんは、その後も何とか解決できないかと、いろいろな霊能者、精神科医を訪ねましたが、残念ながら熱意は虚しく、良くなることはありませんでした。

万策尽きたかに思いましたが、たまたまある本に私たちのことが紹介してあり、Aさんも「ここで駄目ならば、どこへいっても駄目だ」と思い、藁をも掴む思いで相談に来ました。早速加藤先生を通し、神様にお伺い致しますと、Aさんは前世では位の高い方で、それを良いことに多くの人をこき使い、酷い仕打ちをした

りしたため、その亡者たちの怒りの念によりおかしくなっていると教えて頂きました。

その後、加藤先生に亡者たちを出して頂き、Aさんが心から詫び、亡者の人たちも納得しますと、不思議にもAさんの心の重苦しさや神経症などがピタリと消え、今では元気に働いております。

(4) 非行、家庭内暴力

S区に住むBさん(44歳)の子供は、中学に入る頃から万引きをしたり、シンナーを吸うようになり、また家でも親に暴力を振るうため、困り果てて相談に来ました。この方も私どものところに来る前は、いろいろな相談所に行ったりしましたが、ありきたりの答えしかしてくれず、全然良くなる様子もありませんでした。

加藤先生を通し神様にお伺いしますと、Bさんの住む土地の下に、以前に稲荷の神様が祀ってあって、その上に住んでいるため、怒りを受けているとのこと。早速大神様をお願いしてこの神様を御本殿へと導きますと、まもなく普通に帰り、今では家中仲良く暮らしております。

(5) 子供ができない

K市に住むCさん(33歳)は、結婚して8年になりますが、なぜか子供ができません。最初は病院の検査に行きましたが、何の異常もなく、神社でお祓いしてもらいましたが、やはり子供は授かりませんでした。しかしどうしても子供が欲しいCさんは、これは何か霊的なものではないかと思い、私どものところに相談に見えました。

神様にお伺いしますと、土地の神様の障りであるとのこと。早速家に帰って、その場の土地の侘びと清めをしました。しかしその後、いつまでたっても子供はできません。そこで再度お聞きしますと(一つの相談事に対しては、いくつか障りが重なっている場合もあり、一つを解決しても残りがある場合は、良くなるということもある)、Cさんは前世で先妻の子供を自殺に追いやったため、大神様の方で子供は授けないようにしていたとのこと。

早速 Cさんは、その日から毎日毎日心の中でお詫びの行いをしていますと、半年後には神様からお許しを頂き、また今世は子供を大事に育てるとの心定めをしますと、まもなく子供を授かることができました。現在は、三人もの子供に囲まれ、楽しく暮らしております。

(6) 登校拒否

H市に住むNさんの子供は、中学に入る頃より登校拒否になりました。別にいじめられているという訳でもないのですが、学校に行きたくないと言ってずっと学校を休む状態でした。Nさんも困り果てて、学校の先生に相談しましたが、とにかく学校に来るようにしてくださいとしか言ってくれず、途方に暮れていました。

そんな折、たまたまある本で私どものことを知り、相談に来ました。加藤先生を通し神様にお伺いしますと、Nさんの子供は、前世で多くの人をいじめ、苦しめ、殺すなど、大変酷い仕打ちをしたため、やられた亡者の人たちが怒って、恨みの念を向けていると分かりました。

その後、加藤先生にこの亡者の人たちを呼び出して頂き、Nさんが子供に代わってお詫びをしますと、不思議にも1週間も経たないうちに、子供が「学校に行く」と言い出し、そのまま現在も元気に学校に行っております。

(7) 腰痛

I市に住むYさん(34歳)は、数年前より腰が鉛のように重く、痛いということで相談に見えました。神様にお伺いしますと、腰が悪くて亡くなった先祖が憑いているとのこと。早速この先祖の方を助け導きました。と同時に、医療的にも腰の治療を致しました。

と言いますのも、亡者(神の障り)を取っても、長年そこが悪かったため、急には良くなりません。取ったばかりのところは、肉体的に弱っていますから、そこに他人の亡者や悪神が入り込んでしまいやすく(亡者や悪心はその人の弱いところに憑く)、そうするとなかなか治らないのです。それゆえ、病気の相談には、障りと医学的治療の両方が必要なのです(本人の心の変化もないと治らない場合もある)。

Yさんの方は、障りと腰の治療をしたため、2ヶ月後にはすっかり良くなり、今は元気で働いております。

(8) 弱視

S市に住むSさん(39歳)は、なぜか数年前より視力が弱くなり、間もなくほとんど何も見えない状態になってしまいました。Sさんは大変困り果て、あらゆる治療を試みましたが、一向に良くなりません。霊能者のところにも行ったようですが、「墓参りをしなさい」としか言ってくれず(もちろん墓参りをしたところで何も変わらない)、絶望的な状態でした。

そんな折、知人からたまたま私どもを知り、訪ねてきました。加藤先生を通し神様にお伺いいたしますと、Sさんは子供の時に神社のお賽銭を盗んだそうで、その神様が怒って目を弱くしているとのこと。そのことをSさんに伝えますと、確かに覚えがあるということで、早速その神様のところへ、21日間毎日お賽銭を持ってお詫びに行きました。すると不思議にも徐々に視力が回復して、今では普通の生活もできるようになりました。

(補足) 神様の御賽銭を盗ったり、万引きをしたり、人の目を盗むようなことをしますと、先に行って目の病気になることが多いようです。

(9) うつ病

F市に住むTさん(32歳)は、20歳前から、何事においても心が沈んでしまう、うつ病になりました。最初は親も心配し、様々な療法を試みましたが全く効果がなく、以来10年も家の中でじっとしておりました。親は「もうこの子供は永久に良くなるまい」と匙を投げていましたが、たまたま知人を通して私どものことを知り、とにかくやれることはやってみようと相談に来ました。

加藤先生を通し神様にお伺い致しますと、Tさんは前世においては位の高い方であり、その権力でもって豪邸を立てようとしたそうです。しかしその場所に祀ってあった神社が邪魔だと言って取り壊して、その上に立てて住んでしまったというのです。もちろん片付けられた神様の怒りは凄まじく、加藤先生もものすごく疲れてしまうほどでした。

その後、Tさんの親が子供に代わって、何度も何度も心からお詫びした結果、神様もお許しくさいますと、まもなくTさんは正常に戻り、今では働けるほどにまでなりました。

(10) 大やけど

埼玉県に住むUさん(62歳)は、家でお茶を飲むためのお湯を沸かしていたところ、その沸騰したお湯をうっかり自分の手足にかけてしまい、大やけどをしてしまいました。

早速医者へ行きましたが、傷跡はかなり残ってしまうとのこと。Uさんは私の患者さんでもあるため、どうにかならないかと相談に見えました。

神様にお伺い致しますと、土公神様の障りで、以前に飼っていた犬の死骸を庭に埋めたための怒りと分かりました。そこで、21日間の侘びと清めの行いをいたしますと、傷はほとんど目立たなくなり、また生活上のいろいろの失敗もしなくなりました。

(11) 幻聴

S区に住むKさん(28歳)は、2年ほど前より耳で人の声がするようになりました。Kさんはびっくりして霊能者のところへへ行きましたが、逆に霊媒師にさせられてしまうところで、すぐ行くのをやめてしまいました。いくつか霊能者を巡った後、私どものところに相談に見えました。

加藤先生を通し神様にお伺い致しますと、Kさんは墓地だったところに住んでいて、そこに彷徨っている大勢の亡者に取り憑かれて、そのように声が聞こえているとのこと。しかしあまりに亡者の数が多く、仮に亡者を取っても次から次とそのような場所に亡者が集まってしまうため、住む場所を変えるように話を致しました。

住む場所を変えるということは大変なことなのですが、良くなるならと、比較的早い時期に場所を移り、同時に、加藤先生にも亡者を消滅して頂きますと、その

日を境にそのような幻聴はぴたりととまり、今では仕事にもちゃんとつけるようになりました。

(12) 浮気

H市に住むRさん(37歳)は、結婚して10年になる女性の方です。しかし、新婚当初から夫の浮気がひどく、大変頭を悩ませておりました。Rさんは何とかこのような悪癖を治したいと、優しく接したり、時には怒ったりと、色々試してみましたが、全く良くなる様子はありません。Rさんも疲れ果て、「私はそんなに魅力がないのかしら」と落ち込んでおりました。

しかし「これは何か変な亡者が憑いているのでは」と何となく思い、私どものところに相談に来ました。加藤先生を通し神様にお伺いしますと、夫に昔水商売をしていた(夫の)先祖が取り憑いていて、そのようにさせているとのこと。早速この先祖の方を助け明るいところへと導きますと、何とその日を境に浮気がぴたりと止まり、今では仕事が終わると真っ先に帰って来て、毎日労いの言葉をRさんにかけているそうです。

【二】大神・親神様と加藤先生

私たちをご指導下さっているのは、大神様と親神様でございます。大神様がこの世に現れてご指導下さいますようになった年月は、まだ数年かと思えます。大神様は、加藤先生のお宅にお鎮まり下さいます。親神様は、奈良の天理市にお鎮り下さいます。中山みきさんのお身体を通して今から百数十年前より、人間が陽気暮らしができる色々の有難い教えをご指導下さっております。

また、大神様が現れる2年くらい前より、加藤先生のお身体を通して再度（中山みきさん以来）私どもに色々の教えを伝え、それを納得させるために、その証として信じられないような奇跡を次々と見せて下さっております。その幾つかは「心の友」誌に書かせてもらっております。

親神様は天理市にお鎮まりになるために、天理教の神様のように誤解をされ、俺は天理の信者ではない、と反発の心が働く人もいらっしゃるかと思えますが、親神様は天理教という団体の神様ではありません。世界の、全人類の元神様でおられます。だから、加藤先生のお身体をお借りして話される時も、今まで一度も天理教という言葉は話されたことはありません。

「神の鎮まる場に参ってみよ。何かを感じずるであろう」と申されます。私ども人間は、あの宗教、この宗教というようにこだわり、組織を重んじますが、親神様はそんな小さなことを少しも問題にはしておりません。全て人間は神の子だと、捉えて下さっております。大神様の教えは、加藤先生を通して教えられ、私どもの本以外には学ぶことが出来ませんが、親神様の教えは長い歴史がありますから、関係の出版物などより学ぶことができます。

天理教にも入らなくて良いですし、信者にならなくてもよいのです。親神様は私どもの親です。世評や宗教組織を怖がったり、天理教の信者でないからといたりして、親神様の考えに近づかないのではなく、親の言うことを多く知ろうと努力して欲しいのです（今日まで、親神様を祀り、その教えを伝えて来て下さった天理教の方にも感謝したいと思います。ただ、私どもは、天理教というレッテルを貼られるのは嫌なんです。親神様のところへは、親ですから、お参りに行きたいだけのことなんです。また、天理教会の方々の努力により、きれいなぢばに参拝できておりますことも、感謝しております）。

大神、親神様のお手伝いをさせてもらって色々分かって来ますと、天理の教えが全く正しく、「心の友」誌で話させて貰っていることと完全に一致し、人類の救いの道は過去から既に説かれていたことに気づきます。考えれば、どちらも親神様の教えですから、同じ答えになるのが当然ですが、百数十年も過ぎてそれを今、再確認するのも、この乱れた世に必要なこととして発表する機会を与えられたのかもしれない。

(1) 加藤先生と中山みきさんの違い

加藤先生はいつも、「なぜ私のような者に、このような力がついてしまったのかしら。他の人でも良いのに…。仮にどうしても私でなければならぬとしたら、もっと若い時ならもう少しお役に立てたのに…」と申されています。その点について、天理教の教祖、中山みきさんとの役割の違いを神様にお伺い致しました（平成元年1月24日午前1時のことです）。

大神「天理の教えなるものを多くの人々に知らせるにあたり、その時代の折の中山みきなる者を神の道具と致し、世の人々の助けの道明けを致し、時により事に寄せ、神の思いを伝えたのじゃ。その折のすべての道明けと致し、歌にまた言葉にて、人々の心の成人を導き、知らせ助けることにての道具に致したのじゃ。

だが、そなたへの神の使いとしての道は、まったく別の思いありてからじゃ。その印と致し、障り、神の助け、亡者の助け、前世の折にての知らせ、存ぜぬことをそなたを通し、その様な関わりにて苦しみ喘ぎておる者たちを救う道の行いを知らせたく、魂の清き因縁の持ち主のそなたを使うたのじゃ。

そなたをおいて、道具と致しての行いのできる者は、世間広しと言えども他には一切ないのじゃ。多くの者達を次々と助け、良き運命に切り替えねば、この後益々人々の心はすさび、思いやりなき者達のいがみ合いの世の中に変わりて参るを、神は見ておれぬのじゃ。そなた、「いやじゃ、疲れる」と事毎に申しておるが、神はそなたを道具と致し、この先どこまでも人助けの道具と致し、連れて参るのじゃ。

そなたは年老いたと申しておるが、神の道に年はないのじゃ。この先、まだまだ数十年は道具と致し、神は使うて参るのじゃ。神がそなたを道具と定めしは、神の思いつきではないのじゃ。そなたを神の道具と致し使うことは、生まれる前よ

りの約束ある心の持ち主であるからじゃ。この先とて、神の手足となり、どこまでとて勤めることは神は申しておくのじゃ。では戻るぞ。

加藤先生も初めのうちは、逃げられるものなら逃げたい、と何回も思われたようですが、その都度説得され、今は運命のままに働かせてもらおう、と申されています。私も加藤先生の下僕としての役割を頂いたのですから、これも前世からの因縁と思い、喜んで勤めさせてもらおうと思っております。

今では、いつでも命はお返しできる心境です。死というものは、神様の用事が無くなったときに与えてくださるものだと信じておりますから、それが早くてもそれまで一生懸命に神様の道具としてお使い頂ければ有難いと思っております。1日1日が楽しく働ければ有難いことです。

(2) 加藤先生に神々の入り込み

まずは、加藤先生に親神様が最初に入られた頃の、親神様の話を紹介致します。

親神様「天地抱き合わせの間に住んでいる、人間を造った元の神じゃ。神代（加藤先生の名前）はな、信仰（天理教）をしているから、このようなこと（神様や霊の障りを説くこと。天理の教えにはそのようなことは出てこない）をしてよいのか、悩んでおる。神の道とこの霊のこととをな、心で悩んでおる。だがこれも、あくまで人助けの上に使う務めのうちになるのだ。これも人を助ける道だ。神代は心が清くなっているので、神も許しておるぞ。これから時折、わしも現れるであるぞ。わしは全ての神々のまた上の元の神じゃ。そのない世界を造った元の神じゃ。月日親神じゃ。神代は案ずることはないぞ」

親神様が加藤先生に入り込まれた後のことですが、さらに色々の自然界の神様が加藤先生に入り始められました。初めの頃は、神の入り込みとは何のことか良く分かりませんでした。神様が入られると必ず加藤先生の体調が崩れ、だるく、また入り込まれる場所はきりの先でねじ込むように痛いのだそうです。

このような状態は、入り込みの間続き、苦しみ続けなければならないのです。加藤先生も、痛いし苦しいし、日常の仕事もできなくなるので、「神様、困ります」と再三申し上げるのですが、「すまぬが許してくれぬか。辛いだろうがこらえてくれ。神々が入り込む度にそなたの力が強くなり、多くの者が救われるのじゃ。

神の頼みじゃ」と申されますと、加藤先生も「愚痴を言って申し訳ありません」とお答えになりまして、このような入り込み自体は、平成元年をピークに4、5年続いたと思います。最近はこのような入り込みは少なくなりましたが、今でも入り込まれる時もあります。

入り込みは1度に何十体の神々が入られる場合もあれば、数体の時もあります。この神様の入り込みの辛いのが、加藤先生の修行でもあるようです。でも、その辛さは外から見ていても気の毒なくらいで、代われるものなら代わってあげたいということもあります。本当に大変な苦しみです。もちろん、このようなときは相談者の依頼は控えさせてもらっております。

後になって分かったことですが、この様に色々の神々様が入り込まれることにより、依頼者に関係する一番分かる神が担当として現れ、解決して下さるので、何事もすぐに対処できるのです。ですから、数年前にこのようなことを始めた頃に比べると、今は即座にどのような問題も解決できるようになりました。当然解決方法も変わってきました。今は、加藤先生のお身体には、数百体の神々様が入り込まれております。もちろん、総支配の神様は、大神様親神様です。

次に入り込みの一部をご紹介します。加藤先生のお腹が痛い時があり、その件についてお伺い致しますと、力の強い神が入るのでお腹を整理しているのだと申されました。その前後の様子です。

(一) 腹の中の神

加藤先生「ここ数日、足と手が痛く、特に夜中に二本の足がすごく痛かったのですが、今朝起きようとしたらほとんど痛くないので、あー楽だと思いましたが、神様が「もう入り込みは終わったのじゃ」と申され、「痛かったであろうが、その代わり神々の力が強まり、それぞれの事情を皆確実に申すことができるのじゃ」と話されました。しかし、「またしばらくの間は、入り込みは続くぞ」と言われました。本当に目が覚める度に痛かったのです」

腹の神「わしは、そなたの腹の中におる神じゃ。長い間、すまなかったのお。これで入り込みは皆終わったぞ。長い間、誠に体の痛い思いをさせて、すまなかったのお。許してくれぬか。これからはそなたの力もさらに強まりたゆえに、他の多くの者たちの誠の助けができて参るのじゃ。また、多くの者たちが寄って参る

ぞ。今まで痛い思いをした足、また他のところ、これより多くの神々が治して参るのじゃ。今しばらく待ってくれぬか。入り込みはこれで終わりじゃ。

次の入り込みはまた先に参ることになるが、その時までは普通の者と同じように元気でおれるのじゃ。だが見かけは普通だが、他の者とはまるで違うのじゃ。以前は神と一体であったが、今は神の体そのものじゃ。強くなっておるのじゃ」

(二) 他界の神

加藤先生「大神様・親神様、お伺い申し上げます。今、私の体に他界の神様が次々とお入りになるために、腕の付け根のあたりが痛くなるのは分かりますが、私の分からないのは、他界の神様とはどのようなところにおられる神様か分かりませんので、どうか教えて頂けますでしょうか」

大神「待て、代わるぞ」

他界の神「わしじゃ、他界の神じゃ」

加藤先生「申し訳ございませんが、私の伺いたいこととございますが、他界の神様はあの遠い空に輝く星におられるのでございますか」

他界の神「何を申す。そのようなところの神ではないのじゃ。わし神なるは、この世を司る大神親神様方のおわす所におり、別の世界に畜生界の神と申す神もおわすであろう。それと同じことの如くであるのじゃ。人は生を終えしことを、他界を致したと申すであろう。その他界であるのじゃ。

それゆえに、果てし者たちの迷いありて、人に取り憑く者を助け、或いは消し去り、または亡者となりし者たちの恨みの念を向ける者たちに、それなりに申し聞かせ、分かりし後にてはその者たちにふさわしき道を教え、業深き罪を繰り返し致す者たちより罪を取り除き、その者たちを修行の場に迎え、または気の毒なる亡者なるは即座に良き場に導き、それぞれに応じた道しるべを致し、生ある者たちへの関わりを取り除き、亡者となりし者たちと生命ある者たちの中に入り、良きように致す神が今そなたに入り込み、以前の折とはさらに別の力を致させたく、入り込みを願うたのじゃ。

以前の折にては、その度ごとに大神方の助けの折々に出ては参りておりた（大神様に用があると云われて、初めて役目を果たしていた）が、だが今なるほどの様なることとて即座にそれぞれの関わりある亡者たちの導きを致し、それぞれの関わりある亡者たちの解決を致すは、わし他界の神の役目でもあるのじゃ。その様なる行いを致す神でもあるのじゃ」

この神様が入られてより、本人の前世の因縁がより詳しくわかる様になりました。また解決への方法も、さらに的確にできるようになりました。亡者の消滅もこの神様がして下さいます。

（三）外界の神

加藤先生「大神様親神様、申し訳ございませんが、今日夕方頃から私の両方の足が重く感じまして、歩くのが面倒な気分でしたが、その様になるのは、何か原因があるのでございましょうか」

大神「待て。関わりのある者がおるのじゃ。関わりのある者と申すは、これは亡者ではないのじゃ。この者なるは、自然界の神ではあるが、だが大神親神にての関わりはないのじゃ。その神なる者と代わるぞ。

外界の神「わしじゃ。すまぬ。許してくれぬか。わしはその辺りの神とは違うのじゃ。ただ悪しき行いなるは、何一つとて致しておらぬのじゃ。だがわしは、そなたに頼みたきことがありて、足重くさせたのじゃ。わしはこの辺りと申すか、または自然界と申すところに関わる神ではないのじゃ。

そなたに頼みたきことは、この屋敷と申すか、物の植え込まれし場にわしは下りたいのじゃ。その場よりそなたたちの守りの神と致し、この先そなたの健在の限り、人々の助けの上に大いなる力をわしとて与えたきゆえに、そなたにそのことを申したく、足を重たく致させたのじゃ」

加藤先生「重ねて申しますが、本当に神様は、外界の神様ですか。外界とはどの様なところですか」

外界の神「わしの界と申すは、今そなたの住む様な場所ではないのじゃ。またそなたのようなる人と申すものとおらぬのじゃ。ただ広き広きところと申すか、

誠に物音一つ致さぬ静まりし無限の場と申すか、汚れしことなき澄み渡りたる無限のところであるのじゃ。今そなたの住む世界なるは、人々の争い、または自我、欲などと限りなき果てもなきことごとくに陥りておるが、わし神の界にては見るに耐えぬのじゃ。

それゆえに、他の界の神ではあるが、そなたの住む地に降り、その場よりその界の神々の手助けを致すを申しつかり、先ごろより植え込みに下る下ると申しておるのじゃ」

加藤先生「さようでございますか。では申し訳ございませんが、私より今一度、私の信ずる神様にお伺い申し上げまして、その申された通り私も心を定めさせて頂きますので、どうかしばらくお待ちくださいませ」

外界の神「よいぞ。承るがよいぞ」

加藤先生「有難うございます」

大神「大神じゃ。親神じゃ。わしの申すことは他にはないのじゃ。外界の神の下るを願うが良いのじゃ。その界の神の力とて受けるは、更に良きことであるのが分かりたゆえにの」

加藤先生「ありがとうございます。私も大神様、親神様のお言葉を頂いたので、今は何も分かりませんが、その外界の神様のお下りを受けさせて頂くことに致します」

大神「さようじゃ。その思いに定めるがよいのじゃ」

加藤先生「ありがとうございます」

外界の神「すまぬ。すまぬ。わしは外界の神であるのじゃ。この地に降りし後なるは、何一つとて悪い様には致さぬ。そなたの健在の限り、人助けを致し、多くの者たちの集まるところに致さねば、との思いあるのだ。わしの思いは、外界の神々の思いであるのじゃ。そなた恐れておるが、そのように恐れることは要らぬのだ。誰にとてできぬ力が今ひとつそなたにできるのじゃ。恐れることは要らぬのじゃ。わしの下るに当たり、今ある足の痛み、手の痛み、即座に消え去るのだ。

また他の者、悪しき病ある者がそなたに願う事にて、病とて癒えるのじゃ。その様な力がいまのそなたに加わるのじゃ。この夜、今の植え込みに下ることに致すのじゃ」

加藤先生「そのことですが、植え込みに下られた後で、もし知らずに土を掘ったり木を切ったりしましたら、いけませんでしょうか」

外界の神「構わぬ。その心遣いは要らぬのじゃ。何を致したとて構わぬのじゃ」

加藤先生「分かりました。では神様の申される通りと申したいのですが、くどいようですが、私はもうその申し出から逃げることはできないのでしょうかね」

外界の神「そのようなることを申す思いはよく分かるが、幾度も申すが、悪いようには致さぬのじゃ。心落ち着けてくれぬか。外界の神とて神は神じゃ。守る神なのじゃ」

加藤先生「分かりました、申し訳ございません」

外界の神「では、この夜は植え込みに降りることに致すぞ」
(ここで下られました)

外界の神「降りた、降りた。これより守るぞ。この先はわしとて守る力をそなたを通し、他の者に向けるぞ。力強く人々を守り助けねばならぬのじゃ」

(四) 別宇宙の神

平成元年の4月のある早朝、加藤先生が今までにない足の痛みを感じたため、神様にお伺い致しますと、この地上ではない神様の関わりがあるとのことで、大神様親神様をお願いしても、その神様がなかなか出ていらっしやらなかったのですが、ようやくお話を聞くことができました。

別宇宙の神「わしじゃ。そなたの足に痛みを与えるのは、わしじゃ。わしはこの辺りの神とは違うのじゃ。わしはこれより遙か遠くの他の界より参りし神であるのじゃ」

加藤先生「神様、他の界と言われますと、どちらですか」

別宇宙の神「わしは、この世のそちこちの場におりし神とは全く別の界の神であるのじゃ」

加藤先生「それで、私の足に何か事情がありまして付いたのでございましょうか」

別宇宙の神「そうじゃ。いまそなたの身の内には多くの神々が入り込んでおるが、皆その神々は多くの者たちを助ける神々であるのじゃ。だがわしは助ける神ではなく、全く別の働きをする神であるのじゃ。

だが、そなたの身に入り込むということは致さぬが、このところこの界にては、世の乱れと申すか、諸々の者たちの心の結ばれ方の少なき世であるのじゃ。多くの者たちの自分勝手の振る舞い多き世相と申すは、他の界におりし神々の目より見るは、誠に見苦しくてならぬのじゃ。だが、わたしたちの関わり知らぬことゆえに余計なことは申さぬが、そなたに知らせたきことがあるのじゃ。

他の界にはこのような自分勝手の振る舞い多き者たちはおらぬのじゃ。皆それぞれの役割を持ち、お互いに人を守り、助け合いの心地良き明るいところであるのじゃ。そのような世界のあることを今改めてそなたに知らせたいのじゃ。わしのおる界は、このように人々は別々のところに居はもたず、皆一緒に苦楽を共に致しておるところであるのじゃ」

加藤先生「では、神様、他の界と申されますと、この世の神様ではないのでございましょうか」

他の宇宙の神様「さようじゃ。わしのおりし界は、この世でもなければ地獄でもないのじゃ。全く別の世界であるのじゃ。わしはこの地より遠き界の神であるのじゃ」

加藤先生「では神様、私にそのようなことを知らされまして、どのようなことになるのでございしますか」

他の宇宙の神様「わしはそのような界のあることをそなたに教えたく、ここのところそなたの身近に近づいておったのじゃ。だが、このことを知らせた後は、わ

しは元の世界に立ち戻ることに致すぞ。たとえわしがこのようなことを申したとて、この世の中と申すか、この界の邪魔立てはいたしはせぬ。

そのような仲睦まじい界のあることを知らせたいので近づいて参ったのじゃ」

加藤先生「では神様は、この世界の神様ではないと申されるのでしたら、宇宙人という人たちのいる世界でございますか」

他の宇宙の神様「宇宙人と申すは知らぬぞ。そのような者のおりしところではないのじゃ。全く別の世界の神であるのじゃ。わしは、この世界に悪いことをもたらすために近づいた訳ではないのじゃ。そのようなところのあるのを知らせたく、近づき知らせたのじゃ。ではこれにて戻ることに致すぞ」

大神「わしじゃ。そなたの体にまといつき、足に痛みを与えておったは、これはまことに遠き存在の別の界のありしことを知らせたく、近づき参りた神であるのじゃ。だが、このようなことは、気に致すことはないのじゃ。この世創造以前の多くの神々の支配を致せしところであるゆえに、このようなことは心にすること要らぬのじゃ。別の界のことは、別の神の支配のことであるゆえにの」

加藤先生「神様、このような別の神様が近づくことがまたあるのでしょうか。なんだか変な気分がするのでございますが」

大神「案ずること要らぬぞ。他界の神の手の出るところではないゆえにの。かと申し、悪いことを申しておるわけではないゆえに、気に致すことはないのじゃ」この神様は、どうやら地球以外の神様だったようです。地球もどの星から見られても恥ずかしくない状況に、人間の心も整えたいものです。

(五) 力の強い神の入り込み

平成元年6月の暑い日が続いている頃、加藤先生が電話で、「今朝、急に立っていられなくなって、ふらふらと座り込んでしまったんですよ」と申されました。その件につき、何か悪い病気にでもなられたかと思い心配して神様にお聞き致しますと、次のとおりでした。

天下った神「わしじゃ。わしがこの館に天下ったのじゃ。今朝、そなたはフラフラとして、座り込んだであろう。その折に降ったのじゃ」

加藤先生「何神様でしょうか」

神「わしは、宇宙創造以前の力のある神であるのじゃ」

加藤先生「では、大神様でしょうか」

神「違うのじゃ。大神とは違う力の強い神であるのじゃ。これよりはそなたの体に入り込み、多くの神々共々、人を助け導いて参るのじゃ。そなたには今の信仰（天理教）の教え以上の力を神が与えておるのじゃ。天保9年の教えの道が開かれし折（中山みきさんに親神様が天下った年）には、人々の心のあり方を説き表し、この世の初めの事柄を分かるようにことごとくに説いて参ったが、今はそれだけでは足りぬ。分からぬ事ごとを知らせ、助けたいゆえにそなたを使い、折ある度に導いて参るのじゃ」

（六） このように力の強い者はいない

平成元年5月6日の夜中の夢で、地下の道をどんどん進み、その道がすごく長く、突き当りのところに広くて丸い場があった夢でしたので、どういう夢か分からないので神様にお聞きしたところ、次のようなことを教えて下さいました。

大神「そなたの昨夜の夢のことじゃが、あの夢は夢ではないのじゃ。神の知らせじゃ。あの様に長い穴の掘られし道を進みし先に座敷のような場があったであろう。その場は神の折りし場であるのじゃ。その神のおりし場に、そなた自身にて参りたのじゃ。あの様な長い道のりは今までに通りに参りし道のりであるのじゃ。

今のそなた自身、全く神のおりし場まで辿り着いたのじゃ。この先々、他の者たちの頼まれし事なるは、さらにさらによく分かり、また人々に慕われる立場になりて参るのじゃ。この先の日々は、頼まれしこと多くなるが、皆頼みし者たちは神の力にてよくなるのじゃ」

加藤先生の体に数多くの神々が入り込まれ、加藤先生の色々の修行もほぼ終わり、人助けの神々のおられる場にいよいよ着かれた訳です。益々多くの人たちが助かるのです。本当に有難いことです。

続いて、平成元年 10 月 19 日の朝、加藤先生との電話の最中に大神様親神様が加藤先生を通して出られまして、「世界中どこを探しても、この者のようなる者はおらぬぞ。この者は神と一体じゃ。どのようなこともこの者を通しよきになるのじゃ。このように力強き者はどこにもおらぬし、この者の後とて長きにわたり現れぬのじゃ」と申されました。加藤先生とご縁を持てる私たちは、本当に幸せであると思います。

しかし、加藤先生は人間です。肉体があります。この肉体を色々の神や亡者がお借りして解決していくのです。その度に、加藤先生は疲れてしまいます。このことを考えると、本当に加藤先生には申し訳ないと思います。相談者の方々も、この肉体の疲労を理解してほしいと思います。

宗教団体の方々も自分の組織を守るために自分の教祖以上の人が出ると「それは偽物だ。いんちきだ」とすぐ批判したがりますが、そうではなくて、大神様親神様は何としてもどのような方法でも悩み苦しむ人たちを救いたいと思っていられるのですから、大神様親神様の本当の心を理解したら、宗教家の人たちは互いに手を取り合って、悩み困る人を助けなければいけないのではないのでしょうか。

互いに敵対視するのではなく、それぞれの教団の良き点を活かしあいながら、困る人を一人でも多く助け、導きたいものです。私も働かなければ生活できませんから、宗教活動に専念できませんが、宗教家の方々には少しでもこのことを理解していただいて、悩む方々の支えになって頂きたいと思います。

(3) 天照大神様への伺い

(一) 天照大神様との会話

(途中まで省略)

宮下「私も神様とお話をすると、すごく嬉しいんですよ。たまにはやっぱり話をしたくているんですが、なんか偉いので勿体なくてなかなかこう…」

天照大神「そのようなことはないぞ。わしはお前の守護神じゃ」

宮下「はい、すごく嬉しいんですが、何だかあんまり偉くて勿体無いからつい、こう…」

天照大神「遠慮せずともよいぞ。また神代もな、朝に晩に、尊い天理の神、自然の神を拝んだ後に、またこれも今日のな、1日を頼むとわしに願っておるのじゃ。守っておるぞ。案ずることはないぞ」

宮下「はい、有難うございます。神様、私も皆さんと一緒に一度天理に行かせて頂きたいと思っておりますが」

天照大神「是非行くがよいぞ。あれはな、わしは天照の神じゃがな、親神様はそれ以前の神（神界以前の神）じゃ。それ以前の神…この世界の守護神じゃ。だから参るが良いぞ。教えそのものは誠にありがたき教えじゃ。ただな、書物に色々と書かれておるのはな、それは人間の為す業じゃ。神のなす業ではない。神を信ずるのじゃ。人を見るのではない。神じゃ。その心で参るが良いぞ。

書いてあるからと言って心を曇らすではない。あれはな、人間のなした業、またそれを面白がって集めて、書物にする人間がおるのじゃ。そうしておいて、おだてるのじゃ。そのようなことをして楽しんで金を取って…そのような人間も罪になるぞ。人のな、非を見つけては世間一般に広めておることは、良きことではないぞ。

人の非はな、見ても見ぬふりをして自分は真っ直ぐな心で通っておかねば…あのような仕事をしておる者は、いずれ暗いところへ落とされる。人の非を見るでないぞ」

（二）神の世界について

加藤先生「神様の世界でも、人間界同様の修行があるのでしょうか。人間と同じように、神様にも苦しみなどはあるのでしょうか。」

天照大神様「そうじゃ。神の世界とて、人間界のように様々な仕来たりがあるのじゃ。その仕来たりを守らず、道を外れる神もあれば、人間同様に真面目に勤める神もおる。良い神もいれば、悪神も多くいるのじゃ。

そのような悪神の道に落ち込みし神の中には、神界より突き落とされ、さ迷う神もいれば、人間界の者たちを悪用いたし、狂わせてしもうておる神も数多くいるのじゃ。

今、人間界にて様々な信仰があるであろう。誰それに神が下り、神言を申した、それが人助けになる神だ、などと人を集め、有難い神などと申して信仰を広めておるが、そのような場に集められし者たちは、無駄足を運ぶだけで、一向に何事にせよ解決がないのじゃ。

皆、悪神に惑わされておるのじゃ。今、宮下の所に色々の者たちが、私は何々の信仰をしておる、などと申し参る者たちが多くあるであろう。その中にはほとんど、信ずると申す神で助かった、良かった、と申す者はおらぬであろう。「神が私の守護神で人助けに下った」「有難い神が夢に現れた」などと申しておるが、これは皆神界より突き落とされ、さ迷いし神が何かを求めているような者に取り憑き、訳の分からぬことを口走らせて、人助けなどと申して人集めを致しておるのじゃ。

このような悪しき神に導かれし者たちは皆無駄に終わり、誠の心の道は一向に開かれぬゆえ、死後の世界に参りし後は、ほとんど皆の者と申して良いほど苦しみ、のたうち回り、自身より悟れるようになるには何百年となく苦しみ通しのときを送らねばならぬのじゃ」

神様の存在が分かってくると、自分自身が生きている前に生かされていることに気づきます。この世を支配しているのは人間ではないことを悟るでしょう。神様の守護の中に生かされ、色々のものが絡み合って、生かされ、存続しているのです。人間があつて神があるのではなく、神があつて人間があるのです。

無神論者の方は、自分は偉い者だと思い上がり、自惚れの心があるのだろうと思います。天恩に目覚め、神様の守護を知る謙虚な心が必要だと思います。

金銭とか物を重んじてその奴隷になるのではなく、本当の信仰、価値ある信仰、つまり日々神様の守護を感謝し、天の定め、天の理をしっかりと心に刻んで行くことが大切です。今までの信仰とは、自分から努力したり務めることはせず、ただ神様頼みますと願いだけをするものでしたが、本当の信仰とは、自分自身の心の中身に価値を持とうということです。

分かれば分かる程、悟れば悟るほど、自分のものになり、幸せへの道が歩めるからです。自分が分かり理解した程度に応じ、天から恵みという守護があります。悟りや理解をすることは、他人の力では駄目です。自分で求め、見つけてくださらないと自分のものにはなりません。

【三】先祖の障りと供養

今までにも、先祖の助けや供養の方法を本（「さまよえる魂の救済」）で紹介させて頂きましたが、まだよく理解していない方が多いので、改めて説明させて頂きます。紙面の都合上、本に書いていない点について説明致します。

是非、本も併読しながら（又は本誌巻末参照）理解して頂きたいと思います。どこの家にも世帯を持ったら〇〇家先祖代々の位牌は必須です。代々の位牌があっても白木や繰り位牌では駄目です。また、魂入れはお坊さんや神式の祝詞では入りません。

先祖の助けが出来ていないと、生きている私たち子孫が先祖の障りを受けて、病気や不幸に泣くことが多くなります。先祖が子孫を苦しめるなんでおかしいという人がいますが、これはあの世を知らないからで、詳しくは本を参照して欲しいと思います。

では、実際例について紹介してみます。

(1) 先祖の障りで子孫が苦しむ場合

例① N家…父方の先祖の障り

大神様「この者四郎なる者、そのように胃と申す食する物の入るところの病にて困りておるは、それなりの関わりがあるのじゃ。待て。関わりある者と代わるぞ」

先祖「はい。私でございます。私は、N沢の先祖の者でございます。私は古い時代に生きた者でございますが、あの子孫のように体が弱くて、長い間ブラブラして、その後にはウンと血を吐いてそのまま分からなくなって死んでしまった者でございます。

私が遠い子孫の者の体に頼っているのです、あの子孫は私の病と同じように体が悪くなっているのです。私は今も苦しいです。どうか私を助けてください。お頼みします」

例② O家…母方の先祖の障り

大神「この者、五郎なる者、そのように眼のことにて困るは、これは自身の体に原因があるのではないのじゃ。全く違うのじゃ。待て。代わるぞ」

先祖「はい、私です。私はO山のものではありません。私はあの子孫の者の女親の生まれた家の古い先祖の者です。私があの子孫を頼っているのです。どうか、私の体を助けてください。お願いします」

加藤先生「わかりました」

(ここで先祖が助け出されました)

先祖「ありがとうございました、本当にありがとうございました。明るくなりました。」

加藤先生「神様、この方の家のことはよく分かりませんので、どうか神様の場にお導きくださいまして、修行の道に、または、次の生を受けられますように、お導きお助けのほどをお願い申し上げます」

大神「さようじゃ。よくわかりた。亡者なる者、これより神について参り、神の場にての修行の果てに、またの良き運命に生を与えることにいたすゆえに、ついて参るがよいのじゃ」

先祖「ありがとうございます」

大神「では、これより参るのじゃ」

例③ I家…先祖の助け

宮下「神様、お願い致します。今日は、I家の先祖の皆々様をお助け頂きまして、先祖代々の位牌の方へ、お導きの程をお願い申し上げます」

大神「I家の何と申す」

宮下「輝夫と申します」

大神「テルオだな。良いぞ。それで良いのじゃ。先祖代々の助けと導きとな。暫く待て」

(ここで助ける)

先祖「はあ、はあ、はあ、苦しかった。苦しかった。はあ、はあ」

大神「もう良いぞ。この者は、自分の体（加藤先生の体）がおかしくなるからもう良いぞ。これより即座に一同、位牌に導くことに致すぞ」

宮下「お願い致します」

(ここで導く)

先祖「はあー、有難うございます。有難うございます。苦しかったです。私だけではありません。私は苦しみ抜いて、こんなになってしまった者でございます。私が苦しいので、この方が私と同じになったんですよ。申し訳ありません。でも楽になったみたいです」

先祖「ああよかった。よかった。有難うございます。有難いです。私はI家の先祖の者でございます。よかったです。苦しかったんです。苦しかったんです。物が言えないくらい苦しかったんです。で、この方に悪いからと、神様が私を引っ込ませたんです。でも楽になりました。有難うございました」

宮下「Iさんは大勢でいたのですか。その暗いところに」

先祖「はい。そうでございますよ。大勢おります。私のI家では、代々長うございますので、苦しんでいる人が多いのです。私達の時代にはね、お坊さんがね、お経をあげてくれて、引導を渡してそれで良いと思っていたんです」

宮下「ああ、そうですか、わかりますよ」

先祖「だけど、違います。病の時に苦しんでいて、そのうちに何にも分からなくなっちゃったら真っ暗闇でね、真っ暗闇の長いままだったんですよ。お坊さんのお経はあげてくれたんですかね」

宮下「やるのはやっているんです、はい」

先祖「やったのかな。引導なんかやったのかな。生きている時には確かにやりましたね。だけどね、私の時にはそんなこと何にも分かりません。病の時のまんまね。急に真っ暗いところに落とされたんだか落っこったか、ずっと今までね、真っ暗闇の寒いところでね、病のまんまで苦しんでいたのは私達ですよ。私だけではありません」

宮下「うんうん、分かります。分かります」

先祖「あのね、お坊さんがね、本堂でね、木魚を叩いてね、南無阿弥陀仏とかね、なんとかごちよごちよ言いますけどね、あんなの何にも分かりませんよ」

宮下「役に立たないわけですね」

先祖「役に立つも立たぬも知りませんよ。見えませんよ。でね、引導を渡すということは、人様の時には見て知ってましたけどね、私達にもそんなことあったか何だか、全くわかりません。だから坊さんというのは、なんですかね」

宮下「そうですね、なんですかね」

先祖「私達はこうやってね、全く体が違うところに来たのに、お寺に行ったのかねえ」

宮下「それはやっていると思うのですが」

先祖「埋められたのかねえ。葬られたのかねえ。何にも分かりませんでした。今まではね…でも今は違いますよ。だからね、お寺の坊様は、あーやってね、木魚を叩いているけれど、あれはやったのかね、私に」

宮下「うん、やっているのでしょうけど、効果がないということなんですよ」
(注：余程修行をしているお坊さんだと、効果がある場合もあります)

先祖「何にも分からないですよ。嘘じゃないですよ。この方（加藤先生）が言っているのじゃありませんよ。私が言っているのですよ」

宮下「分かります、分かります。はい」

先祖「そういうふうな坊様は、何をしてたんだかな。何をしてたんだかな。そういう風に思いますよ」

宮下「あなたが亡くなって向こうへ行った時に、家族のみんなが亡くなってそっちへ行っているのは見たのですか。それは見えなかったのですか」

先祖「見えませんよ。自分だけ真っ暗けの真っ暗ですよ。みんな、一人一人がそうじゃないんですか。私だけじゃないと思いますがね。みんな一人一人が真っ暗のところにね、私みたいに困っていたんじゃないんですかね。私みたいにね、そのまんま生身の時のまんまでね、体があって苦しい苦しいと、それと同じでしょうね。私だけじゃないと思いますが、他の人に聞いてみてください」

宮下「今はそうやって、皆さん明るいところに集まったわけですね。明るいところへ」

先祖「はい、はい、そうです。有難いです。今初めて明るくなりました。何でも見えますよ。苦しいのも取れました。それと、おしゃべりしてすみません。私のね、体がないですよ。体がないですよ。私の体がね、腐っちゃったのかな」

宮下「腐っちゃったのかもしれませんがね。土の中にそのまま埋められたんだと思うのですが」

先祖「そうですね、確かにもう生きてないようですからね。そうかもしれませんがね。だけど、今いるところ（治療院のこと）は、私達の生きていた時代のものとは全く違いますね。よそ様のところだからかね」

宮下「そうですね、よそ様だからですね」

先祖「よそ様だからね。だけどね、こんな白い壁の家なんかなかったよね。煤けた、煤くれてたなあ。焚き火するでしょう。家の中が真っ暗ですよ。だけど、こ

んな真っ白い家の中なんか、ありませんでしたよ。全く違いますね。これがよそ様の家だからであるか、それとも時が違うのか、分からないけどね。私達の時代はね、囲炉裏で火をくべてね。家の中が煙ったりね、目が痛かったりね、囲炉裏ね、真ん中にね、鉄瓶をぶら下げてね、お茶を沸かしたりね、鍋にね、味噌汁をこしらえたりね、大根を煮たりね、何か煮てね、うどんの煮込みなんかこしらえてね、今囲炉裏はないですか」

宮下「囲炉裏はないです」

先祖「やっぱり違うんだな。やっぱり全く違うんだな。住む時が違うんだね。そんなことがね、違うのがここ真っ白の壁だから、よそ様だからじゃないのかなあ」

宮下「そうじゃないんです。今はそういう時代なんですね」

先祖「でもよかったよ。よかった。有難いです」

宮下「皆さんはお腹が空いているでしょうから、今日から帰ってちゃんとご飯やおかずや、うどんなんか差し上げるように…」

先祖「うどんの煮込み…うどんの煮込みは、うまいなあ、うまいなあ。油揚げでも放り込んでなあ。うどんの煮込み、やるといいや。うまいなあ、うまいなあ」

宮下「そうすると、あなた様はあまり古い時代のご先祖様ではないですね。割合新しい方のご先祖様の…」

先祖「そうかも。私はね、明治の時代ですよ。明治の十年は知っていますよ。それより後は、分からないですよ。うどんとか、そんなことやって食ったんですよ」

宮下「よく分かります。色々教えていただいて…」

先祖「有難いなあ。本当によかったよ。嬉しいからなあ、皆頼むから先祖のことを思ってくれよ。思ってくれよ」

宮下「ご先祖様、ここにおるのはI家の嫁でございます。皆様ひもじいので、ご飯やお茶、おかずやお水を毎日差し上げますと申しておりますので」

先祖「頼みますよ、頼みますよ。みんなね、ひもじい思いですよ。お茶も飲みたいですよ。頼むからね。水も欲しい者もいますよ。頼むな…よかった、よかった。ありがとうな、ありがとうな」

大神「もうよいであろう」

宮下「はい、はい、有難うございました」

大神「きりがないので、この辺でもう良いであろう。この者が疲れるでなあ」

先祖「あーよかった、本当によかった。生きていた時と同じになれた。体が楽になったということだよね。体が楽になったということと、明るいこと、生きていた時と同じですよ。有難うございます。有難うございます」

宮下「神様のおかげですよ。本当によかったです」

先祖「あーよかった、本当に嬉しいです」

大神「よいぞ、皆よくなるぞ。Iなる者の古き先祖の者たち、皆喜びておるのじゃ。供養を致すが良いぞ。家の者たちとてな、明るき運命になりておるがゆえに、分かるかな、先祖を大事にすることが自身守られるのじゃ。分かるか。これよりその行いを致すことじゃ」

I「はい、一生懸命にいたします」

大神「またな、Iなる者な、よいか。身にしみて分かりたであろう。痛い痛い頼むだけではだめじゃ。先祖供養も大切であるが、それとともにこれからは、自身の行いを深く致すことじゃ。心を磨くことじゃ。これよりは神の道にしっかりとついてまいることじゃ。分かるか。痛みとてこれは、日を追って楽になりて参るからな」

I「はい。有難うございます」

大神「ではこれにて戻るぞ」

(補足) 病気の重い亡者が加藤先生のお身体を借りて出て来ますと、加藤先生も同じような体調になって、具合が悪くなってしまいます。そのようなときは神様が見ておられて、即座に対処してくださいます。そのように、常に、加藤先生は身を削る想いで人助けに務めてくださっています。

例④ Y家…信仰の違いから先祖を供養しない

宮下「神様、ここにいるのは Y 田花子と申します。この者の実家の先祖について…」

大神「実家とはなんだ。生家であろう。生まれ育ちし家と申せ」

宮下「はい、申し訳ございません。神様、この家の生家、この者の兄ですが、一つの信仰を持っておりまして、跡を取っている者ですが…」

大神「なにを取っておるのじゃ」

宮下「あの家の跡継ぎでございます」

大神「跡を継いでおるのか」

宮下「そうでございます。そして、位牌を作ることができない宗教の者でございますので、恐れ入るのですが…」

大神「そのような信仰と申すものは駄目じゃ。」

宮下「その様に申したのですが、妹がいくらお兄さんに申しても、兄はそれを聞き入れてくれないものですから。」

大神「さようか。分かりた。ではこれより、神が関わりある気の毒なる亡者達を助け、良き場に導くことにいたすぞ」

(ここで助ける)

先祖「アアアアアアアア。明るくなりました。明るくなりました。本当に苦しかったんですよ。あー良かった。あー良かったですよ。本当に良かった。私達はね、みんなそうですよ。真っ暗い所にね、病でいた時のまんまで今の今までいたんですよ。分かりますか。子孫の者はなんにも言わないのですか」

山田「はい、分かります」

先祖「まったく、このような子孫だから私たちが苦しいのですよ」

宮下「申し訳ございません」

先祖「先祖をな、真っ暗い所に追いやっといてな、平気にいるんだから悔しいですよ。私はね、古い先祖ですよ。まだまだ後々、子孫の亡者と言っているんですがね、仲間は大勢いますよ。皆同じように苦しんでいるんですよ。本当に苦しいんですよ」

宮下「でも御先祖様。今日は、この嫁に出ていった子孫が、御先祖様達のことが大変気に掛かり、こうやって神様にお願い致しまして、お助けさせていただいたわけでございます」

先祖「そうか。そうですか。それならいいけどね、こんな思いをいつまでもさせていれば、皆取り憑きますよ。取り憑きますよ。悔しいからそうですよ。苦しいからそうですよ。苦しいから取り憑きますよ。取り憑けば、皆私達のような病気になるんだからな」

宮下「はい。よく分かります」

先祖「取り付かれた者は、本当にな、子孫はな、分からないから困るんだよ」

宮下「本当にそうです。本当にそうです」

先祖「それで、これから何をしろと言うのですか。早くしてください」

宮下「はい。それで皆さんはね、これから神様の所にお預けになって楽な暮らしができるようにさせていただきます。今まで苦しかったと思いますがね。そこでは神様がいろいろと教えてくださいます。そして皆さんはそこで...」

大神「わしじゃ。大神じゃ。良いぞ」

宮下「ありがとうございます」

大神「この者達は皆、神の場に助け導くことにすぞ。その様に先祖を敬う者がおらぬ家としては、致し方なきことであるのじゃ。それゆえに、その様に亡者となりし者が悔しい思いでおるのじゃ。子孫は先祖のことは分かっても分からずとも、先祖を崇めるような者でなくてはならぬのじゃ。先祖があつて子孫があるのじゃ。子孫は先祖の繋がりであるのじゃ。

その子孫の者が、その様に先祖のことに思いを置かず、他のわけの分からぬ者の申すことに心を、身を入れてついて参るは、これ間違うておるのじゃ。亡者となりし者は、難しき和尚なる者の付けし名前（戒名）とていらぬのじゃ。命ある折の呼び名で十分じゃ。それで良いのじゃ。頭を丸めし者（坊主）の付けるわけのわからぬ名前を申されたとて、亡者となりし者は、それが分かるわけがないであろう」

宮下「おっしゃられる通りです」

大神「自身のな、長きに渡り生まれながらの付けられし名前を呼ばれるが、何よりの喜びであるのじゃ。だが、古き先祖となりた者は、子孫とて分からぬであろう。それゆえに、ご先祖と申し、敬うが良いのじゃ。敬うが良いのじゃ。だが、その行いを致す者がおらぬは致し方なきことじゃ。神が良き場に導くことにいたすぞ」

宮下「お願い致します」

大神「これより大勢の者達、神の元に連れて参り修行を致させ、その後にてはまたの良き運命に生を与えることにいたすぞ」

宮下「はあー。有り難いことです」

大神「分かりたであらう。亡者となりし者達、分かりたであらう。これより神について参ることじゃ」

先祖「はい」

大神「良いぞ。これより神の預かるところに致すぞ。後は何の供養とて要らぬであらう。では、これにて戻るぞ」

(補足) 供養をしてくれる子孫がない場合、神様頂かりとさせていただきます。

例⑤ Y家…戦死や変死は救われていない

大神「この者ヨシなる者、そのように耳に音のするは、この者の身内者にて年若くして早き折に世を去りし者にて、この者に関わりておるのじゃ。その者なるは、この者の連れあいの者にて、若きおりに他の場にて果てし者であるのじゃ。待て。代わるぞ」

先祖「ア…ア…アアア。俺は、俺は…寒いよ。寒いよ。俺は海の中に沈んでいるんだよ。俺がヨシに頼っているんだよ。俺は兵隊に出て、俺の船は奴等の弾に当たって沈んでいるんだよ。俺は海の底の船にいるんだよ。寒いよ。俺は苦しいよ。俺は生きてはいないんだよ。戦争に行つて、奴等に沈められてしまった船の中にいるんだよ。俺は寒いよ。とても寒いよ。苦しいよ」

加藤先生「分かりました。では今すぐ私が神様に頼んで助けていただきますからね。少し待ってくださいね」

先祖「分かるよ。頼むよ。悪いが頼むよ」

加藤先生「神様、申し訳ございませんが、この方が水の中で苦しんでいるので、どうかお助けくださいますよう、お願い申し上げます」

大神「特て。この者なるは気の毒じゃ。寒き水の中におるのじゃ。これより即座に助けることにいたすのじゃ」

(ここで助け出す)

先祖「ア…アア…アアーアアー。良かった。良かった。ふう…助かった。助かった。本当に良かった。有り難い。有り難い。俺はあの時、敵の奴等の弾にやられて、今までずーっと水の中に沈んでいたんだ。良かった。とても嬉しいんだ。有り難い。俺がヨシに頼っていたんだ。俺はあの時に諦めたんだ。だけど、苦しかったんだ。でも、いま急に明るくなって楽になって良かった。有り難いです」加藤先生「良かったですね。では、また別の時に位神に入れていただくので、今少しお待ちくださいね」

先祖「分かりました。ありがとう。どうもありがとう」

大神「これにて、後程位牌への導きをいたすことにの」

(次の日、位牌に導いたときの様子)

加藤先生「神様、申し訳ございません。昨夜お助けいただいた方を、今日はお位牌へのお導きのほどをお願い申し上げます」

大神「待て。これより位牌への導きをいたすのじゃ。待て」

(ここで導きました)

先祖「あ…あ…あ…。良かった。良かった。よーく見えるよ。本当によーく見えるよ。家の中がよーく見えるよ。有り難いよ。嬉しいよ。俺は久し振りで家に帰れたよ。ああ嬉しい。本当に俺は嬉しいよ。有り難いよ。俺は長ーい間、家に帰ることができないで苦しかったんだよ。ああ良かった。良かった。家がうんと違うな。俺は今の家は知らないよ。俺が兵隊に出たときは、麦わら屋根の家だったんだよな。だけど、今の家に作り直したのかなあ。でもいいや。家は家だからな。俺は嬉しいんだよ。有り難いんだよ。有り難いんだよ」大神「では、これにて家の者よりの供養を受けるのが良いのじゃ」

(補足) ヨシさんの家は代々の位牌もあり、先祖の助けもできています。亡くなったこの方は、戦死で三十三年を過ぎているので、代々の助けのとき一緒に助かったと思っていましたが、このように変死や事故死の場合は、別に助けを行わないと助かりません。戦死の場合は、別々に救わないと駄目のようです。

例⑥ Y家…供養の仕方の悪い場合

夫が仏壇で拝んでいたら、先祖代々の位牌がガタガタ揺れると言うので、電話がありました。仏理には、先祖代々と妻の位牌があります。夫は妻だけに心に向けて拝んでいたのですが…

大神「この者達の古き先祖なる者達よりの知らせであるのじゃ。待て。代わるぞ」

亡者「はい、私です。私は、Yの先祖の者です。私があの子孫の者に知らせたのです。あの子孫の者が、子孫の者が、私には物足りないんです。私のことや他の者への思いはないんです。自分の若死にした連れ合いの者へ拝んでいるんです。

私達は、みんな子孫がすることを見ているんです。あの子孫は物足りないです。あの子孫が何も分かっていないので、私達がみんなで分かるように、位牌を動かして分かるようにしたのです。

あの子孫は、神も仏も分かってくれないから、自分の子供で困るんですよ。自分勝手なものですよ。だから、あの子孫がおかしくなるんですよ。私たちは、子孫がよい運勢になって欲しいと思いますが、あの子孫は何も分かっていないから、自分の子供のことで困るんですよ。頼みますよ」

(解説) 先祖は古い古い先祖から、ごく近くに亡くなった人と大勢います。仏前に食事を供えるときも、知っている人の名前を呼んであげるのではなく、「ご先祖の皆様、召し上がってください」と申し、亡くなった妻はその後に声を掛けてやってください。そうでないと、亡くなったばかりの人は古い先祖に遠慮して困ってしまいます。そのため、新しい先祖の人は三十三回忌までは、個人の位牌で祀ってもらい、食べ、修行をするのです。

例⑦ H家…先祖の障り

小便の出が悪く、お腹を押してやらないと出ない。また右足もも、膝、ふくらはぎも痛い。との依頼に付き、神様にお聞き致しました。

大神「この者孝一なる者、足の膝、もも、ふくらはぎの痛み、また小便の出が悪いとな。特て。関わりある者と代わるぞ」

亡者「私でございます。私はH家の先祖の者でございます。子孫の者の病は、私が頼っているからです。小便が出ない、また足の、もも、ふくらはぎの痛み、これらすべては私のためでございます。私は、孝一の病を起こしている者です。お助けください。申し訳ございません。助けてください。お願い申し上げます。苦しいです。私は、孝一の病です。助けてください」

大神「この者は、Hの先祖の者で業の深い者ゆえ、このような病におちいりて果てた者だが、先刻他の者達は助け上げた（先祖代々の助けは既に行った）が、この者は地獄に落ちた者ゆえ、その折には助けることは致さなかったのじゃ。だが、今苦しさに耐えかね子孫の者に取り憑き、助けをこうておるのじゃ。この亡者は、今は助けるわけには参らぬが、孝一よりすぐ取り除くゆえ病は楽になるぞ。小便もまた世話なく出て参るぞ」

加藤先生「どうか神様、この亡者の方をお許してください。また孝一さんに頼られるときがあると、心配でございます。どうか神様、先祖の亡者の方を今の苦しみだけでも取り除いてあげてくださいませ。お願い申し上げます」

大神「そうじゃのう。だがこの亡者は業が深く、他の多くの者を苦しめて参りし者ゆえ、そなたの申すように今助けることは致しかねるのだが、今の孝一の病を助けることは神の悪いも同じだ。孝一と申す者も日夜神に念じておるゆえ、神は孝一の病を一日も早く助けねばならぬ思いであるのじゃ。この苦しみの亡者の病は、取り除くことにすぞ、それにより孝一も早く良くなるのじゃ。業の深い先祖の亡者、前が出るが良いぞ」

亡者「はい、申し訳ございません。私は生ある時代に、誠に多くの者を前に気ままな行い、また人々を苦しめておりました事を、いま心よりお詫び申し上げます。神様、許せるようなことではない悪い悪いことを致しましたことを、いま心より改めて深く深く悔い改めております。申し訳ございませんでした。誠に誠に申し訳ございません。また子孫に頼り苦しめまして、申し訳ございません。神様、どうか…。私は罪深い者でございます。どうか…私という者があってはなりません。どうか私の心をなきものにしてくださいませませんか。私を消し去ってください。覚悟はしました。申し訳ありません、神様」

大神「さようか。よくぞここまで改心致した。では、神はそなたの心を預かったぞ。消すも生かすも神の決めることじゃ。よくぞここまで心を改めた。その心に

免じて神はそなたを許すことに致すぞ。今よりそなたを地獄より救い上げ、病も癒える道に導くぞ。また子孫より即刻離すことに致すのじゃ」

亡者「はい。申し訳ございません」

(ここで助ける)

亡者「あーありがとうございます。ありがとうございます。明るいです。明るいです。本当にありがとうございます。私は、体が、体が楽になりました。足も体も良くなりました。神様、ありがとうございます」

(補足) 地獄に住む者も、反省すれば救われていくのです。

例⑧ N家…母親の憑依による障り

この事例では、亡くなった母親が暗い所に落ちていたので明るい場所に助け出しました。しかし、母親が残してきた一人息子に執着心を持ち続けていたため、再び暗いところに落ち、その子供に憑依しておりました。

大神「この者(子供)、その様に眠れぬ、脚に襲いかかるは、この者自身の身内の者であるのじゃ。待て。代わるぞ」

亡者「すみません。私はあやです。私があの子のそばにいるので、あの子が夢のようになるのです。私があの子の体に憑いているのです。私があの子が可良想で可哀想で、心配しているんです。どうかあの子のことを私が思わなくても良いようにしてください」

加藤先生「どのようにするのが良いのですか」

亡者「あの子は、私がいなくて寂しいんです。だから私がそばにいてやっているんです」

加藤先生「分かりました。でも、あやさんがあの子のそばにいるのは、かえって困るのではないのでしょうか。眠れない、眠れば脚が重くて困るとのことですので、そのように親の心は分かれますが、子供さんが可哀想だと思うのでしたら、

あやさんが離れた方が良いのではないのでしょうか。そうしないと、眠れなくてお子さんの体のためにも良くはないと思うのですが…」

亡者「そうですか。それは分かるけど、あの子のことが私は心配で仕方がないのです」

加藤先生「でもいくら思っても、今あやさんのいる場所と息子さんのいる場所は、まったく違う世界ですからね。息子さんにはお父さんがついているので大丈夫だから、もうその様にいつまでも思わずに、自分の修行の場に戻ってやってくださいね。それでないと、息子さんがもっともっと可哀想ですよ。取り憑いていたって、どうにもならないのでしょうか。あやさんも今のままでは困るでしょう。

だから、子供さんのことはご主人に任せて、神様のところで修行をしてくださいね。これからすぐに私より神様に願わせていただいて、助けていただきますからね」

亡者「分かりました。すみません。どうもすみません」

加藤先生「では、今すぐお願いをするので、お待ちくださいね」

(ここで助ける)

亡者「ア、アアーアア。ああ、良かった。良かった。とても暗かった。良かった。明るくなった。有り難い。有り難いです」

加藤先生「では、今から御位牌にいられていただきますからね」

亡者「すみません」

(ここで導く)

亡者「ああーああー。良かった。良かった。よく見える。私の家の中がよく見える」

加藤先生「良かったね。子供さんのことは、もう考えないでね。ご主人がいるのですから、ご主人に頼みましょうね。あやさんだって、思い過ぎて暗いところに行くのはいやでしょう。その様な寒くて暗くて見えないところはいやだと思い

ますよ。それよりも神様に頼んで、自分は修行するのが一番みんなのために良いことですよ」

亡者「分かりました。すみませんでした」

加藤先生「では、すぐに息子さんから離れてくださいね」

亡者「分かりました。離れます。すぐに離れます」

加藤先生「もう暗いところに落ちては駄目ですよ。自分も子供さんも困るだけですからね」

亡者「分かりました」

加藤先生「では頼みますよ」

亡者「ありがとうございました」

例⑨ N家…一部の先祖のわがまま

Nさんのご主人は長男で、東京に出てから出世しました。そのため東京に立派な家を作りましたが、田舎の家には夏の避暑や村の用事くらいで、ほとんど帰らなくなってしまいました。ところがそんな折、加藤先生と親しいNさんの先祖の一部の人が加藤先生に頼り、自分達の思いを野田さん夫婦に伝えてほしいと言ってきました。

大神「わしじゃ。大神じゃ。親神じゃ。この者(加藤先生)そのように足腰に痛みあるは、この者の身内なる者ではないのじゃ。まったくの他人であるのじゃ。待て。代わるぞ」

亡者「はい。私でございます。私は遠いところに住んでいた者でございます。私の子孫の者は、家も田地もあるのに遠くのほうに住んでいて、家は空き家です。真っ暗です。たまに家に戻ってきても、長くいるのはほんの一月くらいで、また遠くの家に戻ってしまって、私達は戸締めの家の中にいるんです。あの嫁はいい者ですが、どうしてもこの家には来てはくれないんです。だから、私が子孫の者

の知り合いの人（加藤先生のこと）に頼っていて、足や腰が痛くなるのです。私だけではありません。皆同じ思いでいるんです。

あの嫁が、こんなところは嫌いだなんて言って、来てくれないのです。私達がみんな長い間代々住んできたのに、住めないわけではないのに、あの嫁が来る気がないので、私達は毎日戸の開かない暗い家の中にいるのです。私達の墓だってこの屋敷の遠くないところにあるのに、子孫は遠くに住んでいて、たまにくるくらいで、本当に私達は悔しいです。家も屋敷も子孫に残してあるのに、空き家になっているんですから、悪いとは思いますが、長い間になります、知り合いに私が頼っているのです」

加藤先生「分かりました。そのことはお伝えさせていただきますが、でも皆様のお位牌は、いま子孫の方の住んでいる東京の家の仏壇にお祭りしているようですが、あの御位牌に入っていないのですか」

亡者「はい。私は入っていません。私は家の仏壇というか、昔からある家の中の仏壇にいます。私のほかの者は分かりません。私は、あの子孫の者のいるところに行くのは嫌です。このところが一番いいのです。あの子孫の者の家は、私は他人の家のように嫌です」

加藤先生「では、ほかの人はどうしていますか」

亡者「待ってください。いますよ。みんなではないけど、今までのようにこの家にいますよ。あの子孫の者のところにいるのは、あの子孫の親でもなければ違う者がいるですよ。みんなが、この家のほうが良いので、と言っていますよ」

加藤先生「分かりました。そのように子孫の方に良くお伝えさせていただくので、どうか私の足腰から抜けてくださいませんか。そして、いつ頃から私に頼っていたのですか」

亡者「私が頼っているのは、今ではないのですよ。ずーっと前からですよ。ずーっと前に、悪いけど頼っていたのですよ」

加藤先生「分かりました。では、よく話させていただくので、どうか私の体から抜け出てくださいませんか。私も人並みの体に戻りたいのですよ」

亡者「すみません。抜けますが、頼みはまだありますよ」

加藤先生「何ですか」

亡者「私はN家の者ですが、私がああ嫁や子孫に言いたいことは、ウンと残した田地があるのだから、あの家に戻ってきてもらいたいと言ってください。私は、それでないと、あんなに一生懸命になって働いて残した財産が、むざむざと人の手に渡るのが心配で、心配で、仕方ないですよ。頼むからああ嫁に、戻ってきて先祖の者を安堵させてくださいよ、と言ってください。お頼みしますよ」

加藤先生「分かりました。よく分かりましたので、お伝えしますので、どうぞ私の体から抜け出てくださいね」

亡者「分かりました。すぐ抜けます。どうもすみません。堪忍してください」

(解説)先祖の歴史は長いです。ここに出て文句を言っている先祖は、田舎の家で暮らした何代かの亡者の人達だけです。そこに住まなかった先祖は、何の苦情も言っておりません。このような場合は、苦情を言っている先祖に話しかけて、教えてやることです。それは、土地や財産に執着心を持たないこと。

この世にどのような理由(苦勞して築いた財産でも)があろうとも、思いを持ってはいけないこと。思うと暗いところに落とされること。肉体がないのだから、あな世ではあな世の修行をしなければならぬこと。時代の移り変わりで、暮らし方も変わる。先祖は子孫の守護は必要であるが、執着心を持たずあな世の勤めに励むこと。などを分かりやすく話してやることです。根気よく話せば必ず納得します。

例⑩ S家…一人娘が嫁ぎ名跡がなくなる

Kさんは一人娘でしたが、嫁いだので生家のS家はなくなりました。当然S家の土地も、嫁ぎ先のK家のものとなりました。あるときS家の先祖が出て、S家を潰したと苦勞した財産を他人にやったことを、大變怒って出たことがあります。これも同じ事で、S家の先祖の人によく話してやり、私達は魂の修行にきているのであって、財産や物のために生きているわけではないこと、またいろいろの事情で跡を継げないこともあること等をよく話してやると、明るいところ

ろに上がっている先祖なら納得してくれます。一番大切なことは、この世に執着心を持たないことです。

例⑪ K村家とK林家…先祖の争い

また数年前のことですが、次のような例もあります。四国に名家でK村という姓があります。もともとはK林と言う姓でしたが、戦国時代に功績が大きかったと徳川家よりK村という姓をもらい、その後もK村を名乗ってきました。ところが現在、今のご主人が、K村にはいろいろの問題があって困る、とご主人の代になり、K林という姓に戻りました。その後縁があって、私どものところで先祖供養の魂入れの行いをしましたが、その際K林時代の先祖とK村時代の先祖がそれぞれ、位牌に書くのはK林だK村だ、と争ったことがあります。仲を取って、K林K村家先祖代々の霊位と作りました。しかし後で神様は、それは良くない。K林が正しいのだ、と申されました。先祖とはこの様なものです。先祖にはいろいろの人がいるのです。

例⑫ M家…神道系の信仰では救われない

次の例題は、加藤先生の親しい方で、神道系の教会長をしており、大変人柄も良く、温厚な方でいつもにこにこ笑顔で絶やさないう方でしたが、八十五歳で他界されました。この方は喉の癌で、末期には喉に穴を開け、外から管を入れられ、ずっと病床におられたそうです。

葬儀が終わって五日ほど経った日のことです。加藤先生が私に、「ここ数日、あまりにも喉が苦しく痰が出て困る」と申されました。なぜ急にこのように喉が調子悪くなったのか気になりますので、真夜中でしたが大神、親神様にお伺い致しますと、次のように教えて下さいました。

加藤先生「神様、このところ数日、私が痰が多くでて気になるのですが、私の体は何か悪い病気にでもなったのでございませうか。どうか教えてくださいませ」

大神「そなたの体に悪いところはないのじゃ。その様に汚きものが出るは、それなりの原因と申すか、関わりがあるのじゃ。待て。その関わりのある者と代わるぞ」

亡者「私だよ。私が頼っているんだよ。加藤さん、私が頼っているんですよ」

加藤先生「だれですか。私の名前を言うのは」

亡者「私はこの間、体が駄目になった M だよ。T 夫だよ。私は長生きはしたけれど、体があんなになって口もきけなくなって、情け無いよ。今もあのときと同じで言いたい事も言えないで、情け無いですよ。悪いけど頼っちゃったんですよ。私の息子の A 男は、私の苦しみは分かってくれないんですよ。

毎日病院にくることは来たけれど、どうしても私を家に帰してくれないんですよ。「家に帰ったって駄目だよ。おじいちゃんは病院の先生のところになくちゃどうしようもないよ」と言って、とうとう私を生きているうちに、家に連れ戻してくれなかったんですよ。私は年老いて、こんな病気になるなんて情け無いですよ」

加藤先生「M さん。今も体が苦しいのですか」

亡者「苦しいですよ。あの時のままですからね。私の顔を見て、皆穏やかないい顔をしていると言っているけれど、私はちっとも穏やかではないですよ。苦しいですよ。長い間、寝たままで起きることはできないので、体も痛くてきついですよ」

加藤先生「今、M さんは明るいところにいるのですか」

亡者「明るいところではありませんよ。何も見えない真っ暗いところですよ。真っ暗闇のところには私はいるんですよ」

加藤先生「お気の毒ですね。私が後で神様にお願いして、明るいところに助け出させていただきますからね。今少し、我慢しててくださいね」

亡者「ありがとうよ。私を明るいところへ出してくださいよ」

加藤先生「M さん、あなたの信仰している神様に助けていただけないのですか」

亡者「私が自分のことを願うことはできませんよ。私には、今は何の資格もありませんのでね。今はただの人ですからね。すみませんが頼みますよ」

加藤先生「では M さん。今は夜中で眠いので、また明朝私より大神親神様にお願いさせていただいて、明るいところに出していただきましょうね。明るいところに出していただくと、今の苦しみの体から痛みが取れて、楽になりますからね。

今は、三浦さんは生きてるときとまったく変わらない気持ちでいると思いますが、でも今は本当は体から離れているはずですよ。ただ、そのことが今のままでは分からないで、体が病気のときのままでいる思いで苦しいのですからね。後で神様に助けていただくと分かりますよ。体は楽になりますよ。ですからいま少しの間、お待ちくださいね」

そして翌朝早々に、加藤先生に M さんのお助けをしていただきました。

加藤先生「私の体に友達の M さんが頼っていると伺いましたので、どうか今日は M さんの痛みをお助けいただきますようお願い申し上げます。また、それと一緒にどうか明るいところにお助けくださいますよう、お願い申し上げます」

大神「良いのじゃ。これより助けることにいたすぞ」

(ここで助ける)

亡者「ああ、ありがとうよ。ありがとう。良かった。本当に良かった。あのよう喉に穴をあけられては、何を言いたくても思うように話せないで、私は本当に焦れたかったが、良かった良かった。急に体が楽になって良かった。加藤さんに頼っていて、どうもすみませんでした。私は、今は教会の中に戻ってきて祭られているけど、だけど祭られて位牌のあるのは分かるけど、魂は入っていないんですね。今まで御霊様と思って大勢の人を私の手で祭り込んだりしたけれど、こうしていま分かってみると、この家の中にいるのは家の者だけで、ほかの人はだれもいないんですよ。

N さん(教会の信者で、すでに他界された方)も見えないし、A さん(同)も見えないし、よその人は一人もこの教会にはいないんだよ。私は、教えの上ではよく分かっていたつもりでしたがね。やっぱり自分の体が駄目になっ

て、初めて分かったことですよ。家の教会の御霊家の中に幾人も信者の人をお祭りしたのに、本当にだれもよその人はいないのはどうしたのかね。教会の者だけのいる場だからかね」

加藤先生「Mさん。神様にお助けいただいて、体が楽になりましたね」

亡者「ああ、本当に楽になったよ。今は苦しいところはどこもないよ。私は体は駄目になってしまったけれど、本当に魂は生き通しと聞かされていた通りに、私の心は生きてるときと同じで、少しも変わらないですよ。親神様の教えに、体は帰してもまた新しい着物を着替えるように生まれ替わってくる、と聞かされた通りに、今では体はなくても心だけはちゃんと分かりますよ。なんでも見えたり分かったりしますよ。心は生きていますよ。」

加藤先生「Mさん。では体は楽になったので、これから教会の中で皆様と共に、後々続く人たちのために働くと良いですね」

亡者「分かった。分かった。また頑張るよ。今日はありがとうよ」

(解説)人間は、肉体が死んでもそれで終わりではなく、魂は生き続けます。しかし魂についての理解は、宗教によって異なり、「肉体を離れて十萬億土の西方極楽にいつて幸せになるのだ」という教えがあるかと思えば、また一方では、「天は月様であり地は日様である。」

天地の外に生き場はない。息が切れたらその人の魂は月日親神様が大事に抱きかかえて、また旬がきたら新しい身体を貸し与えて、この世に生まれさせてくださるのである。地獄へいくのでもなければ、極楽にいくのでもない」などと言っているところもあります。それなりに当たっている教えもありますが、大半は間違っています。

『まず私たちの魂は、どの様に使って生きても良いと、神様から自由に任されております。けれども、どの様に生きたかの結果は当然、あの世と来世で精算しなければならぬのです。生前、さんざん悪さをした人や心の使い方の間違った人が、無条件で良い状況の下で神様に抱かれるということはありません。当然の結果として、亡くなってあの世にいったとき、明るいところに住むか、暗いか、地獄かは、自ずと生前の生き方で決まってくるのです。生まれ替わってくるには、

必ず霊界で反省をして、明るいところに上がった後でないと、生まれ替わりはできません。

この M さんも、仮に加藤先生にお助けいただかなくても、生まれ替わりのことや心の使い方を知っていましたので、他の人と比べれば比較的早く、自分の力で明るいところまで上がられたことと思いますが、もう少し生前に加藤先生の話の謙虚に受け止めてくださっていたら……と残念に思います。

教会で教えてこられたことのみが絶対正しいと信じていたようです。よく神道系の方は、人が亡くなりますと、神主さんや宗教組織の幹部の方に、白木の位牌への魂入れをお願いしますが、実際には魂はほとんど入っておりません。私たちのほとんどの人は、亡くなってすぐに神として祭られるほど、生きているうちに心を磨いていた者はいないからです。

まず第一に、輪廻転生や、生きているときの心の持ち方・在り方が、あの世にいつからの住む世界を決めるということを知らないし、今世の生き方も独りよがりであって、大神親神様の御心に沿った生き方とは遙かにかけ離れた人が大半であるからなのです。また、霊界には、霊界における守るべき規則がきちんとあるのです。お坊さんや神主さんが自分勝手な解釈で祭るべきではないと思います。

その後、私のほうから亡くなられた M さんの奥さんに次のようなお話をいたしました。「奥さん、確かに教会の指導としては仏壇や位牌を置くことは許していないかもしれませんが、その信仰は信仰として良いのですが、亡くなってからの供養の仕方というのが実際にはきちんとあるのです。

これは今まで、加藤先生と私で何百例となくいろいろの方の先祖を助け導いてきた結果、はっきりとした結論を持っているからです。嘘や出鱈目ではありません。先祖をきちんと供養することにより、運勢が変わった家が、実際何軒も出ているのです。教会の教えでは、陽気暮らしを教えているのでしょうか。にもかかわらず、生きている人間の見栄や組織の仕来たりで、本当の先祖の救いができないのは、おかしいのではないのでしょうか。

親神様は、黒塗りの位牌を作り仏壇に祭ってはいけないなどと、少しも言っておられないはずで、先祖は正しく祭ってほしいのです。あの世のことが良く分かってきますと、神式では駄目なことが分かりますよ。奥さんは現在教会長ではあ

りませんし、息子さんが会長をしているのですから、立場上一主婦として夫と先祖の位牌を作ったらいかがですか」

奥さんは最初、組織の仕来たりにそむくので位牌を作ることはできないと申しましたが、このように説得いたしますと快く承諾してくださり、早速先祖と M さんの助けを加藤先生にお願い致しました。

加藤先生「神様、先日他界されました M さんの助けと御位牌へのお導きのほど、お願い申し上げます」

大神「良いぞ。これよりこの者として、助け導くことにいたすぞ」

(ここで亡者を呼び出す)

亡者「ありがとうよ。ありがとうよ。どうもありがとうよ。加藤さん、今日のご苦労さまだね。私は今は、もうよーくなんでも話せるようになっているよ。この間助けてもらってから、加藤さんのお陰で体が楽になっているからね。病院にいたときは、苦しくて何も言えないでとてもつらかったけど、今は体から離れているので病気のときの苦しみは少しもないですよ。

有り難いですよ。私は幸せですよ。体と心と離れるのは、教えの上では分かっていたつもりだったんだが、今になればそれが良く分かるよ。病院でなんにも分からなくなって、真っ暗闇の中にどれだけいたか分からないうちに、急に苦しみは取れて、周りが明るくなって、正直言って助かったですよ。私の病気は、あれはどういう病気だったのかね。声が出なくなるのは困るけど、喉が詰まるのはもっともっと苦しくてつらかったですよ。でもありがとうよ。どうもすみませんね」

加藤先生「M さん、良かったですね。体が楽になって、私も正直言って M さんのように死んだことはないので、死んだらどの様になるのか分かりませんでした。でも今まで、多くの人達のこと頼まれてきて、亡くなった人達が全部と言っているほど、皆真っ暗くて何も見えないところで苦しいと言っているのです。

その苦しいというのがどの方も、生きているとき病気とか事故とかで体が駄目になって、亡くなったときのままの姿で苦しんでいるようです。そしてその様に真っ暗くて何も見えない暗闇で苦しいと言います。その暗闇のところから神様に助けていただくと、ほんの一瞬の出来事のように明るくなって、体の苦しみは

とれて楽になったと言うのです。Mさんも今は明るいところにおられるので、体は楽でございましょう。今は体から離れて、心だけの世界ですからね。苦しいことはなくなっているはずですよ」

亡者「そうだよ。加藤さんの言う通りだよ。あの苦しみは今はまったくなくて、苦しいことなんかまるで嘘みたいだね。良かった良かった。どうもありがとうね。これで私も、体の苦しいことは忘れられるね」

加藤先生「そうですよ。これからは、そちらの世界から二代目会長として、多くの方達を指導していくと良いですね」

亡者「分かったよ、加藤さん。これからも教会のこと頼むよ。私はもう駄目だからね。何もできないからね」

加藤先生「分かりました。及ばずながらも、できることは協力致しますからね」

大神「もう良いであろう。これより位牌に導くことに致すぞ」

(ここで位牌に導かれました)

亡者「ああ、良かった。ああ、ありがとうよ。私は仏壇に入るとは思わなかった。神殿の御霊家に入るのが普通と思っていたのだけど、あの場は入っても駄目だと言う事がよく分かりますよ。あの御霊家には確かに家の者はいるけれど、いるんだけど落ち着けず、私の入れたものには入れないですよ。

今この仏壇に入って、初めて良く分かりましたよ。あの御霊家には、AさんやNさんなど幾人もの人を入れたつもりが、今私が見たところでは、だれもよその人はいませんよ。私の思って信じていたことの違いが、自分がこうなってみて初めて分かりましたよ。どうもありがとうよ、加藤さん」

大神「もう良いであろう。これにて終わるぞ」

引き続いて、M家先祖代々の位牌への魂入れの件です。

加藤先生「神様、今度は M 家の仏壇に御位牌が入られましたことによりまして、M 家の先祖代々の皆様方の助けと御位牌へのお導きを、よろしくお願い申し上げます」

大神「待て。待つのは。しばらくして)良いぞ。これよりこの家の古き先祖の者達皆、位牌に導くことにいたすぞ」

(ここで先祖を呼ぶ)

先祖「ありがとうございます。ありがとうございます。私達は M 家の古い先祖の者です。私達だけではありません。子孫に続く大勢の者達もおります。皆それぞれの時代時代の生き方をしてきた者達です。有り難いことです。これで私達大勢の者は助かりました。救われました。神様のお陰でございます。私たちは長い長い時を、何も見えない真っ暗い所で、病のときのままで苦しんできました。この家の者だけですか。こんな暗いところで何一つ見えないところで苦しむのは…」

大神「違うのじゃ。そなた達だけではないのじゃ。人は死を迎えるに当たり、その折々の心の持ち方のまま、死と共に真っすぐと申すか、間違いなく暗きところに参るのじゃ。その暗き場にて、自身の生きたときの心の持ち方を自身より悟ることのできぬうちなるは、数十年数百年とその暗き場にて過ごさねばならぬのじゃ。だが今なるは、この者の体に宿る神の力にてその様に明るき良き場に助けられ、出て参ることが叶うのじゃ。また許されるのじゃ。これよりは、そなた達自身の体は朽ち果てのうなりておることゆえに、心だけの場に参り体の苦しみとてのうなりて参るはずじゃ。

暗き場におりし折にては、たとえ体は朽ち果ててのうなりておりたとて、痛みておりた折の思いが心にあるゆえに、助け導かれし折より自身の体なき事とて分かったであろう。また明るい場に出ると共に、長きに渡り苦しみた事とて取り除かれ、のうなりておるのじゃ。これより後なるは、心だけの場に救われ、子孫の供養を受け、日々通ることが叶うのじゃ。これより先祖代々の位牌に導くことに致さねばのう」

(ここで導く)

先祖「ありがとうございます。ありがとうございます。どうもありがとうございます。私達大勢助けていただいて、ありがとうございます。どうかどうか、この先々として変わることなく、私達先祖の供養を子孫の者に頼みます。子孫の者に、私達先祖と同じ思いをさせたくありません。どうか頼みます」

大神「良いのじゃ。子孫の者達として、分かるであろう」

この様に、Mさんのお宅はこれで先祖の件に関しては良くなったのです。

(補足) 別の相談者のことで実際あったことですが、このMさんと同じ信仰を持っている方で、不幸に泣いておる方がおりました。その方に、位牌を作るよう指導させていただいた(今も申した通り、この信仰では位牌を作ることは許されませんが、私どもの説得により位牌を作った)ところ、病気も運勢も良くなり、大変喜んでおりました。しかしそのうち、その方の属する教会長が家に巡ってきたとき、位牌を見付けるや否や大変怒り、またほかの信者からは自分達も上の偉い方から叱られたり攻撃されるのは困ると言われ、大変困ってしまいました。

分からない人にはいくら説明しても仕方がないと思い、その方の先祖に限り神様預かりと致し、その位牌は処分していただきました。この様に、無理解で自分のところのみが正しいと思っている教会の指導者は、本当に困ったものです。供養する子孫がいなかったり、どうしてもやむをえない場合は位牌を作らず、先祖の皆様をお助けしたあと、神様預かりにさせていただく方法もあります。

よく永代供養をしてもらうからと、お寺さんに何十万も払って、安心した気持ちでいる人がおります。しかし何回も申し上げている通り、坊さんのお経や牧師さんの讃美歌や、神主の祝詞などで成仏できるものではありません。このようなものは、何の力もないのです。ただ形式だけです。やってもやらなくても関係ありません。

いろいろの本などで、亡くなるとベッドの上で見えていたとか、三途の川を渡るとか、天使が迎えにくるとか言われていますが、ほとんどはこの様なことはありません(例外はあるかもしれませんが)。何百と行った実例で申し上げますと、ほとんどの人は気が付くと、暗いところにいます。葬式をしたことも知りません。相談者の中で、身内に亡くなった方を四十九日後に助けの行いを試みますと、ほとんどが暗いところにおります。戒名も祝詞もまったく関係ないということです。

さて、私達がやらねばならぬことは、基本的には子孫が位牌を作り、なるべく早く先祖代々の助けを行っておくこと。その先祖を位牌に導いて、毎日一回その位牌に御飯やお茶、おかずなどを添え、感謝と喜びの心で話しかけてあげることです。肉体を持って生きているうちに、充分先祖を供養し先祖の人達に悟ってもらい、また自分は心の勉強をして、亡くなる時には執着心を持たない心の準備が大切になってくるのです。

(2) 位牌への魂入れ

以上のことから先祖供養の大切さを分かって下さった事と思います。さて、加藤先生に魂入れをお願いすれば完全ですが、加藤先生に縁のない方は出来ません。坊さんのお経でも、また、新興宗教の祝詞（のりと）でも位牌への魂入れが出来ないとなると、どうしたら良いかという事になります。完全な方法ではないかもしれませんが次の方法で行ってみて下さい。

まず、黒塗りの一枚板の位牌を仏壇屋さんから買います。そこに〇〇家先祖代々の霊位という金文字の名前を書いてもらいます。これが出来ましたら、家に持ち帰り、テーブルの上に線香とローソクを立て、出来上がった位牌を置き『〇〇家の御先祖の皆様、全部の人がここにお集まり下さい。お集まり下さい。』と声をかけます。

しばらく様子をうかがい、集まったと思われる数分後に『それでは皆さん、この位牌にお移り下さい。今、私が声をかけますので、その声に乗ってお入り下さい。』と申し上げ両手を合わせ、両方の人指し指から念を位牌に向けて、この念に乗ってお入り下さいと力を入れて『エイエイ』と声をかけます。

そうするとかなりの先祖の人は移れると思います。それを入れた後、半月と一か月後位に同じ事を繰り返して下さい。もし落ちている人がいればその人は、この時に入ります。入れた後は、毎日御飯やおかず、お茶、水をお供えして下さい。（酒や牛乳、菓子などは、時々お供えして下さい。）

食事のお供えは一日一回で良いです。花は生花が良いです。食事のお供えは『御先祖の皆様でお召し上がり下さい。』と声をかけて下さい。決して、おじいさんとか〇〇さんと先に声をかけないことです。

(3) あの世の様子

加藤先生と神様の仕事をさせてもらうようになった、ごく最初の頃のことです。今のように大神親神様の下では十分くらいで片付く問題が、一時間近くも掛かって解決しておりました。天照大神様のご指導の元に、手探りでやり方も分からず、夢中でやっておりました。私たちは亡くなってあの世にいきますが、あの世の様子が分からないため、私の先祖さまに出ていただいて聞いた様子です。参考になればと思い紹介致します。

宮下「あの、お忙しいところ出ていただいて申し訳ありません。あの、ご先祖さま、私こうやって治療院をしまして、いろいろな方に話したりして指導していくんですが、どうも分からない点があるもので、ご先祖の方で霊界の掟もあるでしょうから、教えていけない点は構わないんです。いいんですが、教えられる範囲で教えてくださると有り難いと思って」

先祖「分かった」

宮下「まずですね、私たちはお経なんか上げるんですが、ご先祖さまに聞いてですね、そのお経の意味は自分自身でもよく分からないであげておるんです。それでもご先祖様には少しは喜んで貰えるんでしょうか。それとも、意味をよく理解してないといけないもんなんじゃないですか」

先祖「あのな、般若心経というものはな、神界の先祖でもな、うんと心が澄んだものなら悟れるが、まず普通では訳が分からない。(先祖でも悟って神界まで上っている方もいる)」

宮下「ええ、よく分かります。はい」

先祖「読んでもらっているけど、分からないなあって首をかしげている者がほとんどだ。意味が分からない」

宮下「はあ、はあ。そうするとご先祖様、そういうの分かりやすく書いて、分かりやすい言葉で読んだ方が、よろしいんでございませうか」

先祖「それは、分かりやすければ生きてる人間が分かればやっぱり同じに分かる。生きている者の分からないものが、同じ人間の魂、まだまだ修行に慣れない者やら、修行道中の者には、はっきり言ってちんぷんかんぷんで分からないのが実情だ」

宮下「ああ、よく分かりました。そうすると、私共が一番ご先祖様に喜んで貰えるのは、御飯やお花や水をあげるといことなのは分かっているんですがねえ、それ以外にどういう方法をとったらご先祖様に喜んでいただけるんでしょう」

先祖「やっぱりな、人間に教えるのと同じで感謝と喜びが、その心が亡き者に向いて、神様に感謝、人に感謝する心が深まれば深まるほど早く成仏の本当の心が清くなってくるのだ」

宮下「ということはご先祖さま、私ども人間、いわゆる子孫がですね、心を綺麗にすればするほどご先祖さまも一緒に綺麗になっていくことなんでございましょうか」

先祖「それはそうだがな、やはり個人個人違うからな、子孫のその心があればあるほどな、その心を伝えて教えてほしいのだ」

宮下「ああ、ご先祖さまに向かっていますか」

先祖「そうだ」

宮下「はあ、はあ。よく分かります。なるほど、なるほど」

先祖「感謝とな、喜び。感謝と喜びがあればな、心は自然とな、落ち着いてはくるし、綺麗になってくる。それが救われていく…」

宮下「なるほど、なるほど。ということは、これから私も心しまして、そういうものを書いたりよく理解して、そういうものを皆さんに配る必要もあるかも知れませんね」

先祖「そうだ」

宮下「そして、それをご先祖様の前で読めば、ご先祖様は理解していただけると…。で、ご先祖様。あの、宗派というのは、浄土真宗とか禅宗とかいろいろありますが、そういう事にはあんまりこだわらなくてよろしゅうございましょうか」

先祖「それは別に良いであろう。それは気にする事はないがな、ただいろいろ難しい経文を読まれてもな、実のところ分からないのがほとんどだ」

宮下「ああ、そうだと思いますねえ。はい、よく分かります」

先祖「読む人だって分かっていない」

宮下「分かっていない。そうなんです」

先祖「同じ事だ」

宮下「はあ、なるほど、なるほど」

先祖「読む人が分からなければ、同じ人間だ。身体こそ返しちゃってないけどな、同じ人間、それならば言葉を砕いてな、「喜びと感謝の気持ちで今日も、神様に仕えてください」くらいで良いじゃないかな」

宮下「ああ、なるほど、なるほど。よく分かります」

先祖「あのな、お前のよく申す執着だ。執着。取れ」

宮下「はい。それをなくせという事でございしますか」

先祖「それを取ることだ。執着心を取ってな、穏やかな心でな、感謝と喜びのな、心が深まれば深まるほど心は段々と清まって、仏の道に入れるのだ」

宮下「はあ、はあ。そうするとご先祖様。明るいところにいるご先祖様の中でも、まだ執着心を持っている方もいる訳なんです。きっと」

先祖「明るい所におまえが導いた者も大勢おるがな、導かれる折に伝えられたとおり、努めて忘れるようにとは、みんな努力はしておる。その教えは是非してほ

しい。(明るいところへ上る際に、生きていた時の思いを忘れるように話をさせてもらっています。)」

宮下「はい、分かりましたです。はい、はい」

先祖「明るいところに出す前にな、その教えは是非してほしい」

宮下「ははあ、執着心を取れということですね」

先祖「欲と執着心な」

宮下「はい、なるほど、なるほど。この私も心して努めます」

先祖「喜びに替えることだ。すべてをな。それが魂のな、浄化されることだ」

宮下「はい、はい。分かりましたです。よくそれは努めます」

先祖「では、これで良いかな」

宮下「それと、まだご先祖様。いいですか。まだ聞いても」

先祖「うん。よいぞ」

宮下「あのう、そうやって上にあげた場合にですね、家族というのは霊界に行ったら、みんな同じ場所におるんですか」

先祖「違う。それは別々じゃ」

宮下「ほう。あ、そうですか」

先祖「みんなな、血縁があつての家庭だがな、魂一つになったおりにな、それがな、別れるのじゃ」

宮下「ほう、ほう、ほう。生きてた時の心構えによって、それぞれの段階が変わるということなんですね。(魂の輝き、悟り方により住む段階が違うということ)」

先祖「そうじゃ」

宮下「ははあ。で、そういう所にいきましたら、今度は神様の教えにしたがって修行すると、段々と上にあがっていくわけですか」

先祖「そういう事だ」

宮下「はあ、はあ」

先祖「素直にな、努めるのがな、段々と上に上がれる……。そこで教えられても素直に努められない者は、いつまでたっても段階から上がれないのだ教えられても……。例えばの話、学問所でな、同じふうに教わっても真剣にのみ込むものと、上の空の者がいるであろう。それと同じじゃ」

宮下「はあ、よく分かりましたです。有り難うございました」

先祖「その学問所でな、神に教えられた教えを真剣に修めるものもいれば、十人が十人、同じ訳にはいかないであろう。それぞれ、その者の魂の徳次第じゃ」

宮下「はあ、よく分かりましたです。それから、こうやってこういうこととしますと、よく地獄に落ちて一人だけ苦しんでいる方と大勢で苦しんでいる方があるんですがね。で、その一人だけの方は、他は何も見えないなんていう方もあるんですが、これはどういう事なんでございましょうか」

先祖「見えないのはな、自分の心がな、欲と執着で何も見えない世界に落とされておるのじゃ」

宮下「はあ、はあ。そういう世界があるわけなんですね」

先祖「奪い合いだ」

宮下「その地獄というか、暗闇の中でも幾つかの世界がやはりあるんでございましょうか」

先祖「その段階によってはな、違う」

宮下「はあ、はあ」

先祖「だが、ほとんど暗闇だ」

宮下「はあ、はあ。なるほど。そこに落ちるということは、やはり人間として生きていたときのいろいろの心の在り方で……」

先祖「思い」

宮下「思い。はい。ふん、ふん、ふん」

先祖「すぐな、今日死んだって心が爽やかで、きれいで、恨み執着がなければ、すぐにも明るい世界に出られるがな、心がそういうところに落ちておるのだ」

宮下「はあ、よく分かりましたです。で、ご先祖様。私共はいずれ、みんな亡くなっていくわけですが、そういう地獄に落ちないためには、生きている人間にどのようなことを心掛けさせれば一番よろしいんでしょう」

先祖「だから現世においては、強欲を持たず、普通の生活をさせてもらいながら、感謝と喜びの心を持ってな、通ることによりその心がな、清い道にな、浄化されておる。生きながら浄化されておる」

宮下「なるほど、なるほど。で、ご先祖様。もう一つだけ教えてください。それで終わりにしますんで。仏壇が非常に大事だと私、分かってきたんですが、お墓でございますねえ、お墓は骨の抜け殻というんで、それでもやっぱりお墓は必要だと思うんですが、その辺はどういう具合に考えていったらよろしいんでございましょうか」

先祖「墓所という所はな、骨の抜け殻とは申せ、やはりそこはな、魂がな、必ずいないわけではないからな、必ず霊界に行つてな、浄化されておつても、また先祖代々の墓所というものは、必ずそれを守っていくことが子孫の役目……」

宮下「よく分かりました」

先祖「骨というものがあるであろう」

宮下「よく分かります」

先祖「それを粗末にしたら、また抜けたものが怒る」

宮下「よくわかります。はい。で、ご先祖様、もう一つだけすいませんが、今子供が段々少なくなってきてましてね、例えば私の所なんかでも女の子が二人なんですけど、これが仮にお嫁にいつちまうと宮下という姓はなくなってしまうんですがね、そんなときどういう具合に……。あの、仏壇とかそういうのも守る人がいなくなってしまうわけですね。宮下なら宮下が」

先祖「一人を家に残せば良いではないか」

宮下「ええ、だけどそれは、今そのつもりでいるんでございますがね、またその時にはそのお力をお願いするんですが、万が一、二人がいつてしまったという家庭もよそにはあると思うんです。そういうのは、どういう具合に考えたらよろしいんでございましょうか」

先祖「考えることか」

宮下「ええ、あのう、そういう家が実際に私の患者さんにあるんでございます。で、そういう人……」

先祖「そういうよそ様のことでな、そういう家がある時には、だれも守ってくれる者がいないときには、これはどうも仕方がない。霊界に皆あげて霊界に参って、皆が執着なく霊界に上がってしまえば何もいることがない。全然供養も要らない」

宮下「なるほど、なるほど。よく分かります」

先祖「霊界にな、納得して参ってそれぞれの修行を積むことになってそこにおればな、仏壇と申すところにおることも追善供養も要らぬ」

宮下「分かりました。本当によく分かりました。ご先祖様、有り難うございます」

(後略)

(4) 先祖への諭し

あの世の様子で、私と先祖の人が話している内容でおわかりでしょうが、あの中で先祖側からの頼みとして、「先祖でも悟っていない者も多いから、教えを是非話してほしい。悟れば早く成仏できるから」と申されています。また、前文の先祖の助けを読んでいただいても分かる通り、暗いところで苦しんでいる先祖の人達は、心の在り方が分からなかったため、そのような所に落とされているのです。

大神、親神様のお力以外、他力では成仏できないと分かれば、自分で悟り、自分で助かるより方法がないのです。お経や賛美歌の力では絶対助けてもらうことができないことを知るとき、私たちは先祖の方々に宇宙の仕組み、神様のお考えを伝え、自ら悟っていただき、自ら助かっていただく方法を考えなければなりません。

お経に変わるべき文を次に書いてみます。これを参考に、皆さんも自分なりに付け加えることは付け加えて、仏壇の前で声を出して、読んでみてください。自分に憑いている霊(亡者)も、仏壇の中の先祖の人達も、何回も話を聞くことにより悟り、成仏することと思います。そして、明るいところにいる先祖はさらに上の階層へ、暗いところにいる先祖は明るいところへ、と上ることと思います。(注:線香、灯明等をつけて行ってください。また、時には食べ物やお茶を供えて行うことも良いでしょう。)

~例文~

〇〇家の先祖の皆様、お集まりください。お集まりください。これからお話をさせていただきます。これは私も教わったことで、大変良いお話なので、ご先祖の皆様にも知ってほしいと思い、伝えさせていただきます。明るいところにいるご先祖もいるでしょう。暗いところにいるご先祖もいるでしょう。ご先祖様が助かり、良くなるお話ですから、よくお聞きください。

私たちは今まで知りませんでした。ご先祖様や私たち子孫は、皆だれでもが、大神様、親神様と言う力の強い神様によって作られ、生かされているのです。皆さんが生きていたときに祭ってあった氏神様や社の神様とは違います。これから話す神様とは、大神、親神様のことです。

遠い遠い昔、まだこの世、地球が誕生しつつある頃、神様が集まり、神々も一緒に見て楽しめるものを作ろうとお考えになり、人間や動物をお作りになりました。そのうち、中心となる人間には、神に近い姿(心)になれるように成長させたいと思われました。そして神々様は、それぞれが役割を決めて、この世を作るために動き出しました。

人間には、神の子供として種(魂)を宿し込みました。そして、この種(魂)には、永久に枯れることなく生き続ける力を与えてくれました。さらに、この種(魂)には、神の親心と同じ迄に成長する、あらゆる必要なものを備えさせ、完全なものとして宿し込みました。しかし、この種がただ温室の苗のごとくすすくと伸びるのではおもしろくないと思い、火や雨に耐え、嵐に耐えて成長する過程を楽しみたいと思ったわけです。そしてこの種(魂)をどこに蒔こうかと考えられたわけです。この種(魂)が成長していくのに一番ふさわしい入れ物と言うか、乗り物と言うか、そのような物を作ってそれに宿し込もうと思われました。

そしてこの入れ物には、この魂が成長し続ける十分な働きができる、あらゆる可能性を秘めたものにしようと思われました。それを人間と名付け、人間には生命肉体と、意思(心)と、考えと、知恵と、文字を与えようと思われました。この人間には、使い方によってはどの様な力も発揮することができる能力を備えさせました。そしてこの人間の体には魂を宿し込ませ、人間の体のある間、いろいろのことを学ばせ、修行させ、魂を成長させようと思われたわけです。

しかし、魂は神様の操り人形や神様の意思通り動くものではなく、自分の意思や考えで動くものにしようと思われた訳です。だから、何をしても良い、好きなことをしても良い自由な心を与えてくれましたが、神の子供である人間は皆、親(元)神が平等に宿し込んだものであり、だれもが協力し合って、お互いが仲良く成長してくれるのが望みであると申し聞かせてくれました。神様は、皆が仲良くお互いに助け合い、立て合って共に喜び合うのが目的と申され、相手を傷付けたら、困らせたり、成長を邪魔する行為は許さないと申されました。だから、どのような行動も自由であるが、行った結果に対しては、それぞれが自分で責任を取りなさいと申されて、肉体を持つ人間を入れ物として、現に貸してくださいました。

しかし、肉体を持つ人間にも他の生き物すべてにあるように、寿命という、貸し与える期間を定めました。その期間が切れたときに、肉体は灰や土に戻り、魂だけが死と言って、別の世界に入り、そこでまた別の修行をして、魂の修正をして、

次に順番がきたとき、また新しい肉体を借り、前回にできなかった魂の修行をさせようと仕組まれたわけです。つまり神様は、いろいろの時代にいろいろの環境や条件の違う中で、人間と言う肉体を貸し与え、その中で様々なことを学ばせ、魂の成長をさせようと考えられたわけです。

ところがこの肉体を借りると、肉体には本能の心が支配しております。その心は、肉体を維持する食欲、子孫を残す性欲、楽しい暮らしをする物欲、自分を守ろうとする自己中心の我欲を持っておりまして、魂を磨こう、成長させようと宿し込まれてきた魂となかなか意見が合いません。肉体を支配しているのは心で、魂は肉体を自由に操ることはできないのです。だから、心の成長がないと、魂の成長もできないのです。そこで心の成人を促すことが必要になり、神様は時に応じていろいろの伝導者や指導者を送り、いろいろの教えを説き、心の成人に役立ててきました。

しかし、本当の元(親)神の思いを説ける人は、今までに少なかったのです。これも無理のないことで、森の動物のように、食べて子孫を残すことのみで生きていた頃の人間に、神の思いを伝えても納得できなかったでしょう。

この様に、死んだり、生まれたり、つまり肉体をお借りし、生活し、魂の修行をしてまたお返しをし、あの世でこの世での間違いを悔い改め、いろいろと教えられ、新たな決意を持ってまたこの世に次の人間としての肉体をお借りし、修行の場に望んでも、その欲の心に負け、修行どころか逆に悪い因縁を積んで魂を曇らせてしまって、魂の成長はなかなか進まず、神様も残念に思っているのが現在までの姿だと思います。神様は、魂の修行をするのに一人では寂しいし、間違いも分からないし、どの様な手段をとったら魂の成長に良いかと考えられた結果が、家族なのです。夫婦になり、協力し合い、補い合い、子育てをし、夫婦の愛、子供への愛を学び、それを通し他人への愛を知り、親への恩、情けを知り、神への恩、感謝を学ばせようと思われたのです。

その家族と家族が協力し合い、村と村とが協力し合い、国と国とが協力し合って、楽しい世造りができるようにしたわけです。だから夫婦になるのも、その子供になるのも、皆同じようなかで修行をしている人達を組み合わせ、お互いの長所や短所を鏡と見立て、自分自身で悔い改め、互いに補いながら、人間としての肉体を借り、魂の成長という目的を果たしているのです。だから、嫁も姑も子供も、それぞれが与えられた魂の修行に一番ふさわしい状態に置かれたということです。その事を知ったら、嫁と姑の争いも生じないのです。生まれたところが

一番ふさわしい魂の磨き台であり、協力者なのです。宝石も磨かなければ何の価値もありません。磨いてこそ、光り輝くのです。

この様に、魂の成長、魂を磨くのが目的と分かりましたが、困ったことに、人間の体を借りたとき、その支配者、運転者の心は、成長よりも自分の我欲を優先させようとしているから困るのです。心の立場に立ってみれば自然かもしれません。心も肉体も死を迎えれば朽ち果て、無になってしまいますから、生きているうちが花で、死んでからのことや来世のことなど考えず、ただおもしろおかしく過ごして、人のことなどどうでも良いと思いがちです。そこで神様は、人間に間違いは悔い改め、心を成長させるように、知恵や文字や考える力を与えてくださいました。しかし人間は、ともするとその知恵や文字や考える力を心の成長に使うのではなく、我欲の満足に使ってしまっております。

でも心や肉体、つまり人間が平和で安心して楽しい暮らしをするのは、魂が望む方向と一致しているはずです。お互いに助け合い、尊敬し合い、協力し合うところに目的が達成させられるのです。そう考えると、心は魂の言う事をよく聞き、協議して、肉体を神様が喜ばれるような使い方をしなければならないのです。

私たち、肉体を持つこの世の人間は、心を中心に生きているのではなく、魂を中心に、魂、心の順で考えて生きなければと思います。この魂は、何回もいろいろの時代の肉体を借りて、修行をしてきています。その時代時代に良き心の持ち主のときもあれば、人を泣かせ苦しめ、自分さえ良ければの思いで通ったときもあったでしょう。そのために今日、病やいろいろの事情で悩み、苦しんでいるのも、その時代の生き様の通り返しなんです。

このような事が分かってきますと、心の望む表面的な我欲よりも、その底の魂の汚れや曇りを消す生き方を考えねばならなくなります。なぜならば、心や肉体は死ねばなくなりますが、魂は永久に生き続け、魂の成長、元神へ近づく道を歩んでいるからです。集まっている先祖の皆さん! 皆さん方や私たち人間をどういう思いで神様がお作りになられたか、これでお分かりいただけたと思います。だから、皆さん方や私たち人間は、神様の御心に沿うような生き方をしなければならないのです。しかし、皆さん方が肉体を持って生きていたときに、このようなお話はどなたからも教えてもらっていなかったと思います。皆さん方は、死んでしまえばすべてはおしまいで、土の中に埋められ、腐ってしまうか、火に焼かれ灰になってしまい、後のことは関係ないと思っていたと思います。

しかし実際には、気が付いてみると一人寂しく暗いところにおり、体は寒く、おなかは空くし、苦しく、どうして良いのか分からないで困っていますね。幼い子供の人もいますね。若い人も、年取った人も、またけがをして今も痛い痛いと感じている人もいます。刀で切られた人もいます。食べ物もなく飢えて、苦しんでいる人もおられますね。病のままの状態で苦しんでいる人もいます。いろいろの訳(事情)があって、自分から身を詰めた人もいますね。

そして皆さん方の多くの方は、肉体を持って生きている子孫の者に頼って、憑いている人もいますね。墓に住みついている人もいますね。皆さん方の多くの方達は、ほとんどが暗くて寒いところで、ひもじい思いをしていることはよく分かります。ですから、よく聞いてください。皆さん方は死んで、こちらの世からそちらの世に移ったのです。死んで、別の世界に移って生きているということです。その証に、体はもうないのです。皆さんはあると思っておりますが、実際には体はないのです。皆さん、私と一緒に手を叩いてみてください。音が出ますか？ 私は音が出ます。次に、頭を叩いてみてください。音が出ますか？ 私は音が出ます。皆さんは出ませんね。今度は、腕をつねってみてください。痛いですか？ 今は暗いから、体があるかないか分からないのですが、実際にはないのです。ですから、痛くもないし、音も出ないのです。

ですから、まず最初に、皆さん方は死んで、別の世界に移ったのだということを知ってください。次に、では、なぜ暗いところにいるのかについて、話させていただきます。だれでも死ぬと、暗いところに住まねばならないのかと思うかもしれませんが、そんな事はありません。死んですぐ明るいところに行って、幸せに暮らしている方もいます。また、暗いところへ行ったけれど、すぐに明るいところへ上った方もいます。では「俺たちは、なぜ暗いところにいる、寒い思いや苦しい思いをしなければならないのか」と思うかもしれません。また「だれがこんな暗い、寒いところにいたいもんか」と文句を言いたくなるのも分かります。

そこで、これから皆さん方が明るいところに行き、痛くもなく、苦しきもなく、ひもじいこともなく、とても住み良い場所へ行く、助かる手立てをお話しします。よく聞いてください。まず皆さんは、自分が死んで別の世界にきたという事を認めてください。これは、前に肉体をもって生きていたときと違うということで、分かっていただけでしょ。

そして二番目には、体がないということです。これは今、手を叩いたりしてみても音が出なかったことで、分かったでしょう。

三番目は、体がないのだから、けがで痛いとか、病で苦しいとかはないのです。痛いとか、苦しいとか、おなかが空いたと感じるのは、皆さん方がそう思うから痛かったり、苦しかったり、おなかが空いたり、感じられるのです。この事をよく考えて、納得してください。

四番目は、これは一番大事なことです。皆さんは肉体を持って生きていた世界から、肉体のないこの世界に移ってきたのだから、前に生きていたときのこと、つまり肉体を持っていたときのことを思ったり、考えたりしてはいけません。これを執着心といいます。前の世のことを思ったり、考えたりするその思いが強いと、絶対に明るいところへ助け上げてもらうことはできません。例えば、残してきた子供のことや、財産のことや、だれに金を貸して戻してもらってないとか、あの者にだまされた、裏切られたとかに対しての恨みや、また子孫の者達が自分がさんざん苦勞して築いた財産を、湯水のように使い果たしてしまって悔しいとか、田地田畑を奪われてしまったとか、いろいろ思いはあるでしょうが、これら一切のことは忘れて、思いを残しては駄目です。

よく考えてみてください。皆さん方も、私たちも、神様が魂の修行をするために、あの世とこの世を死んだり生まれだりの繰り返しをさせながら、魂の成長(勉強)をさせてくださっているのです。そして、土地も、お金も、物も、すべては肉体を持って、生きて修行をするときには必要だから、生きていく上に必要な道具として、貸して与えてくださっていたものなのです。肉体を持って生きているときの目的は、金や物や、田地田畑を増やすことではありません。魂を磨くのに必要なものだということで、魂を磨くことが目的でした。そして皆さんは、肉体を持っていたときの修行が終わって、今度は肉体のない、つまり体のない世界で、また別の修行をしなければならないのです。

ですから、前の世の世界のことは、何一つ必要なものはなく、また思いわずらう必要もないのです。今は暗いところなどで苦しんでおらず、早く明るいところへ上り、そこにおられる他界の神様の教えを受けて、一時も早く修行をしていただくことが大切なのです。これらのことがよく分かって、十分に納得して下さったならば、「他界の神様、どうぞ私を明るいところへお導きください」と願ってください。

必ず明るいところへ上ります。願っても明るいところへ行けないときには、これまで話したことについて、何かまだ思いに迷いがあるからです。そちらの体のな

い人達が、こちらの肉体のある人に頼り、憑くということは、絶対に許されないことですから、憑いていたらなるべく早くはなれ、神様にお詫びをして、今まで話したことを悟ってください。いつまでも肉体を持った人に憑いていると、神様に消滅させられます。

次に、五番目ですが、皆さん方の中には、すぐに助からない人もいます。それは地獄の地の果てで修行をさせられているからです。その方達は、肉体を持って生きていたときの生き方が、あまりにも悪すぎたのです。ですから、真剣に心の底から自分の行いを悔い改めて、神様にお詫び申し上げてください。魂の世界は、自分が悔い改めて悟れば、解決は早いのです。また、このような地獄の先祖の皆さんには、私共々、肉体を持った子孫の者達が、こちらの世で人様に喜ばれるような行いをして徳を積み、その徳でご先祖様が地獄の底から早く上れるよう、お願いをしてみます。

また、自ら身を詰めた方々は、すぐには助かりません。それは、神様が肉体を持っているときに、いろいろの苦しいことや、嫌なことを与えて、魂の修行の足りないところを学ばせようとしていたのに、その修行が嫌だ、あの世のほうが楽だろうと、逃げ出してしまったからです。学ばねばならないのを、苦勞は嫌だ、自分の思う通りいかないから、修行は嫌だというのは、神様の思いに反するからです。ですから、そのような方は、さらに深くお詫びをして、悔い改めてください。

六番目は、皆さん方が明るいところへいった後、どうなるのかは良く分かりませんが、皆様方の希望で、神の世界に入る修行と、また人間として生まれ変わる道と、二通りあるということです。人間として生まれ変わるときは、生前つまり肉体を持っていて、生きたときの生き様によって、どこの家に生まれ、どのような親を持つかが決まるようです。皆さん方のすべての人が、人間に生まれ変わるかという、そうとは限りません。生前の行いが悪すぎますと、牛や馬や、犬の肉体に入り、四つん這いになる、頭を下げて生きる生き方をして、生前の罪を詫びて果たさなければなりません。この様に、一度牛や犬に生まれたときは、何回かの生まれ変わりの後、人間の肉体を借りられるようになって、第一回目の人間の肉体のときは、少し知恵の遅れた人間の肉体しか借りられません。

この様に、生まれたり死んだりを繰り返しながら、肉体を持って「魂と心」がどの様に生きたか、磨いたかにより、次に肉体のない魂の世界や、さらに次の肉体を借りて生まれてくる運命や運勢が決まってくるのです。だから、肉体を持って生きていたときの生き方が、非常に大切になってくるのです。今、この話を聞いて

て、それなら肉体を持って生きていたときに、なぜ話してくれなかったと残念に思うでしょうが、今からでも遅くはないのです。よく理解して、次の肉体を借りるときは、今度は大神、親神様の心に沿った生き方をしようと決心して、神様に申し上げれば良いのです。皆さんが死んで、そちらの世に行ったとき、坊さんのお経や神主さんの祝詞や、教会の牧師さんの賛美歌が、皆さんを救えなかったことは、十分知っているでしょう。頭を丸めた坊さんの戒名も、何の役にも立たなかったことが、分かったでしょう。

二つの袋

ところで皆さん方も、私たちも、運の良い人、悪い人とありますね。大神様、親神様は、人間は皆平等に作ってくださったのに、なぜこのような差が出るのでしょうか。例え話で考えてみます。大神、親神様は、私たち子孫を作られ、その魂に「自由に何をしても良いよ。何かするときに困ったことや、思うように行かないときには、お金を与えるから、このお金を使いなさい。このお金は、ほしければいくらでも多くあげますよ」と、袋を二つくださいました。それは、白い袋と黒い袋です。そして「神の思いにあった行いをしたときには白い袋に預金がたまり、神様の思いに反した時には黒い袋に借金がたまるよ」と申されました。肉体を持って生きているときは、心と魂の協調関係で過ごしていくわけですから、どうしても黒い袋に借金がたまりやすくなります。

白い袋に蓄えのある方は、困ったことや病や、不幸にあったときには、白い袋からお金を支払い、その困ったことを軽く、無難に過ごさせてもらいます。しかし、白い袋が空っぽで、黒い袋に借金が多く入った人は、不運を取り除くお金がありません。だから、どうしても運命通りに生きるより仕方がないのです。ですから、肉体を持って生きていたときのことを考えてみましても、良い運に恵まれた人と、努力しても努力しても苦勞する人がいたと思いますが、これは白い袋と黒い袋の差が出たのです。だから、運の良い人も預金をすることを怠り、幸運ばかりを喜んでいると、白い袋は段々としぼんでしまい、最後は困ったことになります。この白い袋、黒い袋は、中身の大小は別として、両方だれもが持っています。

この袋の内容によって、いろいろの不幸の現れ方が異なります。病で泣く人、お金で泣く人、前世の亡者の恨みに泣く人、様々です。この黒い袋には、土地の障り、前世の恨みの念や、稲荷様の障りなども含まれます。このような障りの借金は、障りを作らない生き方をすれば良いのです。

詳しいことは、今回は略しますが、皆様方や私どもに一番大切なことは、お金と称する中身です。この中身を徳と申します。この徳が、神様の思いに叶うと預金になり、反すると借金になると考えてください。皆さん方は、このお金、つまり徳とは一体何なのか、あまり聞き慣れない言葉だと思imasるので、徳について軽く話させてもらいます。

まず、肉体を持って生きていたときのことを考えてください。徳を作るにはどうしたら良いかと言うと、生きていく上には、困ったことも、不幸なことも、病になることもあります。その様なとき、不平、不満を言うのではなく、これは黒い袋に詰まっている悪い埃や垢を消してくださる有り難いときである。神様が、魂を磨き、運勢を良くするために与えてくださった機会であると、感謝と喜びの心で乗り切ることです。

二つ目は、このように生かされ、人間としての肉体を貸して下さっている親(大神、親神様)に対して、毎日感謝とお礼の言葉を申し上げることです。

三つ目は、他人のことを親身になって思うことです。人の喜びを共に喜べば、喜びは倍になるし、人の悲しみは共に悲しむと半分になるという通り、本当に相手の身になって思っやることです。また、自分がされたら嫌だなあということは、人にもしないことです。どうしても助かってほしいと心から願い、自分のできることは少しでも協力することです。

四つ目は、金や物にあまりこだわらず、金や物は皆が仲良く暮らせる潤滑油だと思ふことです。

五つ目は、自然環境を壊さないということです。この自然は、神様の体です。この体の中に、動物も植物も、皆生きているのです。つまり、神様が、人間を作られた思いに沿った生き方が徳であり、反する生き方が黒い袋に入る借金です。自分中心の生き方が借金の代表です。

皆さん方も、肉体を持って生きていたとき、自分中心の、自分勝手な生き方をしていなかったか、考えてみてください。反していたら、悔い改め、神様に詫び、次は人のために、世のために尽くす生き方をしますと約束してください。そちらは魂の世界ですから、本当にそう思い、そう願うと、即座に聞き届けてくださるはずです。

今日は時間も経ちましたので、この辺りで話を終えさせていただきますが、これを読んでいる私も、黒い袋ばかり膨らむ生き方をしております。悔い改め、なるべく白い袋が膨らむ生き方をしようと思っております。御先祖様も一緒に学び、努めてみませんか。そして、自分が肉体を借りて生きていたときのことを静かに思い返し、間違っているところは直し、そちらの他界の神様と相談し、指導を受けてください。自分が悔い改め、悟ると、明るいところへと上ります。

今日は長くなりますので、これでお話を終わらせていただきます。長い時間、聞いてくださって、ありがとうございました。

(注)

愛情を持って話してください。教えるということではなく、自分も一緒に学ぶと言う気持ちで。

【四】屋敷内の土地の神様の障り

(1) 屋敷内の土地の神について

屋敷内の神様の障りについては、「さまよえる魂の救済」の本に紹介したのが、この世では初めてではないかと思えます。一般の人は、屋敷内の土地に神がいるということは、今までだれも知らなかったと思えます。

この土地の神様が、人間の病気や不幸に数多く関係しており、これを解決することにより、明るい生活ができることが判明致しました。本を読み、土地への詫びを行った結果、病気や悩みが治ったとのお礼の便りも何通かいただいております。土地の神様の障りは多いので、皆さんにもう一度注意事項を申し上げますので、軽く考えずに詫び直していただきたいと思えます。(本誌巻末参照)

土地の神様には、地の神様、土公神様(北側を支配している)、金神様(南側で西側を支配している)、姫金神様(南側で東寄りを支配している)の四体がおられます。この中で一番厳しく障るのが金神様で、土公神様、姫金神様の順に弱くなり、地の神様はほとんど障りません。ご承知のごとく、庭に動物や魚の死骸を埋めるのを一番嫌いますが、生ゴミや燃やした灰や、木の葉を集めて埋めるのも障りとなります。人間の考えでは、生ゴミや木の葉は木の肥料になると考えますが、神様から見れば神様の社を汚していることになるのです。

今までに、小鳥や金魚を埋め、またはトイレや配水管の件でお詫びしたことがある方でも一度詫びたらそれで完全に許されるかというところではなく、またその場に神様が巡ってきたときに、場合によっては障りとなって出てきます。ただ、一度すでに詫びてある方は、前の障りほどきつくは出ません。いずれにしても、時を置いて合わせて三回くらい、その件について詫びるのが良いようです。

それと、これもよくある件ですが、駐車場が庭にある方への注意を申し上げたいと思えます。金神様や土公神様の所に車や自転車を置いている方は、非常に強い障りを受けます。そうかと言って、都会のように狭い土地で生活するには、神様の障りを受けないような駐車場は作れません。私も金神様の所に車を置いており、他のところには道路の関係上置けませんので、何回も金神様の障りを受け、

その都度やり取りを致しました。人間の都合と神様の思いは違うため、大変困り、かなりのやり取りがありました。

紙面の都合上それらは略しますが、車を入れるということは、金神様は、自分の座敷に土足で入るのと同じだと申されます。また置かないにしても、金神様のところを通るだけでも嫌だと申されます。もし金神様の考えに反抗したりしますと、交通事故や病気で身に知らせると申します。神様と喧嘩しても人間には勝ち目はありません。時には、なぜ障りばかりを起こす土地の神様がいるのだろうと思ったこともあります。よく分かりませんが、土地の神々様は、それぞれ役目をおおせつかって、私たち人間を守護してくださっているようです。

さて、私のところの金神様とは、車が車庫に入る前に毎回四つのタイヤに塩をふり、清めてから車庫にいれるということで折り合いがつかしました。しかし、その場は車を置いたり出入りをしてはいけない場所であることを常に忘れず、詫びて生活しなければならないとのことでした。同じような方もいると思いますので、その方は神様の御心になって、人間側にできることはできる限りすることだと思えます。それを見て、神様も仕方なしに許してくださるということだと思えます。加藤先生を通し障りを教えていただき、お詫びしてもなかなか治らない人は、詫び方に問題があるのではないのでしょうか。言われたからやる、人が見ているから、恥ずかしいから、こそこそやってしまうとか、本当だろうかと思ったりしながら詫びる、それでは完全には許されません。

土地の神様は、ただ人間を困らせようと怒っているのではないのです。「やってしまったことは素直に詫びなさい。そうすれば少しくらいの詫び足りない点があっても、許すよ。しかし信じ、心から詫びてくれよ」と申しているのです。「そして二度と同じ過ちをしないでくれよ」と申しているのです。私達ももっと神々様に親しみを持って、神々の御心になって付き合い合えば良いのだと思えます。

(2) 土地の神様の怒り

加藤先生「大神様にお伺い申し上げます。屋敷の土地の神様の障りのことですが、このところ金神様のお怒りの障りが非常に多いように存じますが、その折り折りと申しまししょうか、時期的に怒りを知らされるということがございますでしょうか。以前にはよく、姫金神様のお怒りがございましたし、土公神様

が続けて障りをお知らせくださいますこともございます。同じ神様のお知らせを続けていただくのは何か訳があるのでございましょうか」

金神様「わしじゃ。わしは土地に関わる神、金神であるのじゃ。その通りじゃ。障りと申し知らせるは、昨日今日致せし事ではなく、土地により古い二十数年前の怒りを知らせることもあれば、または数日前に土地を犯した行いを知らせることとてあるのじゃ。古き以前に犯せし行いとて前々に知らせたことがあるのじゃが、だが知らされし者達に分からぬだけじゃ。それゆえに分からぬ間なるは、自身体弱くなりたと思ひこみ、医師なる者に縁の切れぬ者もあれば、または様々の悩みごとにて知らせられ、わが連れ合いが悪い、わが子供が悪いと相手の不足を申して分からぬゆえに、そのまま一生を終える者とてあるのじゃ。土地の神の怒り、または知らせは、この者(加藤先生)を通すことなれば速やかに分かるが、他には神の知らせを分る者はあまりにもおらぬのじゃ。

人々の苦しみとなるは、これとて神が苦しめさせようとの思いではないのじゃ。だが犯せし行いの分かることを神とて願うておるのじゃ。今そなたの申す神の障りのことであるが、それぞれの者に金神の怒りが誠に多く出ることもあり、また姫金神、土公神と出始める折りにては、時期と申すか知らせることの偏るようになることは確かにあるが、それは怒りを受けし者達がそれなりに寄り集まるのじゃ。これとて全くの偶然ではなく、それなりに関わりのある神が、表に現されるのじゃ」

大神「今そなたの申すことじゃが、それぞれの神の知らせと申すか、障りのことにつき、そなた達は相手の者達に、世間のものの認めし暦と申せしものに書かれし神であると教えるが、相手の者に分かりが早いと思うて知らせておるが、その事を申されし相手の中には、暦に書かれし物と違うなどと申す者が出ておることじゃが、その暦と申せし書物とて天地自然の法則の、ある所までくらい分かりた者達の認めし物であるのじゃ。その先の深き神々のおること、または神の怒りなど、今までは深きこととて知らせては致しておらぬのじゃ。

だが今、この者(加藤先生)を通してそれぞれの者達の苦しみの原因、または事情の原因に、それぞれの神々の怒りある事を知らせ、それなりの詫びの行いを致し務めることにより、怒りを受け苦しむ者達の助けといたし参りたのじゃ。書物なる物に書かれしは、神々の深き事は一切知らされてはおらぬであろう。ただ神の名が書かれておるくらいであろう。だが今申せしように、書物なる物を認めし者

には、深き深きことは分からぬのじゃ。知らせてはおらぬのじゃ。方位によりその神々の存在を知らせておるだけのことじゃ。

神々の申せし知らせを受けし者達(相談者)は、自身の致せし事、または先祖なる者の行いし事の障りとて同じ事であるのじゃが、どの事と言えどもその場その場の関わりある神々に詫びの行いに入ることにより、神々は即座に許す情けある神々であるのじゃ。だがこの詫びの行いとて、心より信じ行うことにより許されるのじゃ。半信半疑の思いにては、神々に届かぬのじゃ」

(3) 稲荷の神様の障り

屋敷の神様(金神、土公神、姫金神、地の神)に次いで障りの多いのが、稲荷様の障りです。屋敷神様に比べ障り方もきつく、いろいろの形で現れます。例えば夫婦仲を悪くする、競輪競馬に狂う、登校拒否、暴力、交通事故、病気(原因不明)、他様々です。稲荷様がなぜ障るかと申しますと、昔稲荷様は家の守り神として、また商売の神として多くの家々に祭られていました。稲荷の神様は他の神様と違って、一度その場に祭られると社を他に移しても、その場から抜け出すことはできないのです。

古い古い昔に祭られた稲荷の神様は、時が移り時代が変わりますと、その場所もいろいろ変化し、時には社が朽ち果て、跡形もなくなり、またその場所が畑になったり、別の建物が立ったりします。また、仮に社があっても人間の都合でその社を他に移し、そこを別の目的で利用いたします。ところが稲荷様は、どのような方法を取っても他のところには移らず、元の場所でき迷い、建物の下敷きとなってしまうのです。そして知らずに稲荷様のさ迷っている建物に住むと、稲荷様の障りを受けることになるのです。自分が社を壊したのでもなく、取り片付けたのでもないのに、知らないで住んでいた場所が偶然にも稲荷様のさ迷っている場所だと、障りを受けてしまうんです。(実際には、因縁の深い人ほどそのような場所に移り住んでしまうことが多い)

いずれにしても本当に困ったことです。人間側から言わせれば、見えないのだし、知らないのだから、しょうがないじゃないか、と言いたくなります。しかし稲荷様にしてみると、社を取り壊され、片付けられ、そこで苦しんでいて、ただできえ怒っているところへ家が建ち、人が住み、頭上でいろいろのことをしているわけですから、怒りはますますきつく、関係ない上に住む人に憑き、困らせて

くるのです。また仮にその家を移っても、以前に稲荷様の上に住んでいたという
ことで、やはりその稲荷の神様より障りを受け続けることとなります。

さて、このような事が分かって、加藤先生を除いては稲荷様の障りすら分から
ず、解決の方法もできません。本当に困ったことです。なんとか皆様に陽気暮ら
しをしていただきたいと思っているのに、稲荷様の障りで困っている人が本当
に多いのです。では、どうしたら解決できるのでしょうか。以前は稲荷様を昔あ
った元の場所に祭る方法をとっておりましたが、現在では一度お祭りしなおよ
しでも、また何十年か先には同じ様に社が朽ち果て、または移動して稲荷様
がさ迷うので、なるべく後世に災いを残さないために、関わりのある御本殿
への立ち戻りをしております。

稲荷様の立ち戻りの場合、稲荷様の分神が社を壊され、さ迷い、家の下敷
きになり、苦しんでいるのを関係する本殿の稲荷の神が見ていても、大神、
親神様の許しのない限り、迎えに行き、助け出すことができません。です
から当院で加藤先生においでいただき、稲荷様の助けを行うときには大神、
親神様にお許しをいただき、その後に本殿の稲荷様のお迎えを願い、助
けだし、本殿の神の導きにより分神の稲荷の神を本殿に連れ戻す儀式を
行います。当然この儀式を行うときには、苦しんでいた分神の神が大変怒
り狂って出てきますから、体を貸す加藤先生がお疲れになってしまいます
ので、事前に加藤先生より苦しんでいる分神の稲荷の神様に事情をよく説
明して、当日は静かにできるよう根回しをして行います。

しかし、当日はそれでもかなり分神の稲荷の神は怒って出てくるので、
加藤先生も大変お疲れになるし、同席する人達も神経を磨り減らします。

次に、稲荷様の助けの状況を書いてみます。

例1 T家

当院の患者さんの子供(高校生)が警察につかまり、刑務所に送られる寸前、
稲荷様の助けを行い、無事釈放されました。助けの行いをした後は人柄
もがらりと変わり、関係者も条件付きで許すことになりました。その際の
やり取りです。

大神「この者房子なる者の子供のことにて困るは、この者の住む屋敷にお
りし神、稲荷の神の怒りにて、子供なる者そのように悪しき行いの道に
入り、親の困ることとなりておるのじゃ。稲荷の社の神の怒りなるは、
誠に厳しきことにて、

そのようにこの者達を皆狂わせ、困らせておるのじゃ。神の仲立ちにて社(稲荷)の神の腹立ちとて鎮めるのじゃ」

稲荷「わしじゃ。わしは稲荷じゃ。稲荷の社の神であるのじゃ。わしは悔しいのじゃ。あの者の住む場におるとは申すが、違うのじゃ。同じ敷地内におるのじゃ。だが悔しいのじゃ。あの者達だけではないのじゃ。皆わしの怒りにておかしくさせておるのじゃ。わしの怒りは、あの者達だけではないのじゃ」

加藤先生「申し訳ございません。神様もさぞかし悔しいことと思います。社に祭られたときのように、人の心がいつまでも神様に向けられているのなら良いのですが、いつしか時代が変わり、人が変わり、その内にお社のあることも知らぬとは申せ、御無礼の多かったことと思います。まして神様の身になりましたら、悔しいのはよく分かります。本当に神様の御心が分かります。どうか私からもお詫びを深く深くさせていただきますのでお許しく下さいませでしょうか。

私の信ずる力のある神様方をお願いを申し上げて、神様お稲荷様の関わりのある本殿へのお戻りの儀を計らせていただく所存でございます。でもこれも、無理にはございません。神様がその場にお社を作れと申されることならば、その様にとてさせていただきますように、Tさんに話させていただきますが、でも私の思うには、例え神様の御社を元の場に作ったとしても、またいつの日か時が移り変わりましたときには、今のようになおざりにされないとは限りませんので、この折を境として、神様の関わりある御本殿へのお立ち戻りをされた方が良くかと思いますが、いかがでございますでしょうか」

稲荷「さようか。そのように関わりある社に戻る事が適うのならば、わしとてそのようにしてほしいのじゃ。そのことを願うてくれぬか。今申すように、この者達のところにわしの社を作りたとして、今のようになるは嫌じゃ。その事に戻るように、頼みじゃ。願うてくれぬか」

加藤先生「分かりました。ではそのことを明日、神様の前でT家の房子さんが深く深くお詫びをして、後にお稲荷様の御本殿の社様のお迎えを受けて立ち戻れるように、力のある神様に願わせていただくことにしますので、どうか明日にはあの方、T家の房子さんのお詫びをお許しく下さいますように、私より深く深くお願い申し上げます」

稲荷「わかりた。よくわかりた。あの者をわしは許すことにいたすが、だがわしの申したき事とて申すが、その折にてはわしはひどき怒りはせぬようにいたすが、頼みじゃ。わしは本殿へ戻りたいのじゃ」

加藤先生「分かりました。では明日はお願い申し上げます」

翌日すぐ当院で席を設けて、立ち戻りの儀を行いました。効果はすぐ現れ、Tさんの家の人々の喜びは事のほかでした。

例2 K家

ご承知のように事情の深いものは当院において加藤先生におこしいたき、席を設けて解決を行っておりますが、なかなか依頼者が多く、順番が進みません。そのため、席を設けて解決するまで、①まず稲荷様の障りを取る方法をして、②席を設けてやる少し前には、稲荷様の根回しの依頼をしている様子をそれぞれ紹介します。

① 稲荷様の障りを取る方法

大神「この者、そのように長きにわたり体思うようでなきは、この者の住む屋敷におりし神、稲荷じゃ。稲荷の社の神であるのじゃ。この者の住む屋敷に古き時代に祭られし神、稲荷の社の神であるのじゃ。待て、その稲荷の社の神と代わるぞ」

稲荷「わしじゃ。わしは稲荷の社の神であるのじゃ。わしの怒りにてこの者の体、そのように悪きことになりておるのじゃ。わしは悔しいのじゃ。あの者達の住む屋敷に長きに渡りさ迷いておりたのじゃ。その事にて、あの者あのように人の体とは違うのじゃ」

加藤先生「お稲荷様、誠に申し訳ございません。どうかお許しく下さいませ。この方達は何も知らずに神様のおられる屋敷に住みまして、御無礼をいたしていたことは、私よりも深く深くお詫びを申し上げます。この方達にこのことを申し上げて、その後なるべく早い時にお稲荷様のよかれと思うように、大神様方に願わせていただきまして、神様の御心に報いますように、一生懸命勤めさせていただきますので、どうかこの方の今の体が少しでも楽になれますように、お許しく下さいませでしょうか。どうかどうか、お願い申し上げます」

稲荷「さようか。そのようにわし神のことを願うてくれるか。そのようなることにてわしが良くなることであるならば、すまぬが頼みじゃ。わしとてあの者の体より抜け出ることにていたすのじゃ」

加藤先生「分かりました。今日すぐとはいきませんが、お約束をさせていただきますので、どうかどうかお許しくださいますよう、お願い申し上げます」

稲荷「良いのじゃ。すまぬが頼みじゃ。わしはあの者より抜け出ることにていたすのじゃ」

② 稲荷様の根回しの依頼

加藤先生「神様、申し訳ございませんが、この方 K 山信さんに関わりありますお稲荷様へのお仲立ちのほどを何卒お願い申し上げます。稲荷のお社の神様のお心に召されるようなるお話し合いのできますことへのお仲立ち、お助けのほどをお願い申し上げます」

大神「待て、代わるぞ」

稲荷「わしじゃ。わしはこの者の住む屋敷にさ迷いし神、稲荷の社の神であるのじゃ。わしは悔しいのじゃ。あの者思うようにならぬは、わし神の怒りにてのことであるのじゃ。わしのおりし場なるは、古き時代の折にては社がありたのじゃが、だが今なるは社とてなく、さ迷いておるのじゃ。わしの怒りじゃ。わしのおりし場にあの者たちが住みておるのじゃ。あの者体のことにて思うようでないは、わしが怒りておるゆえにてのことであるのじゃ」

大神「わしじゃ。大神じゃ。親神じゃ。わし神の申したきは、この者達、いま住む者達への怒りを向けるは、これは、間違うておるのではないかのう。確かに古き時代にては社の神と祭られたが、だが時移り、人変わきりし時の流れにては致し方なきことではないかのう。稲荷の社の神の申すこととて分からぬはないが、だが分からぬ者達に怒りを向け、困らせるは、これとて悪しき事ではないかのう。社の神に申すが、関わりある本殿への立ち戻りはいたさぬか。その思いあるなるは、わし神の力にて本殿への立ち戻りを許さぬこともないかのう」

稲荷「さようござりますか。わしは戻りたいのじゃ。戻ること適うなるは、社へ戻りたいのじゃ。この場より抜け出ること許されるなるは戻りたいが、戻ることを許して下さいませるか」

大神「良いのじゃ。戻るは許すが、だがその関わりある者との場にての折にては、神の申す事をよーく心に現し、怒り狂うは駄目じゃ。そのようなることあるなるは、立ち戻りとて許さぬのじゃ。分かりてくれるは、社の神の上にてても良きことではないかのう」

稲荷「よいです。よくわかりました。あの者との話をいたすことにいら立ちはいたしませぬ。いら成ちは許されぬは分かりたことでありまする」

この後、席を設けて無事、御本殿への立ち戻りの儀は終わりました。

例3 O家

当院の患者さんであるOさんは、今までにも何回か席を設けていろいろな障りは解決しており、稲荷様の障りもその中で二回ほど行ったことがあります。今回も稲荷様の障りが出ましたので、順番を待ってもらおうつもりでしたが、それだとかかなり先になってしまうため、席を設けないで行っていただきました。

(注)稲荷様は一体ばかりでなく、場所によっては異なる稲荷様が数体も出ることがあります。また、席を設けてやらなくてもほとんどは解決できますが、神様の目的は陰で解決してしまうことではなく、やってもらった本人に神様や目に見えない世界のことを理解させたり、人間としての心造りや生き方を正し伸ばさせるために、わざわざ時間が掛かっても席を設けてやっているのです。陰で解決してしまっただけは、ああ良かった、で終わってしまい、便利屋的に思われるから困るのです。

大神「この者智子なる者、そのようにおかしき気分になるは、この者自身ではないのじゃ。この者の住む屋敷におりし神、稲荷の社の神の怒りにてそのように気分いらだち、他の者達への関わり悪くいたさせておるのじゃ。待て、代わるぞ」

稲荷「わしじゃ。わしはこの者の住む屋敷におりし社の神、稲荷じゃ。わしは悔しいのじゃ。この者の体にわしを取り憑き、あのようになさせておるのじゃ。わしの怒りであるのじゃ」

加藤先生「申し訳ございません。どうかお許しくださいませ。本来ならば、〇さんが神様のみ前で深く深くお詫びを申し上げねばならないのでございますが、その時を待つとまだまだ先になってしまうので、いかがでございましょうか。私の思うには、この方がお詫びを申し上げた後に、お稲荷様のお社をお作りになりましてお祭りされたとしても、またいつの日か長い時間が経つと、知らぬ者達の心のない方達が出てこないとも限りませんので、いかがでございましょうか。

この折に神様の関わりあります御本殿へのお立ち戻りの儀につき、そのようになされましてはいかがかと存じますが……。もしお稲荷様がそのようにとの御心がございましたら、私の信ずる力のある神様にお願い申し上げます、お立ち戻りの儀をお願い申し上げますが、いかがなものでございましょうか」

稲荷「さようか。そのようなることが適うのか。そのようなることが適うことなるは、わしとてこの場より戻りたいのじゃ。そのようなることが許されることなるは、頼みじゃ。頼みたいのじゃ。そのことを願うてくれぬか。頼みじゃ」

加藤先生「分かりました。よく分かりました。では早速そのことを私より願わさせていただきますので、どうかしばらくの間、お待ちくださいませ」

稲荷「すまぬ。頼みじゃ」

加藤先生「分かりました。大神様、親神様、誠に申し訳ございませんが、この方〇家の智子さんの屋敷におられますお稲荷様の社の神様の御本殿へのお立ち戻りの儀、どうかどうかお許しくださいませことをお願い申し上げます」

大神「さようじゃ。この社の神なるは、長きに渡りさ迷いておりし神ゆえに、気の毒じゃ。よいのじゃ。これより即座に本殿の社の神の迎えを差し向けることにいたすゆえにのう。待て」

本殿の神「わしじゃ。わしは社の神、稲荷じゃ。わしの分神なるは立ち戻りを許されし事にて、この場に迎えとして参りたのじゃ。これより、この場にて苦しみておりし神、分神と代わるぞ」

稲荷「わしじゃ。わしは許され、嬉しいのじゃ。この場より抜け出すことにいたすのじゃ。(ここで抜け出る)

ううーん。抜け出たのじゃ。抜け出たのじゃ。この場より抜け出たのじゃ。この者達の住む屋敷より戻ることができるのじゃ。わしはこの者達との関わりなるは、なきことになりたのじゃ」

本殿の神「わしじゃ。わしの分身なる者共々、これより戻るのが。戻るぞー」

大神「わしじゃ。大神じゃ。親神じゃ。これにて智子なる者への関わりはのうなりたのじゃ。案ずることはのうなりたのじゃ」

加藤先生「ありがとうございます。どうもありがとうございます」

例4 T家

当院の患者さんである Tさんは、親神様の参拝もよくしてくださり、神様のこともよく分かっています。ところがある日突然、膝から下が腫れだし、動けなくなってしまいました。医者でも原因が分からず、私が治療をしても、したときは良いのですが、すぐまた元に戻ってしまうため神様にお聞きしますと、仕事先の稲荷様の障りと分かりました。

大神「この者仁志なる者、そのように足の甲の腫れしことなるは、この者の働きの場にさ迷いし神、稲荷の社の関わりであるのじゃ。社の神の関わりにてそのように痛みておるのじゃ」

加藤先生「大神様、親神様。誠に申し訳ございませんが、どうかこの方仁志さんに関わりあるお社のお稲荷様のお怒りにての痛みと伺いましたが、どうか大神様、親神様のお仲立ちをいただきたく、社の神様、お稲荷様の御心がお鎮まりくださいますように、深く深くお願い申し上げます」

大神「さようか。わかりた。この者そのように足の痛むのは気の毒じゃ。神の仲立ちにて、この者の足の痛むを助けねばのう。待て。代わるぞ」

稲荷「わしじゃ。わしは稲荷の社の神であるのじゃ。わしは悔しいのじゃ。あの者がわしの社のあるところに物を置いておるが、わしの社のあるを知らぬとは申せ、悔しいのじゃ。わしの怒りにて、あの者の足が腫れておるのじゃ。わしは悔しうてならぬのじゃ」

(ここで力のある神様が、社の神を鎮めてくださいました)

稲荷「分かり申した。分かり申した。わしは、わかりた。力ある神の方の言われる事が分かり申した。わしはあの者の足の痛むを困らぬようにいたします。力のある神の方の申すことがよく分かり申した。この者の足の痛むをさせぬことにいたします。仁志と申す者の体からすぐ抜け出ることいたします」

加藤先生「ありがとうございます。お稲荷様の御心に適うように、力のある神様に後ほど願わせていただくことに致しますので、どうかお許しください。お願い申し上げます」

稲荷「わかりた。力のある神がわしを救ってくれたのじゃ。わしは今はこの場を離れたのだ。あの者の足のところから抜けでたのだ。わしはもうあの者の体から離れたのだ」

加藤先生「ありがとうございました。本当にありがとうございました。大神様、親神様。このようなる事情、速やかにお助けくださいますして、誠にありがとうございました。深く深く御礼を申し上げます」

大神「この者に関わりし社の神なるは、わし大神、親神の力にて、この者の体より抜け出たのじゃ。この者、楽になりてまいるのじゃ」

加藤先生「本当にありがとうございました」

(4) 稲荷の神様へのお詫び

前記のことから、稲荷の神様の恐ろしいことは分かったと思いますが、加藤先生と縁の持てない方は次の方法を試みてください。

1 昔屋敷内に稲荷様の社があり、現在は無い場合は、以前祀ってあった場所に社を造り、内にヘイソクを入れて、「この場にさまよえる稲荷の神様このヘイソクにお入り下さい。」と三回声を出して念を送り、この念に乗ってお入りになってもらう。

- 2 稲荷様を移動する場合、「稲荷様これこれの理由で社を動かしますので中のへイソクにしっかりとお入りになって下さい。」と三日間挨拶をした後、当日、「これから動かしますから、ここに残ってさまよわないようにしてください。」と声をかけてから動かして下さい。
- 3 神主に頼んでも効果はありません。本人が心から詫びて行って下さい。
- 4 お供物は、使い姫の狐に、赤飯、油揚げ、めざし、大明神の稲荷の神様には酒、塩、米、水です。事あるごとにお供えして下さい。新年の初午の日も必ずお供えして下さい。

【五】土地の因縁

病気や不幸の原因は、いろいろありますが、住んでいる土地に関する因縁について説明させていただきたいと思います。

地球が誕生して四十五億年と言われていています。私たちが住んでいる土地にも長い長い歴史があり、そこには私たちが知らないだけで過去にはいろいろの出来事がありました。その出来事の一部が災いして、その上に住む人達に病気や不幸を起こすことがあることが分かりました。

普通の人達はこのようなことは思いもよらず、病気や不幸になると医者に助けを求めたり、不運を嘆くだけでした。土地の因縁による災いは、さ迷っている神の障り(稲荷、不動尊、観音菩薩、他)、亡者や人神の障り、水神様や屋敷の神等の障りがありますが、ここでは一般的に多く表れる亡者や人神の障りについて説明したいと思います。

(1) 因縁の深い土地には住まない

よく神社跡や墓地の跡地、処刑場、事故で多く死んだ跡地などには住まないほうが良いと言われていますが、まったくその通りだと思います。ところが今日のように住宅が不足してきますと、嫌われてきた悪因縁の土地も広い墓地跡も、整理されて造成され、見た目には立派な文化住宅地に生まれ変わっているところが多くあります。

土地を求める人々は、土地の因縁が住む人に障るなどと考えたこともありませんし、また仮に障りがあることを知っている人でも、その土地が古い昔にはどのような因縁があったかは調べようがありません。せいぜいその地に住む古老の人に聞くくらいです。それでも百年くらい前までしかわかりません。

では実際、そのような土地に住むとどのようになるかと言うと、数年もすれば、「近所の家々で次々と不幸の出来事が起きる。我が家もいつも病人が出る」などということになります。相談内容のうち、土地の障りはいろいろですが、多いのは「子供の登校拒否。若者が働かず、人と会うのを嫌い外に出ない。人が来るとおどおどして、隠れる。電話や大声を怖がる。髪の毛が立つ。だれもいないのに

足音が聞こえて、人の気配がする。白装束の人の姿が見える。家族が事故ばかり起こす。家族がイライラして不和になる。商売が不振になる。家族のだれかが金縛りによくなる」などです。

しかし私たちは、何も悪いことをしていないのになぜ不幸にならねばならないのかと考えてしまいます。私たちは見える世界だけで物事を考え生活していますが、実際にはこの地球上で生きているものは、肉体を持つ人間だけでなく、亡くなってあの世に行ってしまった人間、つまり肉体はなく魂だけの人間(亡者)も関係しているのです。だから始末が悪いのです。悟って明るいところへ行っている亡者の人達は関係しませんが、この世に執着心を持ち、暗いところで悩み苦しんでいる亡者の人達は、この世で生活している肉体を持つ人間に悪影響を与えるのです。これが幽霊となって出たり、魔の踏切などで事故を起こさせたり、自殺の名所などで活躍しているのです。その実際例を次にいくつか記載してみます。

例1 土地を求めたいとお願いした件

大神「この者、土地を求めるは良きことであるが、今申せし場なるは、これはだめじゃ。なぜかと申すことなれば、この地なるは古き過去の折に多くの者達が戦の折に血を流しておるところゆえに、この場に住むなれば必ずその場にさ迷いし者達に次々と取り付かれ、暗き日々を過ごさねばならぬのじゃ。それゆえに、この場を求めるは取り止めるが良いのじゃ。この場に参りたとて、自身苦しみて参ること多く、気苦勞が絶えぬのじゃ」

例2 転居してから喘息がひどく、医者でも原因がつかめない方

大神「この者、そのように咳なることにて困るは、これはこの者の住む場におりし亡者に取り付かれ、そのように苦しき咳となりておるのじゃ。その住む場なるは、亡者の多くおりし場であるのじゃ。取り付きし者の消滅を致すことにて気分楽になりて参るのじゃ。待て。この者に取り付きし悪しき亡者なる者、前に出るのじゃ。前に出るのじゃ」

加藤先生「ここで消滅されました」

大神「これにてこの者、楽になりて参るのじゃ」

例 3 関東大震災の時に多くの死骸を埋められた跡地に建ったマンションを買った方

大神「この者達、新たなる場を買い求めたはよいが、その場なるは誠に悪しき場であるのじゃ。その場に移り住む後なるは、この者達新たなる関わりにて、今までとはまったく別の苦しみになるのじゃ。この者達の買い求めし場なるは、それほど古き時代ではない折、多くの者達が火に追われ、逃げ惑う者達が命果てし後に、取り急ぎその場に生け込みてあるのじゃ。そのように人々が恐れを成し逃げ惑いし事なるは、地の揺れし事にてそちこちへと火の手が上がり、多くの者達が恐れおののきておりたのじゃ。その多くの者達が埋め込まれし場なるをこの者自身の手にて買い求めたのじゃ。見ておるが良いのじゃ。いつまでも良きことは続かぬのじゃ。必ず多くの亡者達が、そこに住む者達に悪しき事をしてくるのじゃ」

このような土地の場合は、亡者が多すぎて全部を助け出すことは、加藤先生がお疲れになるためできません。

方法としては転居が一番良いです。なお、転居後も憑依している多くの亡者を消滅なりお助けなりしていただかないと解決いたしません。

例 4 処刑場の跡地に住んでいる方

娘さんが精神異常で幻覚、幻聴がひどく、母親が困り果てて相談にきました。大神様にお伺いいたしますと、処刑場の跡地のため、早く転居するようお教えいただきましたが、家移ることは大変のため、そのままにしており三年経ちました。ところが今度、長男の仕事場が火事になり、大損害を被りました。その件に付き、お伺いした結果です。

大神「わしじゃ。大神じゃ。わしの申せしことは、以前に申せしこととまったく同じことであるのじゃ。そのようなる恨みある場に住むは、身の上にはまた災難に遭うもまったく同じ原因であるのじゃ。今の火のことの災難とて、そのようなる場に住むゆえにての関わりであるのじゃ。その今住む場に恨みをいたせし者達のあまりにも多くあることにて、神の助けの行いなるはできぬのじゃ。この先

とてその場に住むは、金銭の上にはまたは身体の上にとて、関わりなるは忘れし頃に必ず出て参るのじゃ。そのようなる場より他の場所に移り住むが良いのじゃ」

例5 お助けをいただき、転居しなくても済んだ方

患者さんで右膝が悪く、治療してもなかなか良くならない方がおりました。血圧も高く、イライラがひどいというので神様にお伺いいたしました。それが次の通りです。

大神「この者の住む屋敷に埋め込まれし亡者なるは、神の力にて助けはいたすが、だがそのように人の体に取り付くは許せぬことであるのじゃ。この場に埋められし亡者なるは多くはないが、おることに変わりはないのじゃ。待て。代わるぞ」

亡者「はい。すいません。私はあの所に埋められている者です。私は古い昔にあの所で死んだ者です。私の家はその辺りではありません。あの所で私が死んだのは、戦のためです。戦の時に出されてきた者です。私だけではありません。他にも私のように戦でこの地にきた者が大勢いるのです。私はそのように自分の国ではないのです。遠くの生まれの者です」

加藤先生「わかりました。今も他の人達も大勢いるのですね」

亡者「そうです」

加藤先生「わかりました。では神様にお願い申し上げて、みんな一緒にお助けいただくことにしますので、しばらくお待ちくださいね」

亡者「わかりました。ありがたいことです。お頼みします」

この後、亡者の人達を助け導きました。この行いを終えた後は、膝の痛みも治り、イライラも治りました。この人の場合は普通ですと、これだけ多くの亡者がいると転居をしなければならないのですが、常日頃神様のご用を勤めさせてもらい、多くの困る人々のお助けに励んでおられるので、加藤先生もお体の疲れるのを承知で行ってくださったのです。神様もすべてに公平ではありますが、心を尽くす人にはやはりそれなりの御守護もくださいます。

例6 墓地跡なので転居するしかないのだが…

受話器を置いて、深い溜め息をつく。横浜の T 君のお母さんからだ。T 君に頼まれて電話を掛けたという。T 君は二十五歳。学校を卒業してから働かず、家でぶらぶらしている。三つ年上の兄も同じく働かず、ぶらぶらしている。兄弟仲は悪い。二人共同体には異常はない。ただ働く気力がなく、いつも気分がすぐれない。しかし医者に掛かるほどではない。

母親と相談に来た。原因を加藤先生を通して神様にお伺いした。墓地の上に住んでいるからだという。その場所は、清めきれない位多くの亡者がさ迷い苦しんでいるとのこと。その亡者達が T 兄弟に取り付き、いろいろの悪い現象を起こさせているのだ。方法はそこを移る以外ない。再度来て頂いて T 君と母親によく説明する。

テーブルも貸して十分理解してもらおう。よく納得はした。しかし肝心の父親が、そんな馬鹿な、と承知しない。無理もない。やっと苦勞してアパートから建売住宅を買って出たのだ。まだローンだって返し終えていない。それでは、父親と母親はその家に住み、子供達だけ近くのアパートに住まわす事は出来ないか、と話してみる。

現在の状況ではとてもその余裕がないという。働き盛りの若者二人が遊んでいて、母親も亡者に憑かれ、悪い体調を無理してパートに出ている。パート代は知れたものだ。父親の収入だって人並みだ。墓地の上の家を出れば元気になる。元気になるれば働ける。そうすれば正常になる。それは分かる。しかし、それにはその切り替えのアパートを借りるお金が必要だ。そこで行き詰まる。貧乏治療家の私にも応援する資力が無い。仮にしたとしても、この様な金銭上の相談者は多い。全部の人の力にはなれない。方法は指導出来ても、物質上の援助は出来ない。人を助けるのは難しい。そこで深い溜め息になる。

(補足)神様に、亡者の多くいる土地に、供養塔を作り、それをお祀りしたならばどうでしょうかとお伺い致しましたが、それは効果がないと、教えられました。ひどい土地ならば、やはり他に移るより方法がないようです。

(2) 土地の因縁の解決方法

次に、その土地が因縁の土地であるか否かの見分け方を紹介いたしたいと思います。

- 一、金縛りによくあつたり、うなされる
- 一、家の中でビシビシとか、いろいろの音(ラップ音と言う)がする
- 一、なんとなく人の気配がしたり、ひやっとして嫌な感じがする
- 一、隣近所で事故や不運がよく起こる
- 一、住んでから数年目頃よりノイローゼ気味の人が出たりする

などなど、他にもいろいろあるでしょうが、このようなことに気付いたら、借家の場合はなるべく早く転居してください。不思議と墓地跡に住んだ人は次も墓地跡に住む傾向がありますので、よく調査した上で移ってください。

ところで、このような因縁の地に住んだ人は今までどうしていたのでしょうか。一般的には霊能者や祈薦所をお願いしてお祓いや祈薦や土地の清めやきれいな砂を持ってきてまく、他いろいろの方法を行っていたと思いますが、これらの方法では解決いたしません。なぜならば、幽霊となって出てくる亡者や憑依してくる亡者は強い執着心を持ち、自分が暗い苦しいところにいるから怒りも激しく、強いエネルギーを持って災いを引き起こすので、お経の力や祈橋の力で押さえ込むことはできないのです。亡者と言っても肉体がないだけで、私たち三次元の肉体を持つ人間とまったく変わりがないのです。亡者の人達を処分できるのは、大神様親神様と他界の神様だけです。

考えてみてください。私たち、いま生きている人が亡くなってあの世にいったとします。一般の輪廻転生の事を知らない人達は、墓地で苦しみながらそこが落ち着く場所だと思って住みついてしまいます。(すべての人ではないが)。そこを何十年か後に、生きている人間側の都合で勝手に墓地を取り壊し、そこに家を建てて勝手気ままな振る舞いをしたとしたら、墓地で静かに過ごしていた亡者の人達は当然怒るでしょう。そして、肉体を持つ人間に憑き、知らしているのに、「幽霊が出る。お祓いしてくれ」と、祈禱師を頼み、お祓いをして「はい。そうですか」と退くでしょうか。私たちもいずれ亡くなるのです。亡者になったときのことを考えてください。

亡者の立場はどうかと。だから生きているうちに、このようにさまよう亡者にならないために、「心の友」誌を読んだり、いろいろの話を聞いていただいて、あの世にいったときには明るいところに住み、肉体を持つ人間(三次元)の人達には迷惑を掛けないようにしっかりと心造りをするのが大切なのです。

本題に入ります。墓地跡や因縁の土地に住んだ方は、ではどうしたら良いのでしょうか。転居するにこしたことはありませんが、家を移るとなるといろいろの問題(金銭など)が起き、また移った場所も絶対に安全な場所であるとは住んでみるまでなかなかわかりません。加藤先生にお願いすれば良いのですが、全部の人はとてもできないし、またあまりにひどい場所は加藤先生でも肉体の疲労を考えるとできないからです。時間に見れば短いのですが、加藤先生の身を削ることになります。ご承知のごとく、霊能者のところでは何十万、何百万円のお金を請求され、それでも解決できないのが実情です。霊能者や祈薦師では駄目とわかった以上、どのようにしたら良いのでしょうか。これが長年の頭痛の種です。

墓地跡や処刑場跡地から悪いてくる亡者の人達は、生きていたときに、死んだらどうなるか、死後の世界はどうなのかを知らず、また輪廻転生の話を聞いていなかっただけで、生きている私たちと少しも変わりはありません。地球上に生きている多くの人達は、輪廻転生のことや死後のことを知りません。また当然の結果として、今世での心の作り方などに気付いておりません。これらの多くの人達は、ほとんどが亡くなると暗い寒いところに行き、墓地跡で憑いてきている人達の仲間入りをして同じ事を繰り返します。

考えてみてください。今、あなたが亡くなって暗いところにきてしまった。困った。どうしようと思ってとりあえず、自分の苦しんでいる上に住んでいる家の人達に頼ったといたしましょう。その家の人達はびっくりしてお坊さんをお経を上げてお経を上げたといたします。生きていたときに知らないお経をいくら上げてくれても何を言っているのかさっぱりわからず、何の役にも立ちません。空いたおなかには膨れません。今度は祈薦師がきてお祓いをしたといたします。そんなことでは去る訳にはいきません。なぜならば、暗いし寒いし、ひもじいし、自分でもどうしたら良いかわからないからです。皆さんの仲間の多くの人達は、ほとんど暗いところに行きます。暗いところから頼ってくる亡者の人達を他人事と思わないでほしいのです。

以前に、土地に関わりある亡者のお助けについてお聞きした時のことです。

大神「この者の住む屋敷に関わる墓なるところに埋められし亡者なる者がこの者達に頼りておるが、その亡者なる者をどの場にて助けの行いをいたすが良いかとの問いであるのう。これはこの土地に関わりある亡者であるゆえに、その地に住む者自身にて、亡者なる者と言葉にて話しかけ、言葉交せし後にての助けをいたすが道ではないかのう。間違いなきことを思うは、それは違うのじゃ。その亡者なる者を慰め、気の毒なる思いにて弔うくらいでなければ駄目じゃ。屋敷にさ迷っておるは困る、関わりない、との思いでおるは駄目じゃ。その地に住むも、これとて偶然ではないのじゃ。その者達を弔うようなる関わりありてのことじゃ」

さて、私のいろいろの体験上を元に、必ず効果があると確信しているやり方を紹介させていただきます。あの世に神様のいることも知らず、寒くてひもじくて苦しんでいる人達には次のことをよく教えてあげることです。

- 1 亡くなったことを自覚させる
- 2 死んでも生き続けていることを確認させる
- 3 肉体のないことをわからせる
- 4 肉体がないと、苦しいとか、空腹とかがないことを確認させる
- 5 他界の神様がおられ、導いてくださることを教える
- 6 この世への執着心を持たないことを教える
- 7 輪廻転生の事を教える
- 8 この世への憑依は神様に叱られ、消滅されることを教える
- 9 以上のことがわかれば、この土地から離れ明るいところに行って住めることを教える。
- 10 肉体のある人間も、亡者となった人間も、すべて大神親神様の懐に住んでおり、墓地などに住まず、もっと明るくて楽しいところに住むことが正しい生き方であると説く

これらのことをわかりやすく教えてやると良いのです。（「さまよえる魂の救済」の亡者への語りかけ参照）

夜、静かになってから幽霊や亡者の出る部屋で線香を立て(実際には意味がないが、亡者が寄ってくる)、食事(御飯、おかず、水、酒、お茶等)を添えて、その前で「大神親神様。これから亡者の人達に話をいたします。何卒悪神や悪霊に憑依され変にならないよう御守護ください」とよくお願いして(大神様親神様のお

守りのある人は首に掛けて)、また数珠を持って、体調の良いときに(寝不足や疲労しているときはやらないこと)二人以上で行ってみてください。

やり方は、1~10のことを亡者の人にわかりやすく、亡者の方がそこにいる気持ちで、なるべく昔の言葉を使って話してください。追い払うとか邪魔にするのではなく、深い深い愛情を持ってその人を理解させ救ってやるのだと、その亡者の身になって行くと必ず効果はでるはずです。しかし亡者にも、早く理解する人となかなか理解しない人がいるので、根気よく続けてみてください。

【六】前世の因縁

前世の因縁により今世の運勢が決まってきます。病気や相談を通して前世の深い因縁がわかった方は、目先の解決だけでなく、心から反省し、今世の生き方そのものを、因縁を消していく方向へもっていかなければなりません。

例1 結婚できない人

大神「この者 N 子と申せし者、良きつれあいの者を、と申しておるとのことであるな。この者、年も年ゆえ、親としては気になるであろう。だがこの所、この者には縁組の相手は差し当たらないであろう。その事につき、申しておかねばならぬことじゃが、この者は親の元を離れる訳にはいかぬ立場にあるであろう。他には親の行く末を共にいたす者はおらぬゆえにな。

一人他の者はおるが、気の毒じゃがこの者は姉のような人並みの者でないゆえにな。気の毒じゃが今の所、この者 N 子と申せし者との良き相手は、身近にはおらぬのじゃ。この事につき、今少し待てとは言えぬのじゃ」

加藤先生「神様、この方には何か深い因縁というか、または亡者でも関わりがあるのでしょうか」

大神「この者 N 子と申せし者は、このような縁のなき者であることには、それなりの原因と申すか、深い前生のしがらみがあるのじゃ。その因縁がこの者の今生の運命に関わりを持っておるのじゃ。この者の前生は、多くの者達の上に立ち、気まま放題の悪しき行いを数々の者に与えて生きてきた魂の持ち主であるのじゃ。多くの者達を自身の欲のため、泣かせ苦しめて参ったのじゃ」

加藤先生「どのような事をいたしましたのでしょうか」

大神「この者は、今より数えて四百年ほど前かの。前々々々々生の命ある折には、他の者の上に立ち、多くの者達、これは女達の束ね役をいたし、身分ある者たちに否とは言わせず、若い女達を差し出し、自身はその仕事をいたし、与えを受けとり、気まま放題の暮らしに日夜過ごして通った心の持ち主であるのじゃ。その時の多くの者達の運命を自身の立場の上に自由にいたしておったのじゃ。その

因縁の表れにて、このような自身、身の振り方のつかぬような立場の身の上におけるのじゃ。このようなおかしな妹を与えられ、そのような立場に生を受け、嫌でも親と妹との間に立ち、生きていかねばならぬのじゃ。この家の者は皆、深い深い因縁の持ち主よりの集まりであるのじゃ」

因縁を寄せて守護すると神様は申されている通り、同じ因縁の人同士が親子となり、その中で苦労して、または親や子に悩まされ、それを通し反省し、前生の罪を償う生き方をしなければならないのです。

例2 日々の通り方

いつも頭がもやもやして気分がすぐれない相談者について、神様にお伺いいたしました。大神この者 Y なる者に申したきことがあるのじゃ。この者への教えであるのじゃ。この者は、自身業深き者の生まれ変わりの者であるとは以前の折に申したが、今ではそのようなること忘れ去りておるゆえに、改めてその事を悟り、自身の体のことを悪しきを取る事なく、これとて古き前生の折に他の者達を苦しめし事への因縁ありての表れなるを神に詫びる行いの思いにて日々を通らねば、何ほど神に願いてもそなたの心の悩みは除けぬのじゃ。

そのように自身困ることになるは、自身とて古き前生の折にては、他の者達を苦しめ困らせて参りしことへの神の知らせであるのじゃ。これより先なるは、自身の体に知らされるは、他の者達を苦しめて参りたことへの詫びの行いの思いにて日々通らねばならぬのじゃ。これより先なるはその思いにての日々でなければ N なる者、いつになりたとして気分の上に晴れる日はないのじゃ」

このように前生の因縁の深い人は、日々反省の思いで過ごすことと同時に、通り返しの生き方をすることも大切だと思います。つまり、今まで自分本位で通ってきたら、今度は相手本位で通る。人を苦しめ泣かせてきたら、今度は助けて喜ばせて通る。肉体を自分中心の享楽主義で生きてきたら、世のため人のために尽くす動きをしていく。お金の使い方を間違えていたら、これからは生きた使い方をする。こういったことが通り返しと言うものなんです。

例3 膝から下の焼けるような痛み(火の中)

現在私のところの患者さんである H さん(五十七歳)は、初めは両足の膝から下が焼け火鉢に押し付けられたように痛い、ということで来院いたしました。もちろん外科にもかかり、ありとあらゆる治療を受けました。しかし原因は分からず、「精神的なものではないか」とも言われました。歩くこともできず、夜は痛みのために眠れず、食事も痛みのためできないので痩せこけ、ご主人が車で連れてきている有様です。私も治療を数回してみましたが、座骨神経痛とも違い、どんな治療をしても二日くらいしか効果が持ちません。

思い余って神様にお伺い致しますと、前生の亡者の人達の恨みと分かりましたので、組み合わせの順番を早めて当院においてやり取りを致しました。この後すっかり良くなり、今では考えられないと言っています。その痛みは特別だったようです。

宮下「神様、本日は H 家に付いてお願いしたいと思います」

大神「さようか。良いぞ」

宮下「ここにおります H と申します者は、現在体のあっちこっちが痛くて大変苦しんでおります。これは前生の恨みのためとお教えいただいております。今日はその点についてお話を進めていただきたくお願い申し上げます」

大神「そうじゃの。この者 H なる者は、誠に業深き者であるのじゃ。その関わりによりてな、この者は熱い熱いと苦しみておるのじゃ。それなるは、皆前生の折りに他の者に、見るも気の毒なるような悪しき行いをいたした自身の報いじゃ。それにより、今生このように長きに渡り、所を変え痛みを繰り返させられておるのじゃ。その苦しみを受けさせておるのは神ではないのじゃ。この者に関わりある社の神なるは、その事より守る思いにて H なる者をかばっておるのじゃ」

宮下「はい。分かります」

大神「かばっておるのじゃ。だがこの者 H なる者、事に寄せて折々と関わりある神の優しき言葉、思いやりのある言葉、繰り返し繰り返し伝えてはおるのだが、この者が上辺にては分かりた分かりたと申してはおるが、誠の神髓が分かっておらぬのじゃ。神の思いが届いておらぬのじゃ。その物足りなさを関わりある社の神の怒りに触れておるのじゃ」

宮下「はい。分かります」

大神「その社の神とて、この者との古き時代の折りにての関わりありて、気の毒じゃと思うことにより、多くの亡者達の者からの怒りの念を向けられるので守りておりたのじゃ」

宮下「はい。分かりました」

大神「その深き神の思いやりが、この者は心から分かりておらぬ。上辺だけの、分かりた分かりたと申すのは駄目じゃ。分からぬは、この者の至らぬところもあるからじゃ。関わりある神とて気の毒に思い、優しく手を差し延べておるのじゃ」

宮下「はい。まったく有り難いことです」

大神「いずれその関わりある神とて、後程はこの場に出るであろうが、まずその前に H なる者の古き前生の折りにての悪しき行いを致されし、関わりある多くの亡者達をこの場に現し、怒りも言葉も受けるであろうが、H なる者自身より深く深くその亡者となりし者達に詫びねばならぬぞ。詫びねば許されることではないのじゃ。分かるか」

H「はい」

大神「上辺では駄目じゃ。自身のな、今苦しみておるのは、そのようなる苦しみを古き時代の折りに他の者に与えておるのじゃ。そなたの痛みよりもさらに辛いことになるのじゃ。一人の者ならば一人の痛みで良いであろう。だがその様な深き苦しみを受けし者が数々とおるのじゃ。そなた、今一人自身だけの痛みである、多くの者の痛み苦しみが皆、そなたに関わってきておるのじゃ。分かるか」

H「はい」

大神「深く深く詫びねばならぬぞ。これより先なるは、体の痛み楽になりたくば、自身の深き思いにて詫びるのじゃ。分かるか。ではこれより、その時代の亡者なる者達と代わるぞ。深く詫びることじゃ。重ねて申すぞ。宮下なる者として、必ず言葉を添えてやるが良いぞ」

宮下「はい。分かりました」

大神「連れ合いなるものとしてその通りじゃ。では代わるぞ」

亡者「はいはい(苦しそうに)。私でございます。私でございます。私は、悔しい。悔しい」

H「本当に申し訳ございません」

亡者「悔しい」

宮下「どのような事をなさったんでございましょうか」

亡者「悔しい。悔しい」

H「本当に申し訳ございません。心からお詫び申し上げます。(同じ言葉を何回も繰り返している為)」

大神「そなた、黙っておれと申されたのが分からぬか。(これは、亡者の言い分を黙って聞くようにとの、神様からのご注意でした)」

宮下「少し黙って」

亡者「悔しいんだよ。悔しいんだよ」

宮下「分かります。悔しかったらうと思います。どのような事か、少し教えてくださいませんか」

亡者「私はね、このね、女のな、生きておる時代にな、私の生きていたときだ」

宮下「はい、分かります」

亡者「私の時代だ。私たちをな、苦しめて焼き殺しただ。焼き殺しただ」

宮下「へーえ!」

亡者「悔しいよ。悔しいよ」

宮下「すると大勢の方々、皆焼き殺したのですか」

亡者「焼き殺しただ。この女は鬼だ。鬼女だ。悔しいだ」

宮下「するとこの女は、身分のある女だったのですかね」

亡者「悔しいよ。焼き殺されたの」

宮下「はい。分かります」

亡者「足が痛い。私の足が焼けて死んだの」

宮下「はい。分かります。では皆様、そのまま苦しんでおるんですか」

亡者「足が焼かれて、火の中に放り込まれたの」

宮下「それでこの人の足がびりびり焼き火鉢がつけられたように……」

亡者「放り込まれたの。そんなの構わない」

宮下「よく分かります」

亡者「悔しいよ。悔しい」

宮下「よく分かります」

亡者「殴って蹴飛ばしてやりたいよ」

宮下「うーん、その気持ちまったくよく分かります」

亡者「本当に悔しい。人をな、焼き殺すなんて。イナゴやバツタじゃない」

宮下「はい。その通りです。本当にそうだ」

亡者「人をな、馬鹿にするのもいい加減にしろ」

宮下「はは一分かります。分かります」

亡者「イナゴやバツタじゃないぞ」

宮下「それに皆様、何の罪もないのをそうさせられたわけでございますか」

亡者「やられた身になってみろ。やられた者の身になれ」

宮下「いや一分かります」

亡者「悔しいよ。熱いなんて言うのではない。熱い所じゃない。苦しいのだ。苦しいのだ」

宮下「よく分かります、本当に。では、皆様の大勢の方がその様にされたわけでございますか」

亡者「そうだよ。そうだよ」

宮下「では、皆様が非常に怒っておるわけでございますね」

亡者「人をな、同じ人間をな、火の中にな、放り込んだんだよ。放り込んだの。気違い!鬼!」

宮下「うん、うん。そう言われてもしょうがない」

亡者「魔物! 魔物!」

宮下「分かります。どの様に言われても仕方がないです。確かに私もそう思います」

亡者「悔しいよ。悔しいよ。ここにはな、一緒に苦しめられた者はな、大勢おるんだ。大勢おるんだ」

宮下「では、皆様は同じような思いを持ってこの女に怒りの念を向けておるわけですね」

亡者「当たり前だ」

宮下「当たり前ですよね」

亡者「当たり前だ!」

宮下「分かります。分かります。それで、あの一聞いていただけますか」

亡者「当たり前だよ、苦しいのは。こっちはもっと苦しいんだよ。それがな、一人や二人じゃないんだよ」

宮下「はい。それもよーく分かります」

亡者「このな、ここにな、泣きごとと言って痛い痛いと言っている女がな、自分がな、そういうことをしたから今痛いのだ」

宮下「私が治していたんですがね、いつも足から下が焼き火鉢を押し付けられたように熱くて、ピリピリすると言っていたんですが」

亡者「決まっておるわ。当たり前だ」

宮下「今話を聞いてね、本当にそうだと思います」

亡者「人をな、火あぶりのようにな、事をしてな、自分でな、楽にな、生きられるなんてな、とんでもないよ」

宮下「うん。そんなこと許されるわけないですね」

亡者「とんでもないよ」

宮下「よく分かります。本当に良く分かります」

亡者「気違いだ。鬼だ。魔物だ。人間のな、皮をかぶり、人をな、イナゴやバッタみたいにな、火の中へな、放り込むなんてな、こんな馬鹿な事があるかよー」

宮下「分かります。分かります」

亡者「そんな馬鹿なことってあるかよ。悔しいよ。悔しいよ」

宮下「あのう、先日もこの話を聞きましたが、焼き殺したということはね、私知らなかったのですが、大変迷惑を掛けたということは私聞いたのですが、そして今この鬼女ですね、「本当に心から詫びなさい。そして自分がどのようになっても良いから、皆様に罪を許してもらいなさい」とよく話してあるのです」

亡者「許すなんて嫌だよ、もう。悔しいから」

宮下「それではね、今日私はせっかく皆様とこうやってお話をできる機会を与えていただきました。皆様とお話をさせてもらいたいのですが、まず一番の目的は皆様が痛みが治って、そして明るいところに出てもらって、皆様が良くなるということだと私は考えているのです。この女のことは、後で良いのです」

亡者「ああ嫌だ。こんな女、嫌だ。こんな女、自分で火の中へ飛び込め」

宮下「分かります」

亡者「自分で火の中へ飛び込め。熱さが分かるから」

宮下「それで、皆様が今、そうやって長いことそこで苦しくて、困っていたと思います」

亡者「そうだ。その通りだ。この女はな、生まれる度にな、悔しいもの…」

宮下「分かります」

亡者「自分でやられてみたら分かるぞ。自分でやられてみろ」

宮下「それは分かります」

亡者「人を殺してな、とんでもない話だ」

宮下「焼き殺されてみなければ、本当に痛みが分からないと思います」

亡者「虫けらじゃないもの」

宮下「それは本当に……人間と人間同士がね、そんなことをしたらいけないと思います。本当にそれは駄目です。本当に分かります」

亡者「私たちだって、虫けらじゃないからね。川の魚やドジョウじゃないからね。川の魚やドジョウは、火にあぶって食うかもしれないけれど、違うだよ」

宮下「それはよく分かります」

亡者「同じな、手もあれば足もある人間だ」

宮下「そうです。神様は、皆同じ人間だと言ってくれています。私たち人間は皆、あなたも私も同じだと言ってくださっています。その人間をそんな虫けらのようなことをするということは、どんなに罰を与えてもこれは仕方がないと思います。それもよく分かります」

亡者「ドジョウやな、フナはな、焼いて食うよ」

宮下「はい、はい」

亡者「イナゴやバッタは火にな、炒って食うのだけどな、人をな、イナゴやドジョウと同じ仲間にしておいた女がな、自分がな、良い思いをするなんてできるわけがないや」

宮下「はい、分かります。では皆様は、この女が生まれる度ごとに、その女に恨みを向けられていたのでございますか」

亡者「当たり前だ」

宮下「それは当然ですよ」

亡者「当たり前だ」

宮下「それはよく分かります」

亡者「誰がな、誰がな、悔しいからな、困らせずにおるかよ」

宮下「それもよく分かります」

亡者「それもな、一人じゃない。一人じゃないんだ。このな、言っておくけどな、この女はな、悪者のな、悪者のな、親玉のな、カカア(母)だったのよ。おっカアだよ。そいでな、手下をな、あごで使ってな、人をな、人さらいからさらわせてな、人を散々こき使ってな、ろくな物も食わさないでその揚げ句にな、人がな、年を取ったらな、使い物にならない、そんなのぶっ殺してしまえ、火をどんどん燃して放り込めと……」

宮下「生きた人をそのまんま……」

亡者「そうだ。だから鬼だ。魔物だ。気違いだ」

宮下「分かります。分かります」

亡者「そんな、そんな血もない女がな、おるか」

宮下「よーく分かります」

亡者「悪者のな、親方のな、おっカアだ。親玉のおっカアだ」

宮下「あのう、私も今お話を聞いていましてね、本当にもうなんて言ってよいか分かりません。これはもうただ……」

亡者「分かる？分かる？分かればいいけど、分からないのが当たり前だ。人の道じゃないよ」

宮下「本当にそうだからね。本当に何て言ってお話させてもらっていいか、貴方様達、本当に気の毒だし、しゃくに触るしね、本当にもう……」

亡者「人の道に外れてるんだよ」

宮下「人の道じゃない。本当に」

亡者「人間を人間と扱ってくれないんだよ」

宮下「分かります。分かります」

亡者「バツタやイナゴよりももっと悪いよ。人を散々こき使って、使い物にならなくなつて老いぼれたものをな、集めて火に放り込んだだよ」

宮下「本当に皆様、よく働いてくれてありがとうねと言って、少し老後は楽にしなさいと言って面倒を見るのが普通だよね」

亡者「そんなことする女じゃないんだよ。悪者のな、悪者のな、親方のおっカアだから血も涙もな、ありやしねえや」

宮下「それにしても悪すぎますね」

亡者「それがな、本当の話!」

宮下「びっくりしましたし、私もまた誰が聞いたって涙なしでは聞けない話ですわ」

亡者「本当の話」

宮下「はい、分かります」

亡者「そんなな、形のないことをな、私たちは嘘はつけませんよ」

宮下「はい。よく分かります」

亡者「私たちはな、悪者の親玉の子供じゃないの。人さらいにさらわれてな、まったくのな、他人のな、子供として育て、途中で悪い者にさらわれて、あの親玉に売り付けられてな」

宮下「気の毒……本当によく分かります」

亡者「話に、話にできないくらい苦しめられただよ」

宮下「は一、よく分かります。よく分かります。私ももっと軽く考えていましたけど、本当に……」

亡者「悔しい! 悔しい!」

宮下「よく分かります。よく分かります。あのう皆様、その残念なのはよく分かります。今ね、私こう思うのです。今皆様、足が焼かれたままでいた人達が皆そこにいると思うのですが」

亡者「そうだ。そうだよ。いるよ」

宮下「そうですね。この女をね、許す許さないは別としまして、今私が神様にお願いしますから、皆様その痛みがまず治って、そして明るいところまで出てくれませんか」

亡者「明るい? 明るい? 痛みが熱いの、治るの?」

宮下「治ります。治ります」

亡者「熱いのも治りますか」

宮下「ええ、治ります」

亡者「治る、治る。本当?」

宮下「これは私が治すのではなくて、神様が助けてくださるのです」

亡者「こんなに苦しい、熱い熱いで死んだだよ。死んだだよ」

宮下「はい、よく分かります。もう皆様がいつときもそうやって苦しんでおるのが見てられないのです。少しでも早くね、楽になってほしいのです。話をそれくらいにしませんか」

亡者「話って？」

宮下「はい、いかがでしょうか」

亡者「うん、いいよ。それくらいにしてください」

宮下「はい。で、皆様そうさせていただきますから、神様にお願いしますから、お待ちになってください。それで一つお願いがあります。この様にやってくださるのは神様ですから」

亡者「はい。分かった」

宮下「だから楽になった後は、神様のお話を聞いてください。お願いします」

亡者「はい。分かった。分かった」

宮下「では少しお待ちになってください。大神様、親神様。途中ですが、この可哀想な方々をまず痛みを取り除きまして、助け上げてくださいますか。お願いします」

大神「うん。良いぞ。気の毒じゃ。この通りな、Hなる者な、この通り口では言い尽くせぬような悪しき行いを致した者の生まれ変わりであるのじゃ」

宮下「はい。分かります」

大神「それゆえにな、明けても暮れても、痛い痛い苦しめておるのじゃ」

宮下「はい。分かります」

大神「人を苦しめれば自身苦しむことは、致し方のないことじゃ。これは気の毒じゃ。亡者となりしものが気の毒じゃ。即刻助けることに致すぞ」

宮下「お願い致します。お願い致します」

大神「その後にては、また話すが良いがの」
(ここで助け出しました)

亡者「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ……。有り難いです。良かった。良かった」

宮下「良かったですね」

亡者「良かった。良かった」

宮下「あのう、熱い痛いところはどうですか」

亡者「良かった。助かった。良かった。今までな、今までな、火のな、真っ赤に燃えてる中でな、のた打ち回っていたんですよ」

宮下「ほうー。ずっと?」

亡者「そうですよ」

宮下「なるほどね、分かります」

亡者「私だけではないですよー」

亡者「私だけではございません」

亡者「そうです。私もです」

亡者「今ね、私が一番先に口を利いた私が、他の者に代わって言います。悔しかったですよ」

宮下「はい、それはその通りだと思います」

亡者「本当に悔しかったですよ。悔しい思いをな、させられれば恨みをもたれても仕方ないでしょう」

宮下「ああ、それは当たり前です。本当にそう思います」

亡者「そういう思いをさせられたんですよ」

宮下「だから皆様方はね、恨んでおるのも分かります。そして怒りを持っておるのも当然でございます」

亡者「そうですよ」

宮下「それで今こうやって皆様が助かったのはね、皆神様のお陰なんですよ」

亡者「良かった。良かった」

宮下「本当に良かったと思います」

亡者「良かった。良かった。あのね、真っ暗闇のところにね、火が真っ赤に燃えててね、そこの中ね、苦しんでいたんだよ」

宮下「はい、そうですか」

亡者「今までずーっと長い間」

宮下「分かります。大変だったと思います。まず私も今、助けていただいてほんと致しました。本当に良かったと思います」

亡者「そうだと思うよ。聞いた人もそうだと思うよ。有り難い。有り難い。これは、これは人間業ではない。これは人間業ではない。本当に有り難い。人を苦しめる悪者もおれば、助ける神もおるんだね」

宮下「まったくその通りです。今、皆様を助けてくださった神様はですね、普通の神様ではなくて、本当の偉大なる大きな神様なんです。それでこの後、皆様もっと良くなってもらいたいと、私思っております。今楽になったから、これからお話を続けさせていただけませんか」

亡者「うん。なんだね」

宮下「これから皆様は、偉大なる神様の元に来て、もっともっと幸せになってもらいたいと思っております」

亡者「幸せ? 幸せ? 私たちに幸せという言葉があるのですか」

宮下「あります。あります」

亡者「あるのですか」

宮下「あります」

亡者「私たちは、不幸の連続でしたよ。ずーっとです。子供のときから、さらわれてから、ずーっと一日だって幸せなんて珍しい言葉を聞けなかった」

宮下「今までながいこと苦しんで、ここまで困ってきました。苦しい思いをしてきました。それでこれからは、何倍もの幸せになってもらいたいと思います。それで、それにはこれから神様にお願いして、そちらのほうにいていただきますが、その前に皆様、もう鬼と思うその女にです。心からですね、皆様にお詫びをさせてもらいたいと思うのです。皆様嫌だと思うかも知りませんが、この者が詫びをしないとね、地獄でまたもっと苦しまなければならないのです。

そして、私ここで一つ約束させていただきます。これだけの御無理をお願いするので、この鬼女はこれから残る人生は、人のために皆様のために罪滅ぼしと致し、一生懸命自分を忘れて人のために働くように約束させますので、なんとかその点を含んでいただきまして、この女の詫びを汲み取ってくださいませんか。皆様、是非お願いします。許せぬこととは分かっております。分かっておるのですが、そこを曲げて許してやってくれませんか。何卒お願い致します。Hさん。特に深く深く、何回も何回も皆様に詫びてください」

H「大勢の皆様、申し訳ありません。心から深くお詫び申し上げます」

宮下「Hさん。声をはっきり出してください」

H「長い間、本当に申し訳ありませんでした。深く深くおわび申し上げます。本当に人間ではないことを致しました。本当に申し訳ありません。大勢の皆様苦しめて、本当に申し訳ありませんでした。心からお詫び申し上げます。本当に申し

訳ありませんでした。大勢の皆様、本当に悪いことを致しました。御免なさい。御免なさい。すむとは思いますが、本当に申し訳ありません」

亡者「…」

宮下「あのう、皆様ね、大勢の人を許していくことが大事と教えていただいております。だから皆様、悔しい気持ちはよく分かりますが、ただしこれから皆様ももっと良いところへいくには、そういう恨みつらみを持っては、そこには住めないのです。だから皆様にもっと幸せになってほしいのです。ですから許せぬこととはよく分かりますが、そこを譲って許してくれませんか」

H「申し訳ありません」

亡者「…」

宮下「だからもっと皆様に幸せになってほしいのです。ですから、どうぞ許せぬこととは分かりますが、そこを譲ってやって許してくれませんか」

H「申し訳ありません」

亡者「…」

宮下「あのう、人のためにね、必ず生きるような、皆様、生き方を約束させますので、どうぞ許してください。お願いします」

H「あのう、御霊の皆様、お願いします。本当に悪い女でした」

亡者「…」

宮下「本当に申し訳ありません。皆様のお気持ちも本当によく分かります。そうかと言って皆様が恨んでいては、皆様も良い所にいけないのですよ。是非皆様も生まれ変わって、良い社会の生活をしてほしいと思うのです。」

亡者「そんなにな、お前さんがな、口を挟んでくれるのはな、嬉しいけどな、悔しいだよ」

宮下「それはよく分かります」

H「よーく分かります」

亡者「悔しいだよ」

宮下「皆様の気持ち、よく分かります」

亡者「お前さんがな、口を重ねてな、くれて嬉しいけどな、どうしても悔しいな」

宮下「それはね、本当によく分かります」

H「本当に申し訳ありませんでした」

宮下「ただ、あのう、皆様がね、恨みをまだ持つておられると良い所へいけなくなってしまうのですよ。そういう神様の決まりがあるんです。だからこの女はどうでも良いですが、皆様に幸せになってほしいのです。それにはどうしてもまず、許すという言葉がほしいのです。これは皆様のためをお願いしているのです。これは、神様に聞いてくださっても分かるのですがね」

亡者「そんなにね、今言って今許せなんてね、そんな軽いものですか」

宮下「そうではないことも分かるのです。だがこういう場はね、なかなか持てないのですよ。今日のこういう、せっかく設けた神様から与えられた機会ですね、是非皆様が幸せになってほしいのですよ。だって今、皆様痛かったり熱かったり、苦しかったりしたのが治ってますでしょう」

亡者「それはね、苦しめたね、あのね、鬼女とはね、違うのです」

宮下「それも分かります。お任せして処置していただくということにしていたいで…」

亡者「ショチってなんですか」

宮下「ああ、刑罰……罰を与えてもらうということ」

亡者「罰?神様に罰を与えさせて、こちらのことは、私には、私たちには忘れろっていうのですか」

宮下「あのう、こういう事なのです。皆様に良くなってもらいたいのです。皆様がこの女に恨みを持っておる内は、どうしても良い所へいけないのですよ。皆様、良い所へいけないのですよ」

亡者「行けなくても、痛くなければいいや」

宮下「いいえ、それはまた戻されてしまうのです」

亡者「本当!」

宮下「はい。戻されてしまうのです」

亡者「また熱くなるの?」

宮下「はい。そうです」

亡者「そんなうまいこと言って」

宮下「いいえ、本当にそうなんです。神様の懐に住んでいただく人は、皆さん心が優しく、恨みを持たない人達だけがそこに行って住めるのです」

亡者「そ、そんなうまいこと言ったって、もうどうしてあんなに焼かれ苦しんで、バッタにされ、イナゴにされ、今すぐここで、それは私も、私だけでない。楽になって今はね、そうですよ。だけどね、長ーい間ですよ」

宮下「分かります」

亡者「それがね、一時でね、助かったのは嬉しいけどね、もうその悪者の女を堪忍しろなんて言ったって」

宮下「悪者の女ということではなくて、だれに対してもそうなんです。恨みとか、

悔しいという念を持たないでほしいということなんです。これはこの者ばかりではありません。だれに対してもです」

亡者「他の者には、私は思っていない。この鬼女にです。悔しいのは鬼だかな、魔物だか悪魔だか分からない」

宮下「それで皆様、この鬼女が生まれる度に、何回も何回も怒りを向けられておりましたですね」

亡者「違うというと嘘になりますけどね、仕方がないでしょう」

宮下「はい、それはそれで分かります」

亡者「ね。殴ったとか、縛ったとかいうのと違うのです。火の中はね、苦しいのですよ」

宮下「よく分かります」

亡者「熱いですよ」

宮下「だから皆様達、その苦しみとか、悔しいという思いはまだまだあると思いますが、何回かこの者が生まれ変わる度にその念を向けたということで、いく分かは薄らげませんかでしょうか」

亡者「うん、足りない」

宮下「まだ足りないですか」

亡者「この女はな、三回生まれ変わったか、四回生まれ変わったか、繰り返しておるうちは、その時のな、人間の数に比べたらね、一人の恨みは一生、また違う一人の恨みがまた一生、三人いれば三回生まれた、四人いれば四回生まれた」

宮下「はい、分かります」

亡者「まだ足りない」

宮下「それは分かります。只その足りない分は、是非その、皆様が今度、これから神様の元について幸せになるという事ですね、是非お許しくありませんか」

大神「良いぞ。わしじゃ。大神じゃ。親神じゃ」

宮下「ははあ。大神様。親神様」

大神「これはな、何程そなたと恨みを向けられし者達との話を致したとて、即座には許す思いにはなれぬのは神とてよく分かりておるのじゃ。だがな、この者達とて心は優しき者じゃ」

宮下「はい。分かります」

大神「これよりな、神がこの者達をさらに良き場に導くことにいたすぞ。その前に、神からの言葉を亡者なる者に致すゆえに、しばらくそなたは黙っておるが良いのじゃ」

宮下「はい。分かりました」

大神「わしじゃ。大神、親神じゃ。そなた達、苦しき思いを致せられ、焼き殺されたのはさすがに苦しき思いであったであろう。だがな、そなた達はその苦しき思い、悔しき思い、深き恨みがあるが、神とて十分に分かっておるが、だがな、そなた達には今までの苦しみた分は、それにもまして、さらにさらに良き運命に連れていき、古き時代においては人にかどわかされて、悪しき者の下にてこき使われて苦しんで通った者であるが、これからはそなた達はその反対に良き運命の生をうけさせるぞ。

多くの人を手元に届い、また慕われる立場にそなた達を、そのような生を与えることに致すが、どうじゃ。どうする。その様な思いあるならば、今の鬼女に悔しき思いを向けて、そのままにて、その今の姿で苦しむか、また神の申すことを心に受け止め、次の良き運命の道を辿るか、そなた達の声を待つことに致すぞ。返答をじゃ。返答を致すことじゃ。分かるかな」

亡者「はい、分かりました。ありがとうございます」

亡者「はは一。ありがとうございます。いいです。神様の申される通りに、神様の申される通りに悔しさ、恨みはこの場で忘れることに致します。神様の申される通りだ。付いて、次の生まれるときをお与えいただくを待ちます。待ちます」

大神「さようか。それではな、この日を境と致し、Hなる者への恨み、つらみを一切思うことならぬぞ。また同じ事を繰り返すなれば、そなた達は火の中じゃ。分かるかな」

亡者「はい。分かりました。もう火の中は要りません。二度と行きません。嫌です」

大神「分かるか。ではこの場にて一切の恨みつらみは捨て去り、神について参ることじゃ。分かるか」

亡者「はい。はい(他の亡者)。はい(同)。はい(同)。……」

大神「多くの亡者がおるが、良いぞ。後は返答は要らぬ。これより神について参ることじゃ。良いか」

亡者「はい」

大神「では付いて参ることじゃ。良いか。これにてな、多くの者達に申し聞かせ、良き運命を与えることに約束を神がいたし、これより連れて参るぞ」

宮下「はい、ありがとうございます」

大神「これにてHなる者の足の痛みは、この日、即座にとは参らぬが、少しずつではあるが、楽になりて参るぞ」

宮下「ありがとうございます」

H「ありがとうございます」

大神「またHなる者はな、このような悪しき行いを致させた者であるのじゃ。良いか。これより生涯、神の道についており、正しき行いをすることじゃ。罪滅

ぼしの行いを今生、来生は神が導くゆえに、今生じゃ。自身心して罪滅ぼしの行いに生きることじゃ」

H「一生懸命させていただきます」

大神「では、これにて終わりにいたそうぞ」

宮下「ありがとうございます」

H「ありがとうございます」

【七】 先祖の悪因縁による障り

神仏を信じない晩年の方へ

ゴルフや麻雀の話になると目を輝かせ、話が尽きない人がいる。それはそれで人生を明るく過ごす一部分であるから大変良いことだ。しかし神仏の話をしようものなら途端に小馬鹿にした顔になり、そのような世界とは無様だとばかりの顔をする。

「神仏がいるなら見せてほしい」「神仏がいるならこんな苦勞はしないはずだ」「神仏がもし本当にいるなら、あんなに良い人が不幸になる訳がない」などと言う。神仏は確かに見えない。だから見せることはできない。しかし実在はする。その証しは幾らでもある。

私は、馬鹿にされ嫌われても良い。神様の存在を、天地自然の理を、どうしても理解してもらわない訳にはいかないのだ。宗教を押し付けるとかそんな小さいものではない。世の中の人々が皆で幸せで明るい暮らしをしてほしいのだ。それが大神の願いでもある。

世の中が明るく暮らしやすい状態にならないのは、神の心や天地自然の理を知らない人が多すぎるからだ。ゴルフや麻雀が上手になっても世の中を明るくすることにはならない。しかしこのような人達も皆自分の子供や家族は幸せにしたいと努力している。

さて家族や子供達のために努力し、今日まで財も十分に築いてきた。これで安泰と思うかもしれない。しかし同じ努力をし、築いてきた過程の中で、神の心を知り築いてきた人と、自分の力のみを信じ神仏に心を向けずに生きてきた人との違いは明白である。神仏を信じてきた人には財の他に目に見えない徳が積まれている。一方神仏を嫌い自力を過信してきた人には、悪因縁が生じている。この悪因縁が子孫を苦しめ運勢を暗くしているのである。これが天地自然の理でもあるのだ。

定年が近づいている人は、どうぞ自分の人生を振り返ってみて、子孫に悪因縁を残すような種を蒔かなかったか反省してみてほしい。蒔いた悪因縁が自分に戻

ってくる分には来世に自分で消せば良い。しかし関係のない子孫にまで及ぶようだとそれは申し訳ないことだ。だから、神仏なぞ、と馬鹿にする高慢な心を捨て、人生の終わりに近付いてきたら人間として生まれてきた目的や、来世への心の準備や死というものへの認識を深め、自分の歩み方に汚点があるならばそれを消し、少しでも自分に納得のいく人生の幕を閉じられるよう最後の調整時期を過ごしてもらいたいと思う。

次に幾つかの実例を用いて、子孫が先祖の作った悪因縁によって困った例を紹介しよう。このような先祖に皆さんがならないためにも真理を知っていただき、次のような大きな悪因縁でないにしろ、小さな悪因縁さえも積み重ねぬようお願いしたいと思う。

例1 M家…男親の非道で死んだ亡者の恨み

御無沙汰しております。お陰様でお稲荷様の降りを解決していただき、私共母子も無事かけこみ寺より戻り、平穏な生活をすることができました。心休まる毎日で子供達も正常に戻り幸せに過ごしております。ところがまた主人が最近、酒の量が増え、大変世話になったYさんに毎夜のごとき脅しの電話を掛け、Yさんも警察に訴えると申し出しております。また家では昔のように暴れ、殺すぞとわめき、出ていけと物は投げるし困っております。翌朝になると何も覚えていないと申しております。何卒お助けください……。

この件で神様に早々にお願ひ致しました。

大神「この者清なる者、そのように他の者への悪しき行いを致し困らせるは、この者自身の思いにての事ではないのじゃ。この者の住む家との関わりでもないのじゃ。この者の身内なる者のいたせし事にて、その致せし者への腹立ちある亡者の恨みの念にてその様に、この者へ向けられておるのじゃ。持て、その亡者なる者に代わるぞ」

亡者「ハイ、私です。私はあの男の親の代にうんどひどい目に遭わされた者です。私があつた男に取り付いていて、あの様に深酒を飲ませているのです。あの男が関わりもない他人の者に夜な夜な文句を言ったり、怒鳴り声で文句を言ったり連れ合いの者へ暴れたりするのは、私がさせているからです。私はあの男をどうにもならないような男にさせているのです。あの男の親は私の家をバラバラに

させたのです。私はあの男の親のために人並みのらしいできなくなったのです。あの男をこの先もうんと困らせてやります。

あの男の親は私を困らせ、家が駄目になったのです。あの男の親は私の運勢を狂わせたのです。ですから私は人には言えないような思いで終わったのです。私はあの男の親をうんと恨んで憎んでいます。あの男の親は私を刑務所に入れた悪い男です。私には何の覚えもないのに私があの男の親の家に盗みに入ったのだと言って警察に訴えたからです。

だけど私は何もしていないのです。悪いことをしたこともないのに私はあの監獄で敗々の目に遣い、その果てに死んでしまったんです。だから私は悔しくてあの男に取り付いて恨んで、あの男を悪くさせているのです。私は悔しいです。

加藤先生「左様ですか。身に覚えのないことで警察に訴えられたり、その後で刑務所に入れられたりでは本当にたまりませんでしたね。本当にお気の毒でございましたね。よく分かりました。貴方様のお苦しみや悔しさは本当に良く分かりました。そんなひどい目に合わされてはたまりませんですね。しかしそのことはMさんは知る由もないことと思います。

確かに悔しい思いを貴方様が、その腹立ちを子供に向けるのは当たり前かもしれませんが、私から伺いますが、貴方様は今いる所は良い所にいますか。もしかして今いる所は寒くて暗くて、何一つないような所にいるのではないかと思いますか、いかがですか」

亡者「ハイ、そうです。その通りでございます。私のいる所は真っ暗闇の深い所で、何も見えない所です。あの時の死んだままの姿で苦しんでいるのです」

加藤先生「そうですね。その様に暗くて寒くて何も見えないのは、悔しい悔しいとの思いがあるので、神様にそのような場所に行かさせられているのですよ。貴方の悔しさは分かりますが、それはそれで貴方を苦しめた方はそれなりに神様の怒りを受けて苦しい思いをしていると思いますので、その苦しめた方のことは許してあげてくださいませんか。

もし貴方様が許してあげてくださいましたら、今すぐにでも私より神様に貴方様を助けていただきますので、恨みの念を人に向けていると貴方様も救われなからね。どうかお願いします。許してあげてください。そしてあの清さんと

いう方の深酒は止めさせてくださいませんか。その様にしてくださいましたら、貴方様も必ず神様が助けてくださいますからね」

亡者「分かりました。よく分かりました。私は苦しいのであの男に取り付いていて悪いようにさせていましたが、分かりました。よく分かりました。もりみません。どうか私を助けてください。もう二度とあの男に取り憑きません」

加藤先生「ありがとうございます。分かっていたいで本当に良かったと思います。では二度と再び思い出したりして困らせないでくださいね。思い出して困らせると貴方様も今までのように暗くて寒くてなんにも見えないところに落とされて、前のように苦しい思いをしなくてはなりませんのでね」

亡者「分かりました。約束をします。もうすぐ離れます」

加藤先生「では今から神様にお助けのお願いを致しますのでね」

大神「この亡者なるは滅に気の毒なるゆえに、神の力にてこれより助けの行いを致すのじゃ」

(ここで助け出しました)

亡者「アアアアアア。ありがとうございます。ありがとうございます。あの男に取り憑いて悪いことをしてすみません。ありがとうございます。良くなりました。楽になりました。体が楽になりました。辺りも良く見えます。有り難いです。私は刑務所の中で死んだので、あの時のままでいたのです。あの男の親のためと恨みを向けていたのが悪かったのですね。有り難いです。今は楽になりました。もうあの男には取り憑きません。私も悪かったのです。あの男には恨みはないのに悪いことをして本当にすみませんでした」

大神「良いのじゃ。これより神の場にて修行は要らぬ。思いを捨て去り、心を休めし後にて、またの良き運命に生を与えることに致すゆえにの。これにてこの亡者なるは、この者清なる者より離れたのじゃ」

例2 K家…古い先祖に苦しめられ世を去った亡者達

大神「この者一夫と申せし者、引く息苦しき病なると申しておるとな。待て。この者、息苦しき病の持ち主と申しておるが、これにはそれなりの原因があるのじゃ。この者は、古き先祖の者に多くの者達を手に掛け、死に追いやった者がおるのじゃ。その折りの、苦しみ喘ぎながら世を去った者達の恨みの亡者達の執念と申すか、思いが子孫の者であるこの一夫と申す者に古き因縁となりて現れておるのじゃ。この者の持病であるこの苦しみの病を楽に致すには、子孫の者の行いと致し古き先祖の行いを神に詫び、また切り殺されし多くの者達への詫びと助けの行いにより、病は少しずつではあるが楽になってくるぞ」

この後、治療院に於いて一夫さんが先祖に代わりと申し、多くの亡者の皆さんに詫び、恨みの亡者の方々も傷が治り、明るい所へと皆助け出され解決致しました。Kさんは大学の教授で七十近いお年ですが、元気に頑張っておられます。

(解説) 生きている時、あまりに身勝手な生き方をしていると、その因縁が子孫に及び、子孫を泣かすことになります。神仏を信じない人も信仰を馬鹿にした人も、間違いなく寿命が来て体をお返しする 때가きます。死を迎えるにあの世に旅立ったとき、あの世で必ず生前に神の話を良く機会があったのに耳を傾けなかった責を問われると思います。

その罪は重く、それ相当の暗い所で反省の時を長く過ごさねばなりません。この世の名声や富は、何の役にも立たないことを知るべきです。今からでも遅くないです。神や亡者、輪廻転生、心造り等に心を向けていただきたいと思います。そして少しでも世の役に立つ何かをして欲しいと思います。

例3 O家…先祖が殺した犬の恨み

これはまったく気味の悪い不思議な話ですが、本当の話です。私のところの患者さんでもあり、心の会の最初からの会員でもあるOさんから電話があり、「先生、台所で鍋に水道の水を入れておいたところ、気が付くとその中に真っ黒い一・五センチくらいの長い黒い毛がごっそり入っているんです。水道の蛇口にはろ過装置も付いているし、ビルに住んでいるから屋上の水槽も点検してみましたが、そのような物はありません。

他にも色々調べてみましたが、どうしてもそのような物が入る原因がないのです。犬は飼っておりますが、まだ小さく毛も真っ白ですのでその犬ではないのは確かです」と。次に治療院にきた時に、その毛を五十本位瓶に入れて持ってきましたが、その毛を治療にきた多くの人にも見せたので、覚えている方も多くいると思います。その件につき、神様にお伺いしました。

大神「この者誠なる者の先祖の者に、悪しき行いをいたし、その折に苦しきことにて果てし生き物がおるのじゃ。その犬なるは、この者の先祖の者の育てし犬ではないのじゃ。まったく関わりのない他人の育てし犬を捕らえ、深き穴の中に入れ、その入り口を堅く扉のようなるものにて閉じて、中におる犬に食する物とて与えることがあまりなく、穴に入れ込みし犬なるはやせ細り、苦しき思いにて死にてしもうたのじゃ。

そのようなる行いをいたせし先祖なるは、誠に血も涙もなき者にて、苦しき思いをいたさせしに追いやりし者であるゆえに、その出した人の恨みの念が関わりなき子係の者に怒りあるを知らせておるのじゃ。この犬なるは、今とて深き穴の中に苦しみるのじゃ。待て。代わるぞ」

犬「悔しい。俺は悔しい。あの男が俺の体を他の者に縛らせて、あの穴の中に入れたのだ。俺はあの男が憎いのだ。あの男がわからないから、俺があの男の家の水の中に毛を入れたのだ。あれは俺の毛だ。俺の毛をあの男のところに入れたのだ。

あの男が俺を殺したのではないのだ。殺したのは、あの男の親の親のまた生みの親だ。俺は、あの男の家ではないのだ。他の家の者のところで生きていたのだ。そこの家の者は、俺を大事にしていたのだ。俺は、その家にいるときは良かったのだ。あの男のところへ行って捕まえられて、あの穴の中に入れられたのだ。だから俺は苦しい苦しいことで、こんなになったのだ。あの男の親の先の親が、俺を殺したのだ」

加藤先生「分かりました。本当に可哀そうなことをしたのですね。そんな穴の中に入れられなければ、今のように深いところで苦しんでいないでいたのに、本当に悪いことをされたのですね」

犬「そうだ。本当だ。俺はあんな穴の中で死んだりしないのだ。あの男のお陰だ」

加藤先生「分かりました。では、犬さんの体を神様に助けていただきまして、また別の時にあの男の子孫の人がきて、犬さんに古い先祖の者に代わってよくお詫びをするので、その時まで明るくなつたところで待っていてくださいね。今は神様に助けていただくだけにして、また別のときにね。待ってくださいね」

犬「ほんとか、俺が良くなるのか、俺の体が良くなるのか」

加藤先生「なりますよ。では待ってね。今すぐ神様にお願いするのでね。神様申し訳ございませんが、どうか苦しい犬を助けてくださいませ」

大神「待つんじゃ」

(ここで助け出しました)

犬「う…うー。俺は出た。穴の中から出たのだ」

加藤先生「良かったですね。では別の時に、あの男の子孫の方が、古い先祖の者に代わって深くお詫びを犬さんにするので、その後で犬さんは畜生界の神様のところに行かせていただきますよね。その所で、またもっと良いところに神様が行かせてくださるのでね。その時まで待ってくださいね」

犬「うん。分かった。良かった」

加藤先生「では、今日はこれでね、後はその時まで待ってくださいね」

犬「分かった。良かった。俺はうれしい。分かった」

(注)後日治療院にて、Oさん立ち会いで解決を致しました。

【八】 輪廻転生による因縁

例1 離婚…前世で継子いじめ

夫が女に狂い、競輪競馬にも狂っているため、我慢できず離婚をしようかと思いい、お伺いいたしました。

大神「この者達の夫婦なるは、この者の申す通り、確かに今なるは良くはないが、だがこの者小百合なる者、つれあいなる者への怒りあるゆえに厳しきことを申し、つれあいなる者をその折にては罵りいたせし事にて、この者寅男なる者として意地になりておるのじゃ。この者小百合なる者として、そのような子孫との縁あるは、それなりの関わりとてあるのじゃ。(注)小百合さんは、前世では、寅男の「まま母」であり、寅男をいじめ苦しめた因縁。

関わりなるは、小百合なる者の古き前世に於いて、この者寅男なる者を困らせ、苦しめしことありての自身のいたせし行いの裏返しの今生であるのじゃ。別れるはいつなりとできるが、だがその古き前世の折の寅男なる者への借りは、夫婦の別れいたすことにては果たせぬのじゃ。

それゆえに、たとえ今生なるは共に快く暮らせぬとて、古き前世においていたせし事への裏返しの自身の苦しみであるゆえに、できる限りそのような者との縁組あるは、それなりの自身の蒔いた関わりありてのことと悟り、今のままにて一生を通ることにて、古き前世の因縁の借りが果たせるのじゃ。

だが、どのようにとの思いにて、つれあいなる者との別れをいたしたきは、思い通りにいたすも良いのじゃ。だが自身の作りし因縁なるは、果たせなきことなるゆえに、自身の持ち越し因縁となりてこの先、生を受ける度にどこまでとて付いて参るのじゃ」

例2 兄にいじめられる…義理の親子で敵同士

相談者のIさんは、中学三年の男の子と小学六年の女の子を持つ母親です。ところが、その兄弟の仲は大変悪く、絶えずお兄さんは妹を殴ったり、いじめたりしているそうです。またそのお兄さんは、学校にも行かず、家から一步も出ない状

態が続いているとのこと。Iさんも困り果てて、相談に来ました。なお、父親は既に癌で亡くなっているとのこと。

大神「この者一也(兄)なる者、そのように次々と自身の身内なる妹を憎み、痛みを与えるは、この者一也なる者の古き前世の関わりにて、そのように敵といたし、日夜痛めつくしておるのじゃ。一也なるは、古き時代の折にては、誠に悪しき者にて、他の多くの者達を泣かせ、苦しめて参りし魂の持ち主であるのじゃ。

その古き時代の折に痛めつけられし者達がこの者に取り付き、今生とてあのように身内なる者への悪しき行いをいたしておるのじゃ。いまひどき痛みを与えられし静香(妹)なる者として、その時代の折にては、一也なる者の住む屋敷に雇われておりし者でもあるのじゃ。この者達兄妹なるは、古き時代の折にては、お互い敵同士の者達でありたのじゃ。

それゆえに親と子との仲になりたことでもあるのじゃ。親と子とは申せ、義理ある仲でもありたがの。そのような折にては、親の立場なる静香の前世にては、一也なる者に悪しき行いをいたせしこととてあるが、皆そのようになるも、因縁ありてのことでもあるのじゃ。因縁ありて兄妹となり、または親子となりて、深き関わりを持ちて、敵のようなる一生をどこまでとて繰り返させられて参らねばならぬのじゃ。

一也なる者として、自身にては古き時代の折のこと、分かりてはおらぬが、因縁ありて共に同じ親を持ち、一緒に住みしておるのじゃ。その折々の時代を、痛めて泣かせて、長きに渡り通りて参りし者達であるのじゃ。だがこの者、今生兄として生を受けし一也なる者が、今生なるは前世のいたされしことのかたきと申すか、裏返しの行いをいたさせられておるのじゃ。

このようになるも、お互いの者同士の業と申すことにての表れであるのじゃ。だが、この者達のこのようなる行いの繰り返しなるは、この辺りにて止めねばならぬゆえに、神の力にてこの先なるは、一也なる者の手を押さえねばならぬのじゃ。そのように神の力を求めねば、どうにもならぬ静香なる者のこの先の心の定めといたし、自身成人いたせし後にての心を定め、神の館にて修行(修養科)を学びし事を心の道標といたし、生みちしるべある限り神への手足となることを約束いたし、また自身とてわからぬとは申せ、表れし今の自身の姿を前世の自身のいたせし行いの悪い姿を見せられておると悟らねばならぬゆえに、一也なる者

のあの後姿でも良い。詫びる思いで日々通るのが、この先の生き方ではないかのう。

一也なる者の悪しき暴れは、そなた達のこの先の心定めにとて関わりて、良きになるのじゃ。神の守りとて強まりて参るのじゃ。今なるは、この者静香なるは、心の定めで良いのじゃ。だが親なる者、わが子達の幸せを願う思いあるなれば、泣き言だけを申し困る困るだけでは良き道は開かれぬのじゃ。この先なるは、親なる者より神への道を求めねばのう」

このように、神様につながり神様の心に沿った生き方をしないと、お互いの恨みの思いやいじめは、何回生まれ変わっても同じことの繰り返しになります。そうならないためにも今生は神様の手足となり、人様に喜んでもらうような生き方をすることが大切です。また親も、神の教えを学び努力することが必要です。(その一つに修養科がありますが、それについては別の機会に紹介します。)

いずれにしても、今このようになる姿は、前世よりの持ち越しの因縁であると悟り、それを精算、つまり因縁を消す生き方をしないと、いつまで経ってもその状態が続くということです。

私がよく皆さんに「神様とつながってください」と申しているのは、だれのためでもないんです。皆さん自身のためなんです。神様とつながるとは、今の状態が良くなったらそれで終わりというものではなく、良くなった後に神の教えを信じ実行していくことなのです。そうでないとまた元の状態に戻ってしまいます。

因縁を切るには、徳を積むことです。人に喜んでもらうような、人の役に立つようなことをすることです。それは別に人が見ているところでなくても良いのです。人が見ていようがまいが良いのです。どこにいようと神様はきちんと見ておられ、神様のノートにはその人の行動の記録や思いがきちんと記録されているのです。

例3 兄弟の不仲…前世の恨み

Nさんは、五十五才です。神様のこともかなり理解しております。恵美子さんからの相談で、実の姉とは小さいときから仲が悪く、自分は神様のことも分かり、

なんとかして姉と仲良くしたいと努力するが、どうしてもうまく行かないが、なぜでしょうとのこと。

大神「この者恵美子なる者の身内にて、姉であるが、だがこの者恵美子を嫌うことにては、この者恵美子にあるものではないのじゃ。まったく違うのじゃ。そのように姉なる者の近付くを嫌うは、姉の関わりある古き前世にあるのじゃ。古き前世の折にては、美智代(姉)なる者、恵美子なる者への恨みと申すか、厳しき行いを受けておることにて、身内となりて生を受けてはおるが、だが古き前世よりの関わりが心の奥底にあるのじゃ。恵美子なる者の古き前世なるは、誠にひどき行いをいたし、他の者達よりの深き恨みの念とて向けられておるのじゃ。

だが現在にての恵美子なるは、そのようなるひどき行いをいたせし者とは似ても似つかぬようなる心やさしき者として生を受けておるのじゃ。だが姉なる者は、心の奥底に、身内とは申せ、近付くを嫌いておるのじゃ。このように同じ親を持ち生を受けるも、また姉なる者に嫌われて通らねばならぬこととて、皆自身の行いし古き前世よりのしがらみとなりておるのじゃ」

加藤先生「では神様。この先恵美子さんは、姉の美智代さんへの心の持ち方をどのようにして生きていくのが良いのでございましょうか」

大神「この者恵美子なる者、どのように姉なる者に嫌われたとて、いた仕方なきことであるゆえに、自身の作りし悪しき因縁を悟り、陰にても良いのじゃ。姉なる者への詫びの心にて特に思いを掛け、やさしき身内としての生き方をいたして通るなれば、姉なる者への心に届くようになりて参るのじゃ。

今なるは、どのようにされたとて自身の心の持ち方を収めておるのが良いのじゃ。これより先とて嫌なる気分にていたされることとて必ず出て参るが、だが皆そのようにされることにて自身の行えしことへの罪滅ぼしになりて参るのじゃ。このことをよーく胸に納めて、この先通りて参るが自身の生き方でもあるのじゃ」

例 4 不倫…先祖に仲を裂かれた恨み

不倫や浮気など、人の道に外れる行いをするのも、その陰にはそれなりの因縁があることがよくあります。この例は、年上の女の人が子供や夫を捨て、年下の独

身者と仲良くなり、夫婦きどりで付き合っているため、二人の仲を裂くよう、身内の人よりの依頼があってお願いしたわけです。

加藤先生「神様、申し訳ございませんが、TさんとMさんの深い仲のように見受けられるので、どうか二人の仲を離れさせてくださいとのことですが、とりあえずそのように年の差のある者同士が共に離れないのは、それぞれの方に別々の原因がありてのことと存じますが、今の所はこの方達のそのような仲になる原因をお知らせくださいませ」

大神「この者達、そのように深き仲となるは、この者Tなる者の生まれ育ちし生家にあるのじゃ。生家に伝わりし家の因縁であるのじゃ。家の先祖の者にて、若き者にて他の者年上なる者との仲を裂かれ、その後家より追い出され、そのまま家に戻ることも叶わず、他の見知らぬ土地にて自身より身を詰めて果てし者がおるのじゃ。その者の亡者となりし後に、この者達の代々の者の中にては、Tなる者のように年上なる者との仲に溺れ、自身の身を一生駄目にいたせし者として駄目であるのじゃ。その気の毒なる古き時代の先祖の者の助けと導きの行いをいたさねば、この者達の仲は、いつまでとて別れることは叶わぬのじゃ。

またMなる者として、それなりの関わりありて、そのように年若き者に思いを寄せ、この者の本来のつれあいとの仲に嫌なる思いをいだき、そのつれあいなる者との暮らしを拒み、自身よりその者の家より去りて暮らしておるのじゃ。この者Mなる者として、そのようなる道を外れし行いをいたさねばならぬ原因ありてのことであるのじゃ。この者Mなる者そのようなる思いにいたさせるは、この者の身内なる者にて、若き折に他の者に身を売り、その金銭にて自身の家の暮らしを立てさせて通りた者がおるのじゃ。

その者なるは、自身の思いにてそのようなる場に身を沈めたのではないのじゃ。まったく違うのじゃ。この者の家の古き時代の先祖なる者にて、そのようにさせし者がおりてのことであるのじゃ。古き先祖なるは、その若き者を育てし、ままた親なる者でありたのじゃ。その者達の暮らしの上にて、若き者を他の者の手にて売り渡し、金銭に換えてしもうたのじゃ。そのようにさせられし者の恨みにて、Mなる者としてあのようにおかしき道を通りておるのじゃ。その者に代わるぞ」

亡者「はい、私です。私は悔しいです。私はあの時、嫌で嫌で泣いているのを私の家に後にきたあの親になった女に私は売られて、人の集まるところに連れて

いかれて裸にされて、体を大勢の者に洗われて、赤い着物を無理に着せられて、人の見る所に並べられて、嫌なことをさせられて、金を取る商いの道具にされてしまったのです。そのようにしたのは、あの女です。今、自分の子供と別れて、つれあいとも別れて、あのようになんとも別の男に思いを寄せているあの女です。

あの女は、私を台無しにした憎い憎い女です。あの女がされたように、よその男に寄り付いて、離れなくなっているのは、私がさせているからです。あの女は、今にあの男から飽きられて、一人になるのは分かっていますよ。皆あの女に私がさせているからです。あの女が私に苦しい思いをさせた女ですからね。今に自分の子供からも見放されますよ。」

大神「この者 M なる者の古き前世の折に、そのようなる悪しき行いありてのことで、今生そのようなる道を外れし行いとなりておるのじゃ」

時いた種は生える

親神様のときの教え……『恩(神様の心に反すること。生かされていること、守護されていることに感謝せず、自分勝手に暮らし、人を泣かせるようなことをすること)に恩が重ると、牛馬に落ちる。牛馬に落ちたら、なかなか人間に戻れんで。牛三代。馬四代。白犬三代。うす馬鹿一代。それからようよう人間に戻るのやで。』

加藤先生を通しての教え……三十才の相談にきた青年のことですが、少し知恵が足りなく、仕事も普通の人のようにはいかないため、障りならば解決していただき、なんとか幸せの人生をあゆんでいただきたいとお願いしました。その答えが次の通りです。

大神「この者朗なる者、このように他の者に比べるなれば、少しと申すか、違ふようになるところのある者であるのじゃ。そのようなる性分と申すか、心少し物足りぬは、この者の古き前世の折りよりの深き関わりがありてのことであるのじゃ。その古き前世の関わりある者と代わるぞ。しばらく待つが良いぞ」

神「わしじゃ。わしはこの者朗なる者の古き前世の折りのことであるが、その時代の折りにては、この者誠に心太く、他の者達を口先だけで自由に操り、自身の

思うままに人々を働かせ使うておりたのじゃ。そのようなる行いを致しておるうちはまだ良いのじゃが、そのうち自身段々と年老いて参るに従い、体を動かすことは自身致さず、使われし者達を口汚く罵り、その果てにては使われし者達を他の者達に金銭にて売り付けて、人の体を品物のようにいたし、金に換えるようなる行いを致し、使われし者達を苦しめ泣かせて通りて参りた者の生まれ変りの者であるのじゃ。

そのようなる悪しき行いを長きに渡り致して参りた後、この者の古き時代の前世は終わりのじゃが、その後、この者なるは地獄の果てにて長き長き時を経て神に許され、生を受け、今生生まれ変わっておるのじゃ。この者の今生なるは、今の姿で終わらねばならぬのじゃ。例えこの者、神の教えの道について参りたとして、今一つと申すようなる者にて終わらねばならぬのじゃ。このようなる者に生まれつくも、この者自身の古き古き前世の折りよりの通り方によりての自身の業と申すか、今生この者の姿にて終わらねばならぬのじゃ」

このお答えをいただいたとき、神様が加藤先生の口を通して出られて、「この者は悪しきことを致した次の生は牛として生まれ、自身牛馬のごとく扱った苦しみを味わわされ、さらに次は犬として三回生まれ変わりをした後に、ようやく物足りぬ者(知的障害)として今、生を受けておるのじゃ。」とお教えいただきました。いろいろの方のお助けの体験より、犬の魂とは人間の魂と同じレベルであることも教えていただきました。これはすでに「心の友」誌でも、何回も話させてもらっています。犬の魂は多くの人間の魂の生まれ変わりであり、犬の魂を呼び出してみますと、前世が人間であった場合が数多く出てきて、深く考えさせられます。

こういう事が分かると、人に対していじめたり苦しめたりすると、かなりの期間、詫びて苦しんで通らねばならないことが、十分おわかりいただけると思います。輪廻転生が事実としてわかれば、今を大事に、少しでも徳積みに励まなければと思いますし、今生さえ良ければという、無責任な考えの虚しいことがわかると思います。

なおこの青年は、親神様の館で三か月の修行をしていただき、少し物足りませんが会社に勤め、以前よりは大変良くなって暮らしております。しかし、人並みの幸せな家庭は築けないのではないかと思います。

(補足)

家庭の中で、身障者、精神障害者、重い病をお持ちの方の中には、前記の文を読み、不服の思いをいだかれる方がおられるかと思います。身内の難病や不運が、前世の因縁に深く関係しており、前世の生き方が良くなかった事が原因であるとは認め難いと思います。

全てが生き方の間違いによるものではなく、稲荷の神や関わりある神々の障りの場合もあります。しかし前世の心の遣い方による割合が、かなりの部分を占める事も事実なのです。

今までも同様な相談者の方に、前世の生き方の間違いにはふれず傷つけないように話をしたこともありましたが、その方法では救いは出来ませんでした。本人が前世の因縁を素直に認め(実際には記憶がないから分からないのですが)生き方を反省し、詫び、生き方を埋め合わせような心になった方は救われています。だれもが、はっきりとわからない前世の生き方について、悪かったとは認め難いのですが、その事を抜きにしてでは、通り抜ける事は出来ません。

自分で通ってきた足跡は、自分で消すより解決の道はないのです。本人がダメな時は、家族のだれかが真剣に神様につながる事です。そのような身内の者に困らされる方も、そのような悩みを通し、前世の因縁消しの機会を与えられていると受け止め、障害者や難病の方以上に、因縁消しの生き方が大切になってきます。表面的な救いは、医学や国の援助もあるのですが、根本である内面的な救いは、このような困難を生み出している前世の生き方を認め、逃げずに真正面から取り組んでいく姿勢こそが、明るい夜明けへの道につながると信じています。

【九】動物の霊の障り

鼻より多量の出血がし、また白い糸のようなものがズルズルと出て困る方がおりました。医者に行っても原因が分からず、脳から出ているのではないかと心配で入院をしようかということになりました。それに対する返事です。

大神「この者、そのように鼻より血または他のものが出るは、この者の住む屋敷にての関わりではないのじゃ。待て。代わるぞ」

犬「ガアガアガア。ガアガア。あれが…あれが鼻の中から出てきたのは、病気ではないのだ。あの男が俺の体をひどい目に遭わせて殺したのだ。俺は人ではないのだ。俺はあの男の奴に殺された犬だ。俺があの男の体に取り付いているのだ。白い長い物が鼻の中から出てくるのは、俺が取り付いているからだ。俺はあの男の体に取り付いているのだ」

加藤先生「犬さんは、あの男に今生にそのようなひどいことで殺されたのですか。それとも、古い古い時代にあの男が生きていた時に殺されたのですか」

犬「俺はあの男が生まれてから殺されたのだ。あの男が一人で俺を殺したのではないのだ。だけど、一番ひどく俺の体を上から下に叩き付けて殺したのは、あの男だ。俺は悔しいからあの男に付いているのだ。俺の苦しみはひどいのだ。あの男の鼻から出てくるのは、俺がされたところだ。だから俺の体と同じ鼻から変なものが出てくるのだ」

加藤先生「分かりました。では、あの男の人が子供の時に、そんなひどいことをしたのですね」

犬「そうだ。あの男が子供の時だ。俺がずーっとあの男を困らしてきたのだ」

加藤先生「分かりました。では犬さんに聞きますが、今もまだあの時のまま苦しいのですね」

犬「そうだ。俺は殺されたままだ」

加藤先生「分かりました。では今すぐ犬さんの体を神様に頼んで楽にしますので、体が楽になったらあの男の人から抜け出てくださいね。いつまでも人の体に取り付いていると、また犬さんも苦しくなってくるからね」

犬「うん、分かった。俺はあの男が憎たらしいが、でも離れるよ」

加藤先生「約束してくださいね。では少し待ってくださいね。神様、お願い申し上げます。この方、Hさんという方に恨みを持つ犬が、あのようにHさんの鼻から血や白いものが出るように恨みをもって取り付いているとのことですが、どうかこの犬の苦しみをお助けくださいますようお願い申し上げます」

大神「待て。これより犬の助けの行いはいたすが、その後なるは畜生界の神の助けにて、苦しきことのなきようにいたすのじゃ。犬の助けなるは、わし大神、親神の力にていたすが、後なるは畜生界の神の元にて助けるのじゃ。これより助けの行いをいたすのじゃ。この者に恨みを持つ犬なるは、神のそばに参るのじゃ。参るのじゃ。(ここで助けられました)これにて畜生界の神と代わるぞ」

畜生界の神「わしじゃ。わしは畜生界の神じゃ。わしの元に気の毒なる犬は連れて参るのじゃ。犬なるは、神の元にて体を休め、その後にては人の体に生まれることになるのじゃ。犬なるは、人の心とまったく同じ生ある者じゃ。人の体を持ちて生まれることもあるが、人の体を持ちておる折の心の通り違いし者が犬となりて生を受け、その者なりの運命によりては良きにされ、または悪しき生き方のありし者なるは、犬となりたとてさらに苦しまねばならぬが道であるのじゃ。

気の毒であるが、この犬となりし心の持ち主とて、それなりの通り違いの道がありてのことであるのじゃ。それゆえに犬として生まれ、ひどき行いを受け、死ぬことになりておるのじゃ。だが犬とて苦しみを通りし後のことにて、この犬なるはまたの世にては人として生を受けるのじゃ」

これをした後は、Hさんは嘘のように良くなり、今は元気で働いております。

さて、この文よりあの世には人間を指導してくださる他界の神様と、動物を指導してくださる畜生界の神様がいらっしゃるということが分かったと思います。また人間は生まれ変わるときに、次に必ず人間として生を受けるのではなく、生き方が悪いと犬や牛に生まれ変わりそれからやっと普通の人間として生まれ変わることができます。

ですから、動物といえども、自分や家族の、前世や来世の姿かもしれないと思えば、ひどいことは出来ないと思います。当院での相談、解決の中でも、犬や猫だけでなく、狸、蛇などの霊の障り(恨み)が原因のものが数多くあります。どんな生き物も神様に造られ、神様に生かされているということを忘れないようにしたいものです。

【十】病に倒れて

[A] 天からの便り

(1) 入院

同室の人達は、寝入っているのか物音一つしない。吉田栄一は、寝つかれずに寝返りばかりを繰り返している。ここ三日ばかりの急変に、どう心を整理したら良いのか、とまどっているのである。不安は次々と現れ、打ち消し、思い直しても、又現れる。いろいろの考えが、からんだ糸のように入りまじり、時には同じ事の繰り返しで、止めどがない。

三日前に、仕事中急に背中に激痛が走り、動く事も出来ず、救急車で運ばれそのまま入院となった。検査が始まったばかりで詳しい事は判らないが、どうも難しいようだ。健康には自信があり、今まで医者にはほとんどかかっていない。今度の背中の激痛も、ここ数ヶ月続いた、過労から来るものと軽く考えていた。しかし、今日の検査の結果、妻が医師に呼ばれて説明を聞いた後の、妻の表情は固かった。何かを必死に隠しているようである。永年連れ添った夫婦である。妻の咲子の変化を見逃すわけがない。栄一は気付かぬ振りをして、子供達も心配しているから早く帰ってやるように、と妻を促す。

「あなた、又、明日早く来るからね」

つとめて明るく振る舞って、妻は帰って行った。今年も、二人の親友が癌で亡くなっている。今まで仕事に追われ、一度も健康診断をしていない。悪い病気でなければ良いが……。今日まで、ただ仕事一筋に働いて来た。今ようやく小さな会社も軌道に乗り、住まいも持てた。田舎に帰れば出世頭として近所の評判も良い。村の祭りには、幾ばくかの寄附も出来るようになった。今、俺が倒れたらどうなるのだ。会社の従業員の生活は……。我が家の生活は……。まだ下の子は学生だ。苦勞をかけ続けて来た妻にも、これから樂をさせたいと思っていた矢先なのに……。

この世に神様がいるのなら、なぜ真面目に働いて来た俺に、病を与えるのか。神を呪いたくなる。普段、思ってみたことのない神の名を、口にしてみる。いやいやまだ悪い病と決まったわけではない。と一生懸命に打ち消してみる。又、不安

が湧いて来る。まだまだ死ぬわけにはいかない。五十六歳だ。あと二十年は生きなければ……そんな思いが次から次へと湧いて来る。考え疲れた栄一は、いつの間にか深い眠りに入っていった。

(2) 天からの通告

回りの騒がしい音に、目が覚めた。今見ていたのは夢だろうか。夢にしては、あまりにもはっきりと、記憶に焼きついている。そして、なんの事か整理が出来ない。「眠れましたか」という看護婦の声も、何か遠くの、別世界の声のようだ。そのまま又目をつむって、今の夢の整理を試みる。なんだか夢の話、早く妻の咲子に話してみたい。咲子は数年前より、信仰嫌いの私に隠れて、何かそのような勉強をしているようだ。妻であれば別に笑われても、恥ずかしくはない。そう腹が決まると、病院の一日の行動も気軽に動けた。

今日もいろいろの検査をして、あっという間に面会の時間が来た。時間が早いためか幸いにも、面会者は妻だけだ。寝不足なのか妻の目の周りに隈がある。昨夜は思い悩んで眠れなかったのではなかろうか。家の状況や、会社の様子話の後、ためらいながら今朝の夢の話をした。妻は真剣に、時々深くうなずきながら聞いている。

とても素直な表情である。最初は馬鹿にされているのではと思いながら、話し出したのが、いつの間にか栄一も真剣に話している。夢の内容とは、次のようなものだった。

家の広間で宴会をしていた。何人の集りかはっきりしない。甥や姪も集まっていたようだ。そこで俺は、田舎から出て来て今日までの苦労話をしていたように思う。そこに郵便屋さんが、書留を届けに来た。差出人は、運命局と書いてあった。何だろうと不審に思い封を開けてみる。

吉田栄一殿

貴殿に通告致します。定例会議の結果、貴殿は、生まれた時、寿命は七十歳までと定めてこの世に送り出しましたが、その目的を忘れ、少しもこちらの期待通りの働きをしていないので、先の見込みが無い為、寿命を縮め、残り三ヶ月の命として、その時には貸してある身体を返して頂くので御了承下さい。尚、異議申し

立てのある場合は、同封の用紙に記入して返送して下さい。回答によっては会議の結果、定命の七十歳まで身体を貸し続ける場合もあります。

注、貴殿はこの世に、光の天使として誕生したのであります。目的は、人間が五十歳になったらそれ以後は、神恩に報いる生き方を指導するのが、使命でした。

妻の咲子はいつの間にか、ノートにメモしながら聞き入っている。栄一も不思議と落ち着いて、はっきりと夢の事を思い出しながら、要領良く話を進めた。同封の用紙には、

- 1、生まれてから人に、喜ばれる事をしたか。何をしたか具体的に書くこと。
- 2、反対に、人を泣かせ、苦しめ、いじめるような事は、しなかったか。言葉づかいや、日常の態度はどうであったか。
- 3、自分中心の、自分勝手な生き方を、しなかったか。
- 4、必要以上の欲望に走り、まわりの人を苦しめなかったか。
- 5、動物と同じように、ただ生きるだけの一生でなかったか。
- 6、死んだ後の生活を、考えた事があるか。生まれ替わりと、因縁という事に関して、良く理解しているか。
- 7、神を信じていたか。神の親心を知っていたか。
- 8、神が誕生前に与えた役割(ほとんどの人は知らない)を、忘れていないか。
- 9、現在の恵み(健康・財産・家庭運)を、自力と過信してはいないか。全て、神の守護によるものであるのを、忘れなかったか。
- 10、身体を返す時、何の執着心もなく、喜んで、感謝して、お返し出来るか。と、記されていた。まだあったような気もするが、あとはよく覚えていない。

「この書類を読んだ時、確定申告の時の、青色申告のことを思い出したよ。自分で自分の評価を申告するのだね……自分では正しい生き方をし、一生懸命に働いて来たつもりだが、何かが間違っていたのかもしれない。お前は医者から俺の病気について聞いているだろう。しかし、この夢から判断すると、三ヶ月の命だ。三ヶ月の命では困る。もっと生きたい。異議申し立ての用紙に、何とか延命出来る書き方が出来ないものか。

お前、誰かこのような人を知らないか。俺は今日まで、信仰というものは、意志の弱い、自分に負けた人だけが、やるものだと思っていた。だが病んでみると、そこに何か、目に見えない世界が、あるような気がするのだが…」

暫くの沈黙のあとで、妻は言った。

「あの岡沢さんなら、答えを出してくれるかもしれない。あなたも知っているでしょう。校長先生の奥さんで物腰の低い何でも出来る人を…」

この頃、岡沢さんは仲間の方達と「心の会」という、ボランティアの会を作って、悩む人達の相談に乗ってあげているとのこと。二人の意見は、まとまった。岡沢さんをお願いして、話を聞かせてもらおうと……。

翌日、岡沢さんは、忙しいにもかかわらず心良く見舞いに来てくれた。栄一の話す夢の話に深く深く頷きながら、真剣に聞いて下さる。岡沢さんは、このような目に見えない世界の事も、何の不思議もなく、当然のこととして受け止め、

「これは単なる夢ではなく、神様が、使命をきちんと果たしてほしい、とお知らせ下さった事で大変に有難い喜ばしいことなのですよ。この世は大神親神様の支配される世界で、偶然ということは全くなく、成って来るには、成ってくる原因があるのですよ」

と、静かにわかりやすく諭して下さった。

無信仰の栄一には、全く今まで考えてもみなかった事であり、納得のいかない点もあった。しかし何とか延命を願うからには、岡沢さんの話を素直に聞かなくてはと思った。

岡沢さんは、

「同封の用紙の回答は、栄一さん自身で書いて下さいね。まだ三ヶ月には時間がありますから、自分で十分に練って練って、消化してから答えて下さい。栄一さんは病気になって幸せなのですよ。もし病気にならなかつたら、神様の意に反した、自分勝手な、生き方をしたことでしょう。病気になって、神様を知ったのですからね。これも、神様の手引きかもしれません。今日は栄一さんが疲れるからこれで帰りますね。」

と言って帰られた。それから暇があるたびに、足を運んで下さった。

栄一の病は、膵臓癌である。ほとんど治る見込みはない。しかし岡沢さんは、不可能が可能になった、幾つかの奇跡の話为例にとり、この病は治ると言った。岡沢さんは、時間を充分にとり、異議申し立ての夢の、十項目について説明してくれた。

今まで知らなかった世界が、少しずつ解明されていく。一体今までの生活は、何んだっただろうか。栄一も咲子も、自分の生き方を恥じた。

岡沢さんは

「恥じることはないですよ。ほとんどの人は知らないのですから仕方がないのです。誰もが輝く魂を持ちながら、その事すらも知らず、見る方向が間違っているだけなのです」

と、言われた。

話を聞けば聞くほど味がある。自分で噛みくだき、消化するには、充分すぎる程にベッドの生活は時間がある。話を少し理解してくると、心の痛みは少し和らいで来たような気がする。栄一にはまだ、岡沢さんの話を十分に消化出来なかったが、入院時のあの焦燥はなかった。運命のままに、したがおうと思った。

入院後、十日目に手術が行われた。大手術であった。命は取り止めた。しかし何年後もの生存の保証はない。しかし栄一は、もう、命を長らえさせて下さい、とは祈らなくなっていた。もし許されるなら、残りの人生は、誕生の時に授かってきた目的、人生晩年の五十歳を過ぎたら、今までの自分中心の生活から、神様への報恩の生活に、切り替える運動に、全力を出しきりたいと思った。しかし、それも許されないなら、来世生まれ直した時に、この宿題を果たしたいと願った。

だから神様からの申告書には、異議申し立てでなく、御詫びと、今後の心定めを、書くことにした。その結果、命が残り三ヶ月以内に終わっても、それで良いと思えるようになった。栄一と咲子は岡沢さんに、心から有難うございますと言った。岡沢さんは静かに話された。

「ほとんどの人は、死を迎える時が来ても、何の為に生まれてきたのか、大神親神様の望まれる生き方は何か、ということ、知ろうともせず、ただ、自分勝手に、欲望のままに生き、動物と同じ生き方で生涯を終わる人が多いのです。です

から霊界に行っても苦しみ、次に再生して来る時も、運命通りの、苦しい人生を又、歩まねばならないのです。死を迎えて、何事にもこだわらず、役目を果たした、と笑って霊界の明るい所へ旅立てる人が、何と少ないことでしょう。

長い転生の中で、自分の代に魂に、汚れや、曇りを、つけたくないのです。折角、輝き、磨き上げた魂に、自分の代で、傷付けたり、汚したのでは、今日まで努力し、励んできた、その時時の人間の方に、申しわけないのです。

人間が動物と違う生き方とは、自分だけが助かれば良い、のではなく、相手を助け、そして、自分も助かっていく。人の喜びを我が喜びとする。これはなかなか出来ない事ですけれど、しようと努力する、努力する心を養う、これが人間の価値であると思うのです」と。

岡沢さんからは、何か暖かい、目に見えないものが漂ってくる。これが人類愛なのだろうか。回診の時間となり岡沢さんは、又の来院を約束して帰られた。岡沢さんの置いていってくれた「心の友」という、手造りの小冊誌が、宝物のように見える。咲子は「あなたばかりでなく私も、今までは我が事ばかりに夢中になり、人の事を思う心は使わなかったけれど、これからは岡沢さんに教えてもらって、少しでも生き方を変えてゆきます」と、しみじみと言って、帰って行った。

窓の外は、夕陽がシルエットを作り沈みかけている。誰もいなくなった庭を眺めながら栄一は、あの夢は正夢であったのか。それならば運勢局という宛先はどこなのだろう。どのようにしたら神様に返事が届くのだろうと考えた。判らない。これも岡沢さんに聞こう。栄一は、自己主張がなくなり、素直になった自分に気付いた。

皆さんも自分を省みて、これだけは人に喜んでもらう事をした、と胸を張って答えられる事が、幾つあるでしょうか。「我が人生に悔いなし」と、大声で言えるでしょうか。いつ通告書が来ても、喜んでお答え出来る、喜んでお身体をお返し出来る、その心造りを、しておきたいものです。せめて、人間として生まれて来た目的だけでも、知って生きてほしいのです。

[B] 父より愛する息子への手紙

次に、若いけれど私共の話をテープを通して聞いて下さった方の、末期のお話をさせて頂きます。テープを渡すことにより命が短いと感づかれる事になるのではないかと心配しましたが、人間的にも立派な方でしたので、奥さんと相談の結果お渡し致しました。

Yへ

お父さんの元気の内にこの手紙を書き残しておく。痛みはさっき入れた座薬のお陰で止まっている。この間に少しでも多く書き進めておきたい。お前がこれを読むときは、既にお父さんはこの世には居ない。

本当に申し訳けないと思う。まだ小さいお前や、お姉ちゃんや、お母さんや、おばあちゃんや、四谷のおばあちゃん(生家の母親)を残して先に旅立つなんて、とてもつらいんだ。病院のベッドの中で幾日も泣き、苦しんだ。いろいろの事を考えると眠られず、身体に良くないと思いながら、毎日同じ事の繰り返しで、お前達の先の事が心配で、お父さんの運命を呪った。どんな事をして、もう少し生きたい。片足が無くていい、両手が無くなってもいい、生きられるものなら生きたい。

そしてお前達の、少しでも役に立ちたい、相談にも乗ってあげたい。おじいちゃんが癌で亡くなってまだ幾日もたたないのに、お父さんが癌になるとは……、多分癌だ。いや、間違いなく癌だ。本当に胃カイヨウであってほしい。お医者さんも、周りの人達も胃カイヨウだと云う。

しかし、お父さんも少しは医学を学んだ。だからこのようにやせてくる事や、手術時間の短かった事、入院前に三つの病院で診察してもらった時も、至急に手術が必要だと云われた事など、いろいろ重ねて考えると、悪性の癌でかなり末期に来ていると思う。

おそらくお母さんは医者から、知らされていると思う。その苦しさを顔に出さず、お父さんやお前達に笑顔を作っていてくれる。それを思うと本当に胸がはりさけるばかりに痛い。夢であってほしいと何度思った事か……

眠って起きた時、昨日の続きの今日である事に、どんなにガッカリした事か。いくら書いても書き足りない、このやるせない、どうしようもない気持ち、神も仏も恨みたくなる気持ち……これも今のお前ならば判ると思う。

おじいちゃんを亡くした今、又お父さんと別れてみると、神様や仏様があるならば、なぜ続けて、このような苦しみを与えるのかと……。

今、比較的平静な気持ちでこれが書けるのも、思い悩んでいるときお母さんが借りて来てくれた、何本かのテープを聞いて、お父さんの考えが変わったからだ。

元気で無我夢中で働いていた一ヶ月前なら、このテープを聞いても、おそらく聞き流していたであろう。しかし、ベッドの中で何も頼るものがないとき、イヤホンを通して入って来る話は、今までのお父さんの考えを大きく変えた。素直に心に受け止める事が出来た。お前はまだ小さいから判らないだろうが、大きくなった時は、是非神様の話を聞いてほしい。今日は疲れたから続きは又明日書く事にする…。

昨日お前に手紙を書いてから、気持ちが和らいだ。正直な素直な気持ちを伝えられる事がこんなに嬉しい事だとは思わなかった。今日も続きを書く。今お前の寝息が聞こえる。耳を澄ませば皆んなの寝息が聞こえてくる。

皆んなで一諸に寝られるのも、もう幾日もないかもしれない、テープの話をする。

お父さんは今まで元気であった時も、神様や仏様はきちっとお祀りもしてきた。昔からのしきたりは、人一倍守ってきたつもりだ。だから神様や御先祖様については、現在の若い人達の中では、よく知っている部類の一人だと思っていた。しかし、話を聞いてみて、お父さんは何も知らなかった事に気がついた。神様と云えば正月にお札を飾り、毎日手を合わせ、又、お祭りには、町内でみこしをかつぐ事、位に考えていた。町内の氏神様も神様だ。しかし、それよりもっと偉い神様が居られて、その神様によって、お父さんも、お前も、お姉ちゃんも、お母さんも、皆んなが生かされている事が判った。

そして、お父さんはもう少しで、大事な大事なお前達と別れなければならないが、それは死んでおしまいになるのではないと教えられた。お父さんの命はずっと生き続け、身体は火葬になり灰となっても、魂はあちらの世に行って生き続け、仏壇の位牌を通してお前達の、あらゆる事を見続ける事が出来るそうだ。

そして、神様の元で修行というのがあるようだ。丁度お前の学校のような所だろう。まだ行って見ないから詳しい事は判らないが……そしてあの世からお前達を守るよ。なんでも暗い所に居るときは守れないというから、明るい所へ住んでお前達を一生懸命守るよ。どうも話の様子だと、死ぬと暗い所へ行くようだ。お父さんがもっと早く神様や先祖の事を知っていたら、最初から明るい所へ行っただろうが。

でも、お母さん宛の手紙にも書いておくが、亡くなってから四十九日が過ぎたら、加藤先生という方をお願いして、明るい所へ出してもらおうよ。そうしたら、お前も仏壇の前でいろいろ話してくれな。学校の事、友達の事、思い悩んだ事、お父さんがきっと何とかするよ。先日もお願いして、お父さんの所の先祖代々の、小林家の大勢の方々を救けて頂き、それぞれの位牌に入れて頂いているから、先祖の事は大丈夫だよ。

そうそう、おじいちゃんや、お父さんがこのような難しい病気になったのも、庭に祀った稲荷様の障りがきつかったのだそうだ。そのほかに土地の障りもあり、早くこのような事を知っていれば、こんな運命にはならなかったのにと本当に残念だ。でもいろいろの障りは、全部解決して頂いたから、お前達には災いはないと思うよ。

どうも運が悪いという事は、何か必ずそこには、そうなるような原因があるようだ。お前には少し難しいだろうが。お前が大きくなる頃には、このような事も研究され、もっと多くの人に分かり、解決方法も出来ていると思うよ。

それと、お父さんはずっと以前にも別の所で、別の男の人に生まれてきて、生活をして、年老いて又、死んでいるのだそうだよ。今生きているのは、十回目か二十回目か知らないが、死んだり生まれたりを繰り返しているのだそうだ。

だからもう少しで死ぬかもしれないが、又あの世で修行をして、神様をお願いして、次もお前と親子になるよう生まれてくるよ。そして今世、お前達に迷惑をかけた分、次の時はやさしい良い父親となって、埋め合わせをしたいと思う。お母さんはこの次にも、お父さんと結婚してくれるかな。お母さんにも、皆んなにも、埋め合わせをしたい。

お前ももう少し大きくなったら、心の勉強をしてほしい。このように生きている毎日毎日の、暮らし方のなかでの心の使い方、友達や人に親切にしてやる生き方の大切さ、自分だけ良ければよいという、自分中心の生き方はよくないのだよ。

人の為につくす生き方が大事なんだね。この生き方が次のお前の運勢を変え、お前の幸せになる種になるのだよ。まだお前は小さいから判らなくてよい。しかし大きくなったら、本当の神様とは何か?本当の生き方とは何か?ということも考えてくれ。お母さんにもよく話しておくよ。お前が将来相談できる人のことも含めて。

お前は父さんがいうのもおかしいけれど、素直でとっても気持ちの優しい子だ。お父さんはそれが嬉しい。学校の成績は普通でよいよ。それよりも丈夫で明るく、友達思いの子であってほしい。お姉ちゃんも本当に優しい子だよ。中学生になったら、なんとなく女っぽくなって来たね。お父さんは料理の上手な、優しいお母さんと一緒になれて本当に幸せだった。そして出来の良いお前達二人の子供を授かり、小林家に養子に来て、おじいちゃん、おばあちゃんに大事にされ、本当に幸せだった。申し訳ないのは、皆さんに役立たない内に、あの世に旅立たなくてはならなくなった事が、本当に心苦しいよ。死ぬのは少しも恐くないが、ただお前達に申し訳ない思いで一杯だ。

ふと、今も、自分の身に起きている事はみんな嘘で、これを書き終わって眠ると、明日になれば全てが健康で、なんて悪い夢をみたんだ、と思えたらとも、思ったりするんだよ。でも無理だな!

偉大なる神様に、出来るなれば、奇跡をお与え下さい、と毎日祈っているよ。石川のお婆さんも、内緒で神様にお参りをしてきているようだ。皆んなで一生懸命、お父さんの事を祈ってくれているんだね。本当にありがたいよ。お父さんは、あくまでも胃カイヨウで通すよ。その内にこの家でも寝られなくなり、病院に戻る事になるだろうが、希望は最後まで捨てないで頑張ってみるよ。

いつかお前達に、お父さんの病気について、話さなければならない時が来ると思う。誰でもいつか、どこかで何かを、覚悟しなければならない時が来ると思う。そしてその覚悟の為に必要な事は、偽りの優しさではなく、つらくても全てが事実であることを、認める事なのだね。そしてその苦しさに耐え、立ち上がる事なのだ。人間は苦しさを越す度びに、強くなるのだから。

テープの中に愛する夫を亡くした妻が、神様に私の生きている内に、夫を生まれ直させて下さい。合わせて下さいと、無理を願っていたが、お父さんの気持ちも、一日も早く生まれ直して、お前達の生きているうちに会いたいと思う。しかし、そのような情に流される事は、良くない事もわかったよ。

テープを聞いて良かった、もっと早く知っていれば良かったと思う。元気な内に親神様を一度参拝したかった。いつか機会があったら、お母さんやお姉さんと一緒に参拝してみてください。その時にはお父さんも、お前の背中に乗ってお詣りにいくからな。

お前達のこの世も、お父さんのこれから住むあの世も、大神、親神様のフトコロだそう。だから、どちらに居ても同じように生きているんだね。ただ、顔が見られないだけなんだ。テープを聞く前は、お父さんが死んだあとは、お前達が苦勞する事を考えるとつらく、お前達の成長の姿を見る事も出来ないと思うと、運命を呪い、どうしようもなく、自分自身をたたきたくなかったが、テープの話聞いてからは、位牌を通して見る事も守る事、又、命の生き続ける事を知ってからは、大分気持ちがおさまったよ。むしろ残るお前達の方の心が、倒れないでほしいと願うよ。

最後に、この手紙をお前はいつか読む事になるであろう。それは遺書という事になる。その日もそう遠くないであろう。お父さんの死が、お前達のこれからさきの夢を、奪う事になるかもしれない。しかし、幼くして父を失った子供も多い。しかしそのような子は、苦勞はしても、しっかりした人生を歩んでいる人が多い。お前達も苦勞はするが長い目でみると、その苦勞がきっとお前達を立派に磨き上げてくれると信じている。

お父さんは、愛するお前達のために、一分でも長く生きたいと思う。最後の最後まで病と闘ってみるよ。どうか、お父さんの人生最後の闘いぶりをみてほしい。そして、お前が困難に直面したとき、お前の身体の中に、お父さんの血が流れている事を思い出してほしい。またお前達の寝顔をのぞいてしまった。お前達の寝顔を見るのも、これが最後かもしれないと思うと、どうしても見ておきたくなったのだ。それにしても、皆んないい顔をして眠っている。お前達の寝顔を見ていると、お父さんがどれだけお前達を愛していたかがよくわかる。特に病気になってみると、あれもしてやりたかった、これもしてやりたかったと、悔やみばかりだ。

死を前にして、少しも恐くない理由が分かった。お父さんがお前達の事を、命も惜しくないほど愛していて、又お前達も、お父さんに負けないほど、お父さんを愛している事が分かったからだ。愛している事と、愛されている事を感じ合えたとき、すべての恐怖は消えるのだね。いつかきっとお前にも分かる時が来るだろうと思う。さて名残は尽きないが、そろそろ旅立ちの準備に入らねばならない。最後の闘いの準備だ。疲れるからこの辺で手紙は終わる。

その前にもう一言、お前にはまだ荷が重いかもしれないが、男なのだから、お姉ちゃんとお母さんを頼むよ。それとお父さんに代わって、大神、親神様を信じ、心を成長させてくれよ。お父さんは心の底からお前達を愛していた。又、素晴らしい家族を与えられ、短い人生であったが、楽しく過ごせた事を、全ての人に感謝して筆を置く。

さようなら、

父より

愛する Y へ

追記

お姉さんと、お母さんにも手紙を書いておく。

お母さんには、葬儀のときは簡単にするように話してある。戒名もいらなし、葬儀を立派にしたからといって、お父さんがあの世で幸せになるわけではない。お坊さんのお経も、何の役にも立たないという事も知った。

単なる今の世の葬儀であって、亡くなった時は葬儀の事など、ほとんどの人は知らないであの世に行く。親戚の人が葬儀のやり方で苦情を云う人もいるかも知れないが、お父さんの頼みであった事を知ってほしい。

それから死期が来た時には、無理に生かすような処置はしないよう、お医者さんに頼んである。では、最後を迎えあの世へ明るく誕生したいと思う。

後記

私共が相談を受けたのは、医師にだめだと云われ、手術も無駄だと云われていた末期の状態の時でした。

【十一】 亡者の憑依と霊媒体質

亡者の憑依

幽霊や亡霊が出る場所にお坊さんが行き、お経を上げ、解決したという話を聞くことがあります。本当に解決しているのでしょうか。神様からいろいろ教えられたことから、皆さんと一諸に考えてみたいと思います。

まず、私たちの魂は永久に生き続けると教えられています。この世に生を受けている間は肉体という身体を借りて、その中に入って生きているのです。そして、その寿命がきて亡くなれば、肉体という身体は返して(焼却するか土葬にして自然に帰す)あの世に行き、そこで魂だけの生活をします。肉体がありませんから、こちら側(肉体を持って生きている世界。これを三次元と称します)の人間には、あの世(亡くなって住む世界。これを四次元と称します)の人達は見えません。

見えないけれど、生きているのは事実です。その証拠には、何百回も加藤先生のお体をお借りして、亡くなった人が出てきて、皆さんの前で皆さんの先祖やいろいろな人がお話ししています。また今後もいつでも必要に応じ、亡者の方との話はできますし、亡者が原因の病気や悩みごと、対話により解決できます。

三次元に肉体を持って生きている人間と、四次元で魂だけで生きている人間の数を比べると、ずっとずっと四次元の人間の数のほうが多いです。また、幽霊や亡霊が出るかということにつきましては、実際に幽霊や亡霊は出ます。幽霊も亡者も一諸ですから、今後は亡者と称します。亡者は、普通は肉体を持つこの世の人達には見えませんが、肉体を持つこの世の人の中にも見えたり、聞こえたり、気配を感じたりする人はいます。このような人を霊感が強いとか霊媒体質と申しますが、このような人は毎日の生活においても感じない人よりは亡者の影響を受けて体調を崩す場合が多いものです。

さて、私たち三次元の肉体を持つ人間は、常に四次元の亡者の人達に頼られたり、念を向けられたりして、そのために病気になったり、不運な状況にさせられたりしています。しかし私たち人間の目には、亡者が頼っていることも念を送っていることも見えませんから、そのことに気付きません。あの世の亡者側から見れば、肉体を持つ人間の中でも、霊媒体質の人、霊感の強い人、精神的に弱い人、

病気がちで肉体の弱い人などには容易に憑依しやすく、亡者の思いや苦しみをこちらの人間に転化して、亡者の望みをかなえます。

その結果、亡者は希望が達せられますが、憑かれた肉体を持つ人間側は体調が崩れ、けがや病気を繰り返し、運勢も狂ってきます。何でもない健康な肉体を持つこちらの人間側に、ガンで亡くなった亡者が長いこと憑くと、いつのまにか健康なこちらの人間もガンになります。肝臓が悪くて死んだ亡者が憑くと、やはり肝臓が悪くなり、GOP、GOTという数字が高くなり、医師の世話になるわけです。酒飲みの亡者に憑かれると、やたらと酒を飲みたくなり、アル中にまで進む人もおります。

また、こちらの人間の、肉体的に弱い部分にいくつかの亡者が憑依してくる場合もあります。例えば腰の弱い人には、いろいろの障りや亡者がその腰にばかり憑き、困らせてきます。亡者が憑く場合でも、まったく関係ない亡者が憑く場合、先祖が憑く場合、前世の関わりで憑く場合、亡者の埋まっている上に住んでいる場合、墓地の上に住んでいて憑依される場合等、様々です。また、その憑依される状況により、こちらの人間が侵される程度も異なります。

私たち、この世の人間の病気や不幸の九十九パーセントは、いろいろの障りによって引き起こされています。加藤先生以外の人には、何の障りによって困っているか、原因をつかむことはできません。この障りのうちでも、亡者による障りは大変大きく、五十パーセントくらいはあるかもしれません。

ではどうしたら、この亡者の憑依を防ぐことができるか、考えてみましょう。幽霊や亡者が出たら、お坊さんや霊能者を呼んで払ってもらう方法は、効果があるだろうかという疑問には、効果は、ないと思います。理由は、亡者は肉体がないだけで、私たちこちらの人間と同じであるからです。考えてもみてください。皆さんが亡くなってあの世にいて、なんらかの理由で、例えば苦しい病気で亡くなって、死んだ後も苦しんでいて、その苦しみをいやそうと、生きている三次元の人間に一生懸命憑いたとします。

また、残してきた子供に強い思いを持って、死にきれない気持ちで身内の者に憑いたとします。そのようなとき、坊さんがきて、訳の分からないお経をあげて、どこかに行けと言われても、どこに行ったらいいのでしょうか。「はい、そうですか」と離れますか。霊能者が何かの方法で払おうとしても、亡者となって必死の

思いで憑依しているのに、簡単に離れますか。離れないでしょう。さらに、坊さんや霊能者の霊力で亡者を払えるかという、そのような力はありません。

あの世で魂だけとなった亡者の人間を動かせるのは誰かという、あの世を司る他界の神様だけです。加藤先生のように身体の中に他界の神様が存在する場合は例外ですが、加藤先生以外は亡者を取ったりすることは不可能です。他界の神様は、亡者を暗いところから明るいところへ導いたり、反省させたり、あまりわからない亡者は消滅をしたりいたします。

こちらの人間が亡者に憑かれない対策としては、お守りを身体につけておく。

葬儀や墓地に行くときは、数珠を持つ。

塩水を飲んだり湯舟に塩を入れる。

病院では、ベッドの足に塩をゆわえておく。

墓地の近くを通るときは、私に憑依するな、するな、と強い思いを持って通る。

憑かれたと感じたときは、大神様、親神様に、離れていただくよう一生懸命祈る。

ほか、いろいろあるでしょうが、いずれの場合も憑いている亡者の意志の強さにより異なります。

理論的には、憑いている亡者や姿を見せる亡霊に対しては、愛情を持って諭してやれば良いわけです(諭す内容は先祖への諭しと基本的には同じなので、省略します)。亡者が悟って離れれば、その結果としてこの世の人間もよくなる訳です。しかし亡者を諭すには、話をする側にもかなりの努力が必要です。一度だけでなく、何回か根気よく続けて話をしなければなりません。また話をする人も、本当に理解していなければなりません。

いい加減な気持ちでは、その思いが亡者に伝わらないからです。加藤先生にお願いできない方は、結局のところ、この方法でやっていただくしかないと思います。しかし墓地や多くの事故現場跡等の上に住む人は、次々と憑依されてしまい、とてもすべての人を諭すことは不可能です。その様なところに住む人は、まず住む場所を変えて、その後に憑いている亡者を取り除くようにするしかないと思っています。

私たちは、墓地や事故現場跡に住まないようにすることは大切なことですが、普通の人にはそこが良い土地なのか、悪い土地なのかは分かりません。さらに、まったくきれいで、過去に何にもなかった土地があちこちにあるとも考えられず、

この件に関しては私の悩みの一つです。いずれ良い方法が見つかりましたら、お知らせしたいと思います。

霊媒体質と治療の効果

病気の原因を調べてみますと、ほとんどが障りであることに気がきます。障りが元で病気になったのか、肉体的に弱いところがあり、そこに障りが表れたのか分かりませんが、病気と障りが深い関係にあることは事実です。

治療家として、なんとか加藤先生が少しでも楽になるように、私で解決できるものは治療で解決して、加藤先生にお願いする分を減らそうと常々考えています。また、治療法等で解決する方法があるならば、多くの人達が簡単に助かることになるからです。

長年の霊的な研究から、私たち肉体を持つ人間には目に見えない波長が出ており、その波長が、ある厚さの層を作って肉体全部を取り囲んでおり、その波長はほぼ同じ厚さですが、場所によっては薄くなり、層そのものも密度の濃いところと粗いところとあるように思えます。また、波長の色にも黒色から黄金色までのいろいろの色があると思われます。

さて、このように考えますと亡者が憑きやすいのは、波長の光の色が暗く、波長の層が薄く、密度のあらいところがちょうど穴が開いているように写り、そこが狙われるのではないかと思います。

今、Sさんが過労のために腰を痛くしたとします。当然腰の部分の波長は弱くなり、層の色も悪くなり、厚さも薄くなります。そのまま治療もせずに放っておくと亡者に憑かれ、腰は亡者のためになかなか直らないばかりか、亡者が生前ガンで亡くなった人だとすると、亡者になってもガンの苦しみを持っていますから、長いこと憑かれているとSさんは腰ばかりでなく、ガンの病気にもなってしまいます。人間のまわりを取り囲む波長は、その人の心の状況や睡眠不足や肉体の疲れ具合により、絶えず変化しています。亡者はすきを見て、波長が弱ったり色が暗くなってきたときを狙っています。

心が躍り、勇気凛々と働いているときは、波長が強く、とても憑依できません。ですから常に心を磨き、明るい心で前向きに強く生きている人には、亡者も憑き

にくくなります。強い守護神さまが憑いてくださっている人は、この守護神さまが亡者をはねのけてくださいますが、いずれにしても基本的にはその人の生み出す波長の強さに関係致します。

これらのことから、霊的な障りを加藤先生に解決していただいても、肉体的に欠陥のある人は必ず治療を受け、その悪い部分も波長が強くなるよう修正しておいてほしいのです。そのためにも、心の病や肉体の病を起こさないような毎日の生活態度が大切になるかと思えます。これが亡者に憑依されない一つの方法ではあります。

さて、この論を証明する二つの実験を試みて成果を上げました。一つは二十九歳の大手企業の社員ですが、頭がボーっとして失敗ばかりして、仕事がうまく行かず、会社で首を切られそうということで相談にきました。早々に加藤先生にお願いしてみますと、土公神様の障りがあり、お詫びをしましたが、もう一つはつきりせず、本人も家族もこのような神様に関する事は嫌いらしく、話を受け付けません。土公神様の障りにしても、心から多分やらなかったから効果が上がらなかったのでしょうか。仕方がなく、私なりの治療で解決しようと思い、オーリングテスト(指で輪を作り、力を入れるテスト。詳しくは略します)の結果、頭全体の波長の密度の層を厚くする治療を六回ほど一週間おきに行い、完全に正常に戻した経験があります。

もう一人は、皆さんも知っている K 君(二十七歳)です。参拝にも参加した人であり、非常に亡者に憑かれやすく、参拝場でも何回も加藤先生に取っていただき、その効果の素晴らしさに同席した多くの方々にはびっくりしたことを覚えていることと思えます。K 君は以前墓地の上に住んでおり、身体の中に数百体もの亡者が入っており、加藤先生に何回かにわたり消滅していただいた経過があります。その K 君が、墓地の上に住んでいたために霊媒体質となり、「両目から黒い光が入ってきて、意識がもうろうとする」とか「頭の後から何かが入ってきて、両腕の力が抜けて仕事ができない」とか「腰に何かが入ってきて、体中を駆け巡る」とか、変なことばかり言って相談にきていました。

これは加藤先生にお願いする前に、波長を強くして亡者の入らない体質造りが必要と考え、三か月ほど毎週一回波長の強くなるバリケードを作る治療をしました。その結果、すっかり正常になり、霊媒体質も治って仕事もできるようになりました。

以上のことから、肉体の治療でも少しは亡者の侵入を防げることは分かりましたが、こんなことはほんの小さな一部で、亡者に憑かれない完全なる方法は見当たりません。加藤先生にお願いすればすべては解決するのですが、世の中の人全部がお願いできないし、みんなが幸せになる良い方法はないものかと悩んでいます。ただ、自己管理は良くして、常に体からは明るい力の強い波長を放出するよう、生活していただきたいと思います。

【十二】 宗教と霊能者

最近、テレビでも霊(亡者)に関する番組が多い。大汗をかき、経文を唱え、水晶球を持って演技をする。魂の入れ替えをするという。まったく馬鹿げたことだ。魂の入れ替えなど出来ることではない。それよりも悪霊を入れられてしまうのではないかと心配する。何とない加減な修行僧や霊能者が多いことか。

皆さんには、霊能者や教祖に関して本当のことを知っていただき、今後の参考になれば幸いです。霊能者と称する人達は、人間の不運を霊(亡者)的にしか扱っていないが、病や不幸は、『さまよえる魂の救済』の本の、幸、不幸の原因のところにも整理したように、いろいろの神様の障りや本人の前世の因縁、家の因縁等も深く関係している。霊障はほんの一部にしか過ぎない。しかしその霊障すら、加藤先生なら一秒で解決することが、何十分も掛けても本当の解決ができないのが実情だ。それは、正しい神様の力で行うのと、悪霊や悪神に振り回された人の力で行うのでは、全然違うからだ。

宗教の教祖や霊能者と称する人は、『さまよえる魂の救済』の中にも書いてある通り、いろいろの不幸の原因のうち亡者に関するほんの一部分だけしか解決できません。なぜならば、霊能者のほとんどは前生の悪因縁より、恨みの亡者に念を送られそれに操られているか、この文の中の『神の世界について』の中に書いてある通り、神界より落とされた神が付いて支配しているからです。ですから本当の解決は有り得ないのです。加藤先生とは全く次元が違うのです。

テレビなどで遠くに離れた家が透視できピッタリ当たったとか、スプーンが曲げられた、離れたところの石を念力で少し動かしたとびっくり致しますが、それができたからといって、それは何の役に立ちましょう。人にできない力や能力があるなら、その力や能力は人類のために役立つものでなければなりません。困り悩む人を助けるものでなくては価値はありません。ただびっくりさせるだけのものなら、ラーメンを一人で百杯食べられると言う人と変わりがないのです。

また、よく低級霊に操られた人が目先の予言等して当たると、その人を教祖として盲目的に信じ、崇拝している人がいますが、これも注意してください。低級霊や悪神は予言も奇跡も少しは見せることもあります。しかし、正しい真理や教理はありません。自分の心を正しい物差しで見て、その様な教祖や宗祖に騙されないでください。

依頼の件に付き、良い答えを伝えるときは嬉しいが、伝えにくいこともある。しかし神様のお言葉を曲げて伝える訳にはいかない。そうすると、自分に都合の悪い答えをもらった人は、大神様親神様を本当の神だと認めず、去ったり、別の神を求めてゆく。神様は目に見えないから、真実の神を理解してもらうのは難しい。しかし、自分の心がしっかりとしていれば、きっと見抜けるはずですよ。

新興宗教と霊能者の正体

信仰を持たなくても人間的に素晴らしい方は大勢おられます。又、どのような信仰であろうとも、それを信じることにより生甲斐を見出し、明るく勇んだ暮らしができるならば、それはそれで素晴らしいことだと思います。ただ、それが真実の神への信仰であったならば、より一層喜びも大きくなるのではないかと思います。

そこで、まず最初に新興宗教(教祖)、霊能者に対する大神様親神様のご返事をお伝えさせていただきます。これらの意味するところは、他の新興宗教(教祖)や霊能者に行っている方に、盲信盲従とならず、一度よくその宗教なり霊能者なりを振り返ってみて、正しい物差しで見てもらいたいということです。○教の教祖や霊能者といった人達の実態に触れてみたいと思います。

例1 ○○の光

これは比較的新しい宗教団体で、手かざしをして病気を治すという事で信者を増やしております。

大神「○○の光の申すのは、これは誠の神ではない。ある男が真似ごとを致す内に取り憑かれ、それに惑わされておるのじゃ。そのうち自分が教祖となり、その後他界いたし、その後現在の男が資格を受けたと申し、教祖様と呼ばれ人を集めておるのじゃ。あのようなことでは誠の人助けはできてないのじゃ。代わるぞ」

亡者「わしじゃ。わしじゃ。わしは今から千五百年位前にこの世に生を受け、行をした坊主になり、わしは自分なりの修行を致し神通力を得たつもりでおったが、さて命を終えた後では一介の亡者になり果てて人々を操りたぶらかし、長い

間これと思う者にとり付いて、「われの力で人助けを致させるぞ。掌より命の光を注ぎ助けるぞ」と惑わせて参った。

だがそれは、わしの力ではどうていできる業ではない。今の〇〇の光と申して人を集めてやっているのもわしがさせておるのだ。本当は何の役にも立っていないのだ。前の教祖と申す男の夢枕にわしが出てさせたのが今に続いておるのだ。わしは今、地獄で苦しんでいる坊主だ。許してくれ」

大神「このような事を致しても何にもならない。これは坊主のいたずらじゃ」

加藤先生「神様、人の信仰の事をこのように書いてもよろしいのでしょうか」

大神「そうじゃ。これが本当のことじゃ。書いても良いぞ。誠のことを伝えることは悪いことではないぞ」

加藤先生「この後神様に伺いましたら、千年二千年と地獄で苦しんでおるものも幾らでもいるとのこと。自分の心に反省がない内は絶対に許されないそうです」

例2 〇〇の科学

近年、マスコミを騒がせている新興宗教です。

大神「〇〇(教祖の名前)と申す者の書きし書物とな。これは宮下に申すことだが、このような者は次元の低い亡者に惑わされておるのだ。なるほどと申すことは申しておるが、これは神の声ではない。亡者の声であるぞ。このような者の申すことに夢中になりておる者も多いが、この世を造り一切を司る神、親神とはまったく違うのだ。

〇〇と申す男の書物を読み心に向ける者は、他に信ずることを知らぬ者達の致す所であるぞ。〇〇と申す男、この者には過去に行を致した者が取り付き何かと申しておるのだ。それは和尚の亡者であるぞ。この亡者が自身で少しずつではあるが分かったことを申しておるのだ。その亡者と代わるぞ」

亡者「わしだ。わしは古い以前僧侶として行を致したものでござるが、わしの遠い子孫の者に何かと知らせておるのだが、わしは何と申しても人間だ。たとえ行は致したとて人間の魂を持つ身、そこには人間として様々の生きる道もあったが、今はこの様な場におり問われることに物を申しておる。わしは人助けは一切致さず、生きるための道を説いているだけだ。力としてはその位のもので他のことは一切出来ぬのだ」

その後〇〇は、また悪神に憑かれたそうです。

例3 大〇教

これは、明治の中期に二人の霊能者により開教された宗教です。

大神「この〇〇(教祖)と申す者は今から百年くらい前かのう、この世に生を受け生きておりし者であったのじゃ。この者達の住む土地は古き時代よりの深き因縁の地であるが、ゆえに多くの者達がことごとく不幸の人生にさいなまれ、幸せな運命に生きた者は少なく不運な運命に泣く者達の吹き溜まりのような山村であったのじゃ。

その村の中にこの者と申す者が縁ありて住むことになり、年老いて悪神にとり付かれ、わめき、口走り、人々にまともな目で見られる者ではなかったのじゃ。その当時の世相は貧に苦しみ、それぞれが来る日来る日の生活が容易ではない時代であったのじゃ。そのような折りにこの者〇〇と申す者に悪神が取り付き、世間からは気違いばばあと罵られ、おかしい行動の多い者であったのじゃ。

その時代の者達も笑い、嘲るなどの差別を致しだれ一人まともに見るものはおらなかったのじゃ。そうこうするうちにますます悪神に振り回され何やら書き始めたのじゃ。だがそのような書きし物は皆悪神に操られ書いた物ゆえ、人助けの教えにはならなかったのじゃ。そのようなことの繰り返しの後に次は口口(〇〇の後継者)と申す者に悪神が乗り換え、まことしやかに「いつ何が起きる」などと、人を通し書かせ残しておるが、この者達に付きまといし悪神のなす業であるのじゃ。

世の中にはこの様にさ迷う悪神に弄ばれ、「われこそは何々の教祖である」などと大袈裟な衣服を身にまとい、人々に崇められ、神の降臨を受けており人が皆助

かるような教えの書物などを出して人集めを致しておるが、これは悪神に弄ばれておる者達であるのじゃ。この〇〇、□□と申す者は、これは悪神じゃ。悪神に惑わされて今はこの者達は悪魔の者達に弄ばれ苦しみ抜いておるぞ。これは誠の者の信仰ではないのじゃ。悪魔の餌食となり、人々を操り、その挙げ句の果てには悪魔のいけにえにされておるのじゃ。

世の中にはこのように誠の道にはずれし悪神に操られ、人々を助けるのでなく、金を集めているだけの集団に過ぎぬ集まりが数多くあるのじゃ。悩みある者達がこのような所を回り回って助けをこうておるが、悪神の餌食になるだけじゃ。この□□と申す者達に取り付きし者は、重ねて申すが悪神であるのじゃ。

例 4 〇〇の家

これは、昭和の初期に開教し、現在ではかなり大きな宗教組織になっているところです。

大神「この者、〇〇(教祖)なる者、そのように書物を残し何かと良いことをしたためし者であるが、だがこの者〇〇なる者、これは確かに良きことを書物なる物にて残せし者であるが、だがこの者としてわし大神親神の致せし様なる行いのできぬ者でありたのじゃ。この者として神の力なるは受けし者ではないのじゃ。

この者〇〇なるは、自身にての力はないが、だがこの者にては古き時代の折りに業の道に入りし者の力が備わってのことにて、人に心うなずかせるようなる教えがさせられておりたのじゃ。神の申すは、古き時代の折りに修業の道にて心の力強き者に守られし者であると申すのじゃ。」

例 5 G〇〇

例 2 の〇〇の科学の本にもよく引用された組織で、昭和四十年代に急成長しましたが、今から十数年前に教祖が亡くなってからは下火になっているところです。

大神「この者〇〇(教祖)なる者、亡者となりておるが、この者生ある折りにては霊能力ある者と多くの者達に思われ慕われし者でありたが、だがこの者〇〇なるは、これは力ある神ではないのじゃ。この者に関わりし力ある者と思われる

は、この者〇〇なる者を操る悪しき邪霊に操り使われし事であったのじゃ。待て。取り付き操りし者に代わるぞ」

亡者「うわあー。うわあー。ああああ…あ…。わしじゃ。わしはあの者に取り付き使っておりた者だ。わしは、あの者が人を集め人の前で力あるようにさせておりた者だ。わしは犬や猫ではないのだ。わしは山に住む生き物だ。わしがあの男を操っていたのだ。わしは山の中の悪魔じゃ。あの男が早く死んだのは、わしが使い終わりたからだ。あの男がわしのいたさせる事のままにしていたのだ。あの男がわしの取り付くのに良かったからだ。わしは山の中の魔の神だ。わしがあの男をあのように振り回していたのだ。あの男がわしの体の入る命でありたのだ。わしを取り付けてさせていたのだ」

次に霊能者に移ります。

例6 不動〇〇〇

自称不動明王が天下ったと言い、今までにも雑誌やテレビなどにも出たことのある方です。

大神「この女〇〇は確かに過去には神に繋がる女であった。その神とは今は悪神になっておる神だ。その神の導きと申してここ十数年人々の事を聞いたり致しておるが、これは不動明王の使いではないぞ。また、大国主命の子孫などと申しておるが、とんでもないことだ。今は悪神になっておる者だ。操られて、それをまことしやかに人々について助けを求めても、一切中途半端で解決せぬぞ」

不動明王「わしだ。わしが不動明王であるぞ。この〇〇と申す女は、わしは一切支配しておらぬぞ。この女は悪神に惑わされておるのだ。このような女には何も助けられぬぞ」

大国主命「わしの子孫とな。何を申す。わしにはそのような子孫はおらぬぞ。この女は悪神に惑わされておる。その悪神とは神界より悪神の界へと突き落とされし女の悪魔、または悪神なるぞ。夢々このような者に惑わされることなかれ。人を悪い境遇に導き、心でほくそ笑んでいる悪神なるぞ」

この人に限らず、相談者が助けてほしいと霊能者に行ったときに、良くなるどころか却って悪神を付けられて悪くなる場合がよくあります。悪神はその相談者に取り付き、体調を狂わせ、何度もこの霊能者の所に通わせて高い金銭を取り、生活を目茶苦茶にしています。このようなところに行っていて、困って私どものところにくる方がいますが、このような方はまず、そこで憑依させられた悪神を消滅しなければなりません。しかし厄介なのは、一度消滅したらそれで終わりという訳にはいかず、その人が心の中でその霊能者の事を思うだけで、再び悪神を呼び込み悪神に取り付かれてしまう事です(心の世界には距離はない)。

ですから何度も何度も消滅しなくてはならず、本人も私どもも大変なのです。それなら元の霊能者の悪神を消滅すれば良いのではないかと思われかもしれませんが、その霊能者の心が変わらない限り幾らでも悪神を呼び込んでしまうので、きりが無いのです。

例5 ○○青山

この人は最近数多くの本を出版し、片方ではペンダントや護符を売ったり講演などもして、多額なお金を懐に入れていらっしゃる方です。ちらしを配り多くの人を集め霊能力を授けると称してお金を集めておりますが、このように悪魔に支配され悩む人を惑わせていると、当然宇宙の大法則のお叱りを受けることと思います。また信じて行っている人達が「神が見えた」「体が幽体離脱した」などと力が付いたように錯覚しておりますが、それは悪霊に惑わされているのですから注意しなければなりません。正常な人にはこのようなことがあってはならないのです。体質が霊媒体質に変わることは恐ろしいことです。

大神「この者、自身の行える秘法と申すもので人を集め、金銭の欲の思いになりており、誠の神とは違う。その辺りにさ迷える悪霊達を呼び寄せ、守護神と名を語り、集まり参りし者達に神の力のような真似ごとを致し、金銭集めの目的あるゆえに、だれ一人とて苦しみより救われし者はおらぬのじゃ。その○○なる者の紙の中に書かれし事を何よりと苦しみある者が他より飛び付いて参るが、だがこの者の人集め果てにては、誠の助けはないのじゃ。

この者、このように悪しき行いを堂々と致すは、神を恐れぬ愚か者であるのじゃ。この者○○なる者、悪しき霊なるものに取り付かれ、まことしやかに自身人々に申し聞かせておるが、このようなる者の場に呼び寄せられるように参る

者達は、自身の悩むことに耐えかね足を向けておるが、だがこの場に参りし者達は金銭の上にもまた苦しみの上塗りをして、日々困るようになるは見ておるのじゃ。見ておるが良いのじゃ。このようになる欲に目の眩みし者達の場へ参る者達と自身より、『あの場に参りたとして駄目じゃ』と必ず分かりて参り、このようになる場に参らぬ者達が出て参るのじゃ。欲深き者ゆえに、それなりの苦しみは自身かならず受け、苦しみて通る日々がいずれこの者達の子孫の代にとて、末永く出て参るのじゃ」

正しい霊能者と宗教とは

幸せとは何か、と問われると私は、安らぎの心ですべてに感謝しつつ、人様にも喜びの心を分かち与えられることだと思えます。いま置かれているどのような状況に於いてもそれを満足した心で受け止め、感謝した心で喜べればそれで良いわけです。お金や物質は生活していくに足りるだけあれば良いのです。物質が多くなり過ぎるとその物質に心が取られ、心に執着が生まれていろいろの心の埃がついてきます。

宗教団体にしても霊能者の方々にしても、その目的は人間を幸せにすることではないと思えます。私たち人間は、絶えず安心の心を求めています。その人達の心を少しでも勇気づけ、安心させるためにも、指導者達は、輪廻転生の過程における魂の修行に役立っているか、今世、今このように生きている時点で幸せな心で過ごさせているのか。心の持ち方はどうか。の二点を常に心掛けて指導していかなければならないと思えます。

なまじ霊道を開かせて不幸にさせたり神の名の下に金集めで束縛したり、自分のところだけが唯一の神であるので辞めると罰が当たる、と脅かすことは間違っています。どの宗団も、宗派も心を磨き、私たちが社会生活の中で喜んで暮らせるよう指導していかなければならないと思えます。また、宗教組織ばかりでなく一般の神社までもが次々と立派な神殿を作り、お金を集めています。真実の神は神殿を立派にするよりも困っている人達を救いたいと思っておられると思えます。私たちは立派な神殿に属する神が強いと思ったり、金ぴかに着飾った人が偉いと思いがちですが、物質面に優れているものが精神的にも優れているとは限らないことに気づいて欲しいと思えます。

新興宗教と悪魔

当院の患者さんである大田さんが、一ヶ月の間に三回も体調を崩し、その都度加藤先生を通し神様にお願いしますと、いずれも他人の亡者に憑依されたのが原因でした。太田さんはどちらかと言えば亡者に憑かれやすい体質ですが、特別な霊媒体質ではありません。不思議に思い詳しく太田さんに尋ねてみますと、どうも職場の同僚の森田さんと長い間、話をした後にはいつも体調が悪くなるということです。同僚の森田さんはある新興宗教に夢中であり、週に一回は本部にお参りに行って〇〇修行というのを受けてくるそうです。

しかし〇〇修行を受けてきた後は森田さんはいつも調子が悪く、その状態のときに太田さんが接して長い話をした後は、太田さんも体調がおかしくなるのだそうです。この宗教は、「教祖の妻や子供達が亡くなって、霊界より信者の苦しみを身代わりになって引き受けている」という謳い文句のもと、この教団のみに機能する霊界があり、この教団のみに可能な霊能者が多くいるとあって、信者と一対一で対話する信仰です。

豊かな時代の中で育った新人類の人達にはもう古い「貧、病、争」といった入信の動機はなくなりつつあります。新たな形態を作って多くの人達の興味を集めているのでしょう。

この宗教は有名な女優や文化人の信者を集め、霊能者を養成するということで急速に伸びている真言宗の教団です。週刊誌などではいろいろの批判があり、一部では金喰い虫とも呼ばれていますが、金喰い虫はどの宗教でも同じと言えます。

そこで、「なぜ〇〇修行を受けてくるとこの様に体調がおかしくなるのでしょうか。この宗教は霊能者を養成すると言っていますがそのあたりはどうなのでしょう」と神様にお聞き致したのが次の通りです。

大神「この者森田なる者、そのように多くの者達の集まる場に参る度に亡者に取り憑かれる気分の致すとのことであるが、待て。関わりある者と代わるぞ」

狐「わしじゃ。わしはこの者の参るを待ち受けておるのじゃ。他にも多くの者達の、ぞくぞくと参るを待ち受けておるのじゃ。参りし者達の体に取り付き、この

者のような気分にしたさせておるのじゃ。参りし者達なるは、わしが皆この場に参るを長くいたさし度、体に取り付き、困りし者にさせておるのじゃ。この場におりし者達の申すことは、皆わしが取り付き申させておるのじゃ。

わしはこの場に祭られし神ではあるが、わしの本来なる姿なるは人ではないのじゃ。また、誠の神とは申せぬ狐と申すものであるのだ。わしがあの者達を使い多くの者達を困らせ、金を集めさせておるのだ」

大神「わしじゃ。大神じゃ。親神じゃ。この者森田なる者の参りし場なるは、多くの者達を集め、その者達を前におき、助けの行いと申し致してはおるが、だがそのような場に参りし者達は、金銭を使わねばならぬように致させられ、一度仲間に入りし者達であるならば、その者達より金銭なるものを出させ、その後にもまた、次に参るように悪しき者がそれぞれの者の体に入り、困らす事にさせておるのじゃ。この場に参りたとて、必ず良きことはないのじゃ」

私たちはどうしても霊的な力を強くしてくれるとか、予言ができるとか特殊能力が付くという宗教に引かれますが、信仰とは自分の心を磨き、魂の成長と人格の育成をするものでなくてはならないと思います。

例えば、この宗教の場合、なぜ亡くなった教祖の家族が暗い地獄で苦しんでいるのに、その人が信者の苦しみを身代わりに引き受けられるでしょうか。何回も申し上げてるように、本人の持つ因縁や苦しきは、他人が肩代わりして解決できるものではありません。自分で反省し、それを消す生き方をする以外、方法がないのです。それには正しい神を信じ、自分の心を正し、生かされていることに感謝することです。ですから宗教組織の上に立つ人は、金集めや人集めに夢中になるのではなく、どのようにしたら神様の心に沿うような人間を作り上げることができるか、明るい社会を背負う人間を作ることができるか、に主眼を置いてほしいと思います。

太田さんには、同僚の森田さんから離れるわけにはいかないのですが、会っているときは、「大神様親神様、どうぞ悪神や悪霊に付かれないように御守護ください」と念じるよう伝えさせていただきました。

【十三】神の教え

自分勝手な生き方をしている、神様より、反省の知らせとして、いろいろな事が起きてくることがあります。

例1 惜しいの心

鼻血が出て、医者にも原因が分からないため、お伺いしました。

大神「この者、そのように鼻血なるの出るは、悪しきことではないのじゃ。だがこの者にては、それなりの関わりがあるのじゃ。待て」

神「わしじゃ。わしは神じゃ。わしの怒りにて、そのようになりておるのじゃ。この者しのぶなる者、汚き欲の心ありてのことへの現れであるのじゃ。そのようなることへの神の知らせであるのじゃ。汚き欲なるは、この者、誠に出すことへのできぬ心の持ち主であるのじゃ。その心の現れにて、そのように出てはならぬ物が出て参るのじゃ。このようなるは、神の知らせであるのじゃ。この者の出し惜しみの思いなるは、誠に多くあるのじゃ。そのことへの知らせであるのじゃ」

早速、本人にこの事を伝えますと、十分に心当たりがあると申され、すぐ反省して態度を改めてくださいました。その後は鼻血もピタリと止まり、今は全く正常に戻りました。

例2 前世の業からの痛み

加藤先生「神様、この方Hさんの前生の因縁はよほど深いものがあるのでございませうか。近い日にこの方の古い時代の関わりのことにつきまして、神様にお助けのお願いを申し上げたいのでございますが」

大神「待て。この者冬美なる者、この者自身にていたせし行いが、古き前生の折にありたのじゃ。この者の前生の折にては、誠に悪しき者でありたにより、多くの者達を泣かせ苦しめておるのじゃ。その行いあるにより、この者の体の傷み厳しきことになりておるのじゃ。この者冬美なる者、人並みの行いではないのじゃ。

この者今、生あるは本来なれば許されることではないのじゃ。地獄の果てにて苦しみておらねばならぬ者であるのじゃ。今、そのようにそちこちと痛むは、自身の行えしことへの業を痛みておるのじゃ。並々ならぬ悪しき行いをいたせし者の生まれ変わりしことであるゆえに、今の命あるはこれはこの者にては良きに過ぎておるのじゃ。いずれ自身の関わりある者達への詫びの行いをいたさねばならぬが、だがそのようなる行いをいたしたとて体の痛みはさらりとよくなるのじゃ。そのようなる者への詫びの行いに、この者（加藤先生）を使うのは気の毒じゃ。この者の体に亡者に乗られるは、つらきことであるのじゃ。この者冬美なる者、その事とて分かる者ではないのじゃ。

例3 心の立て替え(例2と同じ人です)

大神「この者冬美なる者、そのようにめまいいたすは、この者への神の知らせであるのじゃ。神の教えたきことありて、そのように体に知らせておるのじゃ。家の中にての音のいたすこととて同じ事であるのじゃ。冬美なる者の気の強き者への神の知らせであるのじゃ。この者気の強き者にて、人の申すことが心に治まらぬのじゃ。

そのようなる強き心の持ち合わせに生を受けるは、この者自身の前生の悪しき行いをいたせし一生を通りた者ゆえに、この者の心がそのまま我が強く、優しき思いができぬは、この者のありのままであるのじゃが、だがその心の立て替えをいたし、今生にて自身の深き業の償いの思いにて通ることをそのように体に知らせ、気になる音にとて知らせておるのじゃ。

この先なるは、この者の癖、性分の強き心使いを致させぬ教えの上に、神は厳しき仕込みをいたすゆえに、自身とてことあるごとに神の導きと悟りて通るが良いのじゃ。神の元へ助けの行いを受けて参りし亡者となりた者達とて、皆そのように神の元にて人、自身の修行の行いをいたし、新たなる良き運命に生を受けるのじゃ。だがそなたなるは、生存の者であるゆえに、生ある今生にそのようなる教えをいたし、この先々または来世にとて良き運命に導くゆえにての教えを神はそなた冬美なる者にそのように知らせるのじゃ。

(注)冬美さんは、今は大変良くなっています。

例 4 不動明王の神の怒り

大変因縁の深い一家が、大神、親神様のお陰で大変良くなりました。また縁あって、不動明王様も庭に祭らせてもらっています。ところが親戚に〇〇学会の人があり、その人の物凄い勧めで家族が動揺して信心を変えようとしたため、庭に祭られている不動明王様が怒り、家族中の体を痛めつけ、その痛みによって困ってお願いしてきた結果が次の通りです。今では家族全員が反省して詫言、平穩な暮らしに戻っています。

大神「この者達、それぞれに体思うようでないは、それなりの深き関わりありてのことであるのじゃ。待て。代わるぞ」

不動明王「わしじゃ。わしは不動明王の神であるのじゃ。この者達への怒りなるは、厳しいのじゃ。この者達、身内なる者に申され、他の信仰なるものに心が動きておるのじゃ。身内なる者の申すことにこの者達の心に迷いが出て参りておるのじゃ。わし神の姿への無礼なる思いになりておるのじゃ。無礼なる思いなるは、神わしの姿への心をすっかり向けぬ心になりておるのじゃ。

この者達、わし神とは申さぬ力ある神への願いを頼みし事とて数々とあるが、今なるはその事への思いとて忘れ去りておるのじゃ。このようなる分からぬ者達への救いの手を差し延べるはその時だけにて、良きに落ちつきし後なるは神への思いとてのうなる者達ゆえに、神は厳しく怒りておるのじゃ。この者達、他の信ずる者達の中に入り、その場への心に向けることにてさらにさらにこの者達への怒りは厳しくなりて参るのじゃ。

今のこの者達への怒りなるは、厳しいのじゃ。今のように体のそちこちへの痛みとてさらにさらに深まりて参るのじゃ。この者達への救いの手を差し延べるは、今なるは駄目であるのじゃ。神への恩を分からぬ者達ゆえに、神は怒りておるのじゃ」

加藤先生「神様、お不動様、この方達へのお怒りはあるにいたしましても、心が以前にも増して神様に向くこととてございましたらお許しくさせていただきますでしょうか」

大神「わしじゃ。わしは大神じゃ。親神じゃ。この者達なるは、皆同じようなる思いの持ち主であるゆえに、今のような心定まらぬは、たとえ頼む頼むとの思いにて神に願うは、自身達の苦しきことを除きてほしいは、この者達の身勝手であるのじゃ。神への心なきは神とてそなた達への心なきことになるのじゃ。今なるはそなた達の心の持ち方次第といたすのじゃ」

(注)困った時、助けていただいた恩を忘れ、良くなると大神、親神様から去っていく人が多くいます。先々困る事になるのを知らずに……。

例6 神が助けない場合

大神親神様が助けてくださらない場合もあります。

関西に住むIさんは、多くの霊能者を巡った後、私どものところにやって参りました。確かそれは、彼が大学三年生の頃からです。最初は神様にお願いしていろいろとお助けをいただき、その甲斐あって無事に卒業もでき、大手の流通関係の会社にも就職できました。しかしこの方は、何事においても自分勝手な思いが強く、住む土地も悪いため、他の相談者よりも本当にてこずった人です。就職して暫く経ったある日、またいろいろとお願いしたいとの便りがきました。そのことに対する神様の返事です。

大神「わしじゃ。わしは大神じゃ。親神じゃ。この者光男なる者への扱いをこの先どの様に致すかとの問いであるゆえに、この者に関わることを申すなれば、この者はこの先一切、宮下なる者の場に近付けるは駄目じゃ。この者、以前の折にとて分かりておるであろうが、何を申したとてその場限りの者であるのじゃ。この者に限り、真実の思いとて一切なき者であるのじゃ。

この者に助けの願いを致せし折とて何一つ礼を尽くす思いとて持たぬ、自分勝手なる心の持ち主であるのじゃ。それゆえに、近付けるは駄目じゃ。他の者に頼るだけの行いなるは、神の許せぬ者であるのじゃ。この先どの様なることを申し参りたとて、一切この者を近付けるはならぬのじゃ。この者参るなれば、心有るものへの邪魔だてになるだけじゃ」

加藤先生「では神様。今Iさんが頭がどうのと言っておりますが、そのことについても一切取り合わないのが良いのでしょうか」

大神「さようじゃ。その通りじゃ。その様なることを受けるなれば、この者必ず後々と近寄りてまいるのじゃ」

同様に神様が助けてくださらない方をもう一人紹介します。

神戸に住む K さんは、やはり何度か神様にお願いして解決した方です。以前は夫婦揃っていろいろな障りを受け、また時として幻聴や幻覚があり、体調もいつも悪かったのです。そしてその都度神様にお願いして解決してもらおうのですが、暫くするとまた体のあちこちが痛くなるという状態でした。それでも神様のお力により良い方向へと向かって参りました。そんな折り、またこの方から相談がございましたので、神様にお伺い致しました。

大神「この者益子なる者、その様に次々とそなたを頼り申して参るが、此の者は駄目じゃ。神の助ける思いはないのじゃ。この者、その様に次々と頼みごと後を絶たぬは、自身にての神への行いが無いのじゃ。また神の申したことを何一つ心より致したことの無い者であるのじゃ。この者、連れ合いなる者も共々の苦しみてはおるが、だが心がないのじゃ。神とてこのようなる者への助けの手は差し延べぬのじゃ。これより先なるは、この者達への関わりは致してはならぬのじゃ。この者(加藤先生)の体を使うだけでは駄目じゃ。自身の行いなき者は、助けることは許さぬのじゃ」

加藤先生「神様、申し訳ございません。この方のお助けは駄目でございますか」

大神「駄目じゃ。この者、助けるは要らぬのじゃ。この者、先刻(神の)館へ参りし折りとして、そなたの前へ姿とて見せぬようなる、礼を知らぬ者であるのじゃ。この者の助けは、神は一切致さぬのじゃ。この者なるは、誠に業深き者の生まれ変わりし者であるゆえに、助けの手はこれよりは差し延べるは致さぬのじゃ」

加藤先生「申し訳ございませんが、この方は前生にはよほど悪かったのでございましょうか」

大神「さようじゃ。その通りじゃ。それ故に他の者に見えぬ姿にさいなまれ、またはそのように大蛇なるものとして姿を見せるのじゃ。この者、生を受けるは間違うておりたのじゃ。地獄の果てにて苦しまねばならぬ、悪しき心の持ち主であり

たのじゃ。地蔵の姿、蛇なるものの姿と次々と見せられるは、自身の深き因縁の表れであるのじゃ。それゆえに礼なる行いとてできぬ、悪しき者であるのじゃ。これより後なるは、この者の頼みなるは一切引き受けるは駄目じゃ。

宮下なる者、この者との関わりは取り止めねば駄目じゃ。あえてこの者の頼みを宮下なる者受けるなれば、神はそなた宮下なる者は神の手足と致し使うことは致さぬのじゃ。今までとて多くの者達の助けは致して参りたが、だがこのようなる悪しき者との関わりはなかったのじゃ。このようなる者、他にはないのじゃ。この者、古き過去より生を受ける度ごとに、多くの者達の血を流させし行いの繰り返しを致して参りし悪しきゆえに、この者の助けは重ねて申すが致さぬのじゃ」

この K さんは、今生では人柄も良く、前生でそのような悪行を重ねたとは信じられないのですが、相談者の中には、今生ではとても信じられないくらい良い人が、前生の因縁で泣いていることもあります。人間心ではどんな人でも助けてやりたいと思うし、また神様も「人間は皆わが子。どのような者も助けるぞ」と申されてはいますが、やはり行ってきた罪に対してはある期間、神の助けも受けられず泣いて通ることが必要なのでしょう。それもまた大きな目で見れば、真の親心ではないかと思えます。

【十四】神の手引き

親心

加藤先生のお手伝いをさせてもらっていて、つくづく大神、親神様は親だと感じます。折りに触れ、人によってはきつくまた優しく、本当に分かるよう諭して下さい。分からない人には分かる様、病気や悩みを通していろいろの奇跡や証しを見せて、体験を通して教えて下さいます。

しかし、人間は非常に忘れやすく、その時は涙を流して喜んだ事も、時間が経てば、「そんな事もあったか」などというような顔をしています。心も同様で、有り難かったその時には、「よし、一生神様に付いて、正しい歩み方をしていこう」と心に定めても、時が経ち、目の前の利害が生じると、心定め的事などすっかり忘れ、目の前の自分に都合の良い神様へと心は移っていきます。

特に、因縁の深い人程この傾向が強く、大神、親神様の心をまだ理解出来なかったのか、と非常に残念に思います。現在も加藤先生には、いろいろな神様が入り込まれています。もう数百体以上でしょう。その度に、加藤先生には大変なご苦勞を、我慢して頂く訳ですが、神様が「神々が入り力が強くなるごとに、多くの者が助かるのじゃ」と申されますと、加藤先生も自分の苦しさは口には出せないのです。

なぜ、大神、親神様がこれ程までにして加藤先生に入り込まれるのかは、どの様に悩み苦しむ人々も、皆助けたいとの親心からなのです。加藤先生の大変な犠牲の思いのお陰で、私達の多くがいろいろの悩みや苦しみから助かっているのです。「お陰様で今は困ることがない。また困った時は頼めば良い」で良いのでしょうか。便利屋や道具としてお願いして良いのでしょうか。神様が、これ程迄にして多くの人に本当の神様の存在を知らしめようとする心は、何なのでしょう。神様の心が分かったなら、助けて頂いた私達は、何をすれば良いのでしょうか。

それは、加藤先生を通していろいろと教えられる事を知らない人に伝え、多くの人が障りにおいても心造りにおいても、間違った事をしない様伝える事にあるのです。それにより、人間の不幸や悩みが半減するからなのです。自分が助か

ったからそれで良い、では許されないのです。

神様は、こう申されます。

『最初の何も分からない人達には、煽てたり褒めたりのアメやお菓子を与えて神の方へ心に向けさせるが、何回か助けや証しを見せた者達には、少しずつ仕込みをするから大人へと成人してほしいのじゃ。中には、因縁が深く今世は泣いて通らねばならない者も、神の手足となり神の心を伝える道具として使いたい為に、その深い因縁を神が預かり、今は何不自由なく過ごさせている者もあるのじゃ。この幸せを当たり前のものだ、永遠に幸せが続くものだと思い、神の用向きを忘れ、自分本位の生き方に走る者もあるが、神はそれぞれの心の働きに応じてその運勢を与えていくのじゃ。』

どう心を使おうとそれは各人各人の心次第じゃ。だが、神の心、親の心を思える迄にいろいろの証しを見せ、育った者達はその思いが出来ぬのは誠に残念じゃ。神は、多くの者を救いたいので。それには、神の手足となる者が必要なのじゃ。目先の利害でなく、輪廻転生を繰り返し永久に生き続ける魂の一過程に過ぎぬ事に気づき、自分の我欲を押さえ、神の思いに叶うてくれぬか。

その思いがまた、深き因縁を持つ者達への道開けになるのじゃ。決して無理は申さぬがな。可愛い子供(人間)達の中でも、神に目を向ける者はさらに可愛いのじゃ。強く差し出す手は、神も強く握り返すのじゃ。この者(加藤先生)の道具となり、神の心を汲んでほしいのじゃ。大神、親神がまだこの者にさらにさらに多くの神々を入り込ませる目的は、何であるかを分かってほしいのじゃ。その大事な時が、迫りつつあるのじゃ。』

神様の心が分かってくると、自然とその人の人柄も変わってきます。生活態度の中に感謝の態度があり、人様に尽くすことも自然に行えるようになります。また、報恩の姿勢もどこかに見えるものです。人間は自分が分かっている以外は、なにを聞いてもなにを見ても理解できないものです。だから、さらに深く分かるように悟るよう努力すると、もっともっと深い神様のお心が理解できるようになるのではないのでしょうか。

(1) 神様への恩

Tさんは、父親が癌で医者に見放されたのが、奇跡を頂いて助かり、二年間生き長らえ、今度は他の病気で七十二歳で大往生致しました。また、二人の子供の病気や怪我、住まいの購入などに付き、何回となく大神、親神様の御守護を頂き、幸せな生活をしております。しかし、ある時 T さんの子供が原因不明の熱が出て、なかなか引かないのでお聞き致しました。それが次の通りです。

大神「この者、子供の病にて困りておるは分かるが、だがその前に自身達の在り方を胸に良く手を当て、考えてみるが良いのじゃ。子供なるは、病ではないのじゃ。わし大神、親神の致せし事であるのじゃ。神とて無理は申さぬのじゃ。だが、そなたの様に繰り返し神の助けを求めし者なるは、神の存在とて分かりてあるはずじゃ。

神の存在ありてこの者(加藤先生)に力を与え、そなた達の様なる他の者達とて、それなりの助けの行いを致しておるのじゃ。だが、その中には自身より神の教えを求め、出来る事なれば何なりと神の手足になりたき思いが自ずと出て参る者もおるし、そなたの様に困る時だけの神頼みの者とてないとは申さぬ。

だが、自身親子達の先々の幸せを思う事なれば、無理とは申さぬが神の手足にでも、との心の表れありたとして、良いのではないかのう。だが、それは神の力にて押し付けは致さぬ。自身達の心にて決める事ゆえにのう。子供なる者達の熱なるは、これは病ではないのじゃ。神の手引きの上にその様にさせておるのじゃ。そなた達、自身の親の病(癌)の折の事を忘れ去りたのか。あの者として、神の力にて助けの行いを致し、たとえ一時なりと良きになりておるではないか。

だが気の毒じゃが、あの者既に病進み過ぎておりたゆえに、神の元に引きとりたのじゃ。だが、あの者亡者となりし後とて、神の元にて修行の行いを致し、新たな命を神の力にて与える所に迄、参りておるのじゃ。だが、その者の時の、頼む頼むの折にては、誠にそなたの親への孝心は、神とて分かりておるのじゃ。だが、今のそなたの日々なるは、神の存在とて忘れ去り、子供の事にて困る時に思いを新たに神に頼りておるのじゃ。神は、何も分からぬ者達にむやみやたらに付いて参れとは申さぬが、そなたなるは幾度となく神の力にてそれぞれの関わりを除きし道を知らされし者ゆえに、神は今ここでそなたに一步二歩とさらに神に近付きてほしいのじゃ。

Tさんは、よく分かっている方なのですぐ反省をして、心定めをして下さいました。今では、神様の御心に沿った歩み方をしており、生家のお母さんと共にしっかりと神様について、安心した日々を過ごしております。

(2) 信心

奇跡的な不思議な助けをいただく人は、常々それだけの道を歩んできています。つまり平素の信心がいざという時に役立つのです。平素は自分のやりたい放題、勝手な道を通っていながら、いざとなったら助けてくれ、困るのを助けるのが神の役目ではないかと言ったって、ダメなのです。常に助ける徳を積んでおく必要があります。

いま本当に困り悩んでいる人は、「生涯人助けのために働きます」と真剣に「心定め」をすれば、必ず好転いたします。しかしこれは口先だけではダメで、真剣に思い悩んだ末、悟って心定めをする必要があります。

前生の生き方が悪かったために、今生明るい生活ができない例はたくさんありますが、前生の悪因縁とは、借金と同じだと考えてください。借りたものは返さなくてはなりません。自分本位のために、相手を泣かせ苦しめたものなら、相手に詫言神様に詫言、今生世のため人のために尽くして初めて借金の返済となるのです。借金をしたまま助かりたいと願うのは無理なことです。この借金返済方法の一つに、人を助ける行為があります。

人を助けるとは、本当の神様の存在を教えてあげて、その人の心を変え、徳を積んでもらい、因縁切りをさせてもらって、根本から助かってもらう、そこまで誠を尽くして手引きをし、育てていくことです。困っている人に金や物を与えて助けといたしますと、その人を弱心、つまり乞食の心にしてしまいます。金や物で助かるはずがなく、その人自身が徳を積んで、徳を持ってより多く神様からお与えをいただく、そのお与えをこぼすことなく、全部受けられる器の持ち主になる、他人からの援助には限りがあり、そんなものに期待せず、自分から助かる道を歩める、そんな人に育ててあげることなんです。

神様のことが分かってくると、だれでも少しずつ変わってきます。知らず知らずに良くなっています。家運が上昇し、人相が変わってきます。これは、相談者の方々を見ていて、よく分かります。私の本に出会い、「心の友」誌を読む人は、

自分から好きで近付いているのではなく、間違いなく神様の手引きによって縁が持てるようになっていくのです。大神、親神様がどうしても助けたい、神の手足として育てたいと思われているからだと思います。信心とは知ることではなく、分かることです。身に付けることなのです。

(3) 種通りの芽が出る

Kさんは、二十二歳の学生です。神様の事も分かり、「心の友」の発行の際には毎回協力して下さいます。ところが絶えず土地の神様の障りを受けたり、他人の亡者が憑いたり、なかなかすっきりとした日が続かないのです。本人にしてみると、神様の言われる心造りにも励んでいるし、人様に喜んでもらう様な生き方もしているつもりです。「まだ、足りないのだろうか。いつになったらすっきりするのだろうか」と、焦りの気持ちで一杯です。来年にはもう就職の事も考えなければならぬし、社会人としてやって行けるのかと不安にもなる訳です。

見方の違いなんです。私から見ると Kさんの通ってきた前世の深い因縁を見る時、本当に神様の御守護で神様が多くの因縁を抱き抱えて下さっているから、今の状態で生活出来ているのだと思うのです。多くの相談者に接してみると、もっと因縁の軽い人でも因縁に応じた生き方をして困り苦しんでいます。その人を Kさん程度に迄神様に因縁を預かってもらって良くしてもらうには、加藤先生に何回も骨折りをしてもらわなければならないのです。ですから、何人も扱うことは出来ないのです。

精神病、ノイローゼ、幻覚症状等で悩む人は、ほとんどが深い深い前世の因縁を持っています。この様な人を助けていくには、本当に大変で時間がかかります。また本人も常に、お陰様でここまで良くなった、との感謝の気持ちが必要ですが、まだ良くならない、まだ良くならない、と不足の心を起こしがちですが、深い因縁の人程すつとは良くならないのです。相談者の中には、七割方良くなって来ており、あと一、二年で完全に良くなると思う方も、我慢が出来ず他の所へ移って行く方が多くあります。

完全解決が近付いて来ると深い因縁は出ず、土地の神々の障りや人神の障りなどが繰り返されます。この繰り返しが多いため、このままでは夜が明けないのではないかと去って行くのです。そして、完全解決の道を切ってしまうのです。Kさんにもこの事を話しましたが、焦る気持ちもあり、またいつも協力して下さる

ので、守護神様でも付いて頂いてすっきりした状態になってもらおうと、守護神様を付けて頂ける様お願い致しました。その答えが次の通りです。

大神「この者、守護神なるは入らぬのじゃ。何故かと申す事なれば、この者自身にての悪しき因縁のある者にて、たとえ守護なる神が付きたとて、通らねばならぬは通りて果たして参らねばならぬのじゃ。それゆえに、Kなる者、神の教えを守りその場その場を通りて果たして参るが、自身の致せし前世の行いの通り返しであるのじゃ。だが、その様なる事とて長く続くのではないのじゃ。今より数年先にては、自身の若き事を振り返って今日は良き事であると思うようになりて参るのじゃ。神は、そなたの手を持ちて通りておるゆえに、神を念じての日々を通るが良いのじゃ。」

もし K さんの場合、神様との縁がなかったなら、因縁通りの道を歩き、蒔いた種は、種通りの芽が出て、今世は働く事も出来ず、体調は悪く真っ暗い人生である事に間違いありません。相談者の中に類似の人を多く見受けます。しかし、神様の方に目を向け、生き方、心の持ち方を変えた方は、人並み以上の幸せを掴むことと確信しております。K さんの場合も、神様が大きな因縁を預かって下さり、今世来世と小出しに消して行って下さるのです。

自分で蒔いた汚れは、全部でないにしても、その幾つかは自分で消していかなければならないのです。ですから、神様は消す途中で倒れないように手を繋いで支えて連れて通って下さると申しておられるのです。読者の皆さんの中にも、人並みの生活が出来ないで困っている方もおると思います。しかし、それにはそれなりの因縁があるのです。K さんの様に、神様と縁を持ち、すっかり人生の方向を変えてほしいのです。K さんの場合、良い所に就職出来、卒業後は立派に社会人として幸せな人生を歩む事を保証致します。しかし、神様の恩を忘れ、自分勝手な生き方を始めると、その時には思わぬ不幸が生じます。それは神様の注意であり、お知らせなんです。

神様を忘れない限り、前途は洋々と開けてきます。若い人で、働けずに困っている人が何と多い事か……。本人は働く意思を持ちながら、いろいろの障りや亡者の念を受けて苦しんでいる人を見る時、なんとか協力したいとは思いますが。しかし、本人の強い意思と家族の協力なしでは、とても助ける事が出来ないのです。その点、K さんは真剣に求め、努力したから道が開かれているのです。また、お母さんの理解も支えとなりました。

(4) 皆が幸せに暮らせる心遣い

Mさんは、心臓病、糖尿病、腎臓病、高血圧といずれの病も重く、医師からは生きているのが不思議だと言われながら、普通の人と同じ様に生活しております。息子は大工さんです。Mさんの家もいろいろの事があり、今迄何十回と加藤先生にお願いして神様に多くの助けを頂き、今日の生活が出来ております。今、命あるのも神様の御守護なのです。

その息子の大工さんが、ここ一週間程急に仕事に行かず、毎日家でぶらぶらして、何か気に入らない事があると母親を殴り蹴飛ばすの暴力を振るい、どうしようもありません。足に青あざを作り、思い余って加藤先生の所にお問い合わせにきました。その答えが次の通りです。

大神「この者の子供なる者に、今は何とて取り憑きし者はないのじゃ。この者の親なる者への悪しき関わり致すは、この者自身の思いではないのじゃ。神の怒りにて、その様に致させておるのじゃ。この者の、親なる者への神の怒りであるのじゃ。親なる者は、長きに渡り神の守りにて助けの行いを致して参りたが、この者の親なる者自身よりの神への行いなるは何とてないのじゃ。

自身の子供の荒れし折にては、頼む頼むの行いだけにて、後なるは自身神への礼は確かに参りてはおるが、神の思いに叶う様なる行いは何とて致してはおらぬゆえに、この者に神の怒りと致し知らせておるのじゃ。この者自身より進みて行えし事なるは、何とてないのじゃ。神の思いなるは、この者を助け、その後にては神の助けの道を、他の者達に伝えさせたき思いであるが、この者なるは自身の事にだけ心あるゆえに、その事への知らせであるのじゃ。

今迄にMさんは、ない命を何回も助けられた事、大工の息子さんが働かずに遊び回ってサラ金に追われた事、夫の再起不能の病気を助けられた事など、数多くの奇跡を頂いております。それは、神様が神の道具となって働いてほしいから、深い因縁を棚上げにして助けて下さって来ていたのです。本人は、お助けを頂く度にいかばかりかのお賽銭を持ってお礼に伺っておりました。それで済んだと思っていた訳です。そしてまた困るとお願いする、その繰り返しでした。

しかし、神様はお賽銭がほしいのではないのです。神の道具となって働いてほしいと見込みを付けたから、特別に助け続けて来たのです。前世の深い深い因縁を

考えると、とても今日の生活は考えられないのです。この様に、深い因縁の持ち主でも神様に心を向け繋がっていると、幸せに暮らせるのですよ、と見本を見せて下さっているのです。それなのに、いつ迄経ってもただ困る時に頼むだけで、そこから一步も踏み出そうとしないから叱られたのです。

Mさんに、「神様に喜んでもらう様な生き方をして下さい」と申し上げたのですが、やはり何をして良いか分からないと申して来ました。自分は体も丈夫ではないし、年も取って来たし、お金もないし、どうしたら神様のお役に立てるだろうかと……。

私はこう申し上げました。「役に立つとは、皆それぞれ無理のない所で自分の出来る事で尽くせば良いのです。特別に目立つ事をしなくても良いのです。それには、親の心になってみる事です。親は、子供に何を要求しますか。」

親は、子供がいつでも明るい心でいてくれれば、嬉しいものです。Mさんの魂は、前世、前々世の通り方ですっかり暗くなっています。困った事にぶつかっても、それを良く取り、明るく考える様に心の転換をする努力が必要なんです。明るくなるとその明るさは人にも及びます。光のある所には問題が起こらなくなり、困った問題は困った問題でなくなります。Mさんは、まず心造りをして、周りの人を明るくする事です。

今これだけの病気を持ちながら、元気に暮らせるのは、神様の大きな御守護です。自分自身でも気付いているでしょう。その自分の過去の経験を通して、何回も助けられた事、奇跡を頂いた事を正直に、皆さんに話す事です。そして、真実の神のいる事を伝える事です。自分の過去を恥ずかしがってはいけません。大神、親神様の力と優しい親心を多くの人に伝える事です。

この世には、見えない世界があり、いろいろの障りがあり、努力だけでは幸せになれない事を話すことです。幸いにも町田さんは、口は元気です。時間もありません。病院通いをしていますから、病院で話しても良いでしょう。決して自分を飾ったり、良く見せようとするのではなく、素直に今日まで生かされて来た事を話すことです。お金も体力も入りません。何もボランティアが出来ないから、献金出来ないからなど悩む事はありません。神様は、お金や物は少しもほしいとは申しておりません。

その後、息子さんの方は今まで遊んでいたのが嘘の様に、朝早くから働きに出かける様になりました。

よく徳を積むにはどうしたら良いか、神様に喜ばれる生き方は、と質問されます。各人置かれている立場が違いますが、基本的には神様は子供である人間皆が幸せに暮らす事を望んでいるのですから、皆が幸せに暮らせる心遣いをする事だと思います。そこに、自分中心の我欲を押さえ、共々に幸せになる道を見付ける事です。相手にばかり尽くし、自分が不幸になっても駄目です。自分も幸せになり、他人も幸せにする事です。

(5) 喉元過ぎれば熱さも忘れる

〇さんは、経済的には裕福ですが、身体が人並みでない欠点を持っております。その為、ありとあらゆる名医を尋ね、これはという霊能者を巡り、最後に私共の所に来ました。幾つかの因縁もありましたが、その内の一つが社の人神に怒られているという事でした。その人神とのやり取りを参考にして下さい。

人神「わしじゃ。わしは、〇なる者の前々々世の折より怒りを持ちし神であるのじゃ。わしは、この者雅美と申せし者、今世はたとえ人を通し詫びたとて許さぬ思いでおりたのじゃ。この者の古き時代に行いし行いが余りにも見苦しき、目に余る行いでありたゆえにな。罪もなき若き女達を雇い、次々とかどわかし、わが社の藪の中に連れ込み、まともに見られぬ様な行いを致させ、その後相手となりし男共より金を取り、自身の懐を肥やし、気の毒な若き者達を他の身売り致させる商いを致せし者の所に売り付け、自身の懐を肥やせし不とどき者、何と致したとて許す気にはなれぬのじゃ。

だが、この者(加藤先生)がわしの許しを大神、親神に願い、なんとかお許しを願われ、わしとて本来なら許すとの返答出来ぬところじゃが、わしにはわし神としての寛大な許す思いにならねばならぬ道があるゆえに、許すと申したのじゃ。だがたとえ、神は許したとて雅美なる者許されたゆえと気を緩め、他の者達と同じ様な気分になり切り、自身の古き過去の行いを忘れ去る様な事にては、わしとて後々残念が残るゆえに、この後の人生は正しき行いに勤めてほしいのじゃ。

この後、雅美さんは真剣に反省し、一人娘のわがままを押さえ、人様のために尽くすよう努力して来ました。治療をさせて頂いていて分かるものですが、身体の

欠点が徐々に良くなっています。晩年はきっと全快するでしょう。しかし、人間は良くなると神様を忘れやすくなります。いつ迄も初心を忘れず、神に付いて歩いてほしいと願っております。

貸しと借り

(1) 神は見ている

私たちは、今の世でもあの世でも、いつでも神様の懐住まいをさせてもらっています。神様の住まいから逃れて存在することはできません。神様は常に、私たちを楽しませ、喜ばせながら、魂の成長、魂の修行、修正をさせようと思われています。

さて、事例のIさんが、吉造さんの努力によって築いた財産を、吉造さんにはあげず、自分の子供にばかり譲ったことを考えるとき、人間という目で見ると得をしたと考えがちになりますが、実際には神の懐に住んでいて神様がすべて一部始終を見ていられるとすれば、当然の結果としてその行為の白黒はつけられることと思います。

私はいつも、人間が生活していく上には必ず貸しと借りが生じていると思っております。つまり、プラスの徳とマイナスの徳と考えても良いと思いますが、例えば会社の仕事においても、一生懸命に働いて給料以上の仕事をする人は貸しが生じ、サボって怠けている人は肉体的には楽をしているかもしれませんが、借りが生じていると思えます。

友達においても同じ事です。真剣に友達のために、自分を犠牲にまでして尽くす人は貸しが生じ、友達に甘え迷惑ばかり掛け、自分本位の生き方をしている人は借りが生じます。「心の友」誌を送ってもそうです。何回も送っても何の音沙汰もない人もいます。もちろんこちらから一方的に送るわけですから返事は要りませんが、送料代以上の多くの切手を送ってくださる方も多くいます。

相談者においてもそうです。長い間相談してそのまま帰る人もいれば、神様にお礼だと気持ち代を置いていく人もいます。相談料は無料と書いてありますから良いのですが、ただ神様の目から見られたとき、やはり徳のプラス、マイナスが

生じるのではないかと思って見えています。早く解決してほしい、良くなりたいと相談にきているのに、マイナスの種を蒔いているのは残念に思います。

決してお金やお礼が欲しくて申しているのではありません。私も送料代以上の切手やお金が送られてこられたときは、こちらがマイナスの徳になりはしないかと心配をします。このように考えると、頂いたお金を私用に使用すると、私自身もマイナスの徳を作ってしまう。貸しにするためには神様のご用に、より以上役立たせていただくしか方法がないのです。

商売においてもそうです。物を買うとき、値切って安く買うのは商売上必要なことですが、相手を泣かせ損させてまでの値切りは駄目です。相手の人も生活しているのです。両方が得をしたという線で折り合わねばなりません。

この頃、相談者の中に住まいが墓地の上のためいろいろな問題が生じ、他の地に家を建てることになる方がいます。さて、墓地跡の土地を売るに際し、欲が出て相場以上に高く売ろうと致しました。人間の考えでは当然ですが、考えてみますとそこを買う人は今度、不幸になるわけです。本当は売るべき土地ではないのです。

しかし現実に土地のない都会では、空けておく余裕はありません。その土地を買う人は、それなりに因縁をもったマイナスの徳の人が買うことになりませんが、売る側に見れば、その土地は悪い因縁の土地つまり傷物なのですから、相場より安く、申し訳ないという価値を引きつけて売るのが正しい価値ではないかと思えます。

もし一般の価格で売ったならば、やはり借りを作ることになり、新しい所に家を作り直しても、運勢はマイナスに働くだらうと思います。すべて、目に見える範囲の考えではなく、常に神は見ているのだと、神の目にどう映るのかで判断していかなければならないと思います。つまり、物質的に自分だけ得をしたつもりでも、マイナスの徳を作ると運命を暗くしてしまうということです。

(2) 子供に財産を譲ることについて

昔の人は財産を少しでも増やし、子孫に譲っていくことが生きがいのようなものでした。近頃は少し考えも変わってきていますが、苦勞をして築いた人ほど子供に財

産を譲りたいと強く思っております。子供の将来を考えると、なにを残してやるのが一番良いのでしょうか。

問題は、譲ってやる財産を築いた過程が大切になってくると思います。人を泣かせ、かき集めて作った財産を子供に残してやったとしても、それは一時的な生活の助けにはなりますが、結局は子供の良い芽を摘み、運勢を暗くさせます。

また、残された財産が為に子供達の財産争いが生じ、仲たがいになり、一生懸命働こうとする意欲をなくさせます。事例でも、Iさんの行為が子供達の運勢を悪くさせ、孫の代まで悪影響を及ぼしています。

それでは一体親の残してやるべきものはなにかと言うと、親の生きてきた生き方、考え方です。親が生きてきた足跡、型、これはその日その時限り消えてしまうように見えますが、決して消えてはおらず、生き方が良ければプラスの徳となり、悪ければマイナスの徳となって、子孫の運命に関係すると思われまふ。よく教育者や指導者の子供が不良になったり犯罪を犯したりしますが、これは教育者は人に教えることは上手だが、自分の考え方、生き方の中に天地の道(神の道)に背いた点があるからだと思ひます。

多分、人には知られないが神のみが知る過ちがあつたのではないのでしょうか。いろいろな人を見るとき、ずるい人がうまくやり、悪をして財産を作ったり、わがまま限りをして多くの財産を増やして子供に譲る人を見ますが、果たしてその子供は幸福になるのでしょうか。不徳な家ではいかに金があつても、運命は伸びないと思ひます。子供を本当に可愛がるのは親が守るのではなく、大自然の神によつて守られるような素質、性格を作つてやることだと思ひます。

しかし子供にこれらのことを教えることは難しく、子供が自ら気付くまで待つしかありませんが、プラスの徳を残すことは親ができることです。

一般に親は、子供にいろいろ残してやりたいと思ひます。しかし親の幸福までは譲れません。子供も親の財産を受ける徳分に見合つた分だけしかもらえないのです。本当は親の財産をもらわず、苦勞をして徳分を積み、親に勝る修行の道を歩める、そんな子供に育てられたら、それが親が譲る最大の財産かと思ひます。私もできなくて困つています。どうしても甘く育ててしまいます。

(3) 倒産

患者さんの K さんが、連絡もなしにこなくなりました。噂によると、倒産して家族全部で姿を隠しているとのこと。その後、いろいろな話を聞くと、多くの人達が建物や田地田畑の権利書を預け、それを担保にお金を借りだしていたため、何人もの人達が家や土地をとられ、立ち退きを迫られていて、必死に K さんを追いかけているとの話。

また、老後の退職金を全部だまされて、今後の生活をどうするか困っている人もいるという様子です。K さんは患者さんとしては新しく、まだ神様の話もあまり話していません。逃亡にはかなりの現金を持っているから、当面の生活には困らないのでしょうか。株や土地の値段が下がり、バブルの影響をもろに受けての倒産で、同情すべき点はありますが、関係ない人達に迷惑を掛け、自分たち家族だけが逃げ切れればの考えは、許されないことです。

その後、一度 K さんから泣き声で電話がありました。夫が病気で動きが取れず、困っているとの話。親神様の懐に三か月修養する場があるから、全員で行くように勧めました。三か月身を潜め、その間に心を切り替え反省をして、迷惑を掛けた方々にお詫びをしたら運勢が変わり、再出発できると思ったからです。しかし、K さんには理解できず、以前から頼っていた祈祷師に高額な金を支払い、神札をもらって祭って、なんとか逃げ切ろうと祈っているとのこと。

現在も逃げており、裁判沙汰になっているとの話も聞いていますが、はっきりしたことは分かりません。K さんは、仮にこの場をうまく逃げ切れたにしても、人間は騙せても、神様はごまかせません。必ず運勢が狂ってきます。そのつけは子孫や自分たちの来世への芽を摘んでしまいます。

これと同じ状態を子供の頃聞きました。近所の A さんは小さな会社を経営しておりましたが、ご主人の不慮の事故死で会社は倒産してしまいました。A さんは、倒産により迷惑を掛けた人達にできる限りの償いをして、法律的にはそこまですなくて良い、自分が持ってきた着物や金目の物はすべて金に換え、詫びて歩きました。残ったのは、使っていたミシン一台だけです。これは残された子供三人の生活費を稼ぐ道具として必要だったからです。

その後、ミシン一台で立派に子供を育て、子供達も思いやりのある人格者に育ちました。今はそれぞれが人のうらやむ生活をしています。Aさんは亡くなる時、少したまった預金と買い替えたミシンを添えて、町の老人ホームに寄付致しました。恐らくAさんは、今は幸せにあの世の神様の元で、ニコニコと生活していることでしょう。

この二つを体験するとき、どのようなときにも自分中心の生き方は許されないし、神様は見ておられ、そのつけは必ず清算させられるということです。神様のことが分かった人は、なによりも理が怖いのです。神の理が怖いから、人が見ていようがいまいが、人が勧めようが、神の理に背くことはできません。今はどんなうまいことでも、理の違うことをしたら、先が怖いのです。

絶対に無理に通れないことを知っているからです。こうしたらこうなるという神の理(天の理)は、絶対に動かすことができないのです。だからそれが分かれば分かるほど、自分の首を締めることはできません。皆さんも振り返ってみて、自分の生きてきた生き方に、相手を陥れたり、困らせたり、自分だけ得になればという生き方をしていなかったか思い返してほしいと思います。私は意識して行わないにしても、その様なことは知らぬ間にしていたらと思うと思います。

今日あるのも、大勢のお力添えがあったからです。省みると、とても恥ずかしくてこんなことを書く身ではありませんが、自分も反省する意味で書いています。Kさんのようになるのも、なるべき原因が幾つもあるからです。このような事に巻き込まれ、大勢の方が憂き目を見るのは避けなければなりません。神仏を信じない人も多くいますが、分かれば分かるほど私たちは神様の手の中におり、神様の目を逃げての生活はできません。神様はその人の行いをよく御覧になっており、その行いに応じた運勢を与えてくださっています。

(注)金銭に関係する保証人には絶対なってはなりません。また、白紙の委任状等にも印は押しては駄目です。印を押すときには十分に注意してください。

心の糧(神や霊のことをまだよく知らない初めての方へ)

(1) 神の声

人間はだれでも苦しみを嫌い、楽しみを求め、悩みを避け、喜びを望みます。それは、親神様が人間世界を作られた目的が、陽気暮らしをさせたいとの思し召しであったからです。

この世の元始まり、泥海の中から親神様によって陽気暮らしを目的に作り出されたのが人間であります。ただこの世のほとんどの人達は、この真実をまったく知りません。しかし知る知らずにかかわらず、我々は陽気暮らしをさせたいとの親神様のお考えから創造された人間であるがゆえに、常に幸福を追い求め、喜びと楽しみを請い願って生活を続けているのです。

しかし実情を見ると、病苦にさいなまされ、災厄に襲われ、家庭の不和をかこち、逆境に悶えるなど、願いもしない物事が訪れます。親神様は、世界中は皆わが子、助けたいの心ばかりだとおおせられており、子供可愛い一筋の親神様の懐住まいなのに、なぜこうした望みもしない不幸や病気や悩みごとに遭遇せねばならぬのでありましょうか。

それは今までに何回も申し上げている通り、この世界が思い通りや願い通りに親神様の御守護を見せていただく世界でなく、心通りに与えられる世界にほかならないからです。

親神様をよく知らない人は言います。「親神様は人間の犯した罪に対して、厳しい鞭を当てようとしているのかしら。人間に罰を与えようとしているのかしら」と。親神様は言われる。「親神は人間の親である。どこに可愛い子供に難儀させよう、不自由させようという親がいるか。よう聞き分けてくれ。すべての人を皆助けたい、その心一筋だ」と。

いろいろの病気や困った事情を見せるのは、実はすべての子供を平等に早く助け上げたいからこそその親心であるのであって、人間に自己を振り返る時期を与え、心の入れ替えを促し、一日も早く陽気暮らしの世界へと連れて通りたい思いからであります。病気や不幸というものは、言い換えれば我々人間が親神様の思いを深く振り返って、その思いにふさわしく、心を新たにして踏み出す節であるわけです。

自分を見つめ、心の埃を払い、因縁を消す上にしっかりと自分の心を定めて出発する機会を与えられているときであります。だから病気や不幸に泣くときは、いろいろな障りもあるのですが、障りや持ち越しの因縁によると責任転嫁す

るのでなく、自分の生きてきた生き方、今の物事への考え方に間違いがないか、自分の心の使い方に問題はないか、親神様は何を反省しろ、何を気付けと言っているのかを考える必要があると思います。

(2) 親の手引き

親神様は、病気や不幸は神の道を教えたく手引きしているのだと申されています。いろいろの病や悩みを通じて、我々人間を常に明るい道へ、間違いのないようにと手を引いて下されています。我々は、その温かい導きの手に従って道を進むならば、踏み迷うようなことはないはずで、それを自分勝手の我が心で好きな道を行こうとするから、正しい道を見失う結果になる訳です。

それはちょうど、日が暮れて道に迷い、灯もなくおなかはずくし、寒さと怖さで真っ暗闇の山の中を迷っているようなときと同じで、現実の生活の中には、一体どうしたら良いのかと行き詰まり、心苦しむ時もあると思います。そんなとき神様は、暗がりの中は神の声を頼りについてこい。夜が明けたならば、なるほどという日があるほどに、とされています。

苦しいときは親の思いを振り返り、親の教えを台に、親に手引かれる道について歩くことだと思います(目先の御利益信心では駄目だと思います)。我々にとって、辛く苦しい時こそ、実は明るい明日への一つ一つの道明けであります。節から芽が出るとされています。必ず良くなると、前のみを見つめて歩きましょう。

各人がわれ勝手に生き方をしている姿は、ちょうど根なし草のように、枯れていくより仕方ない生き方で、行き先は細く狭まり、危なく、怖いところへと行き着いてしまいます。神様は、「この電車に乗れば幸せの駅に行くが、間違った電車に乗れば谷底に落ちるぞ」と、いろいろと知らせ、信号を送ってくださっているのです。元来、病気や不幸は、親神様より人間それぞれに対して、「お前の心使いは、自分本位の我が身のことばかり考えて、陽気暮らしへ向かって歩む道からは逸脱しているぞ。一回ここで立ち止まってよく振り返り、思案しなさい。そして心改めて、明るい明日への道を新しく踏み出しなさい」と、信号を投げ与えられているのです。

ところでこの信号は、時には子供が可愛いからこそ、厳しい意見という形になって現れることがあります。しかし、ただ単に罰を与えたり、いじめたりするのは根本的に違います。

親の心を知ろうと思ったら、親の心になって考えてみることです。人の子の親が、わが子を育てていく中に、子供の将来を考えて、「今のままでは先行きが心配だ」「今のよう生き方(通り方)では、将来幸せになり得ない」と思えば、厳しい意見もし、叱言も言い、時には叩いてまでも注意して叱ることもあります。それは決してわが子が憎いからではなく、子を思う親の思いからであります。人間の親である親神様の思いもまったく同じであって、子を思う故の助けたい一筋の思いなのであります。

その様な切ない親の思いを私たちは、病や不幸の中から悟らねばならないのであります。親神様は、子供は皆可愛いわが子ですから、どのような中でも我々人間を良きに連れて通ってくださろうとしています。どのような暗がりの中でも(困難な中でも)必ずや通り抜けることができるはずで、仮に、夜の暗がりは提灯でも、懐中電灯でも、灯をつけて注意深く歩くならば、怪我なしに歩けます。

日光の燦々と降り注ぐ明るい昼間でも、もし心がここになく、何事かに心を捕らわれて脇見をしたり、何かの考えごとに熱中したり、暗い心で思索にふけったりしていたならば、いつどこで石に噴き穴に落ち、川に嵌まり、岸を踏み外すなど、どんな大怪我をしないとも限りません。神様が、どれ程助けてやりたいと力を貸してくださっても、受ける側の本人の心がそこになければ、何の効果も期待できなくなってしまいます。

人間が自分勝手な生き方ばかりしては、実は通るに通れない昼の暗がりの道になってしまうと思います。お互いに病気で困るときとか、何か困ったことにぶつかったときでないと神様のことは考えませんが、毎日毎日すべてのことが神様に守られて生きていることに気付かなくてはと思います。

人間というものは、身体は神様からの借り物で、心一つだけが自分のもので、その心一つの使い方により、幸も不幸も病気も出てくるのだと教えられています。だからこの心の使い方一つで、不幸も病気も治ると言われているのです。

ほとんどの人は、この世は己一人の力で生きていけると思い誤り、俺の力で、俺の腕で、俺の考えでと過信していますが、もし重い病気になり、動くことができ

なくなり、またいろいろの事情で悩むようになると、今までの過信は消え、人の幸せを妬むようになります。それでも自分の生き方を反省せず、俺が我がという思いは取り切れません。すべての種は自分の心にあるのです。

【十五】神様の障りと祭り込み

(1) 観世音菩薩（かんぜおんぼさつ）

相談者の H さんの子供さんが、何事をするにも人並みより少し遅れるので、なぜかとの依頼がありました。早速大神様にお伺い致しますと、家の下に観音様が埋まっているとのこと。H さんに小さな観音像を買っていただき、家の中に祭ってもらい、大神様に観音様のお助けと導きをしていただきました。それが次の通りです。なお、この後 H さんの子供は、すっかり良くなりました。

観世音菩薩「わしじゃ。わしは観世音菩薩じゃ。わしは悔しいのじゃ。この者達の住む家の下敷きじゃ。すまぬ。わしを救うてくれぬか。わしをこの者の住む家の下より救うてくれぬか」

大神「良いのじゃ。これよりその場より出るを許すぞ。待て。（ここで抜け出しました）」

観世音菩薩「うーん。抜け出たぞ。地の中より抜け出たぞ。わしは出られたのじゃ。これよりは、頼みじゃ。導きを願うてくれぬか」

加藤先生「大神様、H さんが御仏像を買って求めたとのこと。どうかその仏像にお入り込みの許しをお願い申し上げます」

大神「良いぞ。これよりは入り込みを許すぞ」

観世音菩薩「すまぬ。すまぬ。これより入り込むぞ。（ここで導かれました）ああ……。これにて入り込むことが叶うたのじゃ。仏像の姿に入り込みたのじゃ」

加藤先生「観世音菩薩様、ありがとうございます。H さんが朝夕に神様に長い間のご無礼のお詫びを致すことと思いますが、そのお詫びが叶うた後は、どうか H 家の御守護をしてくださいますよう、お願い申し上げます」

観世音菩薩「わしじゃ。観世音菩薩じゃ。すまぬことを致した。だが後なるは、この者の守り神となるのじゃ。守るぞ」

(2) 弁財天

弁財天様は、つなぎの神様です。夫婦、親子の仲、金銭、皮膚などに関係します。

大神「この者、働いても働いても金が書いた紙にて参り、手元に金銭が入らぬ(約束手形ばかりで現金が入らない)とな。これは訳があるぞ。代わるぞ」

弁財天「わしじゃ。山田と申す者、金銭でなく、紙の付いたものが手に入り、欲しいはずの金が回ってこぬとな。その様になり、困らせているのはわしじゃ。わしのいたせしことじゃ。この者山田と申す者のいたせしことではないのじゃ。だが、その家に縁ありて生まれるも、その者の前生にての同じような因縁の持ち合わせの者が、その因縁の関わりある所に生まれて参るのじゃ」

加藤先生「申し訳ございません。できる限りのお詫びを致すようにお伝えさせていただきますので、どうか長い間の御無礼があるとは思いますが、神様どうかお許しくださいませ」

弁財天「さようか。山田の先祖の者がわしを怒らせて、そのまま果てておるのじゃ」

加藤先生「どのような御無礼を致したのでしょうか」

弁財天「この者の先祖の者が、わしの使い姫を痛め付け、その後燃え盛る火の中に投げ入れ、生きた使い姫を焼き殺してしまったのじゃ。それゆえに、わしの怒りは深いのじゃ。これは先祖の者のいたせしことじゃ」

加藤先生「神様、申し訳ございません。犯しました深い深い罪は、御本人か女親の方に、先祖に代わり、と申しお詫びさせていただきますが、いかがでしょうか」

弁財天「子孫の者が何ほど詫びたとて、使い姫は今はどうにもならぬ。山田家の一つの因縁じゃ。許せぬぞ」

加藤先生「でも、弁財天様でございましょう」

弁財天「そうじゃ」

加藤先生「では大神様にお願いを致しまして、使い姫を元の姿に戻していただきます。そのように元の姿に使い姫が戻りましたら、お許しいただけますか」

弁財天「そうじゃな。そのときでなければ、神は何とも申せぬ。(後日大神様にお願い申し上げて、使い姫を元の姿に戻していただき、解決致しました)」

(3) 水天宮(水神)

患者さんの中で、治療をしてもなかなか良くなる方がおり、不思議に思いお伺いしますと、建物の下に昔、井戸があり、それを埋めてしまっているために、水天宮様が怒っておられると分かりました。

加藤先生「大神様、親神様。申し訳ございませんが、この方の住む場におられます水神様の本殿へのお立ち戻り・・・」

大神「何を申す。神の立ち戻りを、と申すは駄目じゃ。この者達の住む場における神に、戻る場はないのじゃ」

水天宮「わしじゃ。わしは水神の神であるのじゃ。わしのおりし場なるは、家の下となりておるのじゃ。わしのおりし場なるは、この場より地にはないのじゃ。戻ることを申すは、許さぬのじゃ。他の神とは同じ行いを頼みたとして、これはならぬ。自身がその場より立ち去るがよいぞ。神なるは、一步たりとも引かぬのじゃ」

加藤先生「申し訳ございません。他の社の神様と同様に思い込んでの願い、知らぬ者の浅はかな願いをお許しくださいませ。大神様、水神様の御心を知りませず、誠に誠に申し訳ございませんでした」

大神「さようじゃ。知らぬとは申せ、二度とこの様なることを申してはならぬのじゃ」(その後、家の中にヘイソクと社を用意していただき、水神様に入っただきまして、すっかり良くなりました)

(4) 不動明王

加藤先生「神様、この方光一さんからのお便りで、父親が長い間持病のように肩と頭の痛みで苦しんでいると拝見いたしましたので、見兼ねて何か原因があるのでございますか、と(以前に)お伺い申し上げましたら、光一さんの祖父の方が、自身の屋敷に祭られている不動明王様のお社を他の場へ持ち去りまして片付けたことが、この方の父親の苦しみとなっているとお知らせ頂きました。その事をN家の方にお伝え致しましたところ、孫に当たる光一さんが深く深く祖父に代わりお詫び申し上げます、とのお便りが今、私のところに届きましたので、ここで私よりN家の方に代わりまして、深く深くお詫びを申し上げまして、お不動様にお聞き願いたく思います。

これからその手紙を読ませていただきまして、その後にお不動様の関わりのあります御本殿へのお立ち戻りのお許しを賜りたく、お願い申し上げます」

大神「さようか。わしは大神じゃ。親神じゃ。これより不動明王と代わるぞ。不動明王への便りの文をそなた(加藤先生)が読みし後にては、大神は即座に神、不動明王を立ち戻るを許すことに致すぞ。待て。代わるぞ」

不動明王「わしじゃ。わしは不動明王じゃ。わしの怒りにて、この者達の家は長きに渡り、暗き日々多くありたのじゃ。わしの怒りなるは、この者光一なる者の祖父なる者の無礼なる行いありてよりのことであるのじゃ。わしはそのような無礼なる行いを致せし者の子孫に至るまで、分からぬ限り苦しき思いを致させる思いでありたのじゃ」

加藤先生「申し訳ございません。不動明王様、その不敬を致しましたこの方の祖父の行いを先日、この方達のところに、今の日々の原因はこの方の祖父の犯したことよりとのお知らせ致しました。その事に付きまして、N家の方達が、いま住むところの近くに祭られている不動明王様のお社に、二十一日間お詫びに参られまして、また月々一日、十五日のお詫びの行いを致しますとのお約束をしたとのお事でございます。その事々を文で書いて私のところに送られてきましたので、今からその文を私が読ませていただきますので、どうか不動明王様、お聞きくださいませ」

不動明王「さようか。この者の孫なる者、その様に詫びて参りたか。その思い、神とて分かるのじゃ。これより後なるは、わし神とて深き思いあるは分かりておるゆえに、許すことに致すぞ。そなた、その便りに目を通し、わしに伝えてくれぬか。(ここで、お詫びの文を読みました)

わしじゃ。不動明王じゃ。そなたの読みし文なるは、誠に心の表れ深き文であるゆえに、よく分かりた。そなたとて、何の関わりとてなき身でありながら、そのように祖父の犯せし悪しき因縁を引き受け、気の毒なる思いを致させたが、だが良いのじゃ。そなたの思い、神は深きことなるは分かりた。

その思いあるにより、良いのじゃ。この日より、光一なる者達への家につながる神の怒りは、許すことに致すぞ。わしとて分かりし者には苦しみはいたさせぬ。良いのじゃ。これにて許すことに致すゆえに、この先、近くに祭られしわしの社への詫びの思いの月参りは、無理に参るは要らぬのじゃ。この者の体の上にとて、この先なるは、わしの怒りは除かれるにより、楽になりて参るのじゃ。また父親なる者の体の苦しみとて、まったく同じ事に良くなるのじゃ。この者達への怒りは許すのじゃ。わしは許し、この者達の守り神となりて参るのじゃ」

大神「わしじゃ。大神じゃ。親神じゃ。これにて光一なる者達に関わる因縁は許されたにより、これより不動明王に関わる本殿の神の迎えを差し向けるぞ。その後なるは、社ありし場にさ迷いし分神なる神は、その場より本殿の神共々立ち戻るのじゃ。待て。代わるぞ」

本殿の神「わしじゃ。わしは不動明王じゃ。わしの分神じゃ。これより分神なる神共々、この場より本殿へ立ち戻ることにいたすぞ」

不動明王「わしじゃ。わしは、この場に祭られ、社なき場にさ迷いし神、不動明王じゃ。これより、この場より本殿への戻るを許されたにより、立ち去ることに致すぞ。わしの戻りし後なるは、この者光一なる者達への関わりはないのじゃ。これにて戻るのじゃ。(ここで抜け出ました)」

大神「わしじゃ。大神じゃ。親神じゃ。これにてこの者達への関わりはのうなりたのじゃ。この者達への関わりは、のうなりたのじゃ。父親なる者、体良くなるのじゃ。また光一なる者とて、見ておるが良いのじゃ。必ず体、楽になりて参るのじゃ。この者達の家の因縁にて、そのように親子共々の苦しみとなりておりましたのじゃ」

(5) 人神

加藤先生「大神様、親神様、申し訳ございません。どうか今日で、この足の痛みは解決をさせてくださいませ（このところ、毎日足がいたかった）。痛くて痛くて困りますので」

大神「待て。関わりある神に代わるぞ」

人神「わしじゃ。わしの怒りじゃ。わしは、そなたには何の関わりもないのじゃ。だが、そなたに関わりある、あの徹(このとき、ちょうど親神様のところで三か月修行中の方)なる愚か者への怒りにて、そなたを通し知らせておるのじゃ。わしの社にあの者参り、無礼なる行いを致し戻りたのじゃ。あの者の体に入り、知らせたいのはやまやまなのじゃが、あの愚か者、あのように心狂い、おかしき者になりておるゆえに、修行の場にて他の者達を振り回すようなる行いは致させたくなきゆえに、そなたの体に知らせておるのじゃ。

あの者社に参り、その夜なるは社の前にて夜を明かし、そのうちに社の庭に汚きものを尻より出し、そのまま立ち去りたのじゃ。わしは悔しいのじゃ。そのような行いを致せし者に怒ることのできぬわしの思いとてなりてくれぬか」

加藤先生「分かりました。よく分かりました。本当に本当に悪いことを致しまして、幾重にとてお詫び申し上げます。どうも申し訳ありませんでした。神様の、私よりのお詫びと致しまして、一言申し上げさせていただきます」

人神「何をじゃ!」

加藤先生「神様は、今は社の神様としてお祭りされておられますが、もしかすると古い古い過去の時代には、人様として生きたことのある御方ではないでしょうか。そして、他の方達の手で、お社にお祭りされたのではないのでしょうか。もし人様でございましたら、さぞかし暗くてなんにも見えないようなところでお苦しみになっていることと存じますが、いかがでございますか」

人神「さようじゃ。その通りじゃ。わしの生きておりた時代には、命果てし後には、神の社に祭られる者が多くおりたのじゃ。だが、今申される通り、わしは暗きところにて苦しみておるのじゃ」

加藤先生「さようでございますか。よく分かりました。では私より、神様へのお詫びの印に、これから私の信ずる力の大きな神様に、貴方様のお助けの願いを願わせていただきまして、少しでも神様の体が楽になれますようにさせていただきますが、いかがでしょうか」

人神「さようか。その様な事を願えるのか。願える事なれば、わしとてこの苦しみの場より楽になりたいのじゃ」

加藤先生「分かりました。早速、大神様方に願わせていただきますので、しばらくお待ちください」

人神「分かりた。頼みじゃ。すまぬが許してくれぬか。(ここで助け出しました) ハア、ハア、ハア……。わしは、良かった。良かった。本当に良かった。有り難いなあ。有り難いなあ。助けられて良かった。今までいたのは、暗くて何一つ見えないような暗闇の中にいたのだが、今は嘘のように明るくて、目の先が眩しいようになって、このような所もあったのかと思うようじゃ」

加藤先生「良かったですね。その様に助けてくださるのが、本当の神様のお力、御慈悲でございますよ。失礼ですけど、心狭くて腹を立てて怒ってられる貴方様は、本当の神とは言えないのではないのでしょうか。確かに徹という人は悪いことを致しました。そのことについては、私が本人や親に代わって深く深くお詫びを致しますので、どうか許してくださいませんか。申し訳ありませんが」

大神「わしじゃ。大神じゃ。親神じゃ。わしの申したきことは、今、神と申すその者に、速やかに怒りを鎮め、身代わりに詫びておるこの者の体より抜け去り、怒りを取り去り、神としての修行に入り、さらにその後なるは、誠の神としての行いの道に入らねばならぬのじゃ。その行いができぬは、わしは悔しいのじゃ。

関わりなきこの者に取り付くは、これは許されぬことであるにより、大神、親神の力にて即刻消滅の行いを致すが、どの様に致す。よーく思案を致すが良いぞ」

人神「わしでございます。すまぬことを致しましてでございます。許して下さい。

私は神ではございません。人でございます。申し訳のないことを致しました。どうかどうか、この私の悪い恨み、悔しがる心の癖は改めますので、どうかどの様になりと、申されるようにさせていただきます。お願い致します」

大神「さようか。分かりたか。ではこの者の体より即座に抜け去ることじゃ。また徹なる者の体からとて、即座に立ち去るのじゃ。その行いできぬうちは、大神の助けとは申せ、そこまでじゃ。その後のあり方次第にては、わし大神達の思い通りに助けも致すが、消滅とて致さぬとは申さぬのじゃ。二度重ねて申すが、この者の足の傷みより、即刻抜け出るのじゃ。また徹なる者の体よりとて、同じことじゃ。すぐ抜け出るのじゃ。分かりたか」

人神「分かりました。よく分かりました。すぐこの方やあの方から、私は抜け出ます。許してください」

【十六】神の思いに沿う生き方とは

私たちは過去の過ちを詫び、懺悔することがありますが、確かに反省も必要ですし、自分の非を悟ることも大切ですが、しかしより大事なことは、これからどう過ちに対しそれを償うか、どのような心構えをして生き方を正し、埋め合わせていくかということが大切なんです。過去を振り返るばかりでなく、前向きに、いかに明るく生きるための歩みをするかが大事になってくるのです。そして、埋め合わせをしていく生き方が強ければその結果として、不平や不満の考えは湧いてきません。

何ごとも、すべてありがたいと受け止められます。それが懺悔や詫びに対する誠意の印なんです。懺悔や詫びの低い心を持って、どのようなことにも心を治め、却って前向きの考えを持って歩んでいったら、神様は運命を変えてくださり、明るい世界が訪れてくると思います。また、生き方を変えていこうという人は(神の意に沿って生きようという人は)、他人の過去は絶対に咎めるべきではなく、許し、力になってやるべきです。

相談者の中によく、過ぎ去った過去のことを「あの時ああすれば良かった、こうすれば良かった」といつまでもクヨクヨと情けないことを言う人がいます。また反対に、先の事を思って不安ばかり考える人がいます。「こうなったらどうしよう。ああなったらどうしよう」と…。しかし、人間がどう悩み、どう考えても、成るべきことは成ってきます。

基本的には、神様は人間を皆楽しく陽気に暮らさせたいと思っているのですから、皆良くなるはずです。だから、必ず良くなるんだと思い、すべてを神様に任せましょう。その代わり今は神の思いに沿うよう一生懸命生きれば良いのであって、マイナスの思いを持てばマイナスの結果が出てきますし、プラスの思いの人にはプラスの結果が出てくることは、多くの人の体験や相談者の生き様を見て、確信しています。まして、神を知って生き方を軌道修正している人に悪い結果が出る訳がありません。

私たちはもっと天恩を知り、大きな神の懐に住まわせてもらっていることを考えたとき、私たちにできることは、良い種を蒔くことだけで、その結果は考えなくて良いのです。実りがどうであろうと、取り分が少ないときは、まだ自分の徳

分が少ないのだと反省して、なおいっそう努力すれば良いのです。決して不平や不満を言わないことです。

幸せになるのも、不幸になるのも、神様が決めるのではなく、自分が決めているのです。人生とは、自分との戦いなんです。他人に嫌われるのも、他人にさげすまれるのも、皆自分から出ている心遣いによるからなんです。決して他人の行為によってこちらの幸、不幸が決まったり、運、不運が決まるものではありません。

人間には欠点のない人はありません。埃と言われる悪い点は、いっぱい持っています。その悪い癖や性分を捨てられないので、神様にお願いして祈り、自分を変えさせてもらうよう御守護や御力をお借りしているのです。

助けてくださいと祈るのではなく、自分を変えさせてください、神様の心に沿う人間にさせてください、と祈るところに信仰の姿があると思うのです。好き嫌いや怒りの感情に負けないよう祈るのです。

人生は自分との戦いであると同時に、修行の過程でもあるわけですから、他人に頼るものでもなく、他人に気兼ねする必要もなく、自分と神様との問題であり、神様のノートにどう写るかということです。

成ってきたすべてを生かしていく。つまり表れてきたどんな事も、辛いことも、良い方にとり、前向きに建設的に受け止めていくことです。

患者さんになってまだ日の浅い人は言います。「神様のことを多くの人に分かってもらわなければなりません。しかし、神様のことを話すと馬鹿にされたり、変な宗教を押し付けられるのではないかと敬遠する。だから警察が迷宮入りしている難問題を神様にお願いして解決したら、皆がびっくりして神様のことを分かるのではないかと。まだこの人は神様のことをよく分かっていません。このようなことを神様にお伺いして解決するのは不可能ではないと思います。しかし、ほとんどの人はその場限りでびっくりし、そんな事ができるのかで終わってしまいます。

信仰している多くの人においてもそうです。その場限りを助かりたい。困ったとき、都合のいいときだけ手を合わせて願いを掛ける。後はケロッとしている。つまり神様を自分の都合に合わせた欲望の取り引きに利用しているだけで、本当の神様の思いを知らず、困ったときの神頼みだけになってしまうからです。

加藤先生や私が皆様の悩みや困ったことを神様にお願いして解決しているのも、それらの奇跡を通して本当の神の存在、神の思い、人類のすべてが幸せに歩める道を知ってほしいからなんです。

財産とは

Yさんが、脳出血の手術を受けて、もう十ヶ月は経つ。今だに意識が回復しないという。Yさんは、以前は当院の患者であった。離婚をして、子供もない独り身である。小さなお店を経営し、爪に灯をともしような節約をして、財産を築いてきた。老後の用意だ、とよく話していた。Yさんにとって、頼れるものはお金だけだったのである。小さな家と貯金もでき、これで少しは安心だと話していた。

当時は、持病の肝臓が悪くて来院していた。病気に関しても、人一倍の神経を配っていた。当院の治療の効果も良かったことから、Yさんのお店のお客さんを患者さんとして多く紹介してくれた。ありがたい人だ。そんな関係から、個人的な悩みの相談も受けた。しかし、神様や障りの話は嫌いであった。私が神の話に熱が入るにしたがって、Yさんは遠ざかった。

何か変な宗教でも始めたのかと勘違いしたのかもしれない。患者さんの中でもうこなくても良いですよ、という方もおれば、まだ来ていたほうが良いのに、と思う人もいる。また、このままこなければ先にいってなにか悪くなるだろう、と思う人もいる。Yさんもその一人で、先にいってなにか起こる気はしていた。これは、長年の「勘」である。

だから脳出血で入院したと聞いたときも、やはりそうか、と思った。Yさんが命の次に大切にして築き上げた財産、老後の安定のためにと旅行もせずに蓄えたお金、そのお金はYさんの病を救うことはできなかった。そればかりでなく、聞くところによると、普段付き合いのなかった身内の者が陰で、残された財産の件で腹の探り合いをしているという。

遺産が減るといって、医師の要求する付き添いの人も付けないという。Yさんの気持ちはどんなだろうか。周囲を見回したとき、Yさんと同じように一生懸命に財産を残し、財産に安心を求める人がなんと多いことか。苦勞をして立身出世した人ほど、子供には苦勞をさせまいと財産を残し、甘えて育てる。世間をみると、人生の目的を財産を築くことに置いている人が多い。

財産とはなんであろうか。どう考えるべきか。財産は、本当にその人を幸せにするのだろうか。私たちは、地球上で生きている。地球という定められた限度の中で生きている。だから、土地にしても植物にしても無限のものではない。私たちが暮らしていく上には、十分すぎる自然の恵みが与えられている。ただし、これは皆が仲よく平等に使っての話である。

中に、独り占めして他人の分も多く取り込む人がいると、その分不足してくる人が出る。神様は、可愛い子供の間人々を皆幸せにしたい、だれにでも平等に土地も植物も、その他必要なものを与えているのである。お金も、人間が暮らしていくための便利な道具として考え出した手段にすぎない。一度地上に大異変が起きたら、お金も財産も何の価値もない。

私たちは、元々神の造られた天地自然の恵みを自分のものと思い、勝手気ままに使っているにすぎない。金持ちの家に生まれた子供が、晩年まで財産を持ち続けるとは限らない。また、貧乏人の子供が努力奮闘して金持ちになっている例もよく見掛ける。神様は、貧乏人の子供、財産家の子供、となぜ赤子に差別をつけたのだろうか。

財産家の子供は、親の悪因縁、または家の悪因縁、あるいは本人の前世の因縁を消すために、その費用を与えられたのではないだろうか。つまり、今世において徳を積み、前世より受け継がれてきた因縁を消す消化代、として与えられたものではないだろうか。だから、親から受け継いだ財産は、自分一代で徳積みに使った時のみ、晩年まで幸せに過ごすことができるのだと思われる。

逆に物欲にこだわり、その財産を減らすまいと物にばかりこだわったとき、病や事故や災難に遭うのではなかろうか。親からもらった財産は、自分の代で世のため、人のために使いきり、さらにその徳のお陰で新たに築いた財産は、子供に残してやることは問題ではないだろう。よく、親の残した財産を減らしては申し訳ないという人がいるが、元々財産そのものは神のものであり、そのとき与えられている財産はその人の努力と徳分と神の考えにより、貸し与えられている使用権である。

つまり、管理を任されているにすぎない。財産を受け継いだ子供ほどその使い方を神様に試される運命にあることになる。財産のない家の子供は、障りの点を除いては持ち越しはないかもしれない。また、一生懸命努力すれば健康にも運勢に

も恵まれて、良い晩年を迎えられるかもしれない。そう考えると、財産家に生まれた子供が幸せとはいえない。

子供に財産を残すよりも、まず「人としての道」「神によって生かされていること」「財産や金は運勢や運命を強くするために使うもので、使わないで溜め込んだお金は死に金で何の役にも立たない」等を教えることである。Yさんも、もし溜め込まずにもっと神の道具となるような生き方をしていたら、脳出血などにならなかったと思う。なぜならば、身体は神が貸し与えているからだ。神はYさんに、このままでは反省の見込みがないと思ったゆえ、病を与え反省を促しているのである。

いくら権力があり名医を揃えても、神の守護がなければ食べることも動くこともできない。人間の思い通りに動くものではない。神の計らいの中で神の思いにあった動きをしているときにこそ、思い通りになり安心した生活ができるのだ。お金や財産は、運命を好転させる方法の一つではある。しかし、お金や財産が運命を支配するものではない。その使い方が大切である。亡くなってあの世に持って行けるものは、生前に積んだ徳と魂を汚した埃や悪因縁だけである。

健康と住まいと良い家族を与えていただいたら、この上何の不足があろう。財産があるから幸せかという、そうでもない。そのような人に限って、もっと欲しいもっと欲しい、と不足の心が沸いてくる。しかし、借家でも家族仲良く健康でありがたいありがたいの心なら、裕福の心だ。天は二物を与えない。財産にこだわる人は、必ず何か別の悩みがある。

例えば病気とか子供が悪いとか……。人間には苦勞は付きものだ。その苦勞に出会ったとき、それに負けてしまうか、逆にその苦を積極的に受け止めてそれを喜びに変えるかで、その人の人生は大きく分かれる。人は一人一人生き方が違い、考え方も異なる。この世に起こるあらゆる事は、すべて大神、親神の御心の中にある。親である神は、何もわざと人間に苦勞を与えているのではない。すべては天の自然の理に従って起こるべきものは起こり、成るべきものは成ってくるのである。その元はすべて、自分自身にある。

自分自身で蒔いた種は、自分が刈り取らなければならぬのが、天の法則である。だれも肩代わりしてやることはできない。与えられた財産をどのような徳にするか、悪因縁に使うかは、本人の心次第である。死に金にしてはならない。財産を与えられた人は、与えられない人よりも難しいのだ。

この世に現れた現象、例えば苦しいこと困ったことはすべて、人間個人個人の心の成長を促し、魂を磨くためのものである。仮に苦勞のない人生だけを送っては、魂の成長も精神の成長も望めない。人間一人一人の成長を求めるがゆえに、その人に応じた苦しみや困難を与えているのである。神はアメをくれることもあるが、拳骨をくれることもある。それが真の親である。すべて我が身に起こる事柄は、心の成長のための糧だと悟り、喜び勇んで通ることが大切である。

Yさんのように、財産やお金に老後を託すよりも、人のために神の道具となり、神が放っておけないという人になる方が、どれ程安心して晩年を過ごすことができるか……。いつでも死を喜んで迎える心造りが大切だ。

私はいつでも、お返しできる用意ができています。

悪しきこととは

人間の運命を変えるには障りを取るほかに、本人の心も変わらなくては根本解決にはならないのです。いくら加藤先生にお願いして障りを解決しても、心が変わらなくてはまた同じような不幸を招いてしまいます。また神様も「心が成人せずして、誠の助けは来ないぞ」と申しております。ですから是非本書や『心の友』誌を何度も読んでいただき、心に留めてほしいのです。

皆さんの中には、障りを取ればすべて解決すると思っている方もいると思います。しかしそれは大きな間違いです。障りを取るより本当に大事なものは、心の成人なのです。実際運勢を作り出しているのは、この心の持ち方によるところが大きく、心の持ち方いかんでは幾らでも不幸を追い払うことができるのです。

真の助けは、心と魂の助けであります。目先の助けでなく、病や不幸の本当の根を切る生き方の大転換というか、心の入れ替えが大切なんです。病や不幸の枝葉が一時良くなっても、根(心根)が変わらなければまた同じような問題が生じてくるのです。

ですから、神様にお願いしてその都度証を見せていただいた方には、「もう、そろそろ徳積みをしてください。心造りをしてください。生活態度を変えてください」とお願いしているのです。決して意地悪や嫌味で言っているのではないのです。

身近に A さんという人がいます。青木さんは経済的にも家庭的にも恵まれ、健康で家事のことも良くする、主婦としても良くできた人です。何の苦勞もなく、毎日余暇に友人と外食をしたりいろいろの趣味を持ち、国内旅行や海外旅行を繰り返しています。しかしこの人は、神様の話をしても一応聞くには聞くが、それ以上は深入りせず、ボランティア活動等はあまり好きでないようです。よほど前世で良い徳積みをしていたのでしょう。

確かに一般の人から見れば幸せに見えます。しかし本当に幸せでしょうか。

このような方は本当の神様を分かろうとしません。また今の世に生を受けた意義を知ろうとしません。長い魂の転生の一過程である現在を只自己満足と家族のために、ああ良かった楽しかった、で過ごして良いものなのでしょうか。このような時にこそ次への種蒔きをしておいてほしいのです。良い状況の時ほど日々の生活態度が大切になってくるのです。魂の成長は苦しい困難な時ほど磨かれるのです。しかしだれもが苦しいことや困難なことは嫌いです。

何も苦しい事や困難に合わなくても魂を磨くことは可能です。自分に余裕のあるときこそ、周りの人や困っている人に手を差し延べるときなのです。方法はいろいろあるでしょう。長い魂の旅の過程には山の人生もあれば谷底の生涯もあるはずです。谷底の人生を少しでも埋め、明るい人生を築くためにも、天への貯金、徳積みをしておくべきです。A さんのようにすべてに恵まれている人ほど、人の痛みや相手の気持ちは分からないものです。

A さんほどでないにしても私たちの多くは恵まれた状態の中で人生を過ごしています。しかし他方では、苦しみ悩んでいる人も実際にいるのです。そのような人はそれぞれの因縁でしょうがないにしても、できる限り他人事と思わず協力し力を貸してやることです。だれかがやるだろうと見て見ぬ振りをするのではなく、飛び込んで泥まみれになる勇気が必要です。だれでも自分は変な目で見られたくないと、自分の城をがっちりと守っています。

その一方で人に役立つことは大切だし、良いことをすることは必要だとは頭では分かっています。しかし、実際に行動するのは嫌だという人がほとんどです。だから良い本を読んでも、良い話を聞いてもその時は感銘を受けたと話しても、そこまでです。行動が伴わないのです。百の知識より一つの行動のほうが大切なんです。このような事はいろいろの宗教や道德倫理で話されています。

今までに何回も大神様親神様の話をさせていただきました。ですから皆さんは今までいろいろの所で学んだ信仰や道徳や倫理の話を越えた、高次元での理解をしてほしいのです。親神様の教えの中で、「悪しきを払うて」とか「悪しき事は言わんでな」など「悪しき」という言葉が出てきます。この悪しきとは一般常識の悪いことと解釈して良いと思います。

しかし本当の悪いこととは、今まで何回も大神親神様の話を聞き、いろいろな証も見せてもらった、それにも拘らず神様を信じず、神を疑ったり神の話を「そんな馬鹿な」と否定するそのことが悪しき事だと思うのです。素直に絶対神の心を理解したならば、私たちは皆兄弟姉妹なのですから、隣に困る人があれば黙っていても手を差し延べなくてはならないのです。

自分だけ毎月旅行する余裕があれば、一回ぐらいは我慢して他人のために心を遣っても良いのではないのでしょうか。本当の悪しき事とは神の存在を疑い信じないことなんです。

次にやはり親神様の教えの中に、嘘とお世辞はいけないとありますが、これは一般常識のお世辞ではありません。この世の中には必要な嘘もあります。相手を喜ばせ勇気づけ、立ち直らせるためには嘘も大切です。何事も正直に思ったままで言ったら、丸く納まるどころも納まらなくなってしまいます。お世辞に於いても同じ事です。

神様のいうお世辞がなぜいけないかというと、嘘については私たちが対話の中で話す嘘でなく、神様がいろいろと教えてくださることに対して、それは嘘だ、納得がいかない、と言う嘘を指しているのです。またお世辞は、神様の言われることを心の中では反論し疑問に思い信じてもないのに、口先だけで、さも分かったようにもっともだもっともだと調子を合わせているのをお世辞と表現しているのです。

さてこう考えてくると、Aさんは人を困らせるようなことを確かにしてはおりません。しかし神様の目から見れば、神を信じず理解しようとしなければいか、表面的には手を合わす真似ごとをしています。ここに知らずに悪しき事、嘘、お世辞の行いをしていることとなります。このような自由な何でもできるときこそ心造り、徳積みの生活が必要になってくるのです。積極的に神様を知り、神の

心に沿った生き方をしようと努力する事がこの世に生を受けた私達の目的でもあるのです。

ですから A さんが今の幸せを長続きさせたかったら、少しは自分を押しさえ神様のことを勉強してほしいと思うのです。実りの秋の後には必ず寒い冬がくるのです。

皆さんは幸せすぎるがゆえに、神様から離れているのです。神とは特定の宗教の神ではなく、万物を生かし成長させてくださる絶対神です。特定の宗教に入らなくても良いのです。各人の心の中であれば良いのです。朝起きたときに天に祈り、夜一日が終わるときに感謝の心でお礼を言うのです。そして自分の行動をこの神の物差しに合わせて訂正していくのです。

縁談について

よく縁談について、相性が良いかどうかをお伺いしてくださいという相談があります。お伺いした結果、良縁とお教えいただいたとします。するとそう言われた方は、神様がそうおっしゃったのだから、無条件で生涯幸福に通れると考えますが、それは誤りです。人生にはいろいろなことがあります。いろいろな状況の下でお互いに努力し、お互いに心を遣い合って相手のことを思い、自我を押しさえ協力し合ってこそ、共に白髪の生えるまで幸せに過ごせるのです。

そこには、真剣な心遣いが必要になってくるのです。このような相談者に対する神様の教えが次の通りです。

大神「この者百合子なる者の申すことは分かるが、だれとて自身の行く末の幸せを願わぬ者としてないのじゃ。この者、縁が結ばれし後に仲良く暮らして参ることができると申すは、自身の行いの上にてもあるのじゃ。人を立て、お互いに心を合わせて参るところに一家は治まりて参るのじゃ。たとえ良き縁に結ばれたとて、気ままな行いを致し、他の者を顧みぬようなれば、仲良き暮らしはどこへ参りたとしてできぬのじゃ。

また自身達の共白髪までと申すこととて、良きになるも悪きになるも、自身達の心の治め方もあるが、そのようなる事々を申すは、欲の心遣いではないかの。どのようなる運命の一生を通るも、それぞれの徳分もあるが、心次第にあるので

はないかの。またこの者、相手をと申すが、この者一男なる者との相性なるは、これは誠に良いのじゃ。案ずるようなる者ではないのじゃ。

百合子なる者として、自身に表れし前生よりの因縁を悟るなれば、例えどの様なることが表れたとて、致し方ないのじゃ。それゆえに大神親神なるは、そなたを他の者の言葉を通し、この家に縁を持ち、神の教えの道に連れ通り、大難は小難に導き、連れて通る思いであるのじゃ。この縁組とて、思いなきは無理は申さぬがの。これよりは、自身にて心決めることじゃ。

結構な心

どうも神様のことが心に治まっているほうが助かりも早いし、大きいような気がする。幸いにも私たちは、加藤先生にお願いして神様にお助けをしていただける。しかし、加藤先生と縁を持ってない人達はどうしたら良いかと考えてしまう。縁がないと助からないでは絶望的だ。しかし、今までの教えや相談者の経過を見ていると、その解決策が見えてきた。その答えは簡単だが、ただ悟るのは難しい。

いま困っているいろいろの事情の中、また難病の中、四方八方が塞がり、どうにもならない中、どの様に困難な状況の中においても、その困難、苦しさを心の底より、有り難い、満足だと感謝して、不足の心がなくなったら助かる。解決ができる。このことがはっきり分かってきた。しかし、苦しい中、困っている中で不平、不足を言わず、満足の心になるのは難しい。まったく難しく、まずできない。しかしそれができないと助からない。

それならば、どの様にしたらそのような心になれるのか。それは人間の肉体も自分の身の回りのすべてが神様からの借り物で、自分の意思ではどうにもならないことに気付くことだ。また心だけが自分のもので、この心一つだけが自分の意思で動かせるものだ。しかもこの心の働きが自分の運命も幸せも、不幸も作り出していることに気付けば、今まで生きてきた心の使い方はどうであったか。

前生の心の使い方は、前々々生は……と。悩み、考え考え、また悩み考えていくうちに自分の蒔いた種が種通り(行ってきた通りの結果として)芽として生えてきたことに気付く。そこで自分の殻(見栄や欲や財産)をすべて捨てたとき、不平、不満の心が消え、神が因縁消しのために苦しい機会を与えてくださっていることに気付くであろう。

しかし、この心境に行き着くためには、何回も悩み真剣に考えねばならない。そして、神様の思いが心に治まったときに、神様は私たちの体の中に入って、問題を解決してくださるのだ。苦しい中で喜べと言うのが無理なことは十分承知しているが、それが解決への手段だから仕方がない。今までこのような考えは分かっていたが、身近の相談者の皆さんを見ていてつくづく思う。満足とは心で結構と喜ぶことなんだ、と。結構という心は天の与えをいただく大切な受け皿である。

魂の修行と役割

大神、親神様は、だれに対しても公平です。大神、親神様の台となって働かれる加藤先生でさえも、障りは障りとして詫びなければならぬし、亡者やさ迷える神の憑依に対しては、加藤先生が大神親神様にお願いしない限り善処してはくありません。人間感情ならば特別扱いをしてくださっても、と思うのですが…。

神様が分かってくればくるほど、高慢の心や偉ぶる態度はできなくなります。私たち人間は、神様の前には皆平等で皆仲間なんです。立派なことを言い多くの信者を集めている教祖も、宗派の官長も、信者も、会社の社長も、守衛さんも、皆上下はないのです。それぞれが与えられた環境の中で自分の持ってきた因縁に応じ、魂の修行をしながら役目を果たしているだけなのです。どなたにもそれぞれの役目、つまり使命があるということです。それを自分では気付いていないだけなんです。

例えば、私は「心の友」誌を発行させてもらっていますが、私が心ができていて皆さんを指導する人間かという、そうではありません。ただ、前世の因縁により今世神様のお手伝いをさせてもらう片隅に加えられ、知り得たことや感じたことをお伝えさせてもらっているだけです。決して偉くもないし、悟ってもいないし、特別な能力もありません。ただ、係りだというだけです。

皆さんのそれぞれの使命も、日の当たる目立つ役目もあれば、日陰の縁の下の役目もあります。しかし、その人の魂の上下には関係ありません。ただ、魂の汚れや輝きには若干の差はありますから、それぞれが与えられた条件の中で修正して魂を磨いているだけなのです。役目は、社長さんも、運転手さんも、農家の方も、家庭の主婦の方も、皆それぞれが与えられた環境の中でどうしたら自分と縁

を持たすすべての人に対して、楽しく仲良く暮らせる世造りが出来るかと協力することなのです。わが家族とか、わが会社とか言った小さなものでなく……。

そう考えていくところに公害も地球の破壊もなくなっていきます。神様は常に皆が円満になることを望んでおります。若い人にも老いた人にも、皆それぞれにその時その時の使命があるのです。老人の方でも身体をお返しするまで使命があるのです。自分はもう用のない人間だなどと思わず、今自分にできることは何か、神様は何を望んでいるかを考え、目立たなくても良い、大きなことでなくとも良い、自分でできることをしてみることです。

例えば、亡くなる前に縁のあったすべての人に感謝し、詫びるところは詫び、あのおばあちゃんは本当に良い人だったと言われるようになっておきたいものです。

地位や権力のある人ほど、魂の修行は難しいものです。心を低くし、謙虚になりたいものです。学校の先生においてもそうです。教育者とは知識を教えるものだけではありません。人間として、神の心に沿った生き方ができるよう教えるべきです。人との和、助け合い、思いやり等で、数学や英語の学問は生活の一つの道具にすぎません。それよりも、言葉の使い方や(言葉は人の命も奪います)万物への愛などを教えるべきです。それが本当の使命なのです。

私たちが住んでいる三次元のこの世は、いろいろな魂の方が同居しております。あの世の四次元の世界は夫婦であっても兄弟であっても、魂の輝きによりそれぞれが住む階が違うため、一緒にはなれませんが、この三次元の世は天使としての使命をもった輝く魂の方も、汚れ切った真っ黒な魂の方も、一様に肉体と言う衣を着て一緒に生活しています。外見からはその人の真の価値は分かりません。だから、それぞれの人達がいろいろな人から学ぶことができるのです。

意地悪されるのも、裏切られるのも、また魂の修行の一つでもあるわけです。このような中で、自分の使命を果たしながら魂を磨いていくのです。だから肉体を着た姿を見比べて、会社の社長だから、教会の会長だからといって、ことさら尊敬したり自分を卑下する必要もありません。すべてが平等で、それぞれの立場で魂の学習をしているだけです。しかし、相手を立て、すべてが仲良く円満にいくよう努力し、自分は低い心になることは必要です。

神様は、すべての人間が仲良く、動物とも植物ともうまく共存した生き方を望んでおります。だから、すべての者が仲良く助け合いながら、相手を大事にしていく生き方に努めるべきです。この文を読んでくださる人の中には、「それどころではない。今困っているこの難病を、この悩みを解決してくれ。他人の事などその後のことだ」と言うかもしれません。しかし、長い目で見ればこれも神の慈悲で、あなたの因縁を消す過程なのです。投げ出さずに役目を果たしながら、魂の修行に努めていただきたいと思います。

親神様参拝に思う

治療中に、神様の話をする。そのような話は迷惑だと、逃げ腰になる人もいる。以前は、分かってほしい、興味を持ってほしい、と力んだものだ。しかし最近、さらっと話して心の動かぬ人は、それで良いと思っている。自分の心の遣い方が自分に戻ってくるという天の理があるからだ。いくら身体に良い、栄養になると食べ物を口に持っていても、本人が食べる気にならないと口には入らない。求める心のない人には、いくら力説しても入らない。

世の中には、神が天下ったと称する霊能者や教祖がやたらと多い。我々凡人には、どれが正しい神で、どこが間違っているかも分からない。無理のないことだと思ふ。だから迷い、いろいろの宗教にだまされ、信仰は怖いものだ、近付かないほうが良いと警戒してしまう。

素直に神の存在を信じ、本当の神に縁の持てる人は、何て幸せなんだろう。大勢の人がいろいろの宗教に関係を持ち、自分のところが一番正しい神であり、力の強い神だと満足している。それはそれで幸せなことだ。しかし、これらの人にも本当の真実の神を知ってほしいと思ふ。多くの教団があるように、多くの神もいる。多くの神々の中でも、本当の元神という、不変の法則というか、遠い遠い昔からずっとずっと先の将来までも変わらない天の仕組みを司る神様がおられる。

そして、この世のすべてのものがこの天の仕組みに沿って動いている。この地球に存在する、見えるものも見えないものも、すべてを司っている、その力の強い方を元神、または親神と名付けてみたい。そして、この神の存在を知ってほしい。このような元神、親神の存在を認めて物事を考えると、あらゆる事柄が納得して解決できる。

幸いにも、私たちは多くの神々とも話す機会を持てたし、また元神である親神様ともお話をさしてもらい、教えをいただくことができた。縁のもてない方と比べると、何とありがたいことか。そして神の存在を確認するために、折りにつけ、いろいろの現象を解決していただき、奇跡を見せていただく。その都度、ともすると迷いがちな心をお陰様で正すことができる。

さて、私たちはいろいろのことを通して、親神様が奈良の天理市にお鎮まりしていることが分かった。この親神様が、私たち人類の親であり、人間を作った元神であるということがはっきりと分かった。地球ができて四十数億年といわれている。人類の歴史は、何万年にもなるであろう。そのように長い長い魂の転生を繰り返して、今日まで成長してきた魂が、今世になって初めて親(親神)の存在を知り、会える場所を教えていただいた。

今までに、何回かこの世に誕生して、いろいろの生き方をしてきたであろうが、一度として自分の魂の生みの親の話は聞いたことがなかった。親に会えるなんて考えたこともなかった。親に今日までの成長した姿を見てもらい、お礼の言葉を申し上げる機会はなかった。これが今から百数十年前に、親の存在を教えられ、親のいる場所を知ることができるようになった。縁のある方は、すでに親に会いに、親の喜ぶ行いをして、親孝行をした人も多い。私たちはいま、ようやく親の存在を知り、その気になれば親に会いに行くことができる時がきたのである。

長い長い魂の転生の過程の中で、ようやく親に会い、親に喜んでもらい、お礼を申し上げる機会に巡り合えたのだ。親に会いに行くということは、その辺りの神社やお寺のお参りとはまったく異なるものである。自分が親の身になって考えてみよう。すべてがうまく運んでいる子供は良いが、病気や悩みや困っている子供ほど早く親のところに話しにこい、来れば出来るだけの力を貸そう、応援しようと思う。それが親である。良ければ良いで、さらに良くしよう。困れば困るで、肩の荷を軽くしてやろうと思っている。しかし、親のところへこない子供には、どうすることもできない。

親の存在が分かり、親の気持ちが分かると、どうしても機会を作って里帰りをしななければならないと思うのが、子供の姿ではないだろうか。そして、親に会いに行くのであるから、親の喜ぶ顔を見たい。それには親の喜ぶ御土産をもっていきたい。その御土産とは、なにが良いか。親の立場に立って考えてみよう。

親は、1 子供達がみんな助け合って仲良く成長すること。(世の中のすべての人が助け合って、自分だけ良ければでなく、人様に喜んでもらう生き方をしている)

2 病や不運にならないこと。(いろいろの障りを受けるようなことはせず、また悪因縁になるような生き方をしないということ)

3 どうしたら親が喜ぶかを考え、親の喜ぶ生き方をする。

そんな心を一番喜ぶ。できれば1,2,3の土産の心を持って里帰りをしたい。もちろん元気な姿を見せるだけでもよい。

今生この世に生を受け、親神様の存在を知り、場所を知っているのに一度も里帰りしていない人は、できれば生ある元気のうちに、一度でも二度でも参拝しておけばと思う。親は、助けましょう、幸せにもしてやろう、来世にも良き運命を与えようと思っても、親の元に挨拶にもこない子供には、どうしても愛情は薄くなる。

人間すべてが可愛いわが子ではあるが、お父さん、お母さんとしげしげと慕ってくる子のほうが可愛いのは仕方がないことだろう。この親は、お願いすれば目先のご利益を与えてくれる親ではない。しかし、生涯を通し、いや永久に幸せに生きる道標を教え、すべてを暖かく包んでくださる愛深き誠の親である。親の愛によって毎日生かされ、運命付けられているのを思えば、なにを置いてもまず親の元へ走らずにはいられない。

宗教が違う、宗派が違うという小さな自分のからに閉じこもった考えでなく、本当の親に是非会いにいていただきたい。だれに縛られるのでもなく、だれの制約も受けなくて良い。人生の節や転機的时候には、まず親に相談し、お願いしてみてはいかがだろうか。

手紙の相談者 A さんへ

いろいろの相談者がくる。一生懸命誠意を尽くしても、その場が救われれば、とそれっきり去っていく者もいる。良くなれば恩を忘れ、神様の悪口を言う者もいる。最初のうちは腹も立ち、もうやるまいとも思った。しかし考えてみると、相談者は皆平穏な心ではないのだ。悩み傷付き、歪んでいるのだ。だから何にも期待(心の成長や神仏への心)せず、ただ与えるだけで良い。愛を与えるだけで良い。神の目から見れば、これらの人達は可哀そうな人だからだ。

相手の態度がどうであれ、相談者の為に力と愛をできるだけだし尽くす。それで良いではないか。そう考えてから心は軽くなる。人は定められた運命の道を歩むほか、仕方がないのだ。でもなるべくつながるよう努めるのが私の役目でもある。

相談者の手紙を見る。会ったこともないが、飛んで行って手をしっかりと握り締め、「頑張りなさい」と言いたい。

「あなたの悩みはそれ程大きくはない。あなたは世界中で自分が一番の不幸だと思っているが、世の中にはまだまだ苦しんでいる人が多いのですよ。神様は、あなたが耐えられる苦しさしか与えていないのですよ。今の苦しさを重い荷物と受けとるか、軽い荷物と受けとるかは、あなたの心次第なんです。あなたの身の回りを見るとき、あなたには多くの宝物があるでしょう。

優しい友人や子供や健康、仮に身体が弱くても、心まで病む必要はないでしょう。万が一すべてのものが不幸でも、大神親神様だけは、あなたの味方です。親ですもの。この一番力のある神に頼れるだけで、他に何がいらishょうか。神様は、あなたを困らせようとしているのではないのです。早く因縁を消し、明るい暮らしができるよう手引きをしているだけなんです。長い長い魂の旅の途中で、今は運命通り、ぬかる道を歩いているだけなんです。

この細い歩きにくい道も、いずれしっかりとした広い大通りに出ます。あなたの重い荷物を手伝ってやりたい。しかし、あなたが作ってきた因縁は、あなたしか持つことができないのです。もう少し頑張ってください。持ち続けてください。段々と荷物が軽くなり、加藤先生にお願いして因縁を消すよう、お手伝いしましょう。あなたは先のことをあまり心配し過ぎます。今が一番底だと思い、明日を

信じて生きてください。夜の明けるのは少しずつです。荷物を軽くする考え方を身に付けてください。

あなたも私も前世に於いては友人であったかもしれません。私のできる限りのことはお手伝いしましょう」と相談者の方には、できる限り誠意を持って返事を書きたいと思います。しかし、時間がないため乱筆乱文になることをお許してください。困ったら遠慮なく手紙をください。私ができぬ時は、『心の友』の仲間がいます。本当の夜明けまでの道のりは人によって違いますが、必ず朝は来ます。今の苦しみを笑って語れるときがきます。

私たちは、晩年幸せになれば良いのです。悩み苦しんだ人ほど、相手の気持ちが分かり心が広くなるのです。悩みや苦しみの少ない人は心の成長も遅くなります。今の苦しみは神の恵であるかも知れません。

どこまでも一人歩き出来るまで、手をつないで一緒に歩かせてもらいます。

悩める A さんへ

あとがき

皆様のご協力と励ましにより本誌が出来上がりましたことを、感謝申し上げます。

本誌は「心の友」誌(一号から十号)を編集したものです。「心の友」誌は、その時々にしたものなので、文章が「…である。」「…であります。」等不統一で読みにくいかと思いますがお許し下さい。

病気や不幸になる原因、解決方法等を分かる限り御説明させて頂きました。しかし、まだまだ分からない点も多くあります。二十一世紀の後半には、さらに進んだ教えが出てくると思われます。人間の心の成長を見定めて神様はお教え下さるでしょう。

お陰様でこのような用事をさせてもらうことにより、神様のお考えや教えが自分自身の心の中で整理ができ、人のためでなく、自分のためだったとありがたく思っております。ときには、神様がこうしろああしろと指示を下さったらありがたいのに、と思った時期もありました。

神様は、「心一つがわがもの」と申されています。自分で考え、自分の意思で行動することには神様は決して口を出しません。良い行いをしようが、悪い行いをしようが、すべて自由です。

「どうせえ、こうせえ、これ言わん。これ言えん。言わん、言えんの理を聞き分けるなら、何の理も鮮やかと言う。」という神言があります。神様は、「こうしろ、ああしろ」といちいち言わない、また言えない立場を考え、子供である人間が親の思いを悟って行動するならば、親はより大きな力を貸そうということでしょう。

私たち、お互い誰に何を言われなくても、毎日の生活行動を神様の思いに合わせて、神様に喜んでもらうような生き方をしたいものです。だれが認めてくれなくても良いのです。言い訳もありません。神様が見ていて下さるから、それで良いのです。ただ、その結果がまた自分にまい戻ってくるだけだからです。

(『心の友』誌に)何を書こうが書くまいが、発行しようがしまいが、何も拘束しないのです。ありがたいことに、神様の事を書かせてもらうことは、少しもおっくうに思ったことはありません。少しでも暇ができると、良い心の糧を求めて、皆様にどんなことでも伝えさせてもらおうと考えています。一週一回の休みです。相談者の返事書きもあり、雑用もあつたりで、なかなか進みませんが、今後も続けていきたいと考えています。

神様のことを書かせてもらっているときよく、私よりもっと分かった人が出てきて、代わってくれないかと思えます。書いていると、自分の未熟さがよく分かってくるからです。そのような方が現れるまで、力不足の状態でも書かせてもらおうと思っています。

霊能者に高いお金を支払っても救われません。神様にお願いしても何にもかなえてもらえません。助かるには助かる毎日の生き方、心の持ち方が大切になって来ます。自分の行動を正した後に神様にお願いして下さい。神様は必ず助けて下さいます。

毎日毎日の生き方の結果が明日の運命を決めて下さる。天の運行には少しの狂いもないことを知るとき、昨日の行動を反省し、今日の生き方を正したいと思えます。そうすることにより、皆様が幸せに生きられますよう心からお祈り申し上げます。

《基本的に知っておいていただきたい事》

(「さまよえる魂の救済」より抜粋)

大神・親神様

「大神・親神様とは、どういう神様なのですか」とお尋ねいたしますと、「姿、形はないのだ。この地上が、まだ混沌としていて泥々のころより存在している。」と申されます。

この宇宙大自然そのものが神の姿のようです。親神様が人間を造ったのは、「人が楽しむ姿を見て、ともに神も楽しみたいからだ。」と申されています。

今までに、人間の魂を何千回も生まれ変わらせ、十億年もかけて成長させてきたそうです。つまり大神・親神様は地球ができる以前より存在していらしたわけです。そしてその神様が人間の魂の成長に応じて必要な指導者を送り続け、その時代時代にふさわしい導き方をして、今日の人間にまで成長させたのです。

お釈迦様もイエス様も、いろいろな宗教の教祖なども、みな神様から遣わされ、今から百五十年くらい前には中山みきさん(天理教開祖)を親神様の道具として遣わされ大切な心の教えを説かれました。そして数年前より、この親神様が加藤先生のところに入り込まれたのです。

加藤先生は神の代理人として、神様にお身体を使っていただいて、神様の意思を、子供である人間に伝えていくお役目を仰せつかった方です。

その後、加藤先生には次々と神々様がお入りになり、さらに親神様と同じ宇宙の元神であられる大神様が天下ったのであります。

大神様は、今まで私たちに知らされていなかった、人間の前世の因縁というものや四次元の様子、いろいろな自然界の障り、先祖供養の方法などをお教えてくださいました。加藤先生が心の中で「神様」と声をかけられますと「なんじゃ」と、すぐお答えになり問題を解決してくださいます。神様は、多くの悩み苦しんでいる人を助け、皆が明るく楽しい暮らしができることを望んでいるのです。

幸・不幸の原因

人間の幸・不幸の原因や、運勢や寿命というものが目に見えない力によって左右されることが、加藤先生を通して大勢の方の悩み事を神様に解決していただく中で、はっきり分かってきました。肉体的な病気ばかりでなく、事故や災害、家庭の崩壊、性格上の異常、仕事上の失敗、経済的なつまずき、対人関係の悪化など、あらゆる面に影響がでてきます。それらの原因となるものは、次の通りです。

- 1 先祖に関わる障り(先祖が子供に頼る→先祖供養の大切さ)
- 2 関係ない浮遊霊(他人の亡者や雑霊による憑依)
- 3 いろいろの神様の障り(稲荷様、社の神様、不動明王様、観音様、水神様他)
- 4 土地の神様の障り(土公神様、金神様、姫金神様、地の神様他)
- 5 住む地の障り(墓地、神社跡、古戦場跡等)
- 6 家の因縁(先祖が作った恨みの因縁)
- の本人の前世の因縁(前世に人を苛め、苦しめた因縁)
- 8 霊能者、新興宗教巡りをして悪神や悪霊をつけられた場合
- 9 人間、神の子としての心を忘れ、あまりにも自分勝手な生き方をしている、神よりの反省の知らせを受けている場合
- 10 魂の成長、心の磨きを仕込まれている時

一般には以上のことが複雑にからみ合っております。単なる憑依霊の場合は別として難病や深い悩み事は、一つ一つの原因を根気よく解決しなければなりません。それと同時に、そのような不運になる種を蒔いた生き方に対しての反省と心造りが必要となってきます。

輪廻転生

私たちの命は、死んでおしまいでなく、肉体が亡くなりますと、魂は、あの世へと行って生き続けます。あの世に行ってどこへ住むかは生きていた時に、どの様な生き方をしていたかによって定まります。

その場所で、生前の生き方や、考え方を訂正され反省させられ、悟るにしたがって明るいところへと上がって行きます。一般的には、亡くなると暗い所へ行ってしまう方がほとんどです。

暗い所で修業させられた後、悟ると明るい所に上がり、また生まれてくる準備に入ります。どんな人生に生まれてくるかは、輪廻転生を繰り返してきた中で生じた因縁と、生前の生き方によって生じた因縁とを重ね合せた因縁によって決まります。

よい因縁の人は、運勢的にも恵まれた人生へと生まれ、反対に、権力や金力に物を言わせ人を人とも思わず、奴隷や動物のごとき扱いをした人は、次は人間に生まれず、牛や馬や犬に生まれます。そのような動物に生まれ変わっている人を何人も経験しております。犬や牛でないにしても、自分のしたことの見返りになるような、悪い運勢の立場に生を享けます。偶然とか運が悪いということではありません。成るべくして成る、まったく公平な正しい規則が働いています。

生まれ変わりの日数は、それぞれの人の因縁で、何十年後に生まれ変わる人もいれば、何百年もかかる人もおります。生まれ変わった回数も人によって異なります。

このように、私達は死んだり生まれたりを繰り返しながら、魂を磨いていきます。この世に生まれてくる大きな目的は、魂を磨き、成長させることにあるのです。

亡者の憑依

私達は、亡くなると、この世(三次元)からあの世(四次元の霊界)へと旅立ちます。霊界は地の底の地獄界から、暗くて寒い所、薄暗いところ、明るい所、暖かくて明るい極楽の所、更にその上のよい所と、幾層にも分けられているようです。そして、亡くなってどの層に住むかということは、生前の生き方や心の遣い方、魂の悟り方によって定まるようです。亡くなった方(亡者と呼びます)が皆明るい所

へ行って下されば問題はないのですが、たいていの場合、暗い所へ行ってしまいうようです。

そうすると亡者は、四次元の世界より三次元の人間に取り憑いて、苦しめ困らせるのです。亡者でも、先祖の亡者と、関係のない他人の亡者の二通りがあります。神様は、先祖に限っては、子孫に憑依することを許しておられます。他人の亡者は、原則としては許しておられません。

先祖の障り

どこの家の先祖の中にも、暗い所で苦しんでいる方が大勢います。先祖が子孫に憑依するのは、子孫を困らせようと思っている訳ではありません。自分でも、この苦しい状況をどうしてよいのかわからないので、子孫に頼ってしまうのです。頼って、少しでも楽になろう、腹のすいたのを満腹にしようと思うのです。

困るのは、私達人間側は、腰の悪い亡者に頼られると腰が悪くなり、血圧の高い亡者に頼られると血圧が高くなることです。だから、どこの家でも、先祖の助けだけは、しておかないと、必ず先祖の憑依はあると考えられます。

他人の亡者の障り

他人の亡者の憑依は、日常茶飯事で、しょっちゅう、いろいろの方に憑いています。全然関係のない浮遊霊の様な場合は、加藤先生にお願いして消滅していただきます。しかし、同じ憑依でも原因の深いものが、たくさんあります。それは、家の因縁からくる恨みの亡者の憑依、自分の前世の因縁からくる亡者、住んでいる土地に関係している亡者などがあります。

家の因縁

先祖の悪行などによる因縁があると、亡者がその家の子孫に恨みを向けてきます。

前世の因縁

自分が前世に、人を苛め苦しめるといような悪い因縁があると、亡者が恨みを向けてきます。病気や悩みの中で一番深い原因になっているものです。

土地の因縁

古戦場とか墓地などの上に住んでいるとそこにいる無数の亡者が頼って取り憑いてきます。

神様の障り

土地の神様の障り

住んでいる屋敷の土地には、それぞれを守る担当の神様がいます。南で東に寄った場所が姫金神様、南で西に寄った場所が金神様、庭の北側は土公神様です。そして全体を地の神様が司ります。そして人間を、地の怒り、地の気、災害から守る役目を仰せつかっているのです。土地は常に神聖にしておかなければなりません。その地を汚されると、神の怒りとして病気や事故を起こして知らせてきます。ですから屋敷の土地には、配水管、浄化槽、ペット(小鳥、猫、金魚等)の死骸、落ち葉、ゴミ、生ゴミなど、物は決して埋めてはいけません。本人、家族、孫の代までも障ります。埋めてしまった場合は、きちんと決まった方法でお詫びをしなければいけませんし、新築の場合は事前にきちんと挨拶をすることです。

稲荷様の障り

土地の神様とならんで、怒ると怖い神様です。一番多い例は、その土地に、昔、稲荷様が祀られていて、何かの理由で社が他に持ち去られたか、朽ち果てて、現在は無い場合です。社が無くなっても稲荷様は他へ移れないので、その場にさまよって、その土地に住む人に障ってきます。他にも社を勝手に移動したり壊したりというのでも障ります。この障りは本人だけでなく子孫や自分の来世へも持ち越す厳しいものです。

葬儀・供養等で分かった事

1 ほとんどの人が、自分が死んだ事に気がついていません。何故こんな暗い所にいるのかと、とまどっているようです。生前の病のままで、痛い苦しい思いでおります。葬儀の様子をきいても、葬儀をしてもらったと分かっている人は、ほとんどいません。

- 2 仏壇の祀り方や供養の仕方は、先祖の喜ぶ方法で行うのが正しいのです。生きている人間の勝手になく、霊界の定められた法則に合っていることが大切です。
- 3 位牌は、黒塗りの一枚板のこと。繰り出し位牌や白木の位牌には魂は入れられません。
- 4 位牌への魂入れは、お坊さんのお経や、新興宗教の祝詞では入りません。
- 5 神様も、亡者の人達も、戒名やお経は役にたたないと申されます。
- 6 三十三回忌以前の位牌は、その人の葬儀を出した家にしか祀れません。
- 7 三十三回忌を過ぎないと、先祖代々の位牌には入れません。
- 8 家の跡取りでない次男、三男の家でも、先祖代々の位牌は必要です。
- 9 先祖は仏壇の中におり、墓地にはいません。お墓参りが先祖供養ではありません。
- 10 供養は、毎日、位牌に私達が食べるものを一日一回供えて、話しかけることで、お坊さんをお経をあげることではありません。
- 11 神様のお助けで明るい所へ行っても、この世(三次元)に執着を持ち続けると、また、暗い所へ戻されます。
- 12 自殺者、変死者は、一回の先祖の助けでは助けだせません。
- 13 水子は、暗い所へ行かないので、水子の障りはありません。
- 14 追善供養とは、子孫がこの世で徳を積むとその功德によって先祖が助かっていくことをいいます。
- 15 子孫が供養をしてくれる者がいない家では四次元で神様預かりとして、修業をさせていただきます。

16 神道系の人で亡くなると神式で祀るのは間違いです。神式の祀り方は、比較的新しい時代に始められたもので、白木の位牌で「〇〇の命」と命名するのは間違いです。

お詫びの仕方

土地の神様に関する事は、大神様、親神様は、加藤先生を通して、今回初めて明かされたとのこと。今まで何も知らないで、屋敷の土地にいろいろ埋めてしまった方は、次の方法できちんとお詫びをして下さい。自分でできる解決方法です。

『お詫び』の言葉

「〇〇の神様、これからお詫びを申し上げます。以前の事ではありますが〇〇様の所に xx(埋めた物)を埋め、汚して誠に誠に申し訳ありません。埋めたものに代わり、私が心から深く深くお詫び申し上げます。何とぞ何とぞお許しください。」

現在の庭に埋めた場合

- ・その場に行き、しゃがんで手をたたき、『お詫び』を申し上げ、地に手をつき、頭を深く下げお詫びをする。
- ・その後、立ち上がり、埋めた地面の上に、酒と塩を、「祓たまえ、浄めたまえ」といって、三回まく。
- ・一日一回、決められた日数を毎日行う。

生ゴミ、植木鉢のカケラ、落ち葉 七~十日間

動物の死骸、便所、浄化槽 二十一~二十五日間

以前に住んでいた家に埋めてある場合

『お詫び』の言葉を「埋めた場所は遠くに離れているため(あるいは他人の土地のため)そこへ行ってお詫びができないので、ここを、その場と定めここでお詫

びをさせていただきます。」と申し、今の家の一カ所の場所から、前の家の方向を決め、その方向を向いてお詫びをする。方向が間違えると許されない。

新築の際には

庭の真ん中に、酒、塩、米、水を供え、「土地の神様、土公神様、金神様、姫金神様、この度は家を新しく建てるに際し、神々様の所をけがしますので、しばらくの間、おそれいりますが、他の場所へお移りになっていて下さいませんか。何とぞお願い申し上げます。」と声に出して申し上げる。

御供物は二時間位そのままおき、下げた酒、塩は庭全体にまく。

家が出来上がったら、残りの庭の中心に同じ様にお供えする。

「地の神、土公神、金神、姫金神の神様、出来上がりましたので、何とぞお戻りになって今後も〇〇家の御守護をお願い申し上げます。」と挨拶する。

鬼門、裏鬼門の所が駐車場の人は、特にお詫びをして車に乗るようにする。

神礼の扱い方

・神礼には神様の分霊が宿っているので、きちんと神棚に祀り、酒、塩、米、水を供えてあいさつする。

守護するつもりで来るので、きちんとしないと障ってくる。

・神棚にむかって中心が皇大神宮(天照大神)様、右側が氏神様、左側はその他多くの神様のお札を順に祀る。

・暮れには、御供物をして一年間の御守護に感謝する。

・毎年、新しい御神札を頂く時は、「古いお札から新しいお札へお移り下さい。」と声をかけてから、古いお札を納め場所へ納める。そうでない時は、「このお札から抜け、関わりある御本殿へお立ち戻り下さい。」と挨拶してから神社の納め場所へ納める。

・神棚には、毎月一日と十五日に、酒、塩、米、水、榊をお供えする。毎日、お水は新しくお供えする。

〈相談者の方へ〉

この本を読んでいただいて、すぐにも相談をしたい方がいると思います。

ここに書いた事は、少しも誇張や嘘はありません。あらゆる事が解決し、良い方向に進んでおります。現実には、今、困り悩んでいる人に、どんな立派な説教をするよりも、目の前の痛み苦しみをやわらげてあげる方が、どのくらい救いになるかは、十分に承知しております。

私達も相談者の方に対しては、全部お引き受けし、全力を尽くしたいと思っております。けれども、やって下さるのは、大神・親神様です。大神・親神様は、皆可愛い我が子ですから、惜しみなく力を貸して下さいます。

しかし、大神・親神様も、加藤先生のお身体を使わないと助けができないのです。(時には、使わなくてもやって下さる時もあります)

基本的には、加藤先生のお身体がなければ何もできないということです。加藤先生も高齢です。そしてこのような仕事は、日常生活と比べ、ものすごく肉体的にも精神的にも疲れることです。

相談者のすべての人に力を貸すということは、気持ちはあっても、物理的に無理なことです。一世帯の相談事でも、一年平均十件以上になります。現在関わりを持つ方々だけでも処理ができず、何ヵ月も待ってもらっております。ですから新規に受け入れられる方は、近県で、「心の会」の紹介者と、当院の患者さんに、限らせてもらいます。

他の方々には、この本を読んで自分でできる方法で解決して下さい。加藤先生を通さなくてもよい相談事は、「心の会」でお引き受けいたします。

また、心造りをしていきたい方には、「心の会」より心の友誌のパンフレットを届けさせてもらおうと考えております。

悩みや、不幸を抱えた方に、「相談をしないで下さい」と言うのは、お腹の空いた人に、目の前におにぎりを見せて、食べないで下さいと言っているのと同じで大変申し訳ないと思います。

しかし、解決は、加藤先生お一人しかできないのです。その状況を理解して下さいましてお許し下さい。一人が助ける時間には、限度があるのです。

いずれ人類の心がさらに成長し伸びた時には、神様は、もっと多くの人ができる解決方法をお教え下さることと思います。その時には、加藤先生に代わる方が現れ、また皆様にお伝えしていくことでしょう。

いずれにしても、この本が皆様の今までの考え方を換え、方向転換する一助になれば幸いです。

「心の会」の連絡は、必ず手紙にして下さい。電話での相談は、初回は受け付けません。また治療は、別ですので治療院への相談、電話は御遠慮下さい。治療中に電話が来ると、仕事ができなくて困ります。

「心の会」の人達は、全力を出して、皆様の御役に立とうと思っております。皆、ボランティアで仕事のかたわらのことですから充分満足できない点もあると思いますが御了承下されば有り難く思います。(加藤先生に御願いしなくて良い方で、難病や、病で困っている方には出来るだけ御力になりたいと思っております。手紙にて御相談下さい。)

■連絡先

現在は、加藤先生はお亡くなりになられており、宮下先生は引退され、治療院も閉院しておりますので、連絡先は省略。